

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第12号 昭和38年11月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

11月号

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第12号 昭和38年11月1日発行(毎月1回1日発行)

裏窓

定価 250 円
IBM 1807

振替・東京10756番
(久保書店宛)

武芸残酷物語

忍者一代

小山竜太郎
木屋進 著

凄惨きわまりない忍者の世界！ 勝つた
めには親も子も妻も斬らねばならぬ！
必殺の闇にうごめくは妖しの白猫かまた、
白裸のままに縛られた女忍者か！

230円 送料40円

これが忍術だ！

その歴史
と技法

小山竜太郎・著

これ一冊で忍術のことならなんでもわか
る。歴史的に文献的にさらにまた実技の
写真を多く挿入した、もっとも正確なそ
して興味しんしんの忍術入門書！

170円 送料40円

裏窓叢書 ご案内

お手頃な値段で たのしい読みものが
いっぱい！ あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区江古田一の二三〇二
株式会社 あまとりあ社
(振替・東京一〇七五六・久保書店宛)

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

350円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 秋吉 轡絵

350円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

捕えられた美女群の危難に
つく危難！ 凄絶のクライ
マックスが連続する 息も
つかせぬ迫力編！

ウソのようなホント

続・話のネタになる本

¥170
円 40

野高一作・著

★目次の一部★コケが乳房を大きくする★ガマン出来なくなる薬
★出歯カメは長生きしない★妻の値段★アメリカの女トルコ風呂

オフセット色
二

裏窓文芸評論
フエチストの世界
ある男の半生
股旅頼
民習族
奇習族
紳士録も

画集

裏窓・十一月号・目次

*表紙

カメラ・吉田 久

*目次カット・中川彩子

モデル・柚木あぐり とびらカット・江淵晃夫

犬吠岬の太陽

文・エダ・キリコ
カメラ・吉田 久

(10)

暗い画廊

吉田 久

(223)

小説《陳述書》(森志斐子)が描くレスボスの愛の葛藤

間野 嶺

(154)

ヴィナスの誕生

森下高茂

(24)

ねむれぬ夜の追憶

北海道雄

(38)

悪党半九郎

潮 一樹

(192)

ビルマの首枷族

春川光彦

(178)

ある女装者の夜々

かびや・かずひこ

(96)

黒い皮の饗宴

鬼頭 暁

(174)



選 特
グラビア

海外の公刊誌より①②……………フェニクス商会

(17) (215)

★★★中島喜美・時代妖美画集★★★

(122)

犬吠岬……………吉田 久

(111)

■裏窓タウン……………(135)

■読者コーナー……………

(212)

ああ、ぼくは
この炎のなかに身を投げ………水尾 究
子どももの激しさで燃焼したい

(144)

青雲崩れるとき……………井村 錠

(74)

コレハオドロ記『オシリコンクール』……………左 次 朗

(92)

鉦山町の女たち……………文・宗方八郎
絵・都築峰子

都築峰子

大都会の夜の底で……………九十九十郎

(160)

私たちと『裏窓』……………編集部・編

(58)

★★★★金井行雄フォト作品集★★★★

(103)

アメリカS M絵物語……………フェニクス商会

(127)

松本清張・著『霧の旗』より……………安東 泉
復讐にこめた女のサディズム

(85)

現代マゾヒズム文化時評②⑩……………森下高茂

(184)

武士道無残……………文・島本春雄
絵・東 桂史

(52)

ゴルドンの記憶⑧……………阿麻哲郎

(202)

■編集後記……………

(214)

体当論
戦国伝
怪盗
SマンガM

絵物語

蝕まれ
る青春
お読者の
便りの

オフセット
色ページ

裏窓論文
芸評論
M文の
文獻
時代語
絵物語
連載マ
ゾ小説





犬吠岬の太陽

エダ・キリコ・文
吉田久・写真

重なり合った東京の屋根の下の、そのまた

すみっこの、スミイッコにうずくまって、

えんりよがちにのぞく青い空や、ささやかな

緑を眺めながら、ほんものの太陽と、海と、

そうして、ほんものの夏にこがれていた私は

「どうです、海へいきませんか？」

という、編集長のおことばを、このうえも

なく、ありがたく、頂戴した。

けれども、二泊三日の遠征は、私にとって

かなり、ショックでもありました。

どうしてって？……ね！ ほら！ おわか

りでしょ？

「よう、あの編集長には気をつけんだぞ。サ

ケなんか飲むんじゃないゾ」

そんなコイビトのことばに、心の奥の奥の

ほうで、ひそかに、なみだしながらも「ほん

もの」の夏にくらまされた私は、茨城県の海

へむかって、トコトコ動きだしたのでした。

雨が降っていました。

夏とはいふものの、肌寒い朝でした。

なんだか、わびしい感じの朝でした。

これから用意されている仕事に対して、す

でに私は、ふかい倦怠をおぼえていました。

なにもかも、きのうにつづく、きょうなの

です。

私のもとめている夏は、どこにも見あたり

ません。灰色の、つめたくわびしい夏だけが

どこまでもひろがっていました。

約束の駅で編集長とおちあい、そうして、

約一時間半ののちには、吉田久先生と、その

助手であるK嬢と、メンバーはすべてそろい

ました。

もはや、数度めの、お顔なじみ。

さあ、これから、はじまります。

編集長は、れいによって、れいのごとく、

私のからだをロープで締めつけるでしょう。





そして私は、あまり冴えないポーズや表情などで、被写体としてのお役目を果たすことでしょう……。

私は、おそろしくなりました。

私の夏は、もう終わらせなければならぬ。そうなのです。私のこのちっぽけなからだは、うす暗い穴のなかへ埋葬させなければならぬのです。

いなか家の納屋の二階を改造した、こじんまりした吉田先生の別荘で、昼食をすませ、私たちはふたたび、先生の大きな車によって雨のなかを、場さがしに出かけました。

砂浜、うち寄せる高い波。

ひっそりと木立ちのなかにかくれた神社。空へ向かって、ぽっかりと孤立している得体の知れぬ不気味なコンクリートの建物。

白い雨のなかに、しずかに長くのびている銚子大橋。

いろんな汚物といっしょに泊まっている数十の漁船。

それらの背景を、私たちは、いちいち車をとめて、雨にぬれながら、物色してまわりました。すべては、雨のなかに沈んでしまっていて、夏はすがたを見せてくれません。いいんです。

どうせ私は、うらぶれムード……。

途中、砂浜にうち寄せる波のすばらしい表情に、ああ、ここにもゲイジユツが……などと、感嘆の目をみはらせているうちに、からだじゅうに波しぶきをあげてしまい、下着までも、ぐしょぐしょにぬれてしまって、車中の私は、そのべとべとが素肌をはいつくばう不快さに苦しめられなければならなかったのです。

そんな私のために、編集長はれいによって道化師の役目を買ってくださったのでした。

私はもちろん、一生けんめい笑いました。

そうして、疲れてしまいました。

先生の別荘へひきあげて、かわいた下着を身につけたとき、ああ、私は、このうえもなく、しあわせだったのです。

それでも、コンクリートの建物のなかで、カエルの大群をみつけたとか、そのひとことで、私の食欲は、いちじるしく減退いたしました。

夜、疲れた私のために——いえ、アルコールがはいると、破廉恥な言動を、ものともしなくなる私のために——ウイスキーが用意されました。

「彼女は酔っぱらうと、とても色っぽくなるんですよ」

てなことを、いとも気軽にいう編集長。



「裏窓」のために、なんとかして、私の魅力をご披露しなければと、そういう、けなげな責任感(?)も手伝って、本当は、ただ単に、飲みたいという欲望が大部分をしめてとにかく、ウィスキーを飲み、ほろ酔いきげんで仕事ははじめられました。

いままでお目にかかったこともないような見るからに痛そうな縄を、私の鼻さきにちらつかせながら、編集長は、残忍な笑み(?)をうかべて、そうして、私の乳ぶさの上に、下に、両の手くびへと、ぎしぎし締めつけるのです。

さらに、そのうえに、毛むくじらのでっかい足が、私の背中に、頭のうえに……。

ほんとに、ほんとに憎いひと!

屈辱感、羞恥、苦痛!

とても、とても、アルコールなどでは、ごまかせませんでした。

仕事を終えた私のからだは、縄目のあとがいっぱい。手首に、ほんのすこし、血の色。そこで編集長は、マッサージ師に早変わり、自称フェミニストとしての、めんぼくをほどこしたわけでございます。

そして翌日。

午前四時三十分。もうすこしねむっていたという欲望を押しやって床を離れました。

どんな朝も漬っていた私の朝、これほど、さわやかな朝を、私は知りません。

朝食もとらず、私たちは犬吠崎へでかけました。

なにしろ、人目をしのばねばならない仕事なのです。人びとのさめやらぬうちに、私たちは、ひと仕事終えなければなりません。

太陽は、真夏にむかつてのぼりかけています。

なにもかも、くっきりと澄んで美しいのです。

きのうとは、まるでちがった、きょうなのです。さまざまなかたちで突き出た岩々のかげで、こっそりと、ことは運びました。

まだ太陽の熱のどこかぬ岩肌を噛みしめながら、つめたい海水に身を浸しながら、白い波しぶきにふるえながら、まんまと人目をくらましたのです。

太陽は、すこしずつ高く、熱っぽくなっていました。

さらに、人出のすくない海を見つけては、うすものをまとい、縛られ、波しぶきにさらされ、そうして、私はついに、真夏に負けてしまいました。

編集長のご要望にこたえ、なにもかも脱ぎすて、レンズの前に、身を横たえたのです。



「いいじゃないスカ。かなりいいですよ」

「腰の線なんかは、なかなか、どうして」

そんな気休めのことばなどでは、とうてい救われそうにはないほどの、羞恥心でいっぱいだったのです。

どうして恥ずかしいのかって？

わかりません。

たぶん、いつも、ひたかくしに、かくしているせいでしょうね。

でも、灼熱の太陽のもとで、からだになにかをまとっているのは、やはり、ヤボッたいですよ。

ですから、からだじゅうに太陽がいっぱいだった私は、みんなより、ほんのちよつとだけ、トクをしたような気がいたします。

そして、みなさん、それぞれのお役目に、

疲労をおぼえはじめていました。

砂浜は、もう、夕暮れになっています。

砂丘へのぼると、足もとで、白い霧のうごくのがみえます。

霧はすこしずつ白く、深くなっていき、太陽はすこしずつにぶく、そして、赤さを失いはじめました。

漁師の妻や子どもたちが、そこここにかたまり、漁船の帰りを待っております。

私たちとは、ずいぶんかけはなれた彼らの生活に、体臭に、みな、感慨ぶかげであります。

涙をながさんばかりに感激なさっていた編集長は、とても愉快でしたつけ。

ゆきずりの農家に、スイカだの、ハマグリだのわけてもらって、そんな単純な生活に、

こころよい笑みをおぼえながら、あの、キザな倦怠ムードなど、いつのまにか、消え去ってしまっている私でした。

「もう、くたびれました。このへんで、すべてを終わらせましょう」

編集長の、私にとっては非常にありがたいこの提案を胸に抱きしめて、車はようやく、別荘へ向かいはじめました。

ひごろ、家庭料理には縁遠い私を、K嬢のそれは、とてもあたたかく、むかえてくれました。

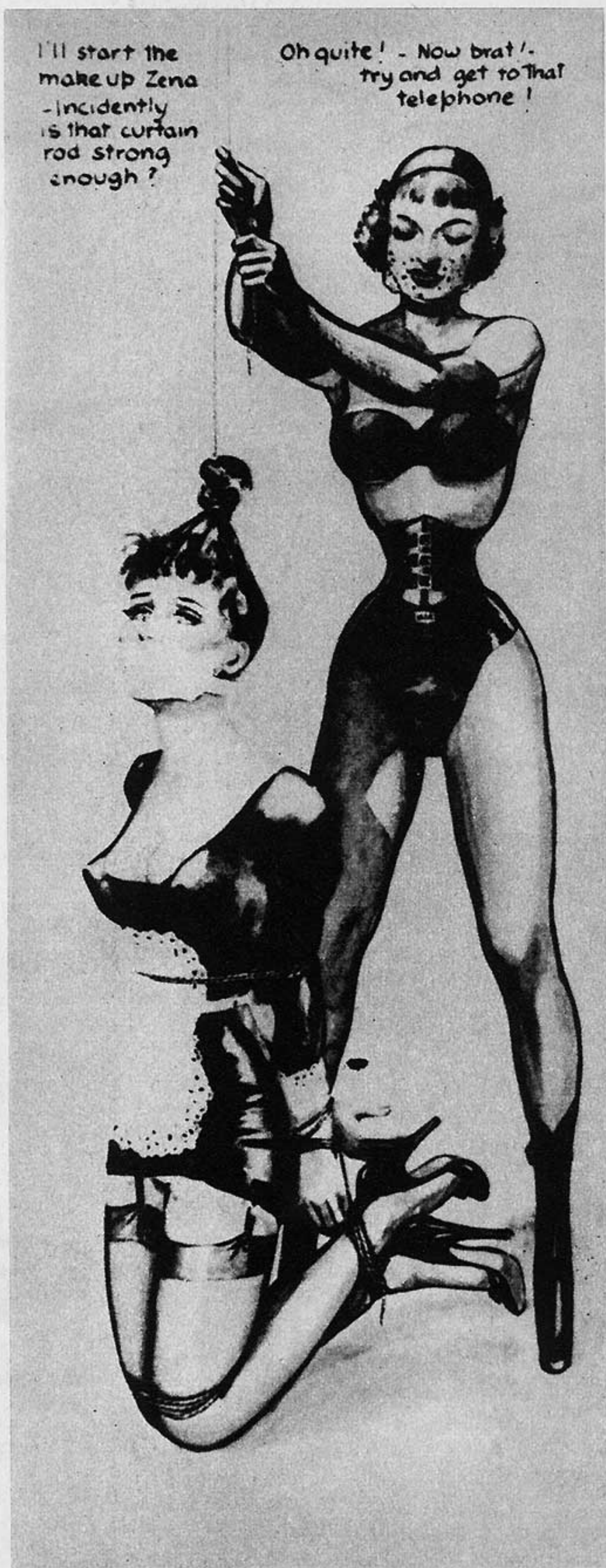
すべてなごやかで、みんな、みんな、親しかったのです。

とても、オセンチな結末でございます。

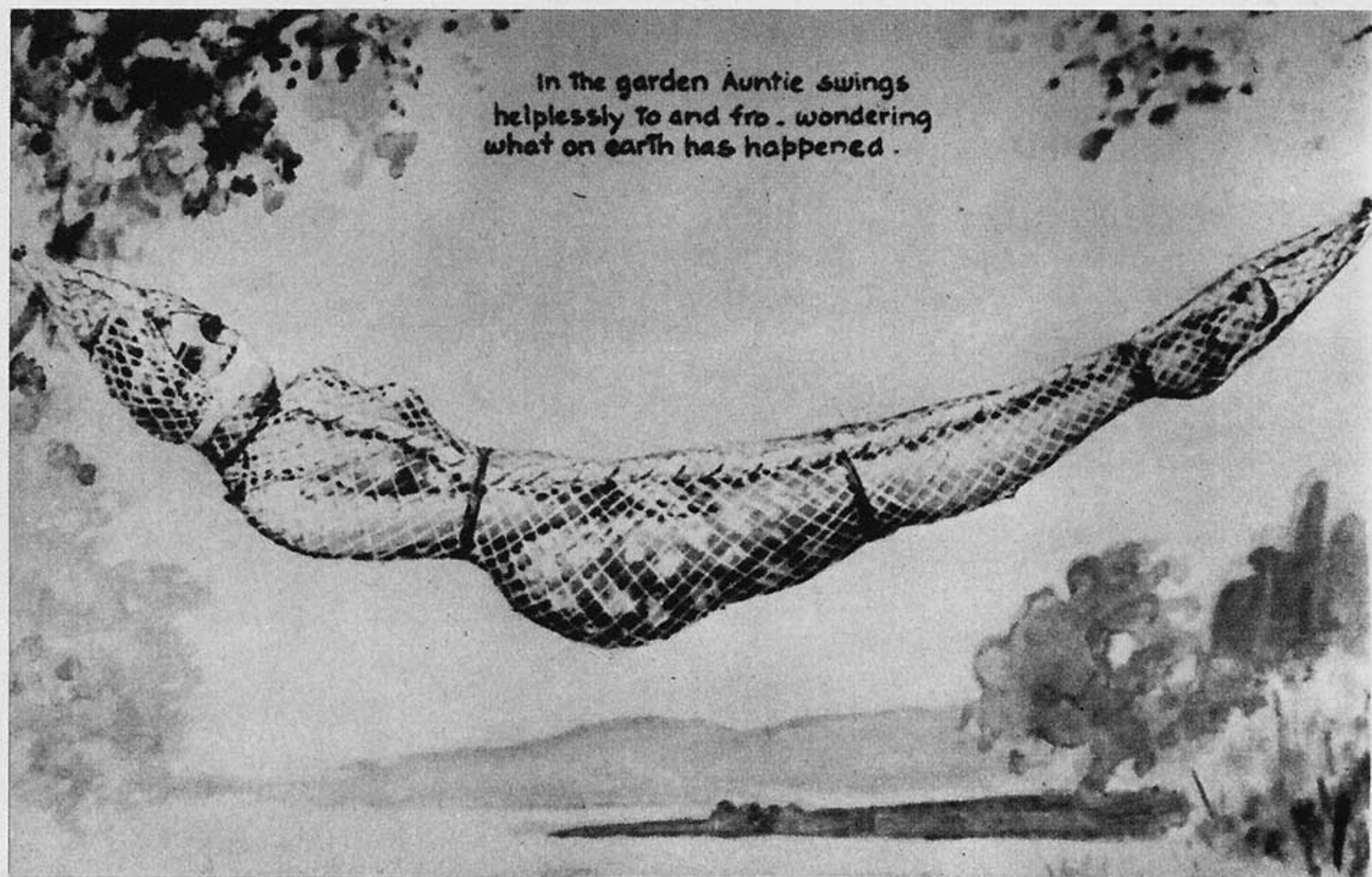


海外の 公刊誌より

カルフォルニア
フェニクス商会・特約



In the garden Auntie swings helplessly to and fro, wondering what on earth has happened.



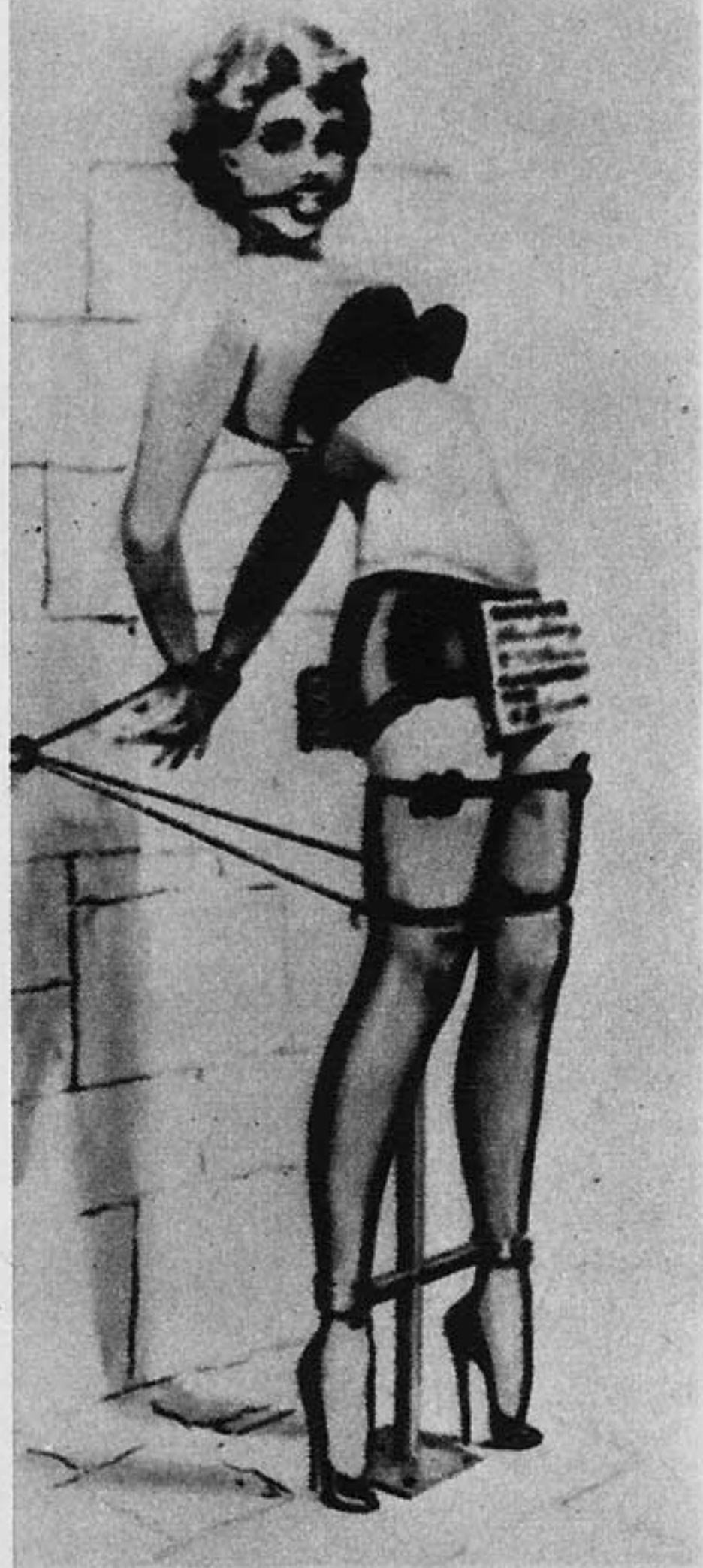
What won't you permit my impertinent one? -when you've fixed her up Zena we'd better attend to the one in the garden too!

OK!





- now for minor errors we have minor punishments which really are not uncomfortable at all - for a few minutes



I've tried and I've tried to get free -



BUT NOTHING MAKES ANY DIFFERENCE
quite hopeless! - I'll have to
unlock you, that's all!

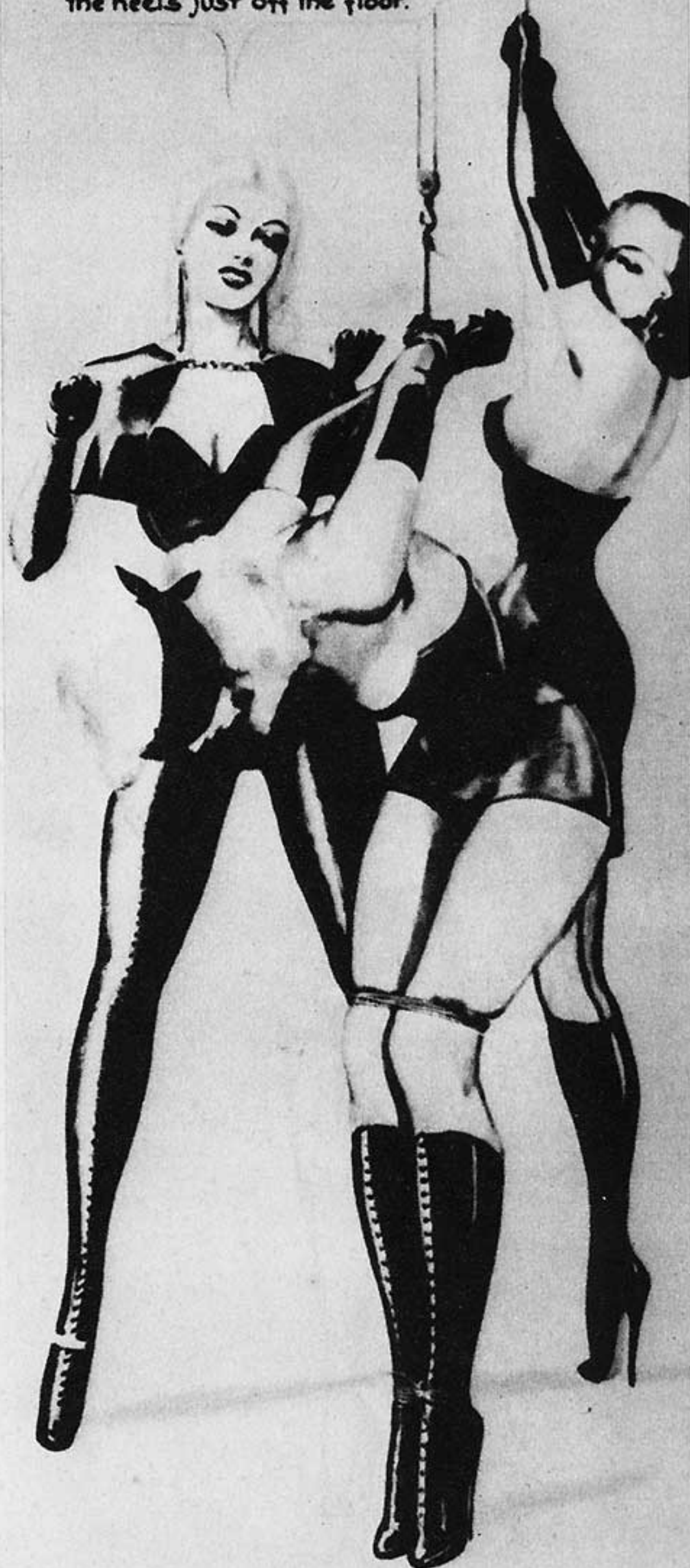
OH-H



There - your hands are free.
Here's the key - you can
manage the rest yourself! -
and be quick about it!



an excellent arrangement Olga -
simple - and effective! that's right -
the heels just off the floor.

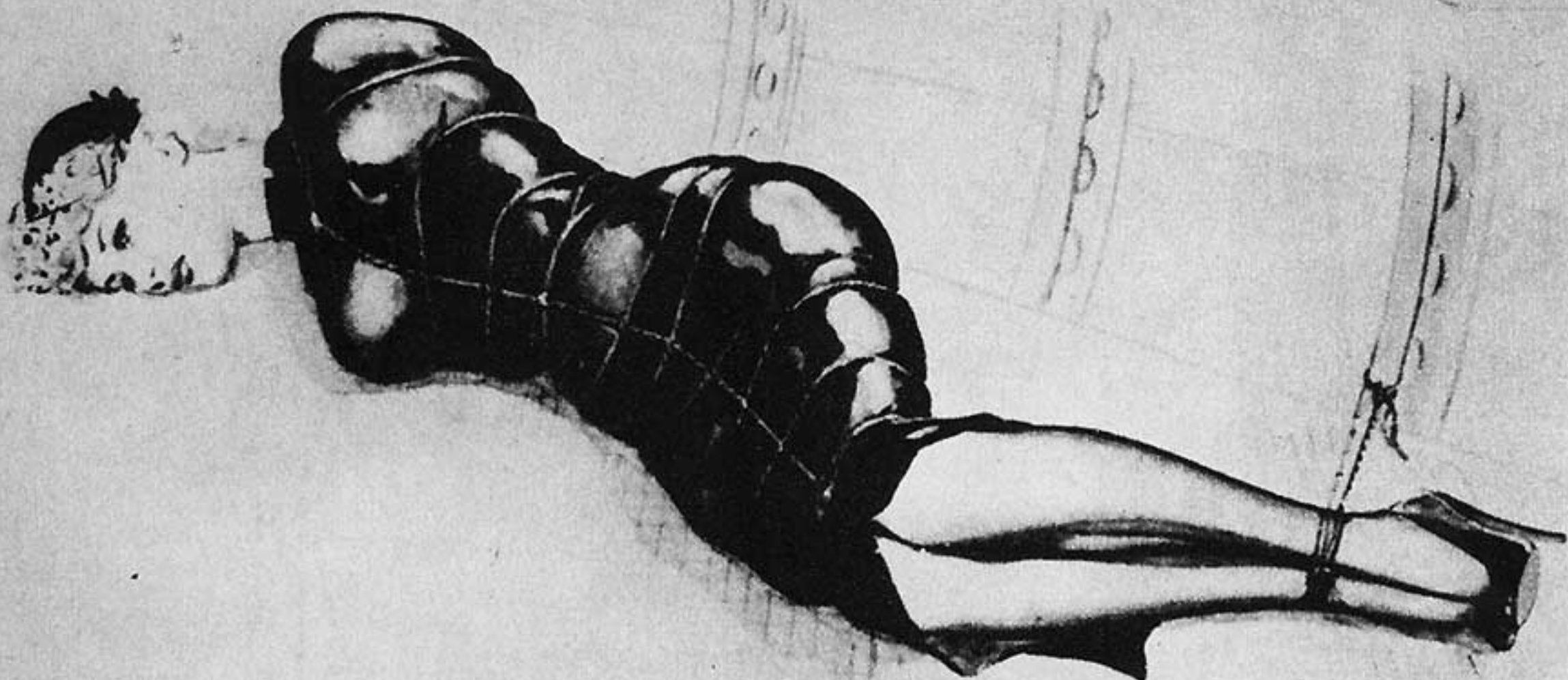


Take out the gag Olga and
let her speak !



in the sky a plane roars away to a strange country, with its captive cargo.

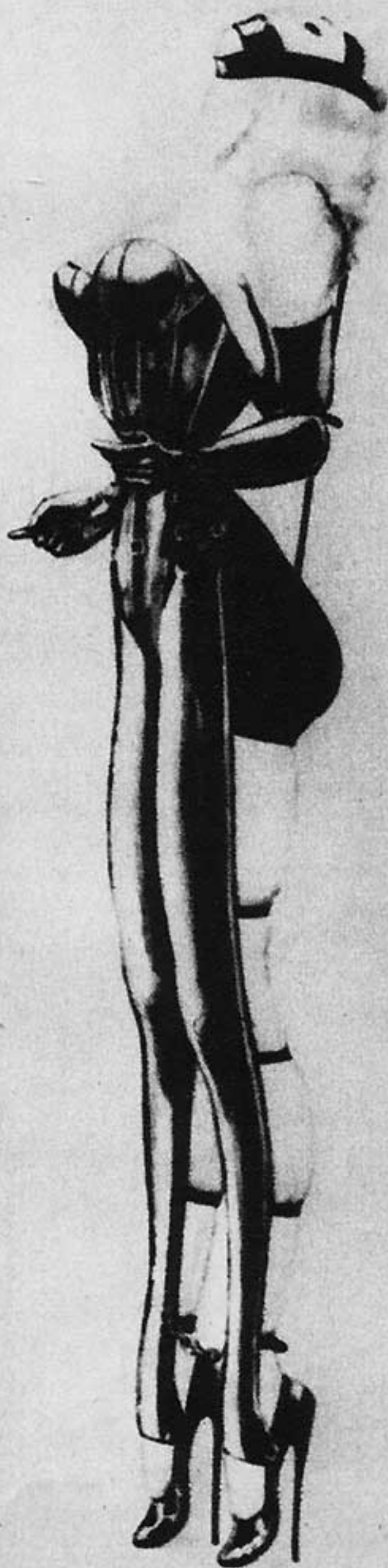
I've taken your gag off in case you get airsick,
but any nonsense and you know what
to expect !





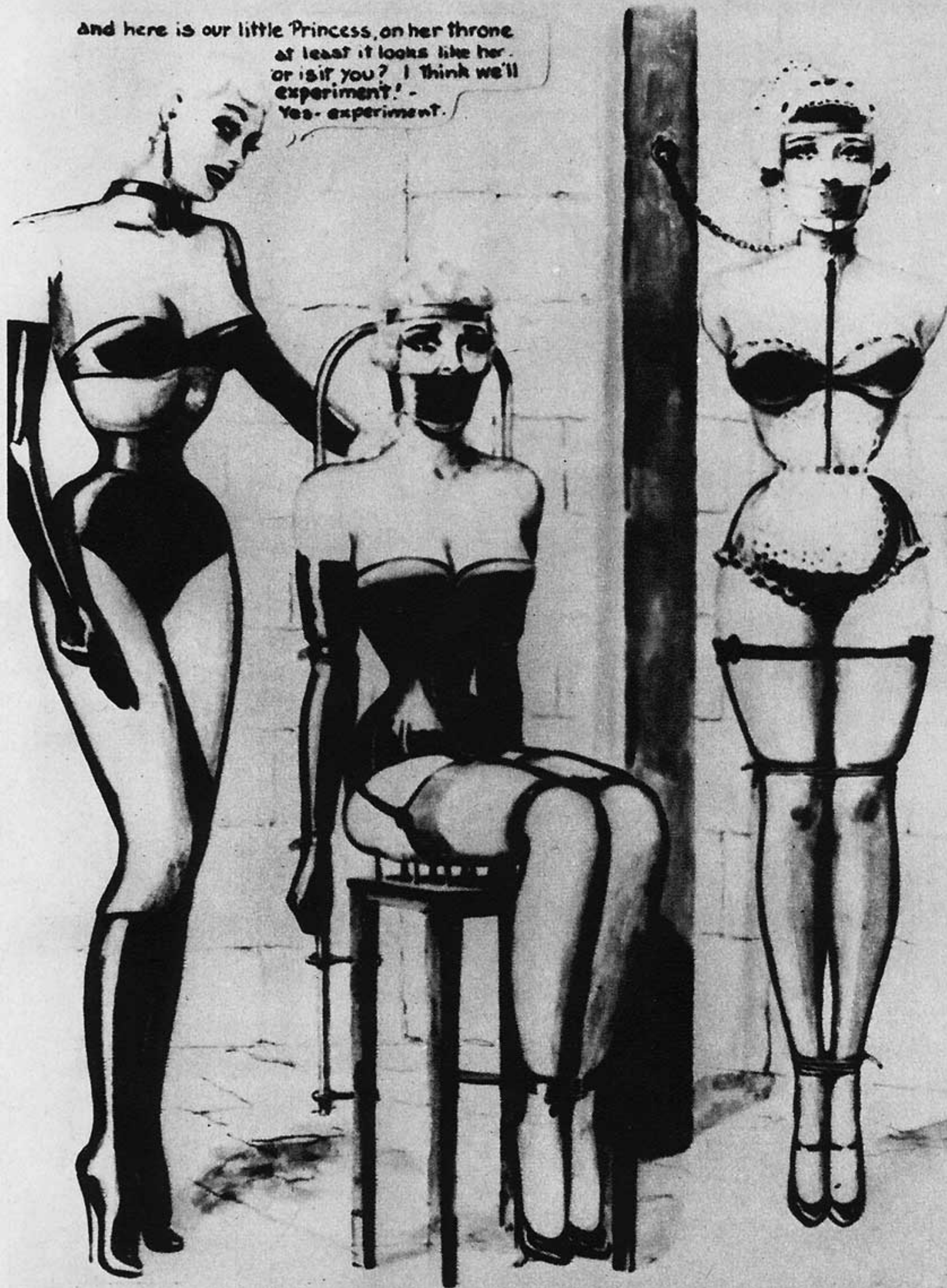
- and if its not one figure training gadget -

- then its another. All uncomfortable !



"NEW ADVENTURES of SWEET GWENDOLINE"

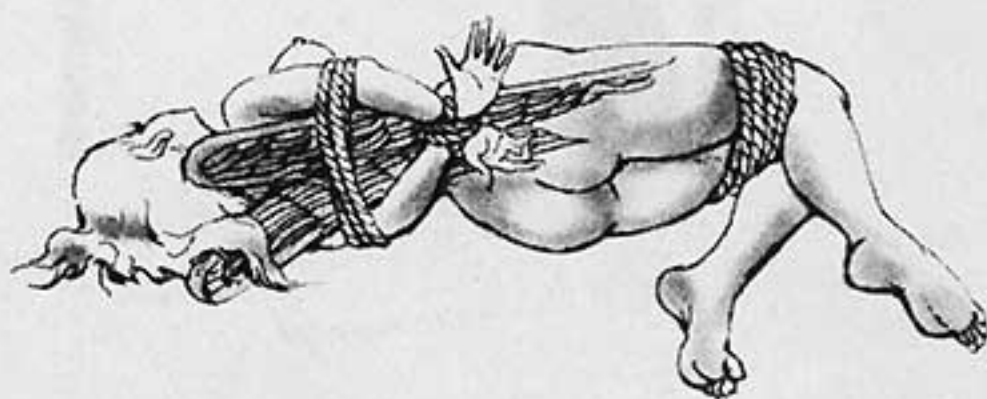
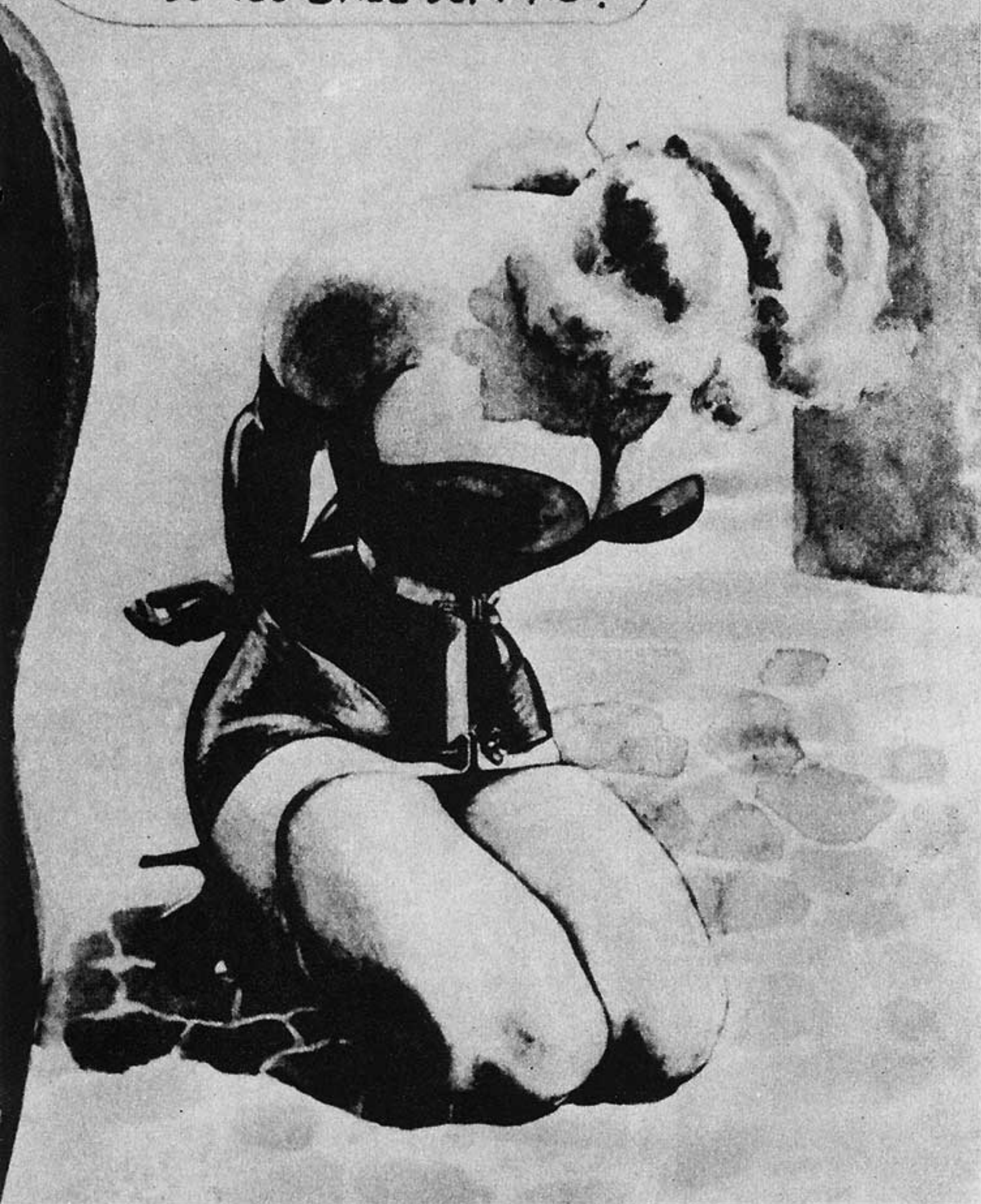
And here is our little Princess, on her throne
at least it looks like her.
or is it you? I think we'll
experiment! -
Yes- experiment.



SO- LATER IN THE DUNGEONS OF THE CASTLE.

YOU SEE escape is impossible -! NO one
KNOWS where you are -! NO one can help you!

- DO YOU STILL DEFY ME ?



裏窓



11 月 号

第 8 卷・第12号

ウ
ラ
マ
ド

1

ヴィナスの誕生

森 下 高 茂

現代マゾヒズム文化時評において、以前にも言及したことのあるハンブルグのパウリイ教授が、新しく一冊の書物を贈ってくださいました。

大へんな豪華本で、限定予約価は邦貨にして一四、〇〇〇円というものであるが、この「性的崇物傾向癖」^{セクシュアル・フェティシズム}という題の本は、最新の資料をシュテークルやヒルシェフェルトの古い資料と交互に引用しながら、おどろくべき精緻さで「謎の世界」とされてきたフェティストの世界の一端を解説し、そして推論している。その理路整然としている上に独断を排した書き方は、豊富な別例の持つそれぞれの傾向に関する端的な描写とともに、ポダルス・キィーウエイド共著の同様の世界を解説した「セクシユアル・シンボリズム」などはくらべものにならないすぐれたものであることは言をまたないが、同時は、我々を戦慄的に感動させるのは、パウリイ氏が、フェティストの世界を単なる現象として、客観的にのみみることなしに、むしろその世界に没入し、あたかも婆羅門僧が苦行の末にネハンガに達し仏陀と等質に至ることを念ずるのと同じく、彼等の夢をともし夢見ることによって、フェティシズムの秘密に触れようと努力していることが歴然としていふことであろう。

たしかに、この書物の中には、一般人に対して初めて打ち明けられたともいふべき新しい着眼点からの記述が、いたるところ目に触れる。

パウリイ氏は「偏向性愛愛好者を患者V」として扱わないという、私たちと共通の主張を持っているように思われる。したがって、華々しいとさえ形容したい程の引用と、それに就いての説明は、医師が患者について語り、弁護士や検事が依頼人や容疑者について説明するまえの、独特な卑屈な匂いのする思ひ上がりとは全く反対に、マルコ・ポーロが中華の異質の文化と文明に若々しく反応した、あの好奇と感嘆とを秘めているように見える。ある時はパウリイ氏は、高名なデザイナーが自らの新作を誇らしげに説明する、あの自信にみちた抑揚をかくそうとしないのである。

そこには、長い間不当にも全倒錯者に対して与えられた憎悪、恐怖、侮蔑、あるいは用意された空虚で無意味な哀れみや同情は、全く見当たろう筈がない。

これは、長い間の桎梏から解放された、あの倒錯者全体にとって、はじめて信頼して読むことのできる大著の一つであるといつても過言ではあるまい。

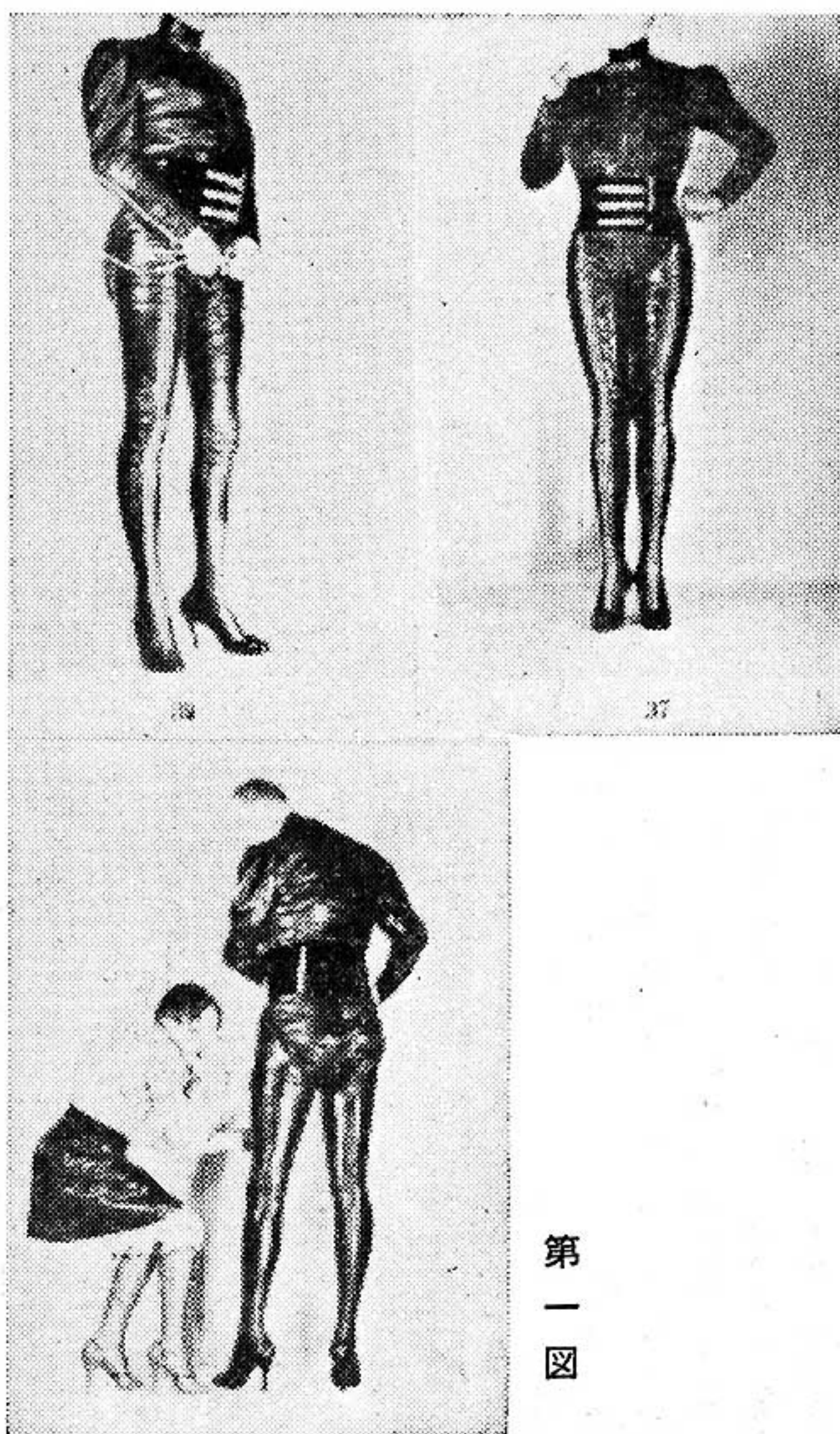
こうした多くの新しい見方の中で、特にフェティストの世界に没入してみ始めて解るのは「フェティストの実際的な満足の方法」や、その「血の通った実生活」についてのパウリイ氏の引用であろう。

氏の意見は、私の意見と本質的にあまり違わないので、この機会に私は、この二つの点に関連して、パウリイ氏が引用した数多くのさしえ、参考写真の中から一部を抜粋して提示しながら、フェティストの対象物についてのおもしろいやり方をご説明しようと思う。

第一図はご存知のように皮革フェティスト(男性)の実写である。ぴったりと身体にくっついた皮の上衣、幅の広い、そして厚い革のベルト、皮製のパンティ風の下着に脛までの編上長靴、こういった衣裳をつける男の姿である。

——この場合、靴がハイヒールであることは、必ずしも彼が女装愛好者であるとはいえない。その理由は、実際にこの種類に属する長靴を自分で着用してみたことのある皮革フェティスト、あるいはマゾヒスティックなフェティストでなくてはわかるまい。

急に高くなっているヒールは、力の作用で太股からヒザ下にいたる脚部に心地よい圧迫を与えるものである。それは彼に、いま何を



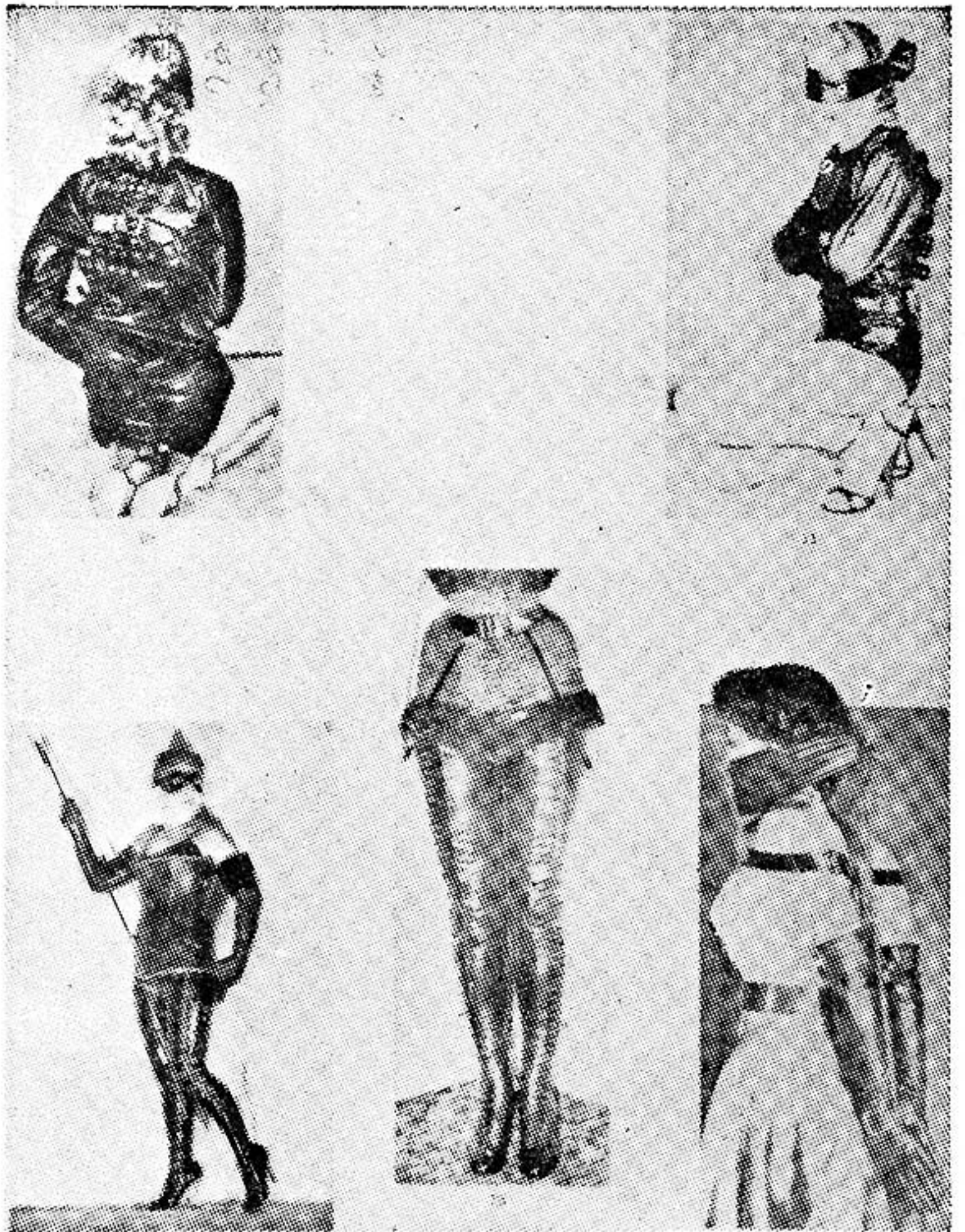
第一図

はいているかという意識を常に失わせない。多くのフェティストが、夜寝る時でもこれをはいて寝たいと思うのは、実にそういう理由からに他ならない。

事実、当初、神経に鋭い刺激を与える皮独特の匂いや、冷たい、かたい感触は、五分もするといっさい刺激的ではなくなってしまうものである。冷たさは体温に応じてたちまち

あたたまってくるし、皮のきゅうくつさも一二分の間に異質の感覚を与えなくなってしまう。ただ、軽い、脚部への圧迫だけが、彼に刺激を与えつづけるのだ。

いわゆる正常人が「ばかっている」と考えるであろうこういう場面は、特殊な歓喜を知るものにとっては、慄然とする程の極限の姿なのだということくらいは、たとえば、この男



第二図

と共通の好みを持っていないにしても、倒錯傾向のある人には、容易に理解されることであらう。

「しかし」と、教授パウリイは書いている。「この男は極めて恵まれた人間の一人であるといわなければならない。それは、単に、この歓喜の衣装が二、〇〇〇ドイツマルク（邦貨十八万円）もするというような、経費の問

題だけでなく、この人間は、自分の歓喜を味わう機会と場所と、そして理解のある女性パートナーを持っているからである」

自由になる時間、場所、この二つは、必要な経費以上に必要でありながら、その実、得難いものである。

社会全体のとりつづけている偽善的なポーズは、かつて異教徒に対して血の洗礼を与え

つづけた歴史を持っているが、いまや、それは、政治的教義と社会道徳律——道徳ではなく半成文化した慣習的道德律——とを識別の基準として、現代の異教に警戒の姿勢をとりつつある。

各国の成文憲法に、住民の大多数の意志を標榜して誇らしげに掲げられている各種の自由、それは、めったに実行されないにもかかわらず、抹消されないで放置されている周知の条文である。各国の裁判官たち——それは天にも神にも、また真実に対してさえも責任を負わないことを国民に認められた特殊な偽似支配階級——は、その条文を、言語の枠を超えて解説する。そして、人々は、自由を与えられ、いま存在する制約は、本来的に制約とは考えてはならないものだという法律の解釈の経文によって催眠されている。

人類の集団的な精神のマスターベーションは、延々として果てるときを知らないかのようである。

「倒錯」は、かつて、魔女、異教の象徴と考えられた「精神異常病者」の一部とされていた。多少の例外を除いて、倒錯者は差別され、甚だしきは禁断され、そして抹殺されてきた。その伝来の恐怖は、現代の倒錯者に不必要な「羞恥」として遺伝している。秘かに、人の

眼を逃がれて、彼らはなおも思い切ることができずに、倒錯行為をつづけている。それに対しては、ごく僅かな公娼街を除いては、多くのサド・マゾヒストは公開の場を持たず、従って大部分の倒錯者は、いわば国を追われた流浪の民として生涯をすごすか、シキルとハイドを巧妙に駆使して世間の眼を晦ましてゆくかの二つに一つを選ばねばならない。

稀な例として、F・K王のように財産と権力を持つが故に、かなり堂々とその欲望を實現できる恵まれた者もあるが、これは極めて特別な例であるといわねばならぬ。

かつて、パレスチナの岩だらけの荒蕪の地域から、愛と犠牲の宗教が抬頭したように、おそらくは「本能の美的自由」ともいうべきものを信奉して、精神と肉体との双方に慰藉と歓喜と神性を供与するであろう倒錯者の自由への盛んな意欲は、現代のこのような精神的、環境的荒廢の中から、犠牲と消耗をつづけながら育まれてゆくであろう。

その証左として、昔日のかくれ切支丹が、刀剣のつばに十字架を鑄込み、観音像にマリアを彫って魂の自由を乞い願ったように、現代のサド・マゾヒストが耐えきれない希求にうながされて努力を傾けた、秘かな慰藉の記録をここに掲げてみよう。(第二図)



第三図

まず、パウリイ氏が数多くの写真類の中から挙げた代表的な皮革フェティシズム愛好者むきに、商業的に製作されたものを五つ並べてみると、上段左右と下段右下は、皮革がサディスティックな縛りに応用されたもの。下段中央はマゾヒスティックな長靴フェティストのための写真(ごらんのように上半身は必要がないから切り取られている。これは個人の秘密の保全のためではない) 下段左は、最も典型的にポーズされた皮革

衣裳を着用したサディスティン。このマスクも異様な雰囲気を出すためにのみ使用されたものである。この五つに代表される写真類のうち、前記三つのサディスティックなものはアメリカで作られたもの。下段中と左とは、ヨーロッパで作られたものである。 こういう写真はたいへん高価なもので、往往にして一枚千円以上にも売られているということは、大方の読者のよくご存知のことと思う。



第五図

第五図は、第四図と似て非なるものである。これは純然たる普通の舞台写真、オーストリアのレビュウ・ガールである。しかしこの中に、マゾヒスティックな潜在的欲望を持った観客にアッピールするための工夫が認められる。第四図と比較してみると、たいへん興味のある問題である。一方は娼家街の奥まった

第四図

第三図は、写真では経費の割合に十分な効果を得られないのと、なるべく安い価格で蒐集をしたいという希望をかなえるために考案された「さしえ画集」の一例である。これは我が国でももうポピュラーなものになってきたが、大部分は原画として販売されず、フォトコピーとして販売されるもので、この画は長靴マニア、コルセット・マニアの他、サドマゾいずれの好みをも満足させるように企画され作画されている。アメリカの画家スタンTONの作品である。

第四図は珍しい実写で、ドイツでの職業サディスチンである。長手袋、乗馬用靴、編上げ式ハイヒール長靴、この三つが現在でもなおマゾヒスト一般（特にヨーロッパでの）の憧れの的であると同時に、最も多数の愛好者を持っていることを示している。

一室で、他の一方は街の中の劇場の舞台で、一方は人眼を忍んで、他は堂々と公衆の前で、という風に、同一の対象物が、全く違った環境で対照的に用いられている。そして、このことは同時にフェティシズムの対象物の多くが、本来は非性愛的なものであるということ、サド・マゾヒズムの欲びが、性交の満足とは異質のものであることを裏付けているのである。

第六図は各種の落書きである。この中に第一——五図にいたる同質の傾向が認められるのはおもしろいことと思う。

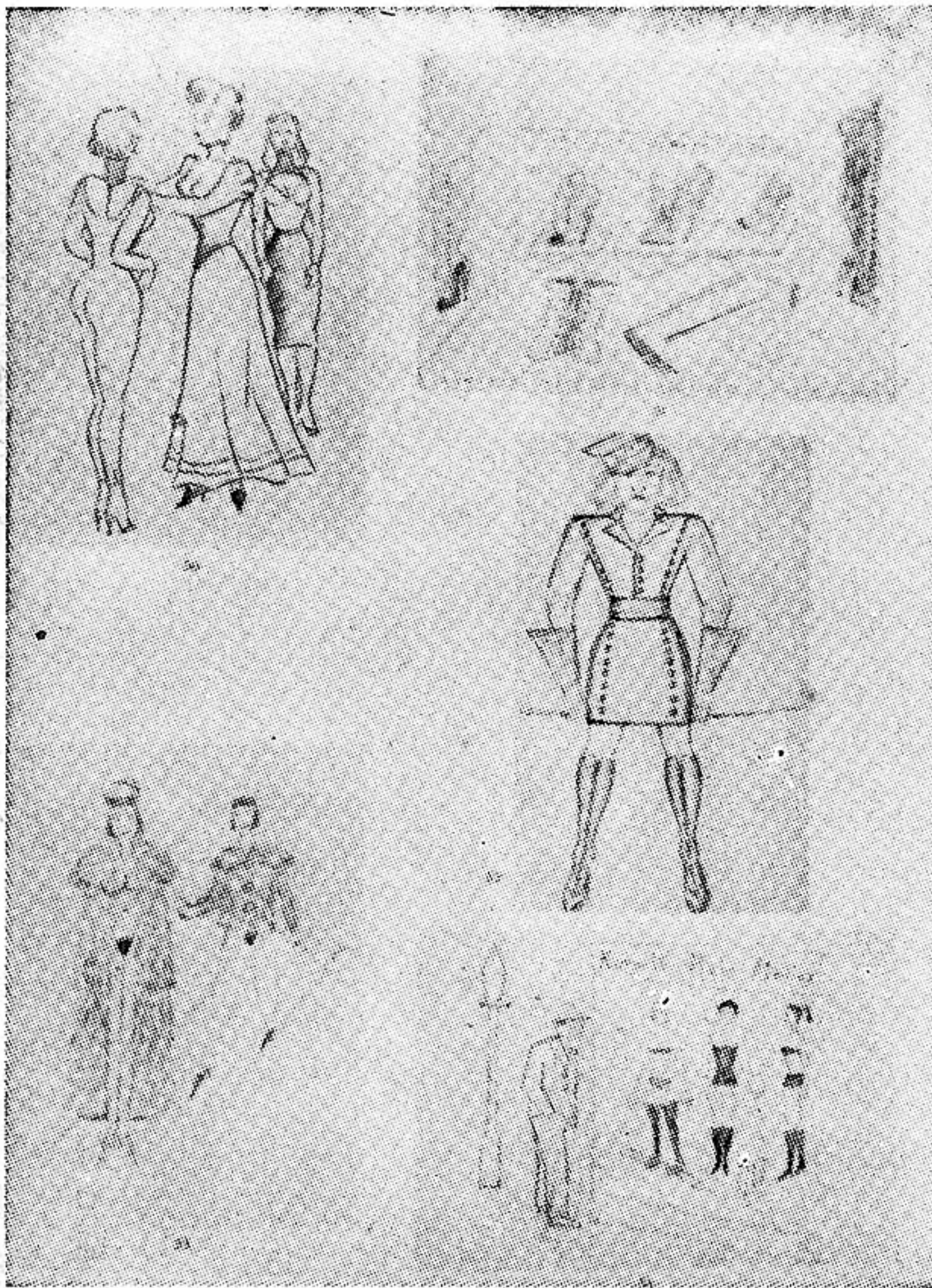
第七図は、同じくスタントンの絵であるが、残虐な拍車のファンタスティックなデザインである。こういう風に人物なしで描かれた絵でも、十二分にマゾヒスティックな人達を満足させることができる。この絵を見た、あるツォーミミク（動物化願望者）は、筆者にその翌日書き送ってきた。二十八歳の独身青年である。

「僕は、あのたった一枚の絵で、正直なところ興奮してしまいました。人物がそこに書かれていないことが、かえって僕の想像を自由にさせたのでしょうか。想像力はどんな欲です。僕はドナ・リードのような絶世の美女が、こんな靴をはいて、こつこつと

石だたみを近づいてくる光景を思いうかべました。きつと手に鞭を握って、その尖端の小さな革のループが、彼女の怒りにうちふるえているでしょうし、石壁の環にうしろ手に鎖につながれた僕は、いやしい目付きで、怒れる美女の血の折かんの恐怖にふるえるのです。びたり、足音がとまって、極度の恐怖にただ視線をそらせている僕の

鼻の先に、彼女の美しい足の運動で、少ししわのよった靴が、このおそろしい三重の拍車をチロチロと鳴らせながら、突き出されるのです。不覚にも、奴隷は抑えられていた獣欲が、この恐怖のさ中にうずきだすのを感じます。まゆずみをぐいと力一杯上

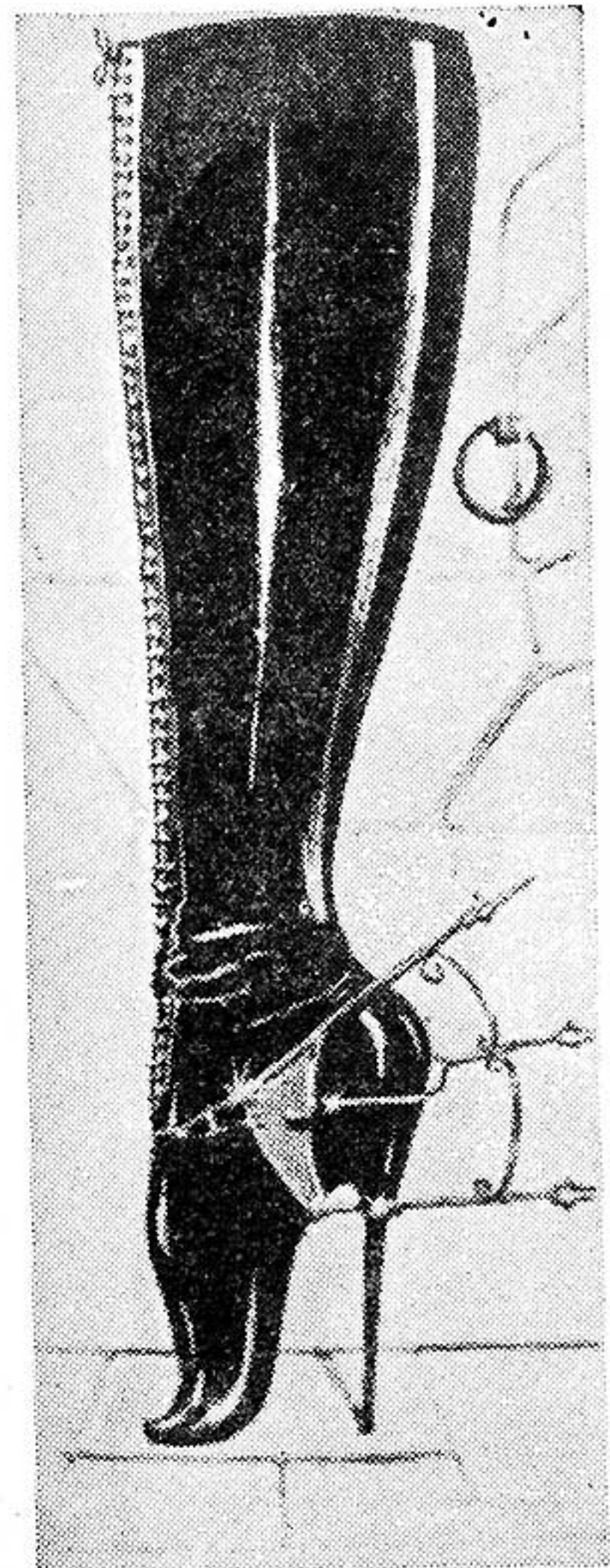
第六図



にひいた、らんらんと輝いて人を射すくめる彼女の視線が、精一杯の悔べつと怒りにふるえながら裸身の男をなめまわすのが、奴隷にもわかっていました。床をふまえた方の、細いエンピツの芯のようなヒールが、ククツと石だたみにきしむと、彼女は、欲情をあらわにしたこの不逞な奴隷の脇腹めがけて、おそろしい力で拍車を蹴こんだのでした。——以下略——

ただ一片の片方の靴の絵は、かくしインクで書かれたホメロスの詩を朗誦するように、夢の世界を現実のものとして再生するのである、

マゾヒストは詩人である。このたった数センチメートルのフォトコピイは、詩人の血をたぎらせる。彼の頭には、いまや怪僧ラスプーチンが、毒杯をあおぎながら立ち上がったときのような、ドラマチックな光景が合成されるのである。彼にとって、これは一片の絵ではない。これは、天国への入場券である。フェティシズムが全倒錯者にとっての得難い媚薬であり、結晶作用の触媒であることは、このとおりである。またの名をセクシユアル



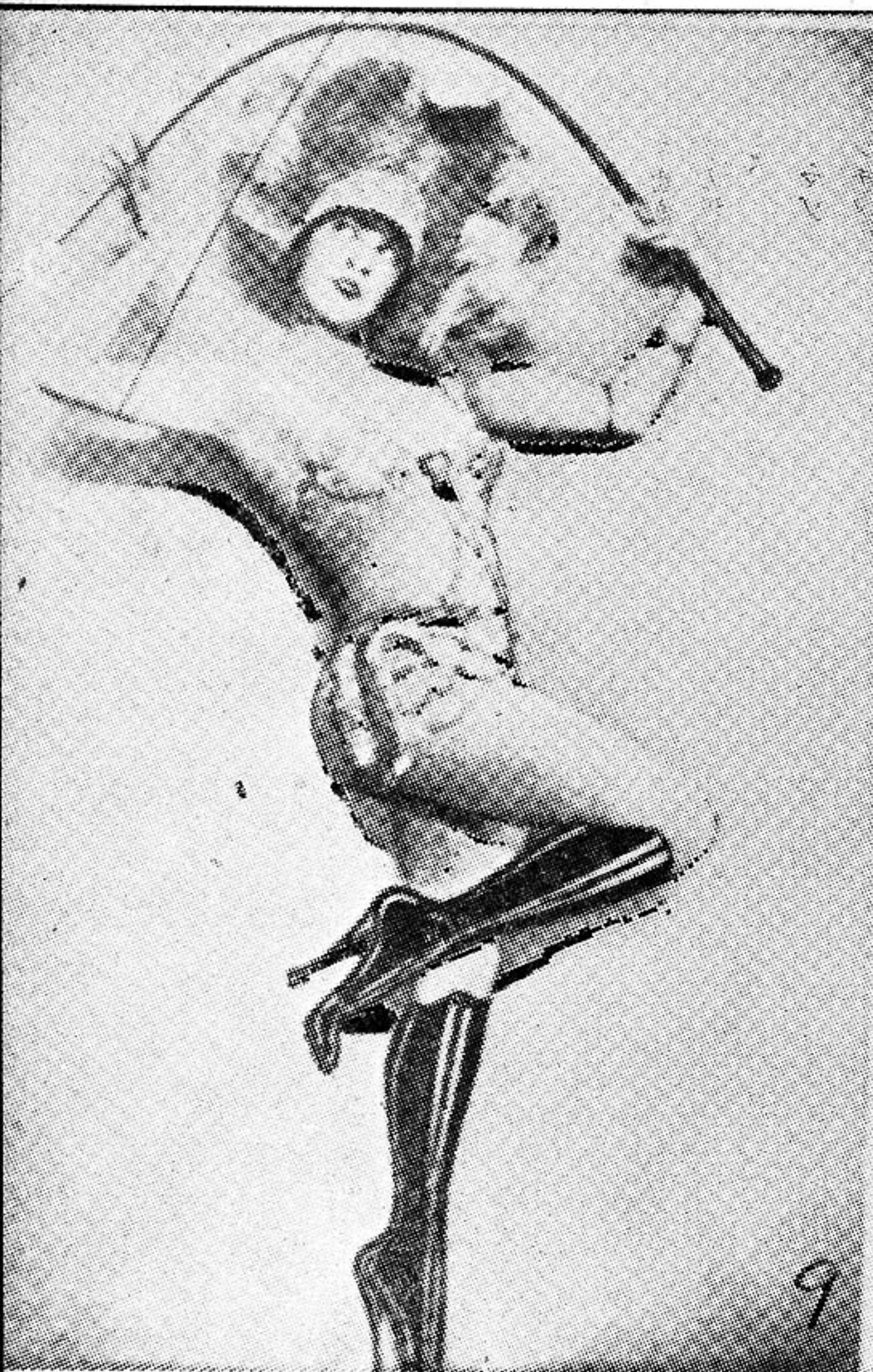
第七図

・シムボリズムと称される理由もここににある。「昔の書物にあるように」とパウリイは再び書く。「フェティシズムは庶物崇拜ではなく『庶物性的愛好』と考えねばならぬ」と。

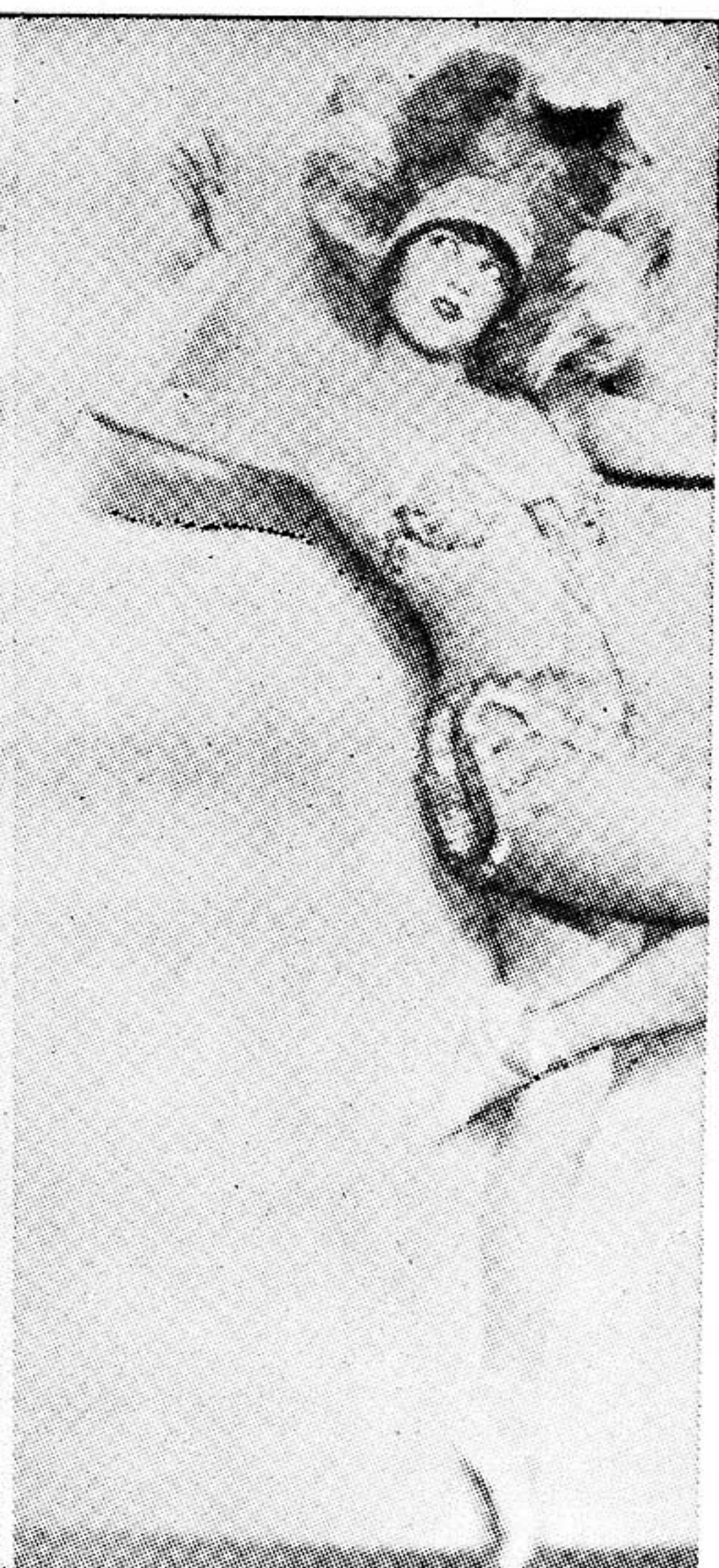
第八・九の両図にいたって、この心理的希求と、その代償行為の評価の高さは、さらに具体的に、かつ活々と述べられている。

一枚の何でもないバレリーナの写真（第八図）は、このよう（第九図）に筆を加えられ

る。加筆したのはもちろんフェティストである。彼はひそかに、愛人を創り上げる。第八図の女は単なる素材にすぎない。はじめ、彼はこの中に愛人の面影を認めたのであろう。彼は夜、自室に入ってポスター・カラーを溶いて、丁寧に、時間をかけて、少しづつ靴と鞭を描き足すのである。この作業は、常に孤独な彼を期待感で幸福にする。そして、何時間か、あるいは何日かの後に、愛人の整形は完成する。彼はひとり、その幸福感と、莫大なエネルギーが、奔流の如くに彼自身をおし流してゆくのをどうすることもできない。ベシエヌウト・チュルリインが、自作の巨大



第九図



第八図

な英雄像の鑄造の完成したのをみて、ただいたずらに立ちすくんだように、この市井のフェティストは、創造の感激に立ちすくんだことであろう。

倒錯が禁断の味の味をするというのは、実にこの感動のためであるといっても過言ではあるまい。

第十・第十一図は、同様のものであるが、この場合は根本的な改変は構図に対しておこなわれていない。普通の乗馬服の映画女優の写真がちよっと変ったスタイルにかえられただけである。

だが、私達はここに、フェティストの頑固な支配欲が現われていることに注目せねばならない。このような改作をした人にとって、長靴は脚の形にぴったりとついているものでなければならなかった。そして、ウエストはより細くくびれ、巾広い革バンドが必要であった。そして、曲馬の女性のような感じを出すために、シャツのボタンははっきりと数多く並んでいなければならず、そして、靴は普通のものより長く、銀の握りがついている特別なものでなくてはならなかったのである。

彼は、第十図では満足せず、わずかな改変を加えられた第十一図が心要だったのである。

ここに峻厳とも、我儘ともとれるマゾ系フェティストのどん欲さが露呈されている。彼はこうした改作の世界では、大帝アレキサンドルであり、始皇帝であり、そしてネロである。彼は自分の治下のすべての物を意のままにしたい。そして、このような絵を創ることは、彼にとって、始皇帝が万里の長城を築くことよりも重要であり、その完成は、はるかに大きな安心とよろこびをもたらしたにちがいない。

さらにもう一つ、全く普通の写真に加筆した第十二図と第十三図を見ていただきたい。第十二図のワニ皮の高級婦人靴は、惜し気もなく塗りつぶされて、第十三図のきらきらと光沢のある長靴に変えられてしまう。この不気味とも思われる改変は、加筆者が、特に長靴に対するひたむきな愛を持っていること

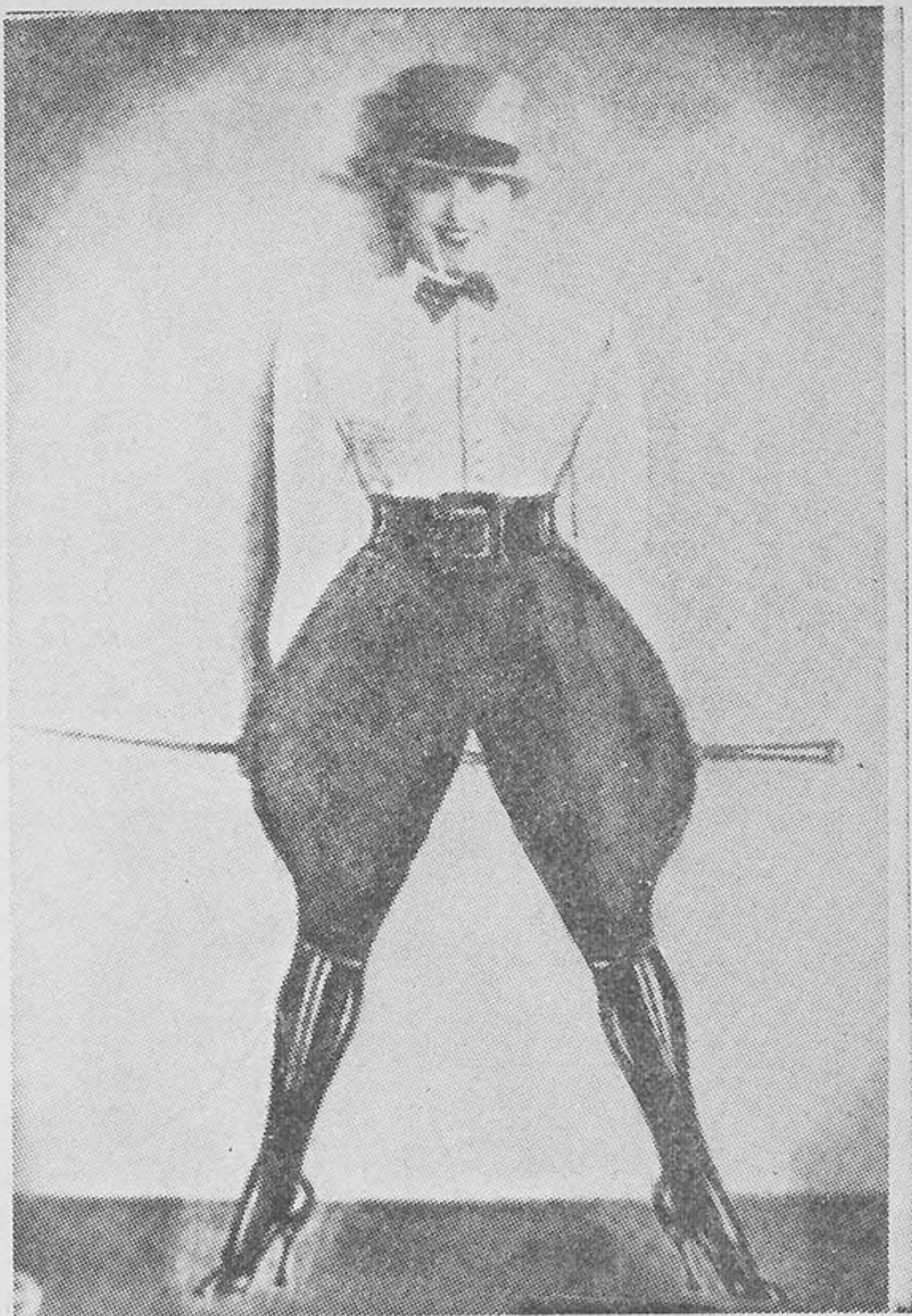
を示している。第七図の職業画家によって描かれたしわにくらべて、何とつつく、丹念に描かれたしわであることか。そして、右足に加えられた上部からの体重の表現、それは、この靴で加筆者の理想の女性によってはかれていることを想うのに必要であった。靴が、よくはきこまれているということ、つまり、この女性が、彼の好みの靴を習慣的にはくということを表現するために、いかにしわの位置と光沢が考えて描きこまれているか。ここにもまたヴィナスの誕生がある。

第十四図は、更に珍しい例である。これは全身像に対してでなく、ポートレートに対して加筆された例である。

上半身、まわりに黒いわくの見えるところが原写真であって、加筆されないのは、顔と肩及び両手先だけ、他は全部革の衣裳に描きかえられてしまっている。その上、下半身はすらりとのびた脚がふみ開かれているように描かれ、何でもない一枚のポートレートは、こうしてサディスティンの姿に描きかえられてしまっている。おそらくこの絵のようすでは、加筆者は必ずしも達筆の人ではあるまいと思うが、ただ執念で描き上げたというその凄まじいまでの思いが人を打つ。写真は一



第十図



第十一図

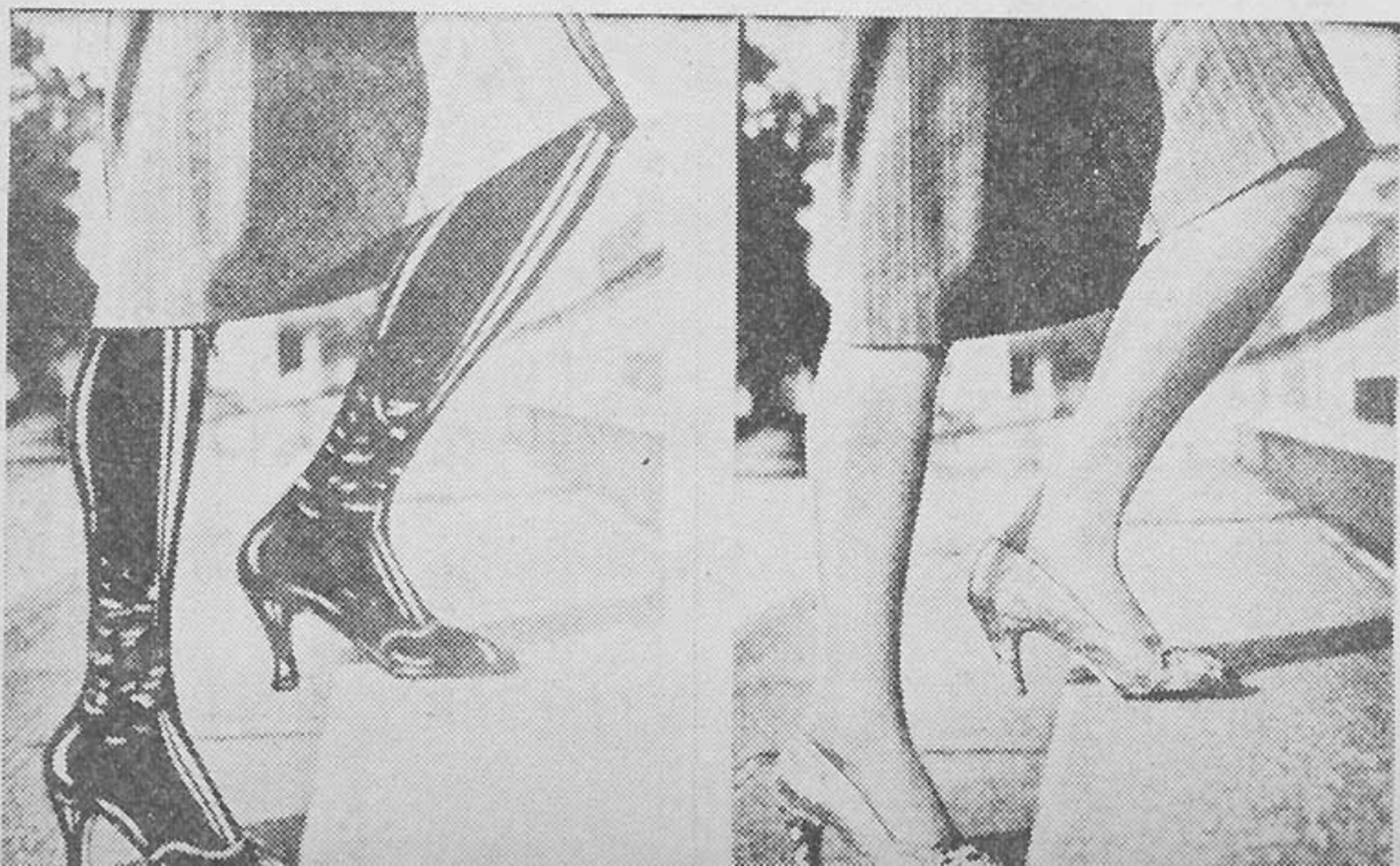
見シャネット・リーのようだが、そうではなく、ただの広告ページから切り抜いたもののようにである。

第十五・十六図は、それぞれに完成された整形ずみのフォト・モンタージュ。

第十五図は人物だけでなく、壁面に小道具を配して、更に十分な効果を上げようと努めた痕が歴然としている。おそらく、この作画

は一度に完成されたのではなく、何回にもわけて制作されたものであろう。そして、多くのフェティストがそうであるように、彼は制作と昂奮と自慰を繰り返したにちがいない。その意味で、これは、彼の欲情の経歴を物語っているものといえよう。作画は、斯界の権威の一人であるパウル・カム（別名フランソア・スウリエ）の画風に近似している。このことは必ずしもこの絵だけでなく、総体にこ

第十二(右)・十三図



の種の絵に共通である。

第十七図をごらん下さい。これは、スウリエというサインでカムの描いたものの一枚だが、この靴のデザインと描法、それにこの女性自身のもっている、ちょっと古くさいコケットリイは、そのまま異様なお色気となって私達に迫ってくるようである。

現在、欧米ではあまりにも略化して味が軽いつという理由で、カムの作品は必ずしも歓迎されているわけではないが、まだまだ日本でのMS画は、カムや、同時代のヘーゲマンなどの作品をよく研究すべきであろう。

たしかに日本の画家は、更に技巧的で迫力のある場面を描いている。本誌にも数多いこれらの名品が掲載されているが、一番残念なことは、画家自身が「絵」を描いているにすぎないということである。特にフェティシツクの世界で、最も要求されるのは技巧でも構図でも色彩でもない、フェティシズムに対する、幼稚なまでに単純な傾倒なのである。

もし、フェティシズムが何らかの哲学的意味を持ち、崇教的色彩をおびているものであるとするならば、これらの絵は、仏画であり、マリアの絵であり、システイナ礼拝堂の大壁

第十四図



画と等質のものでなくてはならない。

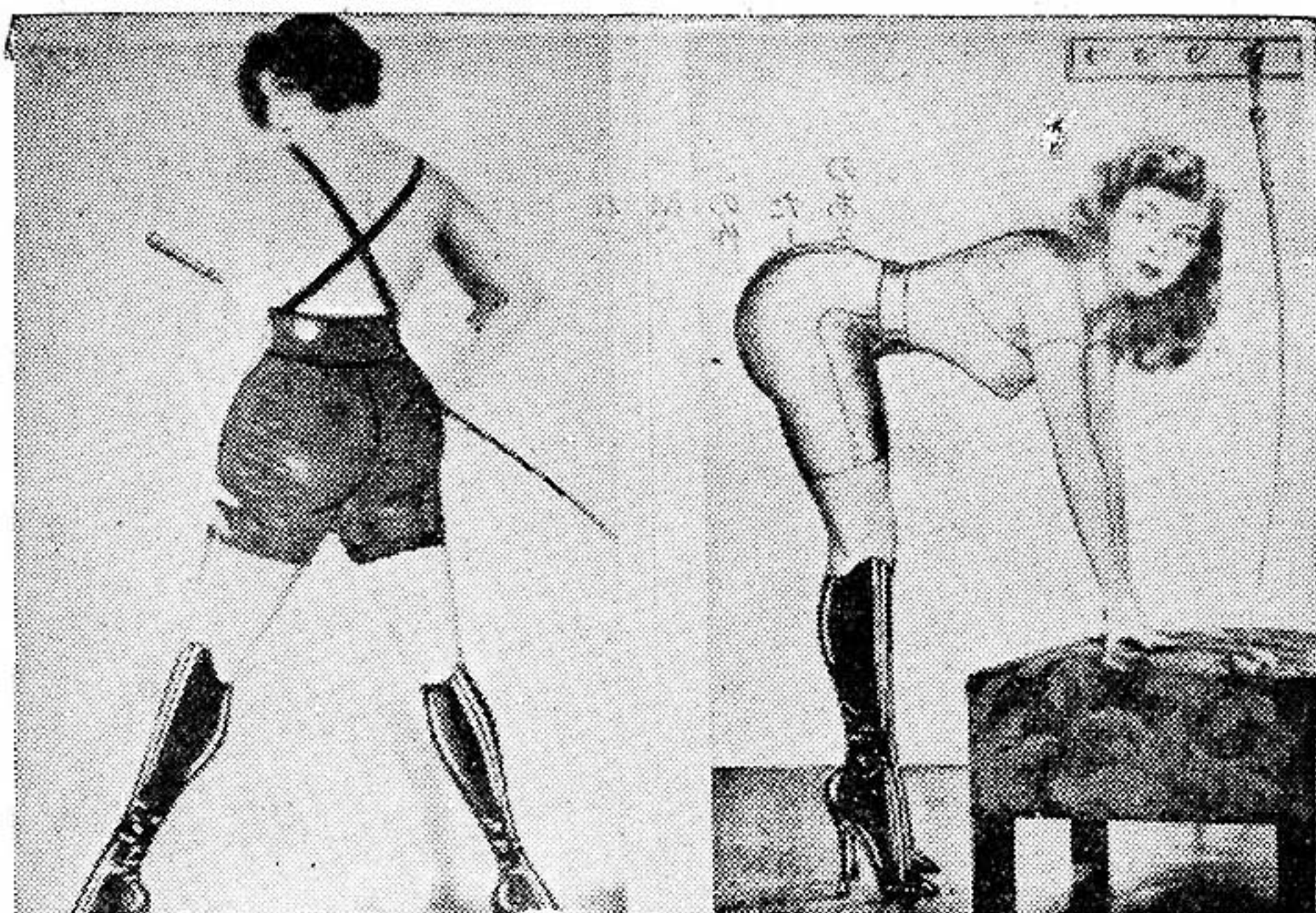
憧憬と沈潜とが、はじめてこの謎の世界を解明することができるのであり、そして、その障壁は思いついた「正常人」と自負する人々に樂園を垣間見ることさえ許さない。盲人は象を語ってはならないのである。

そして、第十八図をみていただきたい。こ

れは、全く倒錯を度外視して創られたものであることは言をまたないが、これまでの十七種の図をご覧になった後に、もしあなたがこの本来の表面の裏に、別の幻想を描くことができるとしたら、いや、描こうという気持ちが動くならば、あなたはすでに天国への入場券を予約したことになる。

この変哲のない一枚の写真が、どのように

第十五(右)・十六図



改変され得るか、どのような活気をおびることが出来るか、あなたはすでに心に描いているにちがいない。鳥を人に変え、そして、いろいろな衣裳や小道具を配して、一幅の絵が想像されるにちがいない。

そうして、あなたが、こうした改変を實際におこなうことなしに、ただ普通の写真の中から、可能性のあるものを抜き出し、それを眺めるだけで十分にあなたの愛人を心に描くことができるようになったら、あなたはすでに紛うところなく、フェティストなのである。その傾向が必ずしもS的、またはM的であるという必要は更がない。

ある朝突然に、中年の人達が、近づきつつある死を思い出すように、この触媒性を感じることが、天賦の性である以外の何ものでもない。

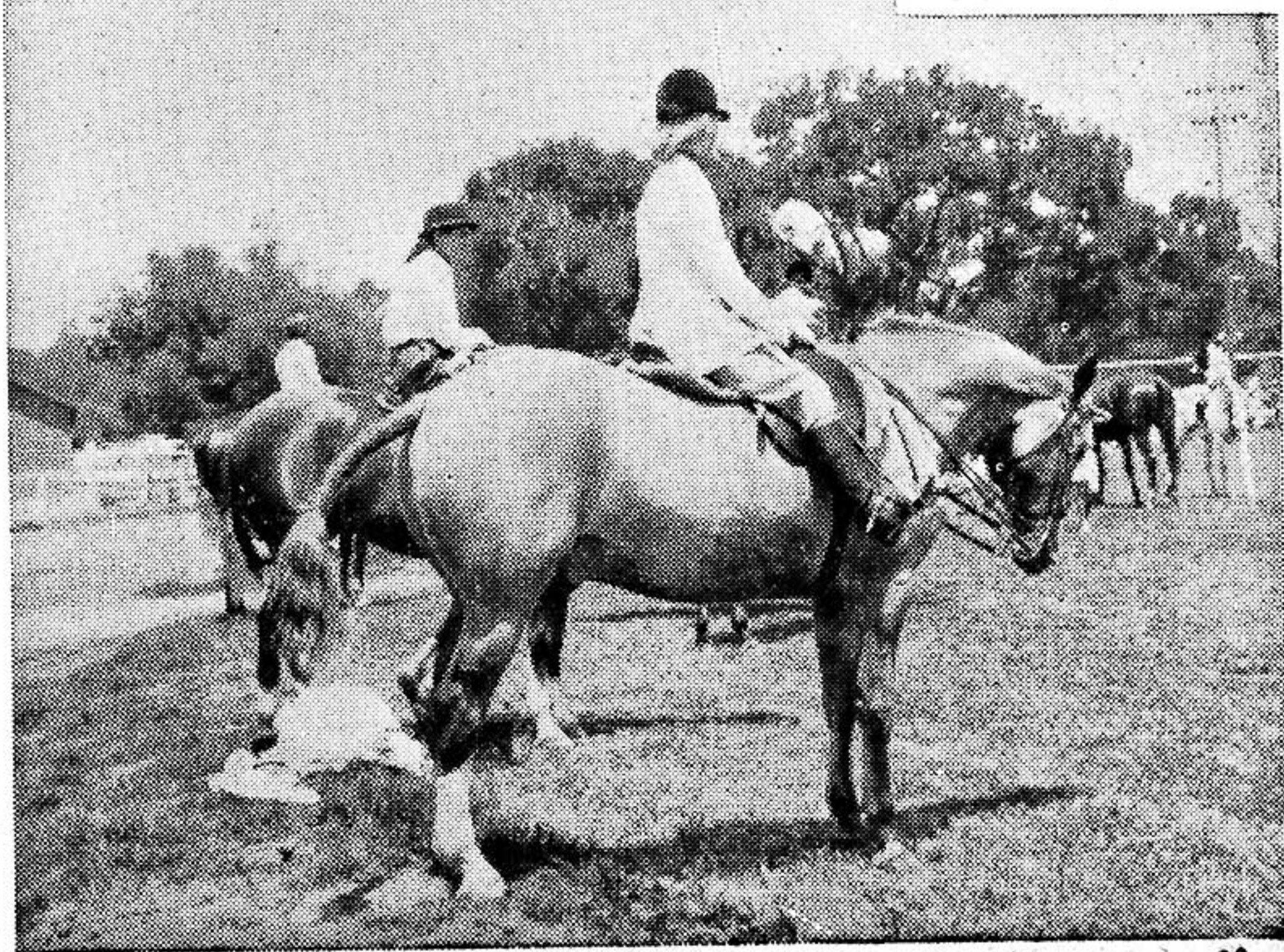
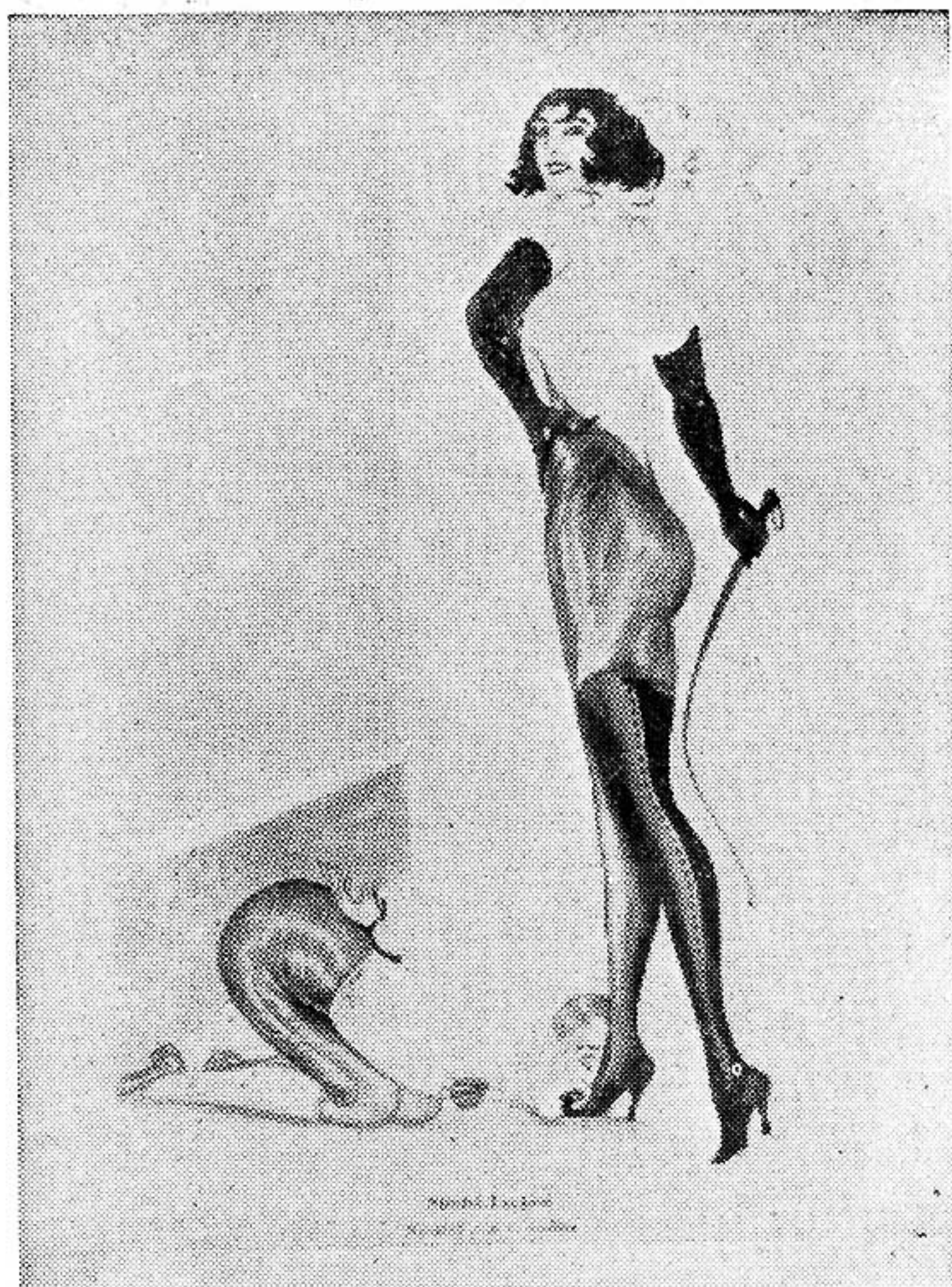
まさしく、それは突然にやってくる。そして、これまで何でもなかった世界が、めまぐるしい変化をはじめ。無縁であった筈の女性性が愛人に、愛人であったものが無縁のものへと、個人差と傾向の差違を忠実に、正確に守りながら、彼をとりまく世界は変貌するのである。

パウリィ氏は、次のような短かい書簡を最後に掲げている。発信者は、ケルンに住む三

十五歳の会社員。

「その日、小高い丘を車で上ってゆくとき、丘の下を一人の女性が馬で散策しているのを見ました。私の手は無意識に動き、車はひとりでに、もときた方へと走っていました。一、二分の後に——しかしその時間は私にとっては戦争の終りを待った一年のように長く感じられました。私は、彼女のうしろに車をびったりとつけていました。のろのろとうしろを従いてくる私の車に、彼女は気付いて、右手の鞭をあげて、先にゆくように合図しました。二度、三度、それを繰り返した後、彼女は、きっと彼女の美しさ故に私が後をつけていると思ったのでしよう。花が咲きこぼれる程の美しさで、私の方をふり返って微笑みました。しかしおそらく、私の表情は硬直していたことでしょう。私の眼は、そんな彼女の人間に対するやさしく、常識的な、そして十分に女性的な行為の最中にも、容赦なく腹を蹴りつつけて、いまその可愛らしい銀色の拍車や、ぜいたくに光りがやいている長靴の反射、ふっくらとした太股をやわらかくつつんでいる上品な仕立てのブリーチエスにそそがれているのでした。そこでは、あきらかに公然と、支配と屈服とが、毎秒つづ

第十七(上)・十八図



けられているのでした。そして、私の心臓は鼓動をいやまして、いやが上にも、彼女とその馬の関係が私に及ぼしている不思議な昂奮を感じとっているのです。やがてそんな私に関係なく、彼女は鞭を上げて一打ちくれると、速歩に移って私からはなれていきした。そして、気付いたとき、私は女性に接した時と同様の状態に自分になっていることに気付いたのでした。これが私にとって、最初の刺激的な瞬間でした。”

そして、パウリー氏はつけ加えるのです。「このように、突然起る心理体系の変化がある。しかし、私たちは、これが、全く突然のものだと考えることができない。彼は、きっと、その萌芽をその日まで、良識でつつみかくしていたにちがいない。彼自身気付かなかったにしても、きっと、彼の心理の奥底に、そうしたM的フェティシズムを持っていたにちがいない。ただ、彼の心理体系はそれまで、彼自身によってではなく、彼の環境、家族、両親、教師、友人達によって誘導され、形成されてきたのだ、ということを考えてみなくてはならぬ」

もちろん、この大部の書物には、他のいろ

いろなフェティシズムについての記載が見られる。それらはそれぞれに、私達にとっては宝島の見取り図のように有用であり、香り高い夢の園の見聞記である。

氏はいま、「幻想的な倒錯性々生活」という新著を、フリドリヒ・テレン教授とともに労作中である。氏は私に、かくしおおせな

い羨望と感動をもって、その新著の中に、本誌「裏窓」を紹介すると告げられている。

いまや日本は、経済界におけると同様に、この世界にも新しい勢力をきづきつつある。すでに西鶴と、浮世絵だけが日本の性生活であると

思う外国の識者は減りつつある。ライプツイヒに住む、イロナ・シュティヒテルという二十七歳のジャーナリストはロンドンから、スイスの山荘に住む富裕な友人に書き送った。

「日本、それは、表現と信条の自由という意味で、再び黄金の国となりつつあります。

私は、この目で見てきました。数種の発行部数を誇る倒錯性愛専門誌が、街の大書店で、新聞スタンドで、そして国有鉄道の直営売店で、極めて廉価で公然と販売されています。これらの発刊日は、いまだに

雑誌やテレビ劇の悪影響よりはるかに少ないとされています。私達が、東洋の神秘と呼ぶ、あの黒い瞳を持った明析な国民は、いま熱心にはげしいエネルギーを費しながら、倒錯的なすべてのものを整理し、新しい美の発見を急いでいるようです。マルコ・ポーロのいう黄金は、決して発見されませんでした。あなたがもし、近く日本を訪れる機会があるならば、旅行社の組立てるオーソドックスなプランに従うことなしに、このような最も現代的なともいえる実状を、古典的な芸術や、近代日本の経済的発展の栄光に目を奪われることなく、直視されることをおすすしめします。

「日陰から日向へ」彼らの進んでいる道はたしかに多くの教訓を私達に与えていると思います”

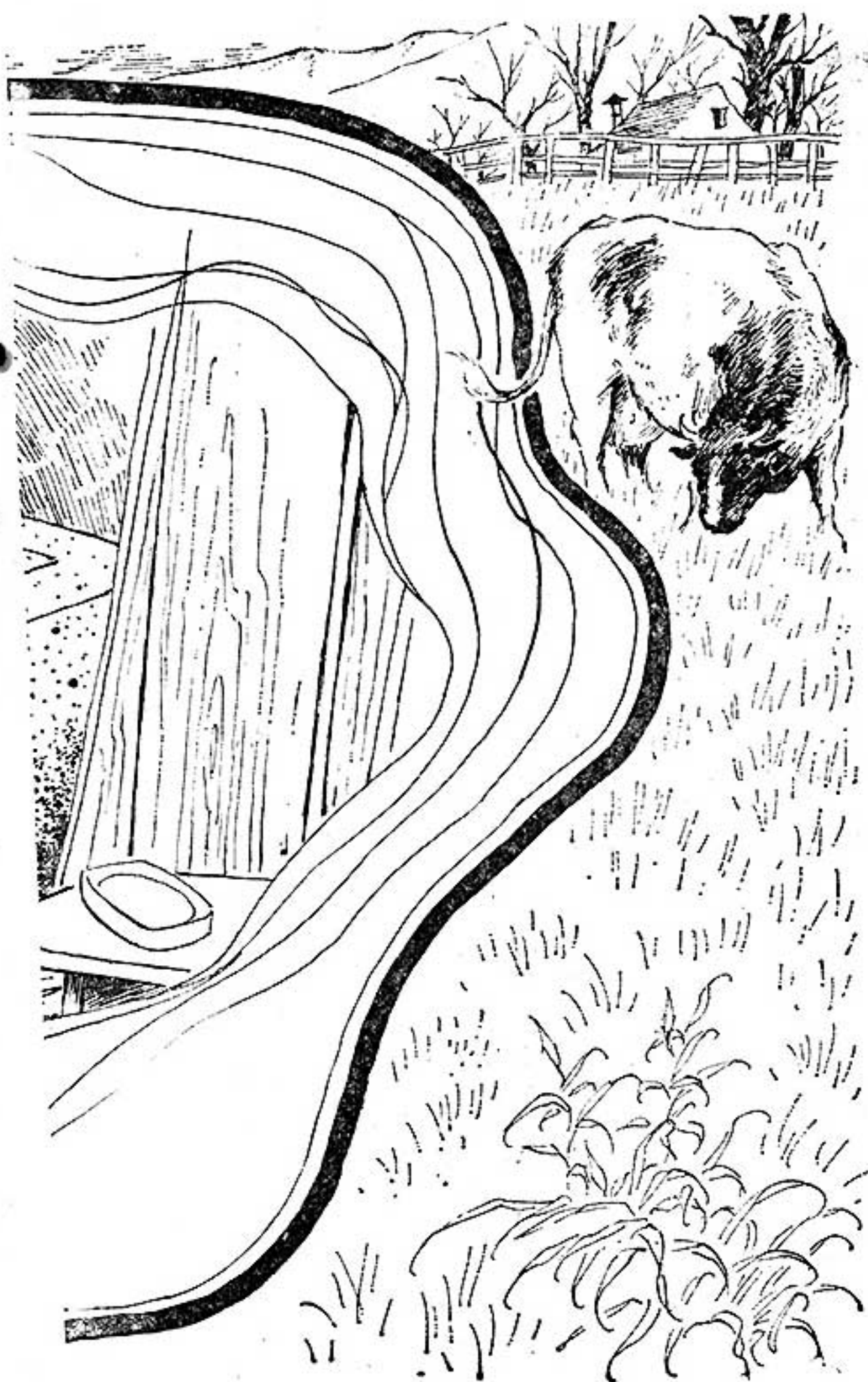


ある牧場夫のものがたり

ねむれぬ夜の追憶

北海道 雄

鬼頭 暁・絵



1
外の牛舎で、ホルスタイン種の乳牛が鳴いた。なにかに、おびえたような鳴き声で、それが、二、三度つづいた。

多一は、目をさました。

九時前に寢床へもぐったのだが、なかなかねつかれず、ようやく、うとうとしたと思ったら、牛の鳴き声で起こされてしまった。

多一は、まくらもとの、目ざまし時計をみた。

夜光の針が、十一時四十分をさしていた。

牛はもう鳴かない。

どこかで、虫の音がきこえるだけのしずけさであった。

多一は、左腕をいっぱいにのばして、左どなりに寝ているはずの、妻の咲子のからだに触れようとした。

が、手はむなしく、つめたい畳をまさぐっただけであった。

——そうか。

多一は、腹ばいになって、苦笑した。

母親が病氣だということで、妻は、三日前から、帯広の実家へ帰っているのである。

それほど好き合っていたしよになった女ではないが、多一にとって咲子は、もう、かけ



がえのない女房になっている。

新婚三カ月目。

夜なかに目をさませば、つい手をのぼし、
となりにねむる新妻をまさぐりたい気もちに
なる、二十六歳の夫であった。

虫の声も、きこえなくなった。

閑静な林のなかにある牧場なのである。

白いペンキぬりの牛舎と、すぐそばにサイ
ローがあつて、五、六十頭の乳牛が飼われて
いる。

牛舎の横に、二戸ずつ三棟の長屋が建てら
れていて、五、六人の牧夫が、寝起きしてい
た。

多一のような夫婦者には、六畳ほどの部屋
が、あたえられている。

タバコを買いに行くにしても、五キロほど
オートバイで飛ばさなければならぬ、へん
びな位置にあつた。

新婚三カ月目の男でなくとも、深夜、牛の
声にねむりを奪われ、死に絶えたような静け
さのなかにいれば、手に触れるものすべてを
抱きしめたくなる、単調な生活がつづいてい
るのであつた。

腹ばいのまま、多一はタバコを一本、口に
くわえ、マッチを摺った。

——咲子がとりに寝ていなければ、タバ

コまで、うまくない。

多一は、そう思った。

あと、四、五日は帰ってこないだろう。

三つ年上の、やや肥りきみで色白のからだを、多一は恋うた。

牧場主の高塚から、なかば強制的に押しつけられたかたちの女だったが、いまと違ってようやく恋愛の情が燃える。

まるで、少年の日のように燃えるのであった。

2

多一は、内地の、東海地方のS市で生まれそこで育った。

両親は、小さな鉄工場を、堅実に経営している。

兄が一人、姉が二人いた。多一は、四人兄弟の、末っ子である。

経済的には、なんの不安もなく、多一は学校を終え、成人したのである。

多一が、自分でたのしむことをおぼえたのは、十三歳のときだった。

経営する工場に隣接して、多一の家の、住居があった。

工場で働く女工は、四、五人いた。一日の終業後、その女工たちが、手足についた油の

汚れを落とすために、風呂場にくる。

三人が一度にはいれるほどの大きさの風呂場が、工場と住居の中間の庭に建てられていた。木造建ての安ぶしんだが、使いやすいうにできている。

その風呂場の内部を、外からのぞけるように細工し、それをみごとに成功させたのが、十三歳のときだった。

多一は興奮し、五日間、その秘密の冒険をつづけ、同時に、ひとりでのしむ行為をおぼえた。

六日目の夜、それを姉にみつかった。

「多一、あなただっていうひとは！」

十七歳の次姉であった。潔癖な年ごろであり、はげしい気性をもっていた。

敏子は、弟の恥ずかしい行為を、母に告げた。母も怒った。

多一は、物置き部屋のなかで叱責され、折檻された。抵抗せずに、彼は甘受した。

敏子の手によって、うしろ手に縛りあげられ、足までくくられた。母は怒りのために興奮し、なんども多一の頬をつねった。

多一は悲鳴をあげた。

「おんなのお風呂をのぞくなんて、なんていやらしい子！」

母は、しまいに泣きだしていた。

「いやな子、いやな子！」

といって、敏子はなんども縄じりで多一を打った。この次姉は美しい容姿をしていた。

敏子のスカートがひるがえり、白い足がの



ぞけた。多一は、歯をくいしばりながら、その白さを、くらいつくように、盗み見ていたのである。正体不明の恍惚が、彼にあった。住居のほうに、二十七、八歳になる女中がいた。名前を、加代といった。結婚の経験があり、豊満な肉づきをしていた。

加代の夫は、京都から大阪の方面をまわってあるく化粧品の行商人だったということである。酒ぐせがわるく、なまけもので、そのために、加代は自分から逃げだした、などという身の上ばなしを、多一は、加代自身の口からきいた。

多一が、十七歳になった年である。

ある日、多一は二階の六畳間で、ひとりで机に向かって英語の教科書をひろげていた。階段に足音がして、加代があがってきた。

「あら、多一さん、お勉強なの？ おそうじしてもいいかしら？」

加代の手には、ハタキとホウキがあった。

「ああ、いいよ」

多一は、肉づきのいい加代のからだに、関心があった。あこがれとも、畏怖ともいえる感情を抱いていた。

「多一ちゃん、あんまり勉強すると、かえってバカになるわよ。たまには、加代とあそびなさいよ」



冗談をいいながら、加代は、ハタキで軽く多一の首すじをたたいた。

「よせよ。いたずらするなよ」

多一は、そのハタキを手で払った。

加代はしかし、やめるどころか、多一の頭の上で、ハタキを踊らせた。かなりしつこい、いたずらをつづけた。

「よせよ、おい、よせたら」

多一は、万年筆を投げだして、立ちあがった。あまつたるい怒りがあつた。

その多一の背後から、加代は大きく羽がいに抱きついてきた。

息のとまりそうなやわらかい感触が、多一の首から背中に、べったり貼りついた。厚みのある肉体だった。

「よせよ！」

肩を左右にふつてもがきながら、のどもとから内部を、ななめに突きさして背中へぬける、強烈な快感があつた。

あまりの快感に、多一は羞恥すらおぼえたのだ。あわてて、加代のまるく重いからだを畳の上に、うつ伏せにねじ伏せた。

「多一ちゃん、痛い！」

しかし、加代の顔は、笑っていた。自分から、わざと畳にころげたようでもある。白くふくらんだのどが、ころころと鳴っていた。

多一は、加代のあばれる両腕の手首をつかみ、こん身の力で、背中にねじあげた。

大きな猫のように、加代は、のどでうめいた。笑い声を、こらえているのかも知れなかった。

多一は、侮辱を感じた。

「ちくしょう、縛ってやる！」

首を前後左右にまわして、なにか紐をさがしたが、あいにく、なにもない。

つかまえた左右の手首を、背中にぐいぐい押しつけながら、しばらく馬のりのかたちでいた。

ふいに、熱い力が多一の全身をすくつくらぬき、彼は、あわてて加代の背中からとびのいた。

「おきろ！ 下へ行け！」

多一は、女中に背をむけたまま、泣くような声でどなった。

このときの多一の記憶は、痛いほどの官能をともなつて、強烈である。

自分でたのしむ回数が多くなり、そのときは、かならず、加代の感触と色彩を脳裡におもいかべた。

多一は、孤独な少年だった。

学業はかなりの成績をおさめていたが、友人というものをもたず、ガールフレンドなど

という存在もなかった。

若い女性と向きあうと、羞恥のために顔が赤くなる。

そのくせ、ぶよぶよした肉体をもった女は大部分、醜悪にみえてたまらない。吐きけをもよおすほど、醜怪にみえる。

自分の部屋に、ひとり閉じこもって空想するときの女性は、女神のように美しく清らかなのである。そういう清純な女性に、恋し、恋されたいと、ねがうのである。

多一には、はげしい夢想癖があり、つねに現実逃避を夢みていた。

青年になつてから、生まれ育った家や土地をあとに、単身、北海道に渡って牧夫になる素質は、少年時から、十分にそなわっていたようである。

3

女中の加代の部屋は、台所のすぐとなりの四畳半であつた。

夏の夜、その女中部屋の台所にめんした障子が、五十センチほどあいている。

むし暑い夜などは、三尺の障子が、ぜんぶあけはなたれる。

ある夜、水をのみに台所へおりた多一は、その蚊張のなかに、寝乱れた加代の白い足を

みて、どきりとした。

台所には、ひと晩じゅう、小さな暗い電球が点いている。そのにぶい光線が、蚊張のなかを、わずかに照らしているのだ。

多一の目が光った。心臓の鼓動が、痛いほど急激に高鳴る。

のぞき見の姿勢になり、多一は呼吸を殺した。

多一にとって、妖しい興奮の光景が、音もなく、微動もなく、青蚊張のなかにあった。

両ひざがひらかれ、白いふとももが、まるみのある、ゆたかな陰影にいつそう白く横たわっていた。

凝視し、多一はしびれた。うずくまったまま、多一は影と化した。しかし、全身の血は一カ所に集中し、凝固し、猛り狂っていた。

多一は、息をつめて耐えた。耐えることにまた、苦しい快楽があった。

このひそかな愉悦は、夏じゅうつづいた。三日にいちどは、女中部屋と台所のあいだの影の部分に、大きなネズミのようにうずくまった。

秋になって、その部屋の障子がしめきられると、多一は絶望した。

だが、すぐにまた、あたらしい興奮を、多一は発見するのである。

女中部屋とは向かい側に、廊下をはさんで物置き部屋がある。

いつか多一が、風呂場のぞきをして、母と姉にさんざん折檻された部屋である。

ある日の夕方、多一は、あのときの官能のうずきを狂おしく思いだし、なつかしさのあまり、家人の目を盗んで、ひとりでこっそりその物置き部屋にもぐりこんだ。

湿りほうだいに湿って、カビの生えた古い夜具の上に身を横たえ、母と姉に縛られ、叱られた日の感触を、はずむ呼吸をおさえながら、なまなましく、よみがえらせていた。

血を妖しく燃えたたせ、やがて疲れて、ぐったりと寝がえったとき、多一はそのことに気づいたのである。

それは、この物置きのすぐ裏側に、壁ひとつへだてて、便所があるということである。

その便所へ行くには、物置き部屋の板戸をあけて、廊下へ出て、七メートルほども歩かねばならない。廊下を二カ所、右へ右へと曲がらねばならないのだ。

いままで、物置きと便所が背中合わせになっていたことを、多一が気がつかなかったのは、当然ともいえる。

その便所は、物置きとの境になっている古びた褐色の壁から、約半メートル離れて小便

所があり、その奥に、かんたんなひらき戸のついた大便所があった。

多一は、その方向と位置を計算し、しっかりと頭にきざみつけた。

そして、自分の部屋から、ナイフとキリを持ってくると、さっそく、その陰湿な、しかし、期待にあふれる作業を開始した。

音をたてぬように、細心の注意をはらいながら、それでも、厚さ六、七センチほどの古壁に穴をあけることは、わりあい、かんたんだった。

一時間ほどの努力で、それは完了した。

その作業よりも、道具がたりなくて、自分の部屋へひきかえし、物置き部屋へ出たり入ったりすることに、多一は気を使った。板戸は、開閉するたびに、きしむのである。

便所へまわって、小便するフリをしながら自分が貫通させた穴をみた。

その穴は、便所の明かりとり小窓からさしこむ光線の、ちょうど影の部分にあたっていて、他人の目につきにくい位置に、まるで黒いシミのようにあいていた。

——成功する！ きっと成功する！

と、多一は胸中でさげんだ。鼻をおしつけければ、湿気と臭気で、ちっ息しそうな夜具に、ひしと身を寄せる。

横になって穴に片目をあてれば、姿勢をラクに、そして、狙う対象が、最良の位置に合致するのである。

多一は、その夜から観察をはじめた。

大便所のひらき戸は、よく西部劇の酒場などの場面にでてくる、上と下が空いていて、まんなかだけがふさがっている、れいのやつである。

しゃがめば、多一の穴の位置から、まるみえになるのである。

多一は待機した。背中がしびれ、ぞくぞくするような期待があった。長い時間がすぎたようだが、経過の観念は消えた。

母がきた。ふたりの姉もはいった。

だが、多一が胸をときめかして待つのは、加代ひとりであった。

夕食のために、いちど多一は物置きから出て、一時間ほどを、家族たちといっしょに過ごした。怪しまれないための用心だった。

七時すぎ、また、きしむ板戸をあけて、カビくさい密室にとじこもった。

加代がはいってきたのは、八時ちょっと前であった。

多一の目が、カッとみひらいた。緊張のために、四肢が硬直した。右手の五本の指は、腐りかけたふとんを強くつかみ、その皮をひ

き裂いていた。

加代の動作は、はじめから終わりまで、いさましかった。加代は、キモノを着ていた。それは、裾からいきおいよくたくしあげられた。

赤い腰巻きがあった。なんのためらいもなく、それもまくられた。

白い二本の足が、多一の視界にあった。

それよりも、さらに白いやわらかそうなものが、ふわりとうずくまり、音がした。

しばらくはそのままでいたが、やがて、左右にふられ、前後にゆれうごいた。

なんの警戒も羞恥もない、奔放ともいえる姿態が、二メートルの目前に展開した。

多一は、恍惚となり、思わず、うめき声をあげそうになった。

それから三カ月後、加代は再婚した。相手は、多一の父の工場で働く三十すぎの実直な男だった。

良縁だといって、多一の家の者も、工場と同僚たちも祝福した。

披露宴には、多一も出席したのである。その夜、多一は、ふとんのなかで泣いた。加代の夫となる男を憎悪し、殺そうとさえ思いつめた。しかし、そんな勇気が多一にあるはずはなかった。

加代が家から去って世帯をもってから半月ほどたった後、あたらしい女中がきた。

だが、それはもう、五十歳に近い、ぎすぎすしたからだつきの女だった。

多一は失望した。

4

多一は、大学生になっていた。

依然として、夢相癖に浸り、孤独だった。恋人もない。

女性と交際するのが、ヘタというよりも、まず、どんな相手としやべるにしても、口ベタであった。

学校の成績は、優秀だった。まじめすぎる固物すぎる、というのが、近所の者の評判だった。

健康な肉体をもった以上、多一も、じかに異性の肌と接したい、という欲望はあった。

だが、抱こうと思えば、すぐに抱ける売春婦などは、きらいだった。興味もわかない。

第一、不潔におもえて仕方がない。

父の工場の経営状態はよく、小使い銭には不自由しなかったが、バーや喫茶店に入り浸るなどということもなかった。

多一は、天気の良い日曜日など、ふらりと電車にのって、郊外へ散歩にでかけることが

あった。

そんなときの多一の心には、ひとつの期待があった。

あまり人の通らない、いなか道を歩いていけば、農家の娘や、若い嫁が、木かげや草む

らのなかにかがみこんで、用をたすところにぶつかりはしないか、という期待であった。

だいぶ以前、そんな目的ではなく、郊外を散歩していたとき、ぐうぜん、そんな光景を目撃したことがあったのだ。

ぐうぜんであったがゆえに、そのときの、気を失いそうな恍惚感を、多一は忘れることはできない。

ふたたび、その感激に浸りたいと思ってもそんなぐうぜんが、二度とあるはずはない。



無駄だ、と理性では判断しながらも、五体をしめつけるような願望が、多一の足を、さびしい、いなか道へ導くのである。

農村の若い女が用をたしているところを見たとしても、べつにその女性に襲いかかるわけではない。声をかけるわけでもない。

声をかけるところか、自分の存在を絶対に相手に気どられぬよう、細心の注意をはらって、その場から逃げだしてくるのだ。

多一はまた、場末の映画館へ、よく出かけた。

三流の映画館の便所は、殿方用と婦人用が分かれていない。そこが、つけ目だった。

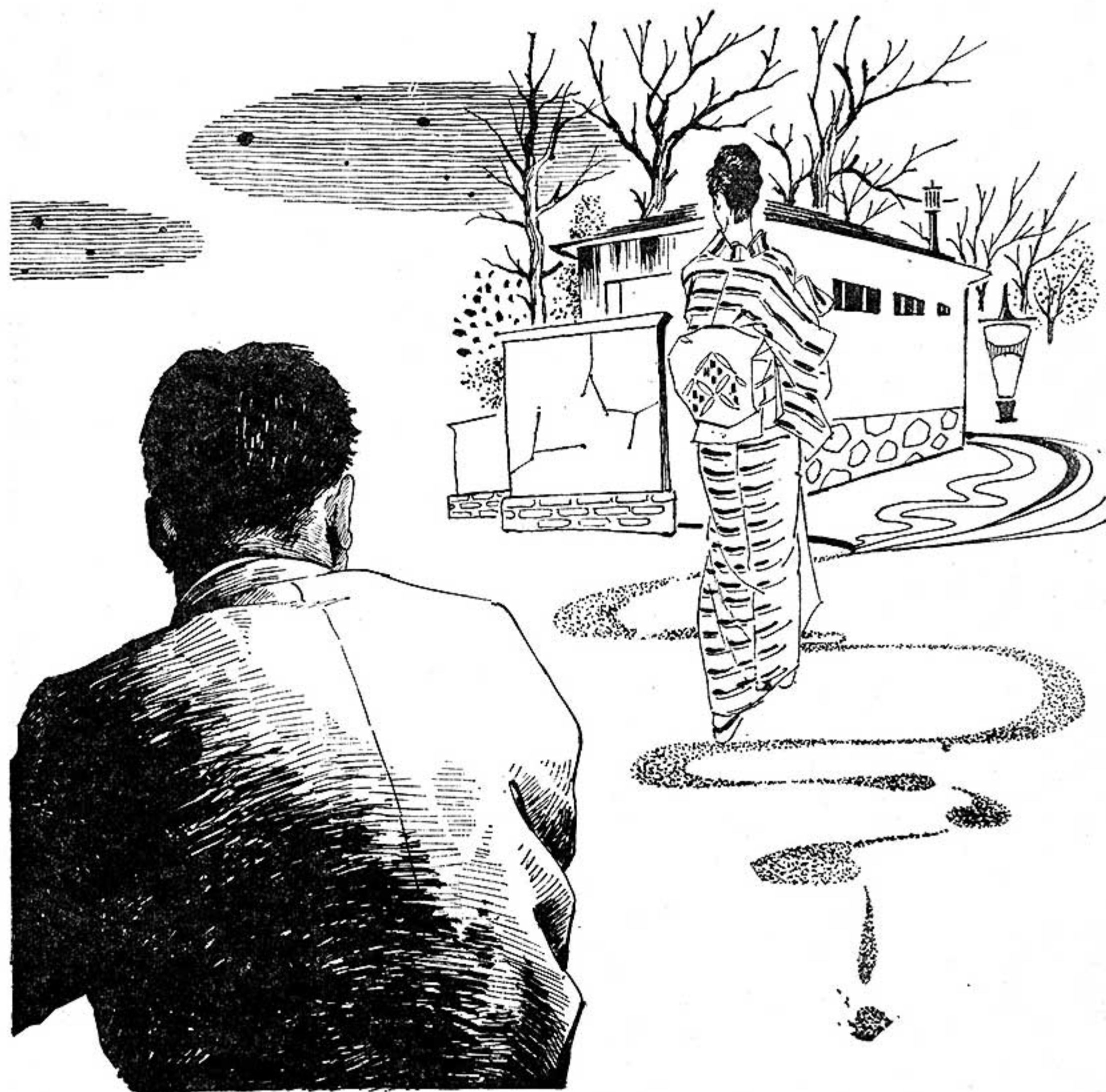
映画などは、はじめから見る気はない。

たいてい、三つぐらいある大便所の、まんなかへはいり、息をひそめている。

こういう館の便所は、ほとんどが木造であり、古く、汚れきっている。

前方の壁には、卑わいな落書きといっしょに、丹念なのぞき穴が、たいてい、すであけられている。

館主側の手で、穴の上に木片をぶついたりブリキ板を貼りつけたりして補修工事をおこなっているが、常習者はそのふさいだ木片の上に、さらに根気よく、のぞき穴をあける。しまいには館主側でもあきらめて、投げだ



したかたちで、穴のあいたままにしておく。
ひどい臭気のなかを、多一は辛抱よくか
がんでいる。

のぞき穴のむこうに、やがて、女性はい
ってくる。

自分の好みのタイプが現われたときには、
多一は、いじらしいほど、胸をおどらせた。
せまい視界のなかで、そんな観察はむずか
しいのだが、多一の直感には、するどいもの
があった。

女性の肩とか、背中とか、腰とか、部分を
いちべつしただけで、全体が判断できるので
あった。

多一の好みは、自分より三つ四つ年上の、
色の白い、こぶとりの女であった。美人でな
くともよいが、容貌には愛嬌があって、母性
を感じさせる女性に心を惹かれる。

つまり、加代そのままのイメージなのだ。
少年時代、加代から受けた官能的な印象が
自分を一生、支配するかも知れない、と多一
は思う。

心とからだが本能に苦しめられ、それを癒
やす方法が、どうにもみつからない場合には
魔に魅入られたように、町なかの公衆便所に
近づくこともあった。

身ぎれいな姿の、二十七、八歳ぐらいの女

性が、公衆便所のなかへ、すうッと消えるの
をみとどけ、自分もそのあとからはいって
く。足音を殺して近づく。

四、五秒間経過したところを計って、そのド
アを、ノックもせずに、いきなりあけ放つ
だ。

「あッ」

という、小さな驚愕。羞恥。白い部分を
くすひまはない。

瞬間、多一はみてしまう。脳裡に灼きつけ
る。

「失礼しました」

と、礼儀正しく頭をさげて、多一はドアを
しめる。ホッとする。

公衆便所のなかの錠は、たいていこわれて
いるか、不完全なのだ。強くひけば、ほとん
どがあく。

その失礼をていねいに詫びて、さッとドア
をしめれば、相手の女性が、いきりたつよう
なことはない。

怒ろうにも、自分はしゃがんでいる。怒り
を発する姿勢ではない。羞恥が先であり、ま
た、錠が不完全なのだから、仕方のないこと
である。

しかし、この奇襲の方法は、あまり実行し
なかった。実行するには、まず、非常な勇気

を必要とする。

相手の女性が恥ずかしがるよりも、多一は
自分のほうが先に、恥ずかしかったのだ。

5

北海道へ渡って、しずかな広大な牧場で、
すべての陰湿な欲望を忘れ、のびのびと働
きたい、という計画は、少年時代からの夢
のひとつだったが、それが夢ではなく、現実
となった動機は、彼が、同じS市の女子大
の便所に、ぐうぜんとびこんだことが発端であ
った。

S女子大の校庭は、その古びた校舎の東南
側に、きわめて広い。

東京のような大都会の町なかにある学校の
猫の額のような校庭にくらべると、おそらく
数倍はあるだろう。

その校庭の南端に、木造の便所が一棟、建
てられてあった。

便所と校舎のあいだには、そのただっぴろ
い校庭があるために、便所はさながら野原の
果てに建っている一軒家のように、ぼつんと
雨風に吹きさらされている感じであった。

むろんこれは、校庭で遊んだり、体操をし
たりしている学生が使用するための便所であ
る。

しかし、学校の境界線に、はっきりした塀や柵などがなかったために、一見、それは、町なかの公衆便所のようにもみえるのだ。土地に余裕のある、地方都市の大らかさ、といったような感じがある。

あの土曜日の午後、S女子大の付近を歩いていた多一は、ふいに腹痛をおぼえ、便意をもよおした。

みると、目の前に公衆便所らしい、くすんだ細長い一棟がある。

多一は夢中でかけこんだ。

小便所がなく、ドアのついた大便所ばかりが、五つほどならんでいる。へんだな、と思ったが、考えている余裕はなかった。

ドアをあけて、なかにはいった。よく掃除され、磨かれていて、不潔感はない。

のぞき見をするためにはなく、本来の用をたすためにはいった便所で、痴漢呼ばわりされる破目になったことは、皮肉であった。テニスの練習を終えた女子学生の数人が、

校庭の端にあるその便所めがけて、かけこんできたのである。

ばたんばたんといふ乱暴にドアがあげられ、五つとも、たちまち満員となってしまった。

まんなかのひとつには、さきに多一がはいってかがんでいる。

「早く出てよう」

「なにぐずぐずしてんのよう、もっちゃうじやないの！」

異性のいない場所においては、若い女の子たちは、あまり羞恥心はない。足を踏みならしながら、さいそくする。

多一のかがんでいる前後は、早くも、三人目と交代していた。

若々しい、勢いのよい放出音が前後から連続してきこえ、多一は、頭から全身、そのしぶきにぬれるような心地がした。

音だけの感覚ではあったが、それはけっして、不快なものではなかった。

「どうしたのよ。ここは。ぜんぜん出てこないじゃないの。だれがはいってんのよう！」

ドアが、はげしくたたかれはじめた。

二、三人の不審の音が、それに合した。しまった、と思ったとたん、多一はのどがつまり、咳こんだ。

その咳で、なかにはいったきり出てこない





のは、男だということが、わかってしまったのである。

一人が、けたたましい声で、ほかの学生を呼びあつめた。大さわぎになった。

気の小さい多一は、ますます出られず、閉じこもったきりである。

しまいには、教師たちまで、あつまってきた。そして、とうとう多一は、女子大の便所に、けしからぬ目的をもってしのびこんだ痴漢にされてしまったのである。

自分から堂々とドアをあけて彼女らの前にすすみ、弁明すればよかったのである。

だが、多一の心には、やはり、うしろ暗いものがあつた。ひきずりだされても、ただ、顔面蒼白にして、立ちすくむだけであつた。

秀才の大学生が、女子大の便所のぞきをしたという噂は、S市内にひろまった。

外へ出ると、じろじろ見られるので、町を歩くこともできなくなつてしまった。

——ばかばかしい、なんということだ！

多一は、まったく、いやになった。

両親や兄姉たちまでが、その噂を信じている。信じられても仕方のない性癖が、多一には十分あるが、それにしても、やりきれなかった。

自暴自棄に近い心境になった。

多一は父親に金をもらって、旅行に出ることを思いついた。逃避の旅行である。

大学ももう、途中でやめるつもりだった。「くだらない噂が消えるまで、どこかへ行ってるよ。しばらくのあいだ、この町にいたくない。金をくれないのなら、乞食になっても遠いところへ行く」

父母にむかって、多一はそういった。

父親は、それもよからう、といって、まとまった金をだしてくれた。

この父親は、長男だけを信頼し、かわいがった。長男には、工場を経営していくだけの才能があった。

多一は、北海道へきて、牧場夫になった。

牧場主の高塚は、熱心なクリスチャンであった。ふらりと訪ずれた多一を、ひとめで気に入ってくれて、雇った。

多一は、目鼻だちのすぐれた、品のいい、容貌をしているのである。

三年間、多一は、わきめもふらず働いた。その間、一度も家へは帰らなかった。自分の過去を埋葬したかった。

その人柄をみこんで牧場主は、こんどは、嫁を世話しようといひだした。

それが、咲子である。

婚期を逸した、二十九歳の処女であった。

美人であるがゆえに気位が高く、婚期を逃がしたのである。

三つ年上の、色白で中肉中背、ややこぶとりの肉づきであった。そのからだつきは、あの女中の加代を連想させた。

母からの手紙で、あの加代が今年になってから二人目の子どもを生んだことを、多一は知らされていた。

咲子をはじめて紹介されたとき、多一は加代を思い、あまずっぱい心のときめきをおぼえた。

多一は、この結婚を承諾した。拒否する理由は、なにもなかった。

6

ねむれない。

どうも今夜は、ねむれそうもない。

めざまし時計の夜光の針は、もう三時をまわっている。

北海道十勝郡幌加の部落から、十キロもはなれた高塚牧場の夜は、夜せんたいが、まるで氷でできた鏡のように冴えかえっている。

——咲子！

と、いくじなく妻の名を呼んでみる。

声をだして、新妻を恋うる。

やわらかく、きめこまかく、弾力のある咲

子の肌。

ねむれない。

ねむれぬ夜の追憶は、妖しいものばかりであった。

幼年時から少年時、青年期へかけての、鮮烈な、強い酒のような空想と、その経験。

すでに埋葬したはずの官能。忘却のかなたへ、沈めてしまったはずの欲望。

だが、なんとあざやかに、きのうの現実のように思いだせるのだろう。

あの独得の臭気さえも、なつかしく鼻さきによみがえってくる。

多一は、ひとり、若いけもののようにみもだえた。

牧夫として日夜、働きづめに働いてきたこの数年間に、あの濁色の欲望は、死んでしまったはずではないか。

それが、今夜また、ぶすぶすといぶりだしてきたような気がする。

いぶりだすどころか、ねむれぬ夜の妄想に青い炎をあげて、燃えはじめたような気がする。炎は炎を呼び、おさえきれない奔流となつて……。

——そうだ！

と、多一の目が、暗闇のなかで、その青い炎となった。

——咲子だけの便所を、あたらしくつくろう！

思いついたのだ。あるいは、悪魔の思いつきと違ってよいかもしれない。

咲子は、いつか、いつていた。

「ねえ、あたしたちだけのお便所、つくらない？ ほかの独身の牧夫さんたち、とてもお便所を汚すのよ。お行儀がわるいのよ。あたし、ああいう共同便所、気もちわるくて使えないの。お部屋がべつべつなんだから、お便所だって、あたしたち夫婦だけのものがあっても、いいんじゃないかしら？」
こんな不平と、希望をもらしたことがあったのだ。

——おれたちだけの便所！

——咲子だけの便所！

その便所は、この寢室のすぐ裏手にある牧畜用具置き場の横に、隣接しておれの手でつくろう。

そんぶんに、のぞける仕掛けをほどこして……。

光線のぐあいも、位置も、高さも、角度も咲子のすべてが、咲子のまったく知らないうちに、こっそりのぞける仕掛けのものをつくるのだ。

咲子がいる。おれが用具置き場へもぐり

こむ。仕掛けの隠し板をはずして、のぞく。

咲子は、なにも知らない。

両足をひらいて、またがる。

おれはのぞく。なにかものぞく。こっそりと、息を殺してのぞく。

おれの心臓は高鳴り、はちきれんばかりにふくらむだろう。

相手に感づかれてしまったら、このたのしみは消滅するのだ。

相手がまったく知らず、ただひとりの思いのままの行動をとり、それを盗みみるところに、無上の愉悅があるのだ。

——夫たるもの、妻の行為の、すべてをみきわめる権利がある……

そうだと、多一は自分でつぶやき、自分ですなずいた。

——よし、やるぞ。かならず、つくってみせる。咲子が帰ってくるまでに、かならず！

多一は興奮した。

全身の血液が熱くなって流れを早めた。

身内に、ふしぎな意欲が充満してくる。

この興奮から、ずいぶん長いあいだ、遠去かっていたような気がする。

いままでのおれは、まるで生きていなかったような気がする。

今夜の自分が、ほんとうの自分のような気がする。

がする。

——相手が自分の女房なんだから、たとえばこの行為や仕掛けが、第三者に発見されたとしても、なんの犯罪になるというものではない……！ ようし！

多一は、ふとんのなかで、十本の指をにぎりしめた。

いとし妻の白い肉体の幻影が、多一の目の前に、おおいかぶさってくる。

「咲子！」

たまらなくなつて、声にだして呼ぶ。

桃色の華やかな恋情が、ほとばしるように多一の四肢から湧きだす。いとし妻の幻影を、その四肢で、しっかりと抱きしめる。

日本の果ての北海道の、そのまたはずれの貧しい牧夫小屋での、この小さな愉悅、小さな快樂。だれに奪われてよいものか。

人間の快樂に、健康も不健康もあるものだろうか。正常も異常もあるものか。

あるものは快樂そのもの、それだけではないか。おれはもう逃げない。逃げる場所もない。多一は、声のないさけびをくりかえしながら、ようやく、ねむった。

外には、濃い朝霧がながれはじめ、牧場周辺を包んでいた重い夜も、ようやく明けそめる気配をみせていた。

時代絵物語

武士道無残

島本春雄
東桂史絵

① 残忍大名

松平摂津守の蒼味をおびた白い額に、血管が怒脹してふくれ上った。癪癖が強く、わがままで、残忍——美濃の高須で三万石、尾張徳川家の一族である二十四才の松平摂津守は、一種の性格異常者であった。

今も、近習の薬師寺平馬が、手もとの桂馬で、ハッシと王手・飛車をかけると、たちまちその顔面を蒼白にして、ワナワナと唇をふるえさせはじめたのである。

「平馬、そちはいさ合戦となれば予の馬の口をとる侍じゃ。馬は大將が乗るもの、そちには不用であろう。この桂馬を予に献上せよ」
「しかし、殿……」

打った駒を、いちいち献上させられていたのでは将棋にならぬ。平馬の顔に不服の色が走った。

と——

「不忠者！」

叫ぶなり摂津守は、双手で盤を持ちあげ平馬の顔に叩きつけた。



② 被虐の過去

君、君たらずとも、臣、臣たれ

——武士道とは辛いものである。

家来は主に、子は親に、たとえばんなことがあるうとも絶対服従……というのが鎌倉以来の武士道であつた。

将棋盤を叩きつけられて、額に傷を負い、鼻から血を流した薬師

寺平馬は、にじみ出る涙を眼尻でこらえながら、ガバと平伏するしかなかつた。

摂津守とは乳兄弟として育つた平馬である。これまでも、今のようなことは、数えきれないほどあつた。

薬師寺平馬は二十六才、摂津守よりは二つ年長だが、十才の冬には、薄氷の張っている池の中で鯉

の手摺みを命じられ、あまりの冷たさに失神したこともある。

十三才の夏には、撃剣の稽古と称して、檜の木刀で散々に打ちのめされた。

そして十五才の春には、侍女萩

乃の寝所に忍びこみ、その守鏡を盗んでこいといわれ、身の縮むような思いで女人の褥に近づき、首尾よく鏡を奪つて来たのに、急に

不機嫌になった摂津守は、「遅いわっ！」と怒鳴って、問題の鏡を

平馬の顔めがけて投げつけた。

摂津守は、平馬が失敗して女たちに取り囲まれ、大恥をかく姿を期待していたらしい……。

平伏しながら、薬師寺平馬は、そうした過去の苦い思い出を反芻していた。青畳の上に、鼻血が赤い花となって散っている。



③ 高須小町

松平摂津守は、二十三才の秋に家督を継ぎ、高須藩三万石の当主となった。幼名虎丸、元服して頼義、そして摂津守と称したが、この年の冬に、さすがの薬師寺平馬も、おのれを制するの到大努力を要する事件が発生した。

馬廻役榊原市之丞の娘美雪と平

馬は、許婚の仲であった。美雪は高須小町と騒がれたほどの美女だが、いわゆる忍従型でなく、奔放で勝気な性格に生れついていた。「美雪は、平馬さまが好きです。婚儀の日まで待ちきれませぬ。平馬さまは勇気のある侍でしょう。だったら、美雪の寝所に忍んで来て……」平気で、こんなことはいえた娘だったのである。



④ 逃亡

「——美雪よ、死んでくれ……」平馬は祈った。狂君に対する無言の抵抗としては、この方法しかない。

しかし美雪は、もっと直接の方法をとったのである。

逃走……

美雪のとった抵抗の手段は、こ

れであった。

摂津守は、右頬を引き吊らせて激怒し、平馬を含めた三人の近習に、追捕を命じた。

「斬るな、必ず生きたまま捕えて戻るのがじゃ」

さらに、その瞳を平馬の顔に釘付けにして、刺すように言った。

「逃亡の手引きをしたのは、そこかもしれないな」——と。



⑤ 肺腑を刎る声

摂津守の最後の言葉は、平馬の胸にグサッと突き刺さった。

女に恋慕し、手引きして逃がしたとあっては、武士の一分が立たない。

「必ず——必ず捕えて……」

平馬は、血を吐くような声で誓言し、他の近習たちといっしょに隣藩桑名への道を走った。

騎馬三騎、風を巻いて街道をゆく……。

桑名は、松平越中守十萬石の城下町。高須からは六里の道だ。そして、榊原美雪は、桑名の城下へあと一里の仙巖寺前で、先駆した梶田又七郎に発見された。

美雪は懐剣を握って抵抗した。

「上意じゃ、神妙にせい」

口はうまいが、武道のほうはカラッキシの又七郎である。たかが女と見て、軽く踏みこんだところを、美雪の懐剣で左肩を一撃され、青くなって後退した。

このとき、薬師寺平馬と、高尾

数馬の二人が同時に駆けつけたのである。

「平馬、おぬしの仕事だ。みどもは、殿の御意で目付役を勤める」

高尾数馬は無情な声でいった。

美雪は美雪で、

「平馬さま、その二人を斬って！」

……そして、美雪と一緒に……」

と、叫ぶ。平馬は眼の前が昏くなった。

——この二人を斬って、美雪と一緒に逃げたい。

平馬の真実の心は、そう囁やいたが、八武士道Vという巨大な壁を破ることはできなかった。主君が恋慕した女と逃げる……終生物笑いの種となろう。

(君、君たらずとも、臣、臣たれ……)

薬師寺平馬は、胸のうちに繰り

返して、一歩ずいと出た。

「許せ！」肺腑を刎るような声。

そして平馬は、美雪の懐剣を叩き落したのであった。



⑥ 歪んだ声

「予の意にそむき、三万石を足蹴にした憎っくき女。——平馬、かまわぬ、打て！」

摂津守の右頬は痙攣していた。捕えた美雪を後手に縛りあげ、着物の背を切り裂いて、白い背肌をむき出しにしたのは、摂津守自身であった。

しかし、いったん手にした折弓を平馬に押しつけ、打てというのだ。

「ええい、何をしておる、打つのじゃ、打たぬかっ！」

「は、はっ……」

平馬の拳が、ワナワナとふるえた。許婚の男に操を立てて、死を覚悟で逃亡した女を、この手で打たねばならぬ平馬。

「打てぬか。不義をした女の肌は打てぬか……」

摂津守は唇を歪め、歪んだ唇から、毒気にみちた声を発した。

「上意」平馬は眼を閉じて、折弓を振りあげた。



⑦ 無残の折弓

「打てっ、打てっ、打てっ！」

叫び続ける摂津守。平馬は全身に悪感を覚えながら、美雪の柔肌に折弓の鞭をあて続けた。

美雪は悲鳴をあげ、身悶え、その瞳に真恵の色を深めていった。
(許せ……)

平馬の眼と、美雪の眼が、一瞬びたりとあった。このとき、美雪の眼は、真恵の色を消し、侮蔑とあわれみの影を、ありありと浮かべた。

そして、ガクツと失神したのである。

「ふふふ……こうなつては、もはや予の意にそむくまい」

摂津守の眼に、妖しい欲望の色が走った。

「平馬、襖外に控えておれ」

いうなり失神している美雪を抱きあげて寢所へ運ぶ摂津守。

これから何がはじまるのか。好色な狂君の手で、一人の美女がその操を失うのである。

⑧ 地獄の寢所



薬師寺平馬は、まるで化石になったように微動もしなかった。

こんな残酷なことがあるのか。

おのれの許婚の女が、命を賭してまで逃れようとした男の手で、

その操を奪われる瞬間を、こうして正座したまま待たねばならぬ。

同じように寢所控えを申しつけられた高尾数馬は、そうした平馬の顔を見てニヤリと笑った。

皮肉な顔であり眼であり口もとであった。

寢所から声が聞こえる。

「——む。気づいたの。どうじゃ

まだ予の意にさからう所存か」

「いえ、御意に従いまする」

「ほう」

「でも、その前に、お願いがござりまする」

「願い……申すがいい」

「薬師寺平馬は、許婚の夫でござります。たとえ契りはすまずとも

定められた夫は夫……。その許婚の夫が生きてあるうちは、殿の御意には従いかねまする」

「——む」

「薬師寺平馬に切腹を……」

もし死人の声があるとすれば、このときの美雪の声が、まさにそれであつたろう。

八薬師寺平馬、不首尾の科あり、切腹申しつくる

鶴の一声だった。

即座に切腹。むしろ、この上意さま、今こそお傍にと叫びつつ。

私たちと裏窓



四組の夫婦で



津々木光也

十月号において、私が以前投稿した小説の題名と批評が掲載されておりました。貴重な誌面を汚したことは申しわけありませんが、ごていねいな批評は、まことにありがたく感謝いたしました。

私の妻に、

と、見せてやりました。ペンネームなので、妻は半信半疑で、「これ、ほんとに、あなたの？」と、いつていましたが、私が以前「裏窓」に投稿するんだ、といつて原稿紙にむかって書いていたのを思いだし、やっと本当にしたようです。

「裏窓」を愛読している夫婦は、

私ども夫婦のほかに、私どもが仲よくしている夫婦が三組ほどおります。

はじめは、亭主同志の交際だったのですが、いつのまにか、女房たちも、グループの仲間に入ってしまった。

二カ月に一度ぐらひは、ひとりの家に集まって、いろいろとしやべったり、笑ったりして、時間を過ごします。

話は無論「裏窓」を中心に展開していきますが、なにしろ趣味が一致しているので、興がのると、かなり、きわどい点にまで至り、しばしば、大笑いになります。

グループ（というほどのことでもないのですが）のひとりの、H氏は、最近八ミリ撮影機と映写機を買い、さっそく自作自演としゃれていきます。ほかの人たちが、「見せてください」

と、お頼みするのですが、「まだまだ、ひとさまにお見せするようなモノじゃありません」と、いつて、もったいぶつてお

ります。

しかし、かなり露出癖（失礼）のある方なので、やがては私どもにも、みせてくださるでしょう。

グループが会って話しあっているうちに感じたことは、根本は一致しているけれど、こまかい点には、やはり、好みに差違があると

和装ものが一番というN氏。

女性の足が、地から浮いてないとおもしろくない、というE氏。（つまり、吊り、です）

黒スリッパに黒パンティ、黒ストッキングが大好き、というのがH氏です。

四組が四組とも、ぜんぶ好みが違うのですから、なるほど、何万人を相手にする雑誌の場合は、編集長もさぞ苦心サントンだろうと拝察する次第です。

世間の常識でいえば、とつくに倦怠期になっている私ども夫婦ですが、おかげさまで、たいへん、平和であるようです。やはり、結婚生活を長く保たせるためには、

こうした「演出」も必要ではないでしょうか。いや、これはいささか、自画自賛になりました。

十月号に私の名前が掲載されていて、あまりのうれしさに、つい筆をとりました。今後も投稿させていただきます。

掲載していただき、ただかないはべつとして、書くことがたのしみであり、よろこびであるのでご面倒ながら、ご一読ください。

時代物は、時代考証などで、なかなか私ごとき者の筆ではこなしきれないので、私はN氏と同様、時代劇ムードが好きなので、一生けんめい書いています。

私の小説に、小日向一夢先生のさし絵がついたら、どんなにすばらしいだろうと、いつも夢想しております。

小日向先生のさし絵は、まず、絵としても気品があり、いつも気に入っています。

余計なことばかりのべました。貴誌のご発展を、夫婦ともども心よりお祈りしております。

雨降って 地固まる



三 敏 崎 長

九州から、ひさびさにお便り

いたします。いつぞや上京の節は、親身も及ばぬご面倒を頂き、あれからだいぶ月日もたちましたが、改めて、御礼申しあげます。

じつは、先月のはじめ、妻に、

「裏窓」や、その他の雑誌を発見され、二重人格者とのしられ、そんなおそろしい、ケモノのような人間とは、もうとても一緒にはいられない、と離婚さわぎにまで発展しました。

私にとっては、地獄のような数日でした。

世間知らずの妻は、仲人に手紙をだし、

「こういう雑誌を、どう思うか。こんな雑誌を読む人間を、どう思うか？」

と、質問し、仲人の返事によつては、本当に、別れるつもりだったらしいです。

ところが、仲人の返事は、

「私も男性だから、こういう雑誌は好きだ。読みもする。べつに、それほど異常だとは思わない。妻の立場としては、そんなことは気にしないほうがよい。もし、雑誌をぜんぶ焼いてしまふのなら、私がもらいにいく。すてたり焼いたりするのは、もったいない」

と、こんな文面だったのです。

仲人は、大学で神学を教えている教授ですが、この返事には、私も正直、ホッとしました。

それから一週間して、その仲人が私の家へやってきました。また「裏窓」の話になったのですが、こんどは妻も笑声をあげ、しみいには三人で大笑しました。

その後は、夫婦円満です。

雨降って地固まるということわざがびったりするほどです。

レイナー氏の「結婚入門」に、SMの項について、「幼時への退行」として扱っていますが、案外そんなところかもしれない。

結婚入門書の多くは、SMに関して、まったくふれないか、病理学的一项として扱うか、まったく罪悪的反社会的に扱ったものが大部分です。

現代文明の洗礼を受けた社会人に、あまりノーマルな道学者めいたエチケツトばかりを強調するのは、むしろ、反動的な不親切だと考えます。

まるで、ピストン運動の機械体

操的カイセツ書のような、味気のない本が多いと思います。

レイナー氏は、夫婦間において

のSM遊戯を、アブノーマルとしてきめつけるよりも、むしろ、自然な方法として溶合させたほうがこのまじいと説いており、私も同感しました。

私は、女のひとの長い髪を十年以上、きらいでした。恐怖感すら抱いておりました。これは、幼児のとき、ザンバラ髪の母の容貌をみてこわかった思い出をもつからで、女性のひざ、ふとももの、こ

とに正坐したときのまるみが好きなのは、幼時に母のひざで入浴したたのしい記憶がつづいているのではないかと思っています。

私の妻が、あまり極端にSM雑誌を嫌悪するのは、もしかしたら潜在的SM心理の裏がえしではないかと思ったりします。

婦の態度、印象なども、思春期の彼女の性格形成に影響したかもしれない。

また、戦時中は疎閑していたそのうですから、そのとき、地元の悪童どもから、なにかSM的なショックを恐怖感として心にきざみつけられたのかもしれない。

そのへんは、妻の幼少時を知らぬ夫たるものの、うかがい知ることのできぬ部分ですが、とにかく私の妻の場合は、無関心とは、逆の心理の動きのような気がするのです。

しかし、とにかく妻が嫌悪する以上、妻はしばらく、私ひとり、内にこもることにしましょう。

こむずかしい理くつばかりならべる高尚ぶった亭主の裏側が、グルグル巻きの絵や写真ばかり集める趣味者だったと知ったときの妻のおどろきは、まあ、わからないことはありません。

(私自身は高尚ぶっている意識はぜんぜんありません。ただ芸術が好きただけです)

ケモノのような人間とかわれて

も、私にはいろいろな面があり、いろいろなものが好きであり、グルグル巻きの写真でも、私の場合は、うしろ手の、ごくおとなしいスタイルが好きなのですが、とにかく、妻の目には、いっしょくたの汚らしいエログロ写真にみえるわけでしょう。

まして「世間」という、得体の知れない、ばかばかしい「良識」という仮面をかぶった偏見は、おそろしいともいえます。

最近はずいぶん理解者もふえてきました。が、やはり、なんといつても、ワカラナイ人のほうが多いのですから。

「裏窓」十月号を拝見して、アメリカものの多いのが、目につきました。アメリカものは、どうもわれわれ日本人にはむかないと思います。

日本のある種の歴史的版画が、世界に冠たる位置を示すのは、やはり、情緒的美的感覚であり、な

しょう。

ゆえに、SMの場合でも、たとえ現代の女性にあっても、雨にうたれた海棠の花の風情が、日本人にはよろこばれるのではないでしようか。日本人の写した写真には東洋的情感があります。

いかに機械文明のお国とはいえアメリカもの(西独はまだよい)は人体相手ではなく、さながら小荷物のように、私はアメリカに生まれなくてよかったと思っています。

と申しても、このやりにくいご時勢に、アメリカものを多く掲載して、雑誌の永読をはかるという編集部の深慮遠謀かも知れませんが、すね。

人間性の深部を嫌悪し、踏みつぶそうとする「世間」の「良識」とたたかいながら、美しい雑誌をつくっておられる編集部には、信頼と愛情を感じます。

ながながと書きつらねました。長崎へおいでの節は、なにとぞ連絡ください。

「裏窓」は やはり裏側で



高 義 津 神

おんなの子のお色気、いや、も
っとはつきりいって、男性側の本
能を、はげしく高めるおんなの子
の状態というものに、自由をうば
われているポーズが、かぞえられ
る。

機能の本質的な相違から、男性
は、女性の意志とは無関係に、本
能をみたすことができる。

もつとも異性の欲しい青春時代
なんぞには、恋愛感情などべつに
しても、おんなの子を欲しいとき
がある。

欲しくなるほうが自然で、健康
で、欲しくなかったらカタワであ
り、不健康であろう。

新聞などの三面記事をやむと、

むりやりに女性をおそう、などと
いう事件が、ちょいちょいある。

健康なひとりものが、たったひ

とりの部屋で、もやもやしている

ときなど、自分もその主人公の心

理になりかけることがある。

もちろん、自分が大切だし、事

後のむなしさ、バカバカしさを考

えると、そんな危険なことを実行

に移すはずはない。

しかし、相手はいない。恋人も

いない。

こういうときに、空想が生まれ

る。明日会えば、たのしく語りあ

うこともあるだろう美しいクラス

メートが、空想のなかのエジキに
なるのである。

あくまでも「夢」のなかの出来
ごとである。「夢」にあそぶので
ある。

夢がさめれば、ケロリと忘れて
しまうのである。現実の社会に、
なんの抵抗もなく、もどれるので
ある。これが人間の、猿とはちが
うところである。

こういう発散の方法は、社会に
とって、非常なプラスになると思
う。プラスとかマイナスとかいう
よりも、この形態がもつとも多い
ケースだと思う。

「裏窓」の存在は、有益な発散を
手助けする。すくなくとも、私の
場合は、そうである。

「裏窓」は、だから、夢の雑誌で
ある。空想の雑誌である。

私の悩みを解消する方法として

「裏窓」を読むことは、絶好であ
る。私が「裏窓」を愛読する目的

は、だから、ほかの人たちとは、
だいぶちがうのかも知れない。

私は正直なところ、まだ、サデ

イズムも、マゾヒズムも、よくわ
からないのである。

読めばおもしろいし、興味もあ
るが、その根底には、いまだ達せ
ざるの感がある。

男のマゾヒスト、女のサディス
トの場合になると、まったく見当
がつかない。

性的倒錯だと言で片づけられ
そうにちがいないだろうが、それ
だけでは納得できない。

先日、私はあまりヒマのない身
でありながら、一編の小説らしき
ものを書いてみた。

縛られた女性のもつ、直接的で
はない、耽美的な感覚を主題にし
てみたのである。

あるおとなしい恋人同志が、ふ
ざけてスカートを飾るビロウドの
ベルトで、ちょっと相手の両手を
くくってみる。

くくられた娘は、きゆうにおと
なしくなり、両眼をとじる。男は
じいっと彼女のすがたを凝視して
いる。

そこには悲鳴もなければ、狂乱

もない。ただ、しずかな愛のムードだけがある。

彼女は、恋人の前に自由をうばわれ、横たわっている不安とあきらめに陶然と酔い、動かない。

男は、前でくみ合わされた恋人の、手首を飾る黒いリボンを、アクセサリー以上の、美しいエロチシズムの象徴として感嘆するのである。

こんな小説は、とてもなまぬるくて、とうてい「裏窓」にはのせてくれないだろうが、恋人同志のそんな行為と、サディズム、マゾヒズムとは、どのていどの関連性があるのか、知りたいと思う。

「裏窓」の八月号に掲載されていた、エダ・キリコさんの文章は、私にとって、たいへん共鳴するところがあった。(この女性は、歯切れのよい、スカッとした文章を書くので、とても好きになった)

彼女はなんの変哲もない、ひとりの正直な女性だと思うが、実際はどうだろうか。

大げさにいえば、私は彼女の文

章によって、男女間の、ある感情の真実を知らされたと思っているのである。

「裏窓」の中には、社会一般の無理解を嘆き、ときにそれを嘲笑しているようなふしも読みとれるがそれもしか、社会一般の常識から考えて、無理もないことだと思う。

なぜなら、こういう性癖は、一応秘すのが当然だと思うからである。(秘密にしなければならツマライ、という人間の微妙な心理もある)

現在の世の中においては、雑誌名のごとく、裏側に生存すること、やむを得ないのではないか。

また、犯罪への関連を、ヌレギヌといっておられるが、要は、本誌でもなんでも、読む人の知性その他にかかっているのではないだろうか。

いいかえれば、シゲキを受け、それであやまちを犯す人は、なにを読み、なにを見ても、そのきっかけには十分だと考える。

結論として、私たちにみさかいなくアブノーマルのらく印をおす無知な社会を、けいもうしようなどという考えは、誤まっているといいたい。

けいもうが成功し、アブノーマルが、ノーマルになってしまったら、アブノーマルの魅力は、なくなってしまうのではないか。

作家の立場から



九十 九十 郎

昨今ようやく秋風が立ちはじめ絶好の読書・創作シーズンに入りました。

ようやく長編のいとぐちについておきます。ところが、これがクセモノで、書いては消しの連続。投げだしてみたり、未練がましく取り上げてみたり、最初の一節が

出来上がってからも、まだ方向がつかめずにマゴマゴしている有様で、いつになったら完成することやら。自分では十月いっぱいにはかならず——と、柄にもない決心を持っているのですが……。

プロットは大体出来あがっているのですが、黒魔術、宗教裁判、

鍊金術、百姓一揆と盛りだくさんなのを、どうこなすかが問題で、四苦八苦しております。

さて「裏窓」十月号、さっそく拝見しました。八月号あたりからとみに内容充実して、ご苦心のほどがしのばれます。

「裏切り」は、相当張り切って書いたつもりなのですが、活字になったのを読みかえしてみると、どうも気のぬけたビールのような感じがします。自分ひとりが力みかえっているようで、気恥ずかしくさえあります。

活字になって読むのと、原稿紙のままて読むのでは、だいぶ印象にちがいのあるようなのが、最も困りものです。

以下、二、三、批評めいたことを書きます。

▼オフセットページの絵は、やはり、春日章氏にとどめを指す。十月号の鬼頭暁氏のは、無残な失敗というよりほかはない。

いったい鬼頭氏の絵は現代物に向いている上に、絵のポイントの

ないのが欠点である。オフセット印刷では、その欠点が、さらに強調される結果をまねく。

かつて、だれかの評で、氏の描く女性はどれも低脳のような印象をあたえるとあったが、まったく同感。

その第一の原因は、氏の女性は顔の下半分、とくに口が大きすぎあごがたるみ過ぎている。それに頭に比して手足が大きすぎる。これすべて「バカのデカ足」に通ずる特徴である。その証拠に「アラビアの城」のように、さるぐつわをはめて、口をおおうと、なかなか可愛らしい顔になる。

▼読者コーナーを読むと「アラビアの城」は、毀誉なかばしているようだが、私は興味ぶかく読んで

いる。これは、小説というより、臨床報告として読むほうが、あたっているのではないか。たしかにガラしてはいるが、そのつもりで読めば腹も立たない。

かつて「奇譚クラブ」に「家畜

人ヤブー」という長編小説が載ったことがあったが、あれも相当にガラガラしていた。

また、サドの「悪徳の栄え」を退屈しないで読める人はすくないであろう。

私はかねがね「S」に題材をとった小説」と「S小説」を、区別して考えているが「アラビアの城」は、後者の一例として、珍重にしたい。

このような細密な過程の報告は前者のタイプの小説にはみられないからである。北園氏よ、奮起して、末長く(?) 続けて下さい。

▼今月の最大の収穫は、落合龍二氏の「龍宮城の叛乱」である。

氏の絵については、かねがね、散見するカットなどで注目していたのだが、今月はそれが一度に咲きほこったような感がある。

氏の絵のデッサンの確かさ、縄目の正確さ、可愛らしくあどけない表情、ユーモアなどは、本誌の誇る挿画家陣の中でもユニークなものと思っていた。

そして一抹の危惧は、あまりにも西欧の絵のように、脚線を強調し、ヒップをふくらましすぎるこ

とによって、日本人の美感(これは私のみの美感かも知れない。ついでに言うておくが、私は西欧のこの種の絵、写真にはほとんどなんの情感も動かされない)から、あまりにも外れるのではないが、ということであった。

しかし、そのような危惧は、本号でまったく一掃され、私は手を打って快哉をさけんだものだ。

中には、氏の女性のやせぎすに不快を抱かれる人もあろうが、これは氏の持ち味として、その可憐清純な表情とともに失ってはならぬものと思う。

思うに、氏は少女に対するあこがれを強く抱いていられるのではなからうか。(それとも氏の幸福なる彼女または夫人が、ベビードール的な美人なのか)

ともあれ、氏の今後のひんばんなる登場を、切に望む。

読者のみなさん、「裏窓」を読

む楽しみの、すくなくとも三分の一は、各ページにちりばめてある氏の可愛らしいカットにあるということをご存知か？

彼女たちは、きわめて大胆なポーズで、諸君が虫メガネを手にとることを待っているのですぞ。

作品が登場しなかったのでしょうか。園氏の名前を目次にさがしだすまでの不安感。

とくに十月号などは、ただただおどろく以外に表現しようもないくらいの迫力であります。

この不安感を、あとしばらくはせめて味わうことのないようにと心で願っています。編集長より、何卒の保証を賜わらんことを。

「北園透一郎氏、ばんざい！」と、さけびました。

また、このシリーズが終わりましたら、第二、第三の弓子の登場を心待ちにしております。

私どものささやかなサディズムの夢を、北園透一郎はかなえてくれました。

鬼頭曉氏の絵が、またまたすばらしいですね。ただし、文章の弓子は、純真可憐で品のよい美少女ですが、絵のほうは、憎たらしいほどのグラマーで、北園氏の弓子とはだいぶちがいますが。

しかし、読者コーナー欄をみますと、このシリーズはマンネリ化したから中止したら、などという声があります。私は、絶対にそんなことはしないでくれ、とさけびたい。

なにとぞ、ご研究下さいますように、お願い申し上げます。いろいろ乱筆もかえりみず書いてまいりましたが、よろしくご笑覧下さい。

小生、現在、都内において開業している一医師でございますが、貴誌とは創刊号以来のおつきあいです。

注文を申しあげたいと存じます。私はまったくのS系でして、しかも、男対女でなければ、駄目であります。（法医学などでも、このタイプがもっとも多いといわれています）

もちろん、貴誌の読者のなかには、私のような好みの人ばかりはいないでしょうが、あのようなメカニズムが好きな方は、相当多いのではないのでしょうか。

北園透一郎・鬼頭曉両氏に、よろしくお伝え下さい。

最近の貴誌の成長ぶり、内容の充実ぶりには、ただただ、おどろいております。私ども読者にとりましては、感謝のことばもないくらいです。今後とも私どものために、ご健闘くださるよう心からお祈りいたします。

私はすでに貴誌を数十冊整理して所持しておりますが、北園透一郎氏のアラビアの城シリーズ「可愛い調教師」の出現で、私の長い年月の夢が、正夢となりました。

いままで、どうして、こういう

いつも書店で貴誌を購入し、北

現在の貴誌について、私なりの

いままで、どうして、こういう

いつも書店で貴誌を購入し、北

け下さい。

アラビアの城 ばんざい！



荒 木 市 彦

口悪のえし



寺内保夫

字はへたかも知れませんが、わかりやすくかきました。とにかくさいごまでよんで下さい。

さしえの先生の悪口をかきますが、聞き流して何が残ったとすれば、この上もない幸いです。

「お前のような青臭い小僧に、こんな高等な特殊な世界がわかってたまるか」って？

まあそういういわないでほしい。

先輩の同志のだれかが前にいつていたと思うが、いわゆるインテリぶった、実はとんでもない助平じじいよりは、オレのほうが、まだわかってるつもりだ。

というのは、この間テレビの三

国一朗、トップ・ライトの「おとぼけ新聞」のゲストで出てきた、O氏が、たいして関係のないところ

で、サディズム、マゾヒズムといったことばを、いかにもけがらわしいもののように口にしていただ。

一般にSやMというと、世間では、なにかアブノーマルな異端者扱いするようだが、人間だれでも心理の奥底には、そういった要素がひそんでいるって説に、オレは双手をあげて賛成する。

それでもオレは、裏窓の以前の装幀時代からの愛読者だ。

そしてオレはどうやら、S派ら

しい。しかし、自分でそう思っているだけで、本当のところはわからない。

というのは、考えてみれば、水尾究先生の「体当たりマゾヒズム論」をよんでも、共鳴することがしばしばだから。SとMとは、やっぱ紙一重なのだろうか。

三七年一月号「うらまど・いろはかるた」の最後の「今日はS、明日はM」というのは、そういうことなのだろうか。

さて、さし絵の評。

▼あのすばらしかった堂昌一先生の名が、裏窓から消えて久しい。さびしい。春日章先生も三度きりでおわかれとは残念。

▼現代的なタッチで、グラマー美女を描かれる山田彬弘先生の絵が十月号にはなくてさびしい。

▼女の目に特徴のある絵を描かれる古正英生先生。だけど、あちこちの雑誌にあまりたくさん描きすぎて、希少価値はない。

▼せんさいなタッチで、美しいお色気をだす喜多玲子先生。このこ

ろ、先生の絵がみえない。ご病気なのだろうか。

▼ふとい線で、非常にセクシーな感じの美人を描かれる都築峰子先生。ただしマンネリズム。

▼同じくマンネリズムの中川彩子先生。はじめのうちはめずらしくてよかったが、いつもいつも同じようなので飽きてきた。

▼絵がこまかすぎるのはいいけどかんじんの要点がぼやける鬼頭先生。十月号の絵物語のナワなんて固いナワの感じが全然ない。

▼時代物の詩情あふれ、品格正しい小日向一夢先生、好きです。

▼ボクの好みにピッタリ、落合竜二先生。

▼女の子の目に、黒瞳がないのに表情ゆたか、詩情あふれる江渕晃夫先生。

▼ふしぎなお色気、すばらしいアイデアマンの左次朗先生。愛読しています。

以上、とりとめもないことを、ガラガラとかきました。裏窓よ、わが生涯のよき伴侶たれ！

■暗い時代にうごめく哀れな売春婦たち

鉾山町の女たち

宗方 八郎・文

都築 峰子・絵

秋田県の鷹の原という小さな町から、さらに、おもちゃのような汽車にのって東北へ四十五分ほどいくと、加曾谷という部落があります。

現在では、すっかり廃鉾になってしまいましたが、私が子どものころ、その部落は、銅山として、たくさん人間がはいりこみ、かなり繁昌した町でした。

私は、五歳のとき、父母とともに、その町へ移り、十三歳で小学校を終えるまで、あらくれた男たちの汗と、ヒゲと、酒と、ケンカと、そして女たちの安白粉のにおいと嬌声の渦巻くなかで過ごしたのです。

というのは、私の父は、そのころ数百人も

集まっていた鉾夫たちに、女をあたえる商売をしていたのです。

小金を持った流れ者夫婦、つまり、私の父母は、その土地の没落した旧家を買取り、すこしばかりの大工の手をいれて、そういう商売の家に改造したのでした。

そして、東北地方のあちこちから女を仕入れてきては、よく稼ぐ商品に育成していったのです。

たしか昭和十一年、日華事変のはじまる、すこし前のことだったと思います。

売春防止法とか、人権がどうか、そういう法律も意識も、なにもない時代でした。

とにかく、人身売買が公然と行なわれてい





たのですから、ひどいものです。

あれから三十年たつたたぬうちに、ずいぶん、世の中も進歩したものだと思います。

すくなくとも、表面的には、人身売買も、売春も禁止され、彼女たちの基本的人権とやらも守られているのですから。

もっとも、これはあくまでも表面だけで、実際には、三十年前と、そうたいして違いはないのかも知れませんが。

父のつくった女郎屋には、二十人くらいから、多いときには、四十人近い女たちが、ひしめきあうようにして寝起きしていたように記憶します。

そのうち、以前からその商売をしている女は、わずか五、六人で、あとはほとんど、山形、宮城、青森、秋田などの、貧農の家から買いあさってきた娘ばかりだったようです。

なかには、当時子どもであった私の目からみても、まだほんの小娘といった感じの、少女もありました。

おそらく、まだ十五、六歳か、あるいは、それ以下の年齢だったかもしれません。

女衞（ぜげん）などという商売人がいて、私の家へ、しじゅう出入りしていました。白髪だらけの頭をした、一見、いかにも好人物を思わせるおじいさんでした。

およねのこと

およねという女がおりました。

としはもう、三十を三つ四つ越していたで
しょうか。姐御肌の氣ツぶのよい、淡白な性
質の女でした。

私のことを「ほうや、ほうや」といって、
自分の部屋へ呼びよせ、キャラメルや、おせ
んべいをくれたりしました。

「親は鬼でも、子どもはかわいい」
酒に酔って、そんなつぶやきをもらしたの
を、私はきいたおぼえがあります。

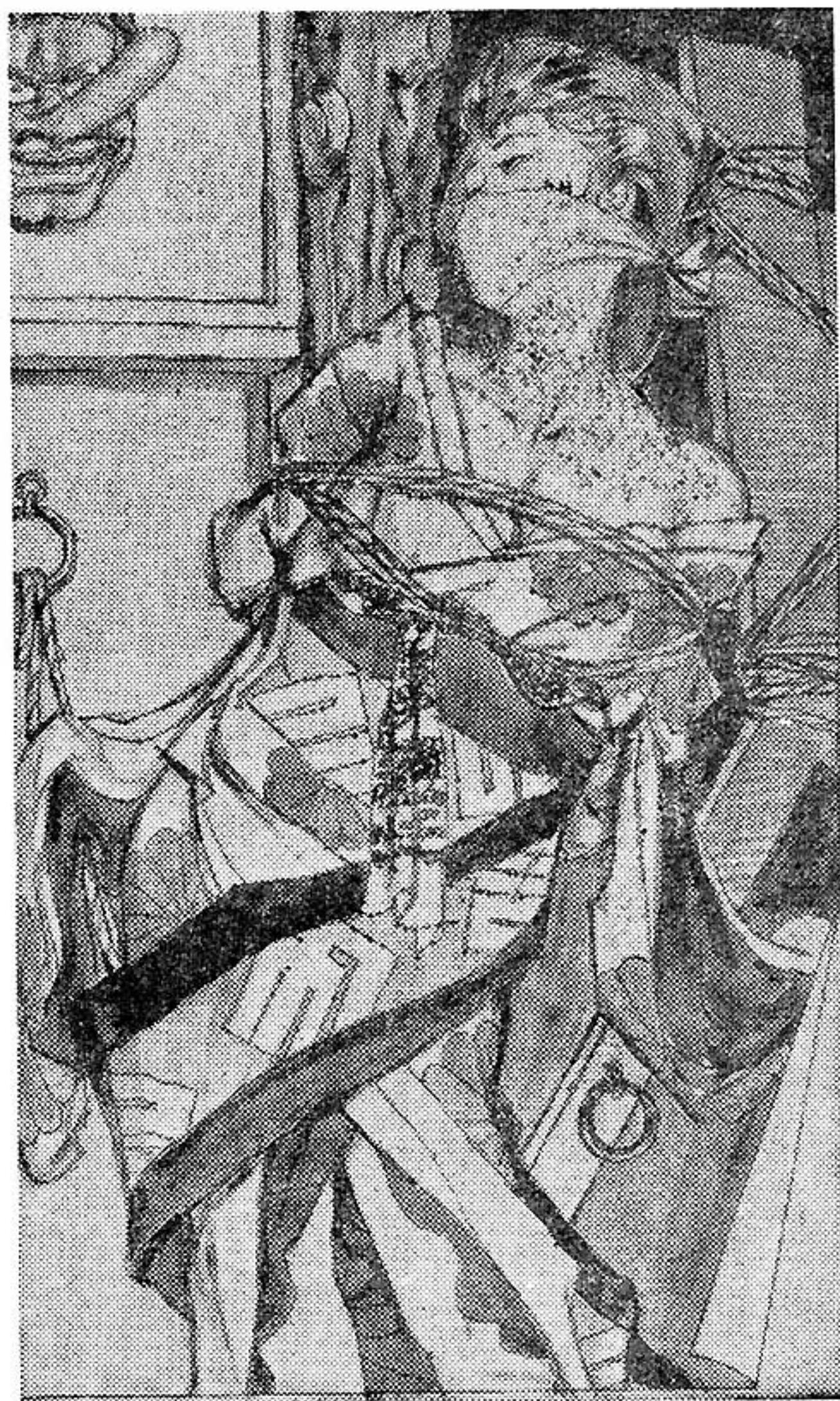
親を鬼とよばれて、子ども心にも私は、悲
しさに胸をふさがれる思いでした。

このおよねが、ある日の夕方、物置き部屋
で折檻されているのを、目撃したことがあり
ます。

当時の私の目にも、年増女の爛熟した、お
モチのような肌が、縄にぎりぎり巻きあげら
れてうごめくさまは、濃艶とも、妖艶とも、
なんとも形容しがたい光景でした。

およねが、妹のようにかわいがり、面倒を
みている千代という女がいます。その千代が
病気になって熱をだしているの、およねが
私の父に、

「今夜だけは、千代を休ませてやってくれ」



と、頼んだのです。

それが、父の怒りにふれたのでした。

なまいきだ、というわけで、父は、雇い人
の定さんという男に命じて、およねを責めた
てたのです。

およねの口は、白い手ぬぐいのさるぐつわ
で、がっちりとおおわれ、頬までがよじれて
いました。

うしろ手に縛られ、その縄の強さに、胸を
つきだし、のけぞるような形で苦痛を耐えて

いるようでしたが、うめき声ひとつあげず、
およねは定さんの顔を、まばたきもせず、に
らみつけていました。

その切れながの目もとの、凄いような美し
さを、いまでもよくおぼえています。

「おめえは、ふだんから、でしゃばりすぎる
ぞ。きょうは旦那さまのおゆるしもでたこと
だからな。思いきり、仕置きしてやる」

そういうと、定さんは壁にかかっている天
狗の面を、右手ににぎりしめたのでした。

千代のこと

千代はまだ本当に、十五か、十六くらいだったと思います。家が恋しい、母親に会いたいといって、よく裏のくぬぎ林のなかで泣いておりました。

そういうとき、慰さめようと思って私が近づいていくと、ぎくツと肩をふるわせてふりかえり、キツネのように目をつりあげて、私に石を投げつけるのです。

私のことを憎んでいる、そのときはそう思ったのですが、いま考えてみると、千代は自分の商売を恥じて、私に対して羞恥のあまり石をぶつけたのではないのでしょうか。

なにしろ、私と千代との年齢の差は、わずか、二つ三つでしたから。

千代はからだの弱い子で——いや、いくらからだが丈夫でも、鉦夫相手に毎晩を働かせられるのですから、たまったものではありません。——よく熱をだして寝こみました。

ある夜、定さんは強制的に検温器を使い、千代の肛門ではかりました。あいにくそのとき、熱はひくかったのです。

「このアマ、仮病を使いやがる」

定さんは、そうわめくと、千代を物置き部屋にひきずりこみ、うしろ手に縛りあげて、折檻しました。

うすもも色の長じゅばんが、びりびり音をたてて裂け、ふくらみきらない乳房は、私の目に痛いほど悲しくうつりました。



菊枝のこと

菊枝という女は、足ぬきをしようとして捕まり、これはみせしめのために、みんなの見ている前で、お仕置きをうけました。

店へくる客のなかで、一風変わった、大学を中退したとかいう青年鉦夫と、本気で恋愛しあい、その青年の手びきで、逃げだしたのです。

いちばん近い駅へ出ると、すぐ捕まるというので、鷹の原まで二十里近い道を歩き通したのです。

しかし、鷹の原駅にも、すでに警察の手がまわっていました。その青年は、アカの疑いがあるとかで、すぐさま警察へ連行され、菊枝は店へひき渡されました。

鷹の原から自動車にのせられて店の前までつれてこられたのですが、そのときすでに、捕縄でうしろ手に縛られていたのですから、ひどい話です。

いったん解き放たれた菊枝は、定さんの乱暴な足にけとばされながら、れいの折檻部屋まで追いたてられ、あらためて定さんの縄に縛られました。このときの定さんは、まるで舌なめずりでもするような、いやしい表情でした。

菊枝は、もうすっかりあきらめきった顔でなんの抵抗もみせません。おとなしく縛られ両手首を背中の上のほうに、ぐいぐいと、引きあげられていました。

その手首のほそさと白さは、無言で無抵抗なだけに、ひどく痛ましいものでした。

女はたいせつな商品ですから、縛って押しこめておいても、肌に傷をつけるようなことは絶対にしないのですが、このときの菊枝は青竹をささらにしたムチで、ずいぶんたたか

れました。

しまいには、裏の庭へひきだされ、赤い腰巻ひとつにされて、折檻されました。

「てめえたちも逃げだそうとしやがると、同じ目にあうんだぞ」

定さんは、女たちをみまわして、さっそうとした顔でいうのです。

菊枝はまるで、白と赤に染められたハダカ虫が、半殺しにされた最後のあがきのような格好で、地面にのたうちまわるのでした。



ツル子のこと

女たちのなかで、ただひとり東京から流れてきたというツル子は、性格が派手で驕慢な上に同輩たちに対してもわがままで、ずいぶん憎まれていたようです。

たしかに、女たちのなかでは、ひととき、色も白く垢ぬけていました。なによりも、お客たちに人気のあることが、ツル子を増長させていました。

鉦夫でも、下ッぱは相手にせず、似合わない口ひげを生やした技師だけを客にとっていました。いまでいえば、さしずめ、オンリー

とでもいうところでしょうか。

ところが、いま思えば、その技師には、女を縛ってかわいがるというくせがあったらしく、ツル子は彼女自身の部屋で、いつも悲鳴をあげていました。

泣くような、あまえるような、ふしぎな声で、ツル子は悲鳴をあげていました。

さるぐつわを噛ますわけでもないのに、その声は、ふすまから廊下へぬけて、向かい側の部屋、両どりの部屋へ筒ぬけです。

まだお客のとれない女が私を手まねきし、「坊ちゃん、ツル子の部屋をのぞいてごらんよ。ツル子はわるい女だから、ああして、ヒ

ゲの技師さんにお仕置きされているんだよ」

と、嫉妬まじりにそそのかします。

私はそれを真にうけて、好奇心を燃えあがらせ、ツル子の部屋へのぞきに行くのです。

「そこでのぞいているのはだれだ。なんだ、この店の坊主か。坊主なら、まあいい。はいれ」

酒に酔って、のどまでまっ赤にした技師は私をまねき入れるのです。

天井には、大きなクギが乱暴に打ちこんであり、ツル子の両手を縛った縄は、そのクギにひっかけられて、ツル子は中腰の形で、半吊りになっているのでした。

あたまをがっくりとうしろへ倒し、白いのどから胸のあたりを弓なりにのけぞらしたまま、なめらかにさらけだしています。

「おじさん、ツル子は、どんなわるいことをしたの？」

と、私はきいたのです。

技師は口ひげをふるわせて笑い、

「わるいことなんかしないさ。おじさんは、この女が、好きが好きでたまらないのさ」

という、ツル子の足をくすぐるのです。

もちろん、そのことばや、目の前の妖しい情景の意味が、そのときの私に、理解できるはずはありませんでした。



春代のこと

春代は、小さいときに、脳の病気をわずらったとかで、みんなに、バカにされてしまった。気のいい女で、のんきであけっぴろげな性格は、お客にも人気があり、好かれていたようです。

ただ、大酒のみで、そのために同輩たちにもいろいろと迷惑をかけていました。

酒の気が切れたことはなく、働いた金を、ぜんぶ飲んでしまふのです。すでにアル中患者になっていたのではないでしょう。

酔っぱらって廊下へとびだし、大の字になって倒れたまま、ねてしまいます。

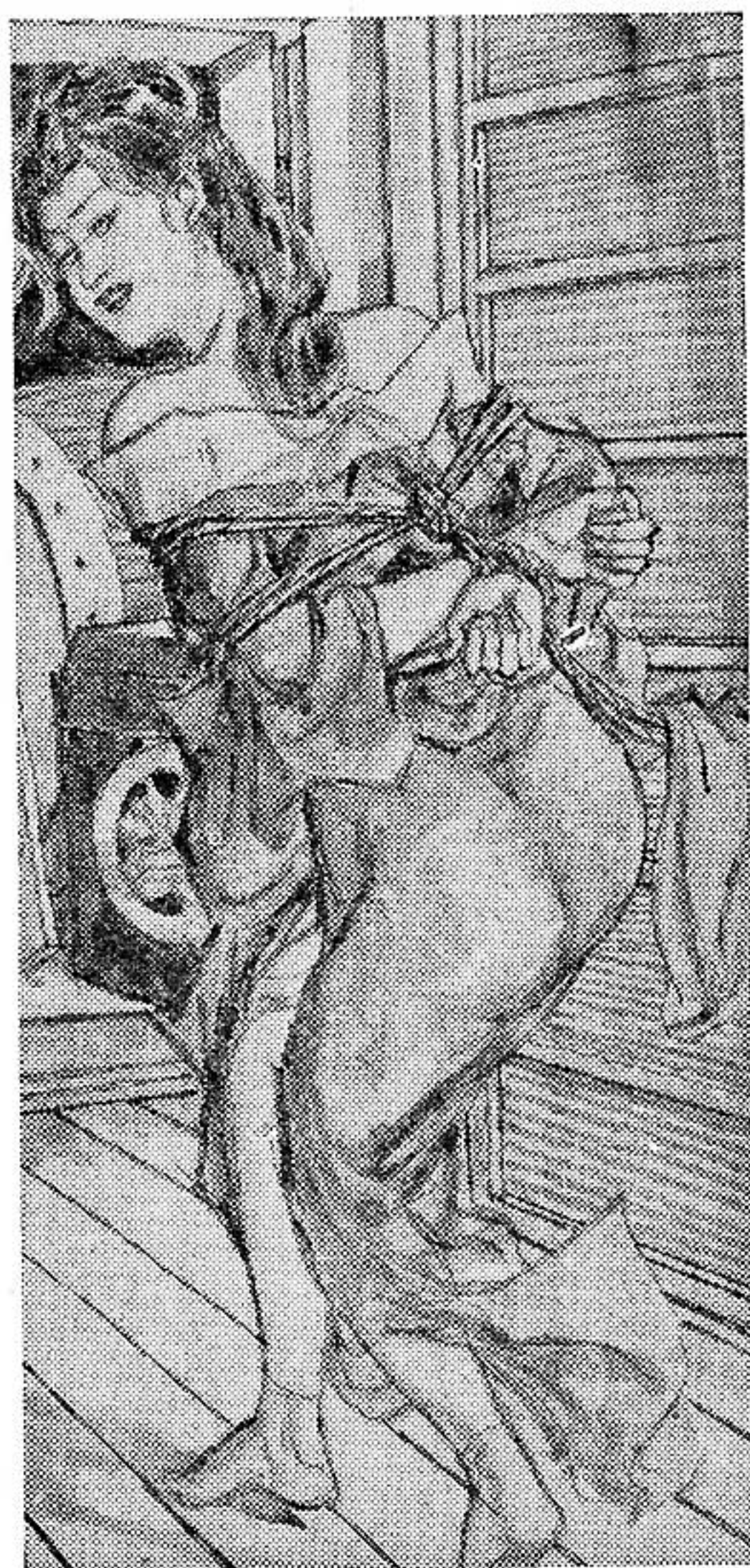
「ばかやろ、商売ものをおっぴろげるやつがあるか」

と、よく定さんに蹴とばされていました。

酔っぱらったあげく、ほかの女の部屋へころがりこみ、女と客とがいっしょにねているふとんの中へもぐりこむのですから、監督係りの定さんとしては、ほうっておけません。「しよのねえアマだ。酒の気が切れるまでこうしておいてやる」

と、れいによって、縄でうしろ手に縛りあげ、物置きの中へとじこめておきます。

ところが、春代は、店の女のなかでも、い



ちばんの大女で、腕力もあり、柱につないでおいた縄じりをひきほいて、また廊下へ、ふらふら迷いでてくるのです。

縄じりはほいでも、うしろ手に縛られた縄はそのまま、廊下を歩きまわるのですから、いくら戦争前の女郎屋でも困ります。

しまいには、両足までぐるぐる巻きにくくられて、物置きの中に監禁されます。

春代の場合は、お仕置きや罰ではなく、一時の監禁が目的なのですから。縛りかたも、そうきついものではありません。

私は、かわいそうに思って、そんな春代の縄を、ときどき解いてやりました。

「ありがと、坊ちゃんだけが、あたしの味方だよ。あたしは、だから坊ちゃんが、いちばん好きだよ」

といって、春代は、なみだをながして泣くのです。

私のからだを、ふとい、むちむちした両腕で、ぎゅうッと抱きしめ、私の顔じゅうに、ぬるぬるしたくちびるを押しつけるのです。

酒のおいと、べったりぬった口紅のにおいに、私の鼻はおしつぶされ、私は、「バカ、バカ、やめろ！」

と、どなりながら、必死になってもがくのです。



あれから二十七年

女たちは、どんどん変わっていきました。
あたらしい女が、女衞につれられ、おどおどとやってきました。

病気になって、死ぬ女もありました。
がちりお金をためこみ、自由の身になって家へ帰っていく女もありました。

しかし、金をためこむ女はごくわずかで、ほとんどが、わずかな借金のために、苦しい人間を人間とおもわぬ商売の毎日を送っていたようです。

私は、そのほかにも、店の女が縛られ、折檻されているのを、三、四度のぞいてみたような記憶があります。

ふしぎに、それは陰惨な色にぬりつぶされ

た風景ではなく、妙になまめかしい、芝居絵のような記憶なのです。

こんなことを書きのべていると、私の父が経営した女郎屋は、いつもいつも女をいじめばかりいたようですが、そうでもありません。

かわいがるところは、ちゃんとかわいがり面倒をみるところは、よく面倒をみていたようです。といっても、それも結局は、女を、よりたくさん働かせるための、手段だったのでしょうけれど。

あの時代でしたら、抱えの女を縛ったり、たたいたりすることも、さほど、めずらしいことではなかったはずで

私は、私の目撃したかずかずの経験のなかで、もっとも印象にのこった情景だけを、思

いうかべてみただけです。

鬼とよばれ、外道とよばれた父も母も、私に対してはやさしかったように思います。

もっとも、もう四十をこした私に、こんななまなましい記憶をいつまでも植えつけておくような環境は、けっしてよいとはいえませんが。

そんなアコギな商売をして金をためたやつは、ロクな死に方をしない、とよく言われますが、終戦後、父も母もすばやく仙台へ出てこんどは固い食料品店を経営し、成功させてから死にました。

小説の上ならともかく、実際の社会では、悪事を働いたやつも、案外、器用に栄えるものです。

あの女たちは、いまごろ、どこで、なにをしているのか、と、ときどき思います。

私がもう、こんな年になっているのですから女たちもみんな四十をすぎ、あるいは、五十をすぎているはずで

しあわせに暮らしていればよいが、と心から念じています。

父のおこなった、あまりよくない行為に対して、せがれの私は、やはり、いくばくかの責任を感じているようです。

■大盗賊誕生

青雲崩れるさち

錠 村 井
絵 生 英 正 古

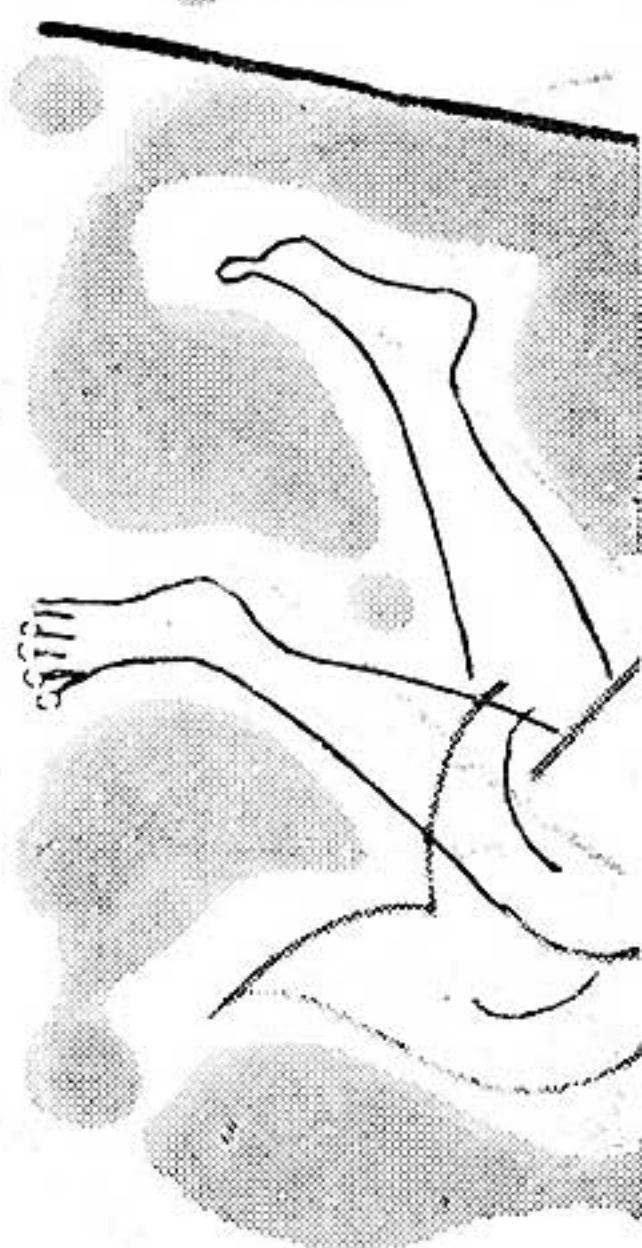
霧の伍右衛門

小春日和の澄んだ大気をとおして、五助の後につづく荷駄車から、相もかわらず伍右衛門の高声が伝わってくる。

約三町ばかり、五十騎の騎馬武者を先頭に、した五百の軍勢は、今朝ほどから重苦しい緊張につつまれて、笑い声、話し声のきこえてくるのは、隊列の最後尾についている伍右衛門らの連中だけだった。

行く手の山が次第に押し迫り、先頭の武者から話し声がとだえると、後尾の荷駄組まで合戦の近いことが痛いくらいに感じられる。荷駄組の兵たちはその圧迫感から逃がれるために、つとめて伍右衛門の話に耳をかたむ





け、合づちを打ち、伍右衛門をあおっている。

伍右衛門の話がまたおもしろい、といっても五助にとっては唾でも吐きかけたいような、卑猥な内容ばかりなのだが、伍右衛門のおどろくべき話がすべて与太話だ、ときめつけることはできない、いや、伍右衛門の話を裏書きしているような事実を、五助はこれまでに二、三度見聞している。

「……はいつてみると年頃の娘が二人、抱き合って青くなっている。姉妹なんだな、ぶるぶるふるえているやつをまず妹の方を縛りあげ、姉の方は裸にむいてから縄をかけたな」

伍右衛門の話は果てもなくつついている。

曰く、どこそこの後家は肉がしまっていてよかったですか、曰く、どこそここでおそった奥方はふとり過ぎていて味が悪かったとか――。

五助は、額から汗がたれるほど嫌悪しながらも、自分でも気づかず、いつしか伍右衛門の声に耳をかたむけていた。

とにかく、伍右衛門というのは変っていた。

村の若者数名とともに募兵に応じた五助が、

配属された荷駄組に伍右衛門がいた。まず、伍右衛門の、他の雑兵とちがったいでたちが五助の目をひいた。といっても、なにも伍右衛門が立派な鎧をまとっていたわけではなく、見方によってはむしろその逆であった。

常勝軍木下秀吉の兵たちは、度々の合戦で敵味方の戦死者の中から目ぼしい武具を剥ぎとり、足軽雑兵にいたるまで身分不相応な武具を身につけている。が、哀しいかな、なんといつても借りものだけに、はた目には滑稽な格好をしているものが大半であった。

伍右衛門はそれらの中にあつて、小柄な体

軀に濃い鼠色のかたびらを身につけ、軽い黒皮の胴衣を着用しているにすぎなかった。あとで聞いた話だが、黒い衣装は闇にまぎれて敵の目をくらますため、武具を身につけないのは、もちろん身軽に活動するためとのことだった。

五助が伍右衛門を強く意識したのは、単に伍右衛門の異装だけではない。入隊したその

日から、五助は痛いほど伍右衛門の視線を感じていた。

二度、三度の小合戦で、五助は伍右衛門の実力を知った。

いつも合戦まぎわになると、伍右衛門の姿が消えた。五助の組は華々しい働きも出来ず、合戦となれば弾薬の運搬、合戦がすめば戦死者の埋葬が主な仕事で、武功をたてようとす

るなら、抜け駆け以外に方法はなかった。死傷者の収容をすませて一息ついたころ、当の伍右衛門はひょっこり帰ってくる。おどろいたことにはその度に、大将首とはゆかぬまでも、侍首を二つ、三つとぶらさぎていた。

組頭にしても、自分の部下にそんな男がいると他の組頭に顔がきくので、めったにとがめることはなかった。

「何が望みだ、申してみい」

秀吉は年齢よりも皺の多い相好をくずしてたずねる。

伍右衛門の答はいつもきまっていた。

「侍大将になる望みはござりませぬ、銀子を少々」または「捕えた女を拝借いたしたい」遊んだ女は惜しげもなく同僚にくれてやる。そして、その時のことをおもしろおかしくみんなに話す。五助は、それが氣にくわなかった。

そのうち、伍右衛門の方から五助に話しかけてきた。

「五助、おまえは郷士のこせがれとかいったな」

「そうだ、石川村の溝呂木五助だ」

「なるほど、俺は血筋とかいうものは嫌いじやが、やっぱりそれはあらそえぬな。年はいくつだ」

「十五じゃ」

「ほう、それはでかい」

伍右衛門は、青く澄んだ金壺まなこをしばたたいて、五助の大ぶりの顔を見上げた。

人いちばい大づくりの目鼻だちを、いつも気にしていた五助は、女のように羞恥に顔を染めた。

伍右衛門は、つと手を伸ばして、胸から腕へと軽くたたきながら、五助のからだをまさぐってゆく。

「よせ、俺は馬ではないぞ」

「くつくくくつ、まあそうおこるな、いいからだじゃ」

伍右衛門は口をつぐんだまま薄気味悪い笑い方をするくせがあった。

「どうじゃ、五助」

「……………」

「俺の頭かしらにならぬか」

「かしら？」

「そうじゃ、おかしらじゃ」

「盗賊のかしらになるのか」

「知っているのか、誰から聞いた？」

「自分でいつも言ってるぞ。みんなおまえのことを何んと言ってると思う。霧の伍右衛門、暗の伍右衛門、野鼠の伍右衛門」

「くつくくくつ、鼠はよかった」

「伍右衛門、恥ずかしいと思わぬか」

「なんのい、名前なぞ符牒にすぎん、盗賊もまた楽しからずや、武将も同じじゃ」

どこ吹く風、と伍右衛門はうそぶいた。

「泥棒に武将が、どうして同じじゃ」

五助は声を荒げて詰めよった。

「まあさ、たとえば信長の播磨攻めじゃ。播磨に対して信長が、なんのうらみつらみもあるもんか。いかさま強食弱肉の世の中に、盗賊なんぞかわいいもんじゃ。武将こそは、血も涙もない大盗賊じゃ」

「ならば、おまえが頭になればいい」

「そうよなあ」

顎に手をおいて、伍右衛門は撫然とつぶやいた。

「頭になるには、人間、持って生まれた器量というものが必要じゃ、俺は腕がたつてもそれが無い。おまえには頭となる器量がある。」

いまから十年、みっちり腕をきたえれば、押しも押されぬ大盗賊じゃ」

——だが五助はにべもなくことわった。

抜け馳け

ふっと、後の話し声が止んだことに気づいた五助の横に、伍右衛門が荷車の後押しの手を貸していた。

「相かわらず女好きじゃの」

「男じゃからの、五助、女はかわいいぞ」

「そのかわいい女を、なんで縛ったりするのじゃ」

五助は意地悪くからみつく。

「四の五のぬかすとうるさいからじゃ。乱世のことじゃ、なまじ好いて好かれれば、明日は死ぬ身の別れがつろうなる」

また、五助のきらいな話になりそうなので五助は話題をきり変えた。

「明日はいよいよ合戦じゃな、勝てるだろうか」

「まずな、真砂城の城兵は二百、城を取りまく三木勢わずか三百、城兵と俺たち援軍を加えて七百と三百のいくさか、まちがいはあるまい。それに、真砂の鶴姫はどえらい美人じやそうな」

「そうじゃ、鶴姫さまは播磨一の美姫とのこ



ほう、といったふうには、伍右衛門は五助の顔をのぞきこんだ。

スイ、と紅がらとんぼが二人の間を抜けていった。

——翌朝、夜明け前に隊列を離れた五助は伍右衛門にしたがって、真砂城の見える裏手の山を馳けていた。

(なるほど、背後から奇襲か) 五助は伍右衛門の兵法に胸が高鳴った。いくさはすでに始まっているのだらう。山から見おろすと、真砂の名を誇る白い城壁を背景に、彼我の旗竿がゆらめいている。

「五助、こっちだ」

伍右衛門は五助を導いて、木立の中を馳けおりました。城に通じる径か？ それを見透せる茂みにくると、

「さあ、ゆっくり待とうぜ」

伍右衛門はどっかり腰を落としてしまった。

「……………」

「わからぬか、ここにいて落武者を斬り伏せるのじゃ」

「なっ、なんじゃと！」

きいて五助は、言葉が咽喉につつかえた。

「いきるな、いきるな、いかな豪傑といえどもまともに戦えば万が一ということがある。」

とじゃ」

鶴姫の話になると、五助の方から声を弾ませた。

「読めた！」

ふいに、伍右衛門は大きな声を放った。

「いかに播磨唯一つの味方とはいえ、城兵二百の真砂城を、見殺しにしたとて痛くもかゆくもないものを、わざわざなんで俺たちを援軍におくるのかと思えば、猿め、鶴姫を抱こ

うがためじゃ、馬鹿々々しい」

「これっ！ 猿とは秀吉さまのことか」

「いかさま、狒々じゃ、色猿じゃ」

「ご主君に対してなんたる言いぐさじゃ、口をつつしめ」

「なるほど、おまえにとっては秀吉こそ、まことの武将じゃったな、くっくくく」

伍右衛門は例のごとく笑った。

「伍右衛門、頼みがあるのじゃ」

ここにいて手負いの武者でも落ちてくればしめたもんじゃ。果報は寝て待てとはこのことじゃが、くっくくくくくく

あきれて、五助は怒ることも忘れてしまった。

「盗賊の兵法はやはりそれくらいが落ちじやの、伍右衛門、もう頼まんぞ」

五助は、ガッカリして城に向かって歩きだしていた。

「五助っ、どうしたっ、おい、五助っ」

伍右衛門の声をふりきって、五助はいっさんに馳けていった。

鶴 姫

作戦か？ 三木の寡兵は一合もまじえず、旗を巻いて退脚したため、援軍は頬のそげた真砂の城兵に迎えられて無血入城を果たした。

五助は組頭にさんざん油を絞られた後、さしたる仕事もないままに、仲間たちから一人はずれて、城の中庭にごろりと疲れたからだを横たえていた。

城兵も、援軍も疲れ果てて、夕飼までの一ときを、はやそこそにいびきをかいて眠りこけている。

（伍右衛門め、うじ虫め、泥棒め）組頭に絞られたことも、いや、なにもかも伍右衛門の



せいのように思えて、五助はいらいらと眠れなかった。無理に目を閉じる、とあたりのいびきが五助の高ぶった神経を刺激する。

と、誰かの息が、眉にかかる気配に目を開けると、果して伍右衛門の金壺まなこがのぞきこんでいた。この男と面と向かうと、妙に憎めないのが五助には腹立たしい。

ギョロと五助は寝たままで、伍右衛門の方へ目を動かした。

「おこっているのか？」

腫れものにさわるような伍右衛門の声だ。

「合戦はなかったのだ、結果は同じことじゃった」

五助に吐き捨てるようにつぶやいた。

「そうか、そうか」

伍右衛門は真底うれしそうに顔を皺でくずした。

「ところで五助、土産ができたぞ」

「なんじゃ」

「おなごを拾うた。それ麓に大きな杉があつたろうが、あそこに二人つないできた。赤衣着物の方はまだ生娘じゃ、おまえのためにとっておいた。おこるな、おなごのふところに錢もくれているわ、どうじゃ、いかぬか」

「おまえとはもう、口をきく氣もないわ」

五助はくると伍右衛門に背を向けてしまった。

「やれやれ、つき合にくい奴じゃ」

五助の背で、ため息がきこえた。五助のまぶたが、ようやく重くなってきた。

「弥助っ、惣次よっ」

伍右衛門が口をきくと、必ずいいことがあるので、呼ばれた二人がすぐ飛んでくる足音がした。

半ばうつつの五助の耳に、先ほど五助に言ったことを話している伍右衛門の音がする。

「といって伍右衛門兄貴、助けを呼んでいまごろは、もぬけのからじゃあるまいな」

「なんの、ぬかりがあるもんか。ちゃんと猿轡を噛ましてあるわ」

「おっと合っ点、ありがてえ」

馳ける足音が、遠ざかっていった。

（あきれ果てた奴だ）カタリ、と五助は眠りに落ちた。

——あたりが急にざわめいて、五助は重いまぶたを開けた。

庭に、あかあかとかがり火がたかれ、夜氣がしんしんと身に泌みる。みると夕餉を椀に盛った城の女たちが、小者が、目まぐるしく往き来して兵たちの前に運んでいた。

かたわらの伍右衛門に目をやると、彼はすでに起き上がっていて、なにか一心に見つめている。伍右衛門ばかりではなかった。五助のまわりに屯する兵たちの目は、一せいにひとところに注がれている。

何事か、と五助はその方に目を移して、カツ、と頭に血の昇るのを覚えた。

（鶴姫だ！ 鶴姫さまだ！）

そこに、飯を盛った大びつの前に、おそらく援軍の労をねぎらうためだろう、はした女の中に混って、かいがいしく飯を椀に盛っている鶴姫の姿があった。

「伍右衛門っ、伍右衛門っ、あれを見たか、

どうだ、鶴姫さまを見てかつ」

先ほどの不機嫌も吹っ飛んで、五助はわが事のように伍右衛門をかえり見た。誰かに同意を求めなければ、大声で叫び出しそうな氣持だった。

「なるほどな、ききしにまさる美形じゃな。

猿が抱きとうなるのも無理はない」

自分から合点を求めながら、五助は伍右衛門の言葉も上の空で、鶴姫の一挙一動を凝視していた。何んという美しさだろうか、匂うような月の眉、小さな花のような紅い唇、金糸銀糸のうちかけはかがり火に映えて、五助には幽幻世界の神々しさに目がくらむ思いがした。

「のう、五助、明日は三木の軍勢が寄せてくるやもしれぬ。おまえも鶴姫も明日ない生命なら、せめて生きてるあいだにあんなおなごを抱いてみようと思わんかい」

（ああ、まことそうならば……）五助は伍右衛門の声も夢うつつに、真剣、いつでも死ぬる思いだった。

夢見るような五助の目を、伍右衛門の金壺まなこが糸のように細くなつてのぞいていた。

茂みの女

「五助っ、五助っ、起きるのじゃ」

耳もとで、伍右衛門の忍び声をきいて五助はガバと身をおこした。

「なんじゃ、いくさか」

あの日から二日過ぎた。城方の放った物見から、三木勢二千余が向かっているとの伝えがあり、今日明日にも一合戦ありそうな緊迫

した空気が城内を包んでいた。頼みは秀吉の本軍であるが、どうやら遅れそうな気配である。

この夜更けに起こされて、五助がいくさと早合点したのも理由があった。

「寝ぼけるな五助、よい知らせじゃ」

「……？」

「鶴姫さまがの、お待ちかねじゃ」

「なっなんと、つつ、つつ」

「しっ、声が高い、鶴姫さまがの、おまえにひと目あいたいとお待ちかねじゃ」

「ちっ、眠いのをわざわざ起こして与太話かい」

「五助、俺がうそを言ったことがあるかい」

五助は次第に真剣な伍右衛門の目の色に、ぶるぶるおこりのようにからだがふるえてくるのを止められなかった。

「こっちだ、気づかれるな」

伍右衛門は先に立つと、いびきに満ちた城内を、まるで勝手知ったわが家のように、音もなくすべり歩く。

伍右衛門に導かれるまま、いつか五助は城に近い林の中に立っていた。伍右衛門はうそをつかぬ、ということが次第に現実感となつて、うれしさ、というより空恐しさで足がまるで地につかぬ。

「伍、伍右衛門、どうするのじゃ」

ガチガチ鳴りそうな歯を食いしばったが、五助の声はふるえていた。

「だらしがないぞ五助、ほれ、姫さまはあの茂みじゃ。俺は向こうで首尾を待つぞ」

五助の目から、フィと伍右衛門は消えた。

あとは、茂みに映えかえる月ばかりが青い。

「クッ」

と、茂みの影で、泣くような声がした。

声の方へ、五助はおそろおそろ首をのぼして見た。

伍右衛門の言ったように、月明かりの中に白いうちかけが浮かび、その人は五助の気配にキッと顔を上げた。

「げっ、ひっ、姫さまっ！」

五助は仰天した。あろうことか、鶴姫の美しい顔の下面に、頬をくびらせて白布の猿轡が噛まされているのを見たからである。

更に、細い立木に寄りかかった身は、黒い太綱で幾重にもゆわかれて、ひょうたんのように締めくくられていた。

「おっ、おのれっ、キエ——！」

五助は激怒に狂って、腰の陣太刀をひらめかせた。

「伍右衛門っ、伍右衛門っ！ 出てこいっ」
五助は狂人となって、月のまばらな林の中

を駆けめぐっていた。

真砂城は遂に落城した。城兵決死の奮戦にかかわらず、三木の軍勢二千余は、浮き足だった秀吉軍の砦を破ると、怒濤のように城内に乱入した。

秀吉勢生き残りの百余人は、血路を斬り開き、斬り開き、命からがらに敗走した。

五助は辛くも敗走軍の中に混って、息のつくかぎり山を越え、野を馳けていた。

まる一日、敗走をつづけた残兵は、はるか向かうかなたから、ひょうたんを赤地に染め抜いた秀吉の本軍がこちらに威風堂々と進軍してくるさまをみて、遂に力尽きた。

再 会

真砂城の戦傷者は尼ガ崎へ護送され、元気な兵は新たにそれぞれ本軍の各所に配属された。

五助はここで、念願の戦闘隊に加わる事が出来た。

秀吉勢一万余は再び態勢をととのえ、と、しゆくしゆく真砂城に向かって進軍した。再び、五助の前に真砂城が迫ってくる。五助は血ぶるいに似たふるえが、からだを駆けめぐるのを覚えていた。

「五助、五助」

きいたような声に、五助が思わずふりむくと、おどろいたことに、後ろに伍右衛門の顔が笑っていた。

「よく生きていたな」

「おまえもな」

一度、合戦を経験して、五助の心は自分でもおどろくばかりに大人びていた。この卑屈な小男を、むしろ哀れむようなまなざしで笑みかえしていた。

「遂に落ちたな」

擲擧するような、相もかわらぬ金壺まなこである。

「鶴姫はいまごろどうしているかな、どうせこうなるなら、おまえ、惜しいことをしたもんじゃない」

「哀れな、城とともに、ご自害なさったことじゃろうな」

五助は仕方なく答えた。事実、惜しいことをした、という感情は、三木の軍勢が真砂城

に押し寄せた時からずっと、五助の胸をさいなみつつけていた。

美しい人は死んだ、という感傷が、五助がいつ命を捨ててもよいぞ、という捨て鉢の力ともなっていた。

「くっくくくくく」

みると、伍右衛門は唇の端に泡して、必死に笑いをこらえている。五助は自分の夢を汚された思いで、そっぽをむいた。

「なんのなんの、あのおなごはおのれの武器



を知っているわい、なんで死んだりするもんか、いまごろは三木の総大将に抱かれて、夜ともなれば一つ寝床よ」

五助は、もう伍右衛門とは口もきくまいと思つた。

「さて、明日はまたいくさじゃ、というてこの寒空に死にとうないのう」

五助は終始、黙殺した。

「風邪をひく」

伍右衛門の話はまだまだつづきそうだ。

血 戦

鶴姫の魂に引かれるかのように、五助はいつしか先鋒の槍隊の中に伍していた。

槍隊は城を討って出た三木勢の先鋒と、相峙したまま互いに闘いの声をあげるばかりで、しばし一番槍の声も聞かれなかった。

五助は目の前が一瞬暗くなったように感じた。意志に反して、足は釘づけとなつて動かぬ。目にうつるものは、五助の恐怖に突き刺さるような、きらめき光る槍襖の波だ。

そのうち、三木勢の豪勇が一人、獣のような声をあげて突き進んできた。

たちまち、秀吉の槍隊はその男を押し包み突き伏せる。が、槍隊の態勢はくずれた。ガアッ、という海鳴りに似た声とともに、あと

は凄惨な死闘となつた。

五助はただ夢中で太刀をふりまわした。太刀が、あまりにも重い、すぐ息が切れた。

何かに足をすくわれて、五助はグッと仰向けさまにころがった。

(死ぬっ) 五助の目に、大木のように見える槍の穂先が繰り出されるのがうつった。

獣の魂切る声が起り、再び目を開いた五助の前で、槍を手にした男が血しぶきあげて倒れるのを見た。

「五助っ、起て、ついてこい！」

そこに、血刀をさげた伍右衛門が立っていた。

「ウォー——ッ！」

五助は目のあたりに見た。彼の前を疾走する伍右衛門が血刀をふるうたびに、敵兵はまるで大根のようになぎ倒されてゆく。

真ん中の死闘をかこむように、まるでいたちごっこのように、円を描いて走りまわっている大群がある。彼らは彼我の見境もなく、ただ恐怖に追いたてられて、わけもなく疾走する群勢である。それは、いつの合戦でも見られる悲しい光景だった。

ようやくその大群にたどりついた五助と伍右衛門は、群衆と伍してわけもなく走りつづけていた。

——合戦はいつしか終つていった。

大盗の誕生

夜更けた城内は、傷を受けた者の呻き声が、苗代の蛙のように伝わってくる。

五助は憑かれたもののように、黙々と伍右衛門の後にしたがった。昼間の合戦以来、五助の伍右衛門に対する感情は一変してしまつた。小男が、とてつもない偉大な人物に見えるだしていた。

「いいかい」

伍右衛門がスルスルと松の木を昇ると、そこは本丸の瓦の上だった。

つづいて五助が伍右衛門を真似る。

「やっぱり、俺の見込んだだけはある」

「何か言つたか」

「いや、ひとり言だ」

伍右衛門は次の作業にとりかかった。

瓦をはずし、壁土を切りとり、板をはぐる。

息ひとつ切らさず、冷静に運ぶ手際に、五助は目を見張つた。

ポツカリ開いた穴をくぐると、そこはもう天井裏である。

伍右衛門は息をつめて、しばらく気配をうかがっていたが、やがて、棟板を這つて歩く。まるで蜘蛛だ。五助がつづく。

ピタリ、止まったところから錐を出してもむ。

小さな穴が開いて、ポチ、と部屋の灯りがうつった。

伍右衛門は平蜘蛛のようになって、部屋のようすをうかがい見ていたが、顔をあげると、

「くっくくくく」

声をころして、咽喉の奥で笑った。

「五助、見てみろ、いいながめだ」

五助はいわれるままに、そっと目をつけてみた。

真っ赤な、フカフカした夜具がまず目に入った。夜具の隅に、白くうごめくものが目についた時、五助は危うくあげそうになった声を吞んだ。

鶴姫だった。五助の夢に死んだはずの鶴姫が、白い肉塊となってそこに横たわっていた。ねり絹のような白い肌に、真紅の紐が幾条にもからみつき、伏した背に高々と白魚の指が空しいこぶしをつくっている。

猿轡をされているのであろう、わずかに見える横顔に、白布がかたく食いいていた。

白いけにえを前にして、膳を傍に手酌をくんでいる男がいる。常さえ皺深い顔を一そく皺に埋めて、戦勝と、これから味わう肉の饗宴に酔いしれているのは、まがうかたなく

猿面冠者、木下秀吉その人である。

ときどき、鶴姫のからだに妖しくくねるのは、縛しめのためばかりではないことくらいは、五助の目にもわかるようだった。

頭をあげて――、五助はしばし黙然と暗の中で動かなかった。

「くっくくく、どうした、五助。これから

がおもしろいんじゃないぞ」

伍右衛門の声が、チクリと刺した。

晩秋である。月光が凍るように降りそそいでいる。

いつかの林の中を、二つの影がゆっくりと歩を運び、唄うような伍右衛門の声だけがつぶやきもらす。

「……自害したはずの鶴姫が、昨日は三木の大將児島将元の女で、今宵は猿面と一つ寝床かい、さてさて心の優しいおなじやのう。

猿もまたあっぱれの侍大將。くっくく」

五助は黙ったままだ。

「これや寒い。五助、ぼつぼつ戻ろうかい」

伍右衛門はクルリと背を向けた。

「待て、伍右衛門。頼みじゃ」

月灯りに、五助の顔は先ほどとはうってかわって明かるい。

「なんじゃい、なんのことじゃい」

伍右衛門の金壺まなこが、シュツと細る。

「頼みじゃ、俺をどこでもよい、連れていてくれ。お前の言うとおりに、俺は盗賊の頭になってやるぞ」

「おおおう、そうかい、そうかい」

金壺まなこはますます細って、糸のような線となった。

「ちくしょう！ 鶴姫の馬鹿野郎！ 猿の盗っ人野郎！ 俺は日本一の大泥棒になってやるぞ――！」

五助の声は、林を駆け、森を抜けて消えていった。

後年、豊臣秀吉の天下平定後、石川五右衛門と名を改めた五助が、京都伏見城に忍んだところを秀吉の家臣に捕らえられ、四条河原で釜うでの刑に処せられた話はあまりにも有名である。

その折、五右衛門は息子の伍一を高々と差し上げ「石川や……」のうたを詠んだというのは大うそだろうが、妻子をもうけ、最後まで息子の命を救おうとしたあたり、やはり霧の伍右衛門同様、遂に「鬼」にはなりきれなかったとみえる。

寄稿作品

ご紹介と

短評の欄



「宿命」……………黒田 寿

▼脱走に成功した女死刑囚が、次々と自分の最も忌み嫌う形で死んでゆく、といった着想はおもしろい。が文章の荒さにご都合主義を感じさせるストーリーはとうにもいたしかたない。(B)

「ねらわれた女」……………(大阪) 高川 吉春

▼犯罪臭の強いもの、それもクソリアルなものではなく避けた。特にストーリーといったものもないので、なまなましい印象だけが残る。(B)

「ハレムの地下牢」……………(東京) 宮本 史朗

▼せっかくの着想ながら、もっと小説として読ませるところがほしい。女を責める方法、といった内容なので、ハレムも

意味がない。

「白桜寮の日々」……………(鹿児島) 赤木 泰 (C)

▼戦時中の動員学徒寮の私刑。むずかしい話だがSM小説も単に残酷だけでは通用しなくなった。女性の登場しないのはまだしも救いとはなるものの、表現が露骨すぎる。(B)

「夢幻荘の虹子」……………(和歌山) 小早川 夢楽

▼文章を弄しすぎたきらいがあり、ために構成が平単になり、パンチがきかなくなつた。全体に年寄りのくりごめいた作品になっている。(B)

「祇園無情」……………(大阪) 岡 良一

▼文章がうまい。それに適当なストーリーを盛って秀作といえよう。しかし、あまりにも特定の社会を描いたことが難点となつてしまった。思い切つて時代ものに書きかえればなんとかなりそう。次作が待たれる。(A)

「奥さま、おみあしを」……………(横浜) 玉置 順

▼さわりの場面に力が入りすぎて、主人公や杏子の生活がおざなりである。これはなんでもないようだが、内容をおもしろくするためには絶対必要条件。(C)

「二十四時間」……………(東京) 植島 源人

▼ボクシングをあつかったもので興味を

引かれたが、SM的なところは感じられない。作者にはお気の毒だがピントはずれの憾あり。(C)

「墓石の下で」……………(東京) 明石 洋

▼大自然と詩、そこへ一ぶう変わった人たちが、はちよつと惹きつける。作者の意図はわかるが、主人公をもっと徹底したニヒリストにうたえば作品が引きしまつたろう。私の弱さが作品の弱さになっている。(B)

「パンドラの筐」……………(京都) 中畑 一声

▼内容から題名がかけ離れている。責めに終始してストーリーも単調である。きわどいところは関節描写を勉強してほしい。文章ももたもたしている。(C)

「行く人・来る人」……………(東京) 新寺 無人

▼文章に妙な味わいがある。登場する女性が無か醜悪な年増を感じさせるのはどうしたわけか、惜しい。(B)

■AⅡ水準作。または書き直せば掲載可能なもの。出来るかぎり掲載したい。

■BⅡ掲載にはいま一步というところ、惜しいとは思いますが。

■CⅡ本誌に不向きなもの、直しようのない作品。まず、没と思って下さい。

復讐にこめた女のサディズム

泉 東 安

1

松本清張の推理小説の数ある中で、本人が自薦してやまぬ傑作の一つに『霧の旗』がある。『霧の旗』は、読み方によっては推理小説ではないかもしれない。推理小説というより、女の酷薄さを冷酷無残にあばき出した小説、ということになるのかもしれない。女、それも処女の冷酷さである。処女がその冷酷無残さを武器に、氷のような冷静な計画でもって、徹底的な復讐をひとりの男に加える。たんとんとして、臨床医のように松本清張は筆を進めてゆく。感情はすいぶん殺してある。経過だけを報告してある。そして結果と。

復讐を扱った小説はすい分と多い。始祖としても有名な『モンテクリスト伯』などをあげなくても、復讐ほど大きな人間関係にあつてのドラマはない。従って復讐小説は掃いて捨てるほどに多い。『仮名手本忠臣蔵』『鏡山競艶録』とあげてみれば、歌舞伎の世界も多く復讐物で満たされていることがわかる。『霧の旗』にはガラスのように鋭く、氷のように冷たい、女の復讐のてん末が語られている。女は見事に目的を遂げる。男は地位も名誉も、家庭も恋人もまっ殺される。生きながらの煉獄に突き落とされる。こんな苛酷な復讐があるだろうか。現代社会で生きる者たちにとって、これは復讐の一つの極限を突き

つめた、一点の妥協もない、本当に非情なドラマである。そして同時に、そこに女がある。女のひたむきに保守的な、ひたすら我が感情だけに忠実な、絶対に妥協を許さぬあの処女のエゴイズムが、ちょうどカトリシズムの戒律のように厳しい処女のエゴイズムが、冷たい冷たい炎で燃えるのである。

『霧の旗』はその意味で女性小説と言えるのかもしれない。井上靖イズムの、あの甘やかなロマンチシズムの旋律の裏で、突如としてまじるキーンと耳をつんざく、突きさすような疳高なオクターブが、『霧の旗』で松本清張によって描かれた。これは女性への非難でもない。批評でもない。報告である。それ

をそれと知りながら、女性の酷薄さを報告しながら、その徹底無残ぶりに、ひそかに崇敬の念をさえまじえながら、松本清張の態度は、あくまでリアリストのそれである。崇敬と讚美を筆の奥で押し殺し、松本清張は一人の女性に関する報告書を読者に提供してくれた。

「わたしが最も愛するもの」として、清張自身が『霧の旗』を推す心境の最たるものは、彼がだれよりもフェミニストであるからだ。フェミニストでなければ、どうして苛酷な、こんなすさまじい女のエゴイズムがえがけよう。

2

柳田桐子という、会社のタイピストをしている二十歳の女性が、大塚欽三という日本でも一流中の一流の弁護士に復讐をする物語り、『霧の旗』の内容を追いつながら、その異様なドラマを紹介しよう。

× ×

大塚欽三弁護士は、東京・丸の内に事務所を持つ第一級の弁護士である。スケジュールに追われて毎日息もつかせぬ忙しさである。だが、それだけのキャリアと実力を持った彼

は、その激務のかたわら、人生をエンジョイするだけの気分的な余裕があった。河野徑子との交際も、そうした余裕から産まれた副産物であったのかもしれない。

その日の午後二時に、大塚欽三は河野徑子と川奈でゴルフをする約束であった。仕事を早々に切り上げて、すぐにも川奈にとんでゆくつもりであった。だが判決を間近に控えた今受持の重大事件のなりゆきが、彼の脳裏からは去らない。余裕を持つ一方、彼は仕事の鬼であった。何事もチャランポランに済ますことはできない性格であった。もはや五二歳、血色のいいふくれたほおと、たるんで二重にくくれたあご。ともかくそれだけの貫禄が身に備わっていた。

だが、彼は河野徑子との約束が気になった。そこへ客がひとり。大事な客なので、十分にこしを落ちつけた話をしなければならぬ。時計ばかりが気になる。そのうち、やっと事情を察して客は立ち上がった。大塚欽三は客を送り出しホッとした。そこに飛びこみの依頼人としてやってきたのが本編の主人公、柳田桐子であった。桐子は九州のK市から、大塚弁護士の高名を慕って、はるばるとやって

きたのだった。今獄舎に、殺人犯という無実の罪でつながれているただひとりの兄を、桐子はどうしても救いたかった。彼女は命がけであった。必死であった。兄を救える人は、日本中で大塚弁護士以外にはない、彼女は信じていた。

3

最初事務員の奥村が応待に出て、桐子から用向きのことを聞き、その上でことわった。それにはそれだけの理由があった。一流の弁護士を訪問するのに、桐子は前もっての連絡は何もしてなかった。だれからの紹介状をも持っていなかった。それに金もあまりないしかなかった。奥村が彼女に弁護料の話をした。

東京から九州に出張では、飛行機で往復の旅費、それから滞在費。もちろん一流旅館の計算で。そのほかに調査費、記録などの騰料の実費。第一審が地方裁判所で始まった刑事公判事件の弁護料は、大塚先生クラスだとまず五十万円以上。また出張のときは旅費のほかに、一日八千円見当の日当をいただく。そして事件が成功したら特別に謝金が一——二審、三審は別として、とにかく一審の判決ま

でに要する費用は概算して八十万円位——奥村の説明で桐子はびっくりした。

しかしたじろがなかった。三分の一に負けてくれといって食い下がった。奥村がそれを断わったのも以上の通り当然のことであったが、それ以上に桐子は強引であった。奥村は持てあました格好でどうしたものかと大塚欽三にその旨を取り継いだ。大塚は時計を気にしながらも、ともかく桐子と会ってみた。初めから断わるつもりであった。

「ぼくのところに頼みにこられたのは？」

「先生が日本で一流の弁護士さんだと聞いたからです」

「九州にも、いい弁護士さんが居るはずですよ」

「先生でなければ、兄は救えないと思ったからです」

「ほう、それほどむずかしい事件ですか」

「兄が強盗殺人事件の犯人にされてしまったのです——むろん私は兄の無罪を信じています。でもあちらの弁護士さんは、無罪にもってゆくのはむずかしいだろうとおっしゃってるんです。事件の話を聞いていただけませんか」

だが、大塚欽三は、河野徑子との約束の時にせかれるまま、桐子の依頼を断わった。

「規定の弁護士料が払えないからお断わりなさるんですか」

きつい反問だった。大塚もはつきりと

「それも多少はあります」

ついに桐子はあきらめた。帰りがけにつぶやいた。

「先生、兄は死刑になるかわかりません」

4

柳田桐子は小さい時に、よく男の子とけんかをして相手を泣かせた。シンが強い強情な子であった。いったん断わられると、再びそれを押し返すことのできないタチだった。哀願することが、みじめできらいなのだ。会社でも決して上役や男の社員に甘えはしなかった。頼んで拒絶されたら、二度と口に出すことができなかった。

だから、大塚欽三にあれだけ頼んで断わられると、もう二度とは頼まないつもりで、九州までの帰りの切符も買ってしまった。その彼女が、しかし結局はその屈辱に耐えて、再び大塚弁護士の事務所に電話をしたのは、よ

くせきのことであったと言わねばなるまい。この時大塚は、河野徑子と川奈でゴルフをやっている留守だった。その間、六時間ほどしてまた電話をかけたが、結局は無駄だった。大塚は留守で奥村が電話口に出ていた。桐子は大きな声で言った。

「兄は助からないかもわかりません。八十万円あったら助かったかもしれませんが、わたしたちになかったのが、不幸でした。貧乏人には、裁判にも絶望しなければならぬことが、よくわかりましたわ。どうもご無理を申し上げて済みませんでした。もう二度と、お願いすることは無いと思います」

これが事件の発端であった。大塚欽三は決して話のわからない男ではなかった。若いころには、手弁当で一銭の金にもならない事件を買って出て、不利な被告のために奔走した。それだけの正義感と情熱の持主でもあった。

だが、大塚と桐子の出会いは、あまりにもタイミングが悪かった。運命のいたずらとでもいったらよからうが、大塚は事実、若いころと違って非常に忙しい身の上であった。一だれかれの頼みごとを取り上げてやるわけにはいかなかった。その上、いくら兄のため

に思い詰めて、とはいふものの、桐子の依頼は考えようによつては虫が良すぎた。とはいふものの、もし、その時、河野径子との約束の時間が迫っていなかったなら、大塚は桐子の話を得心のゆくまで聞いてやったに違いない。

九州K市での強盗殺人事件のてん末と、桐子の兄が犯人に仕立てられてしまった詳しいいきさつとを、そして、そこに少しでも何らかのひらめきでもあれば、大塚は報酬を度外視して事件を引き受けたかもしれない。また事実、いったん事件の詳細を聞いたとすると、それを断わりきれない純情さがあることを、大塚は自分で意識していたからこそ、桐子の依頼を話を聞く前に、先に断わつたのだ。

あつた。が、大塚欽三との交際は少女のように真剣な気持ちからであつた。彼女も深く大塚を愛していた。だが河野径子には大塚に隠しているただ一つの秘密があつた。秘密というよりあやまちであつた。彼女が経営しているレストランの給仕頭、杉浦健次との情事がそれであつた。彼女は杉浦を愛したのではなかつた。つい遇然の成行きからであつた。だが杉浦は、しっかりと径子にくつついて、彼女をあきらめようとはしなかつた。彼は彼女に径子を愛し、それだけ大塚弁護士が存在には嫉妬した。径子は悩んだ。何とかして杉浦をば身辺から追い払いたかつたのだ。

河野径子は銀座で一流のレストランを経営していた。堂々たるハイクラスの女実業家で

5

杉浦の姉が新宿で三流のバーを経営していた。「海草」というバーであつた。そのバーに、九州から出てきたという、シンの強そうな女の子が勤めていた。柳田桐子であつた。兄は無実の罪のまま、獄中で病死したのだつた。何を思つたのか桐子は、今までの会社をやめ、上京し「海草」で女給として働いた。「海草」にはマダム、弟、杉浦健次がちよいちよい仲間を連れて飲みに来る。或る日彼は思いきつて大塚弁護士に径子とのことで電話をかけようとする。ダイヤルを回すのを頼ま

れたのが柳田桐子だつた。杉浦は途中で思い直して電話を切らせる。だが、桐子は、頼まれたダイヤルナンバーにはつきりとおぼえがあつた。それこそ大塚欽三のところの電話番号ではなかつたか。大塚とどういふ関係があるのだろうか。彼女は杉浦に深い興味を持った。

6

桐子はそれから絶えずつきまといつて杉浦の行動を監視した。或る日、杉浦の車をつけて小さな普通の家の前まで行つた。桐子の頭に瞬間にひらめくものがあつた。彼が愛人とひそかにあいびきをもるための家ではないかと思つたのである。杉浦がはいっていったあと彼女はその家の前で、監視を続けた。そこへ中年の美しい女が自動車で乗りつけてきた。女が、家にはいつていった後、桐子はそつと玄関口に近づいた。その時、アワを食つたように、今はいったばかりの女が飛び出してきて、桐子とぶつかつた。女は桐子を見ると叫んだ。

「わたしはやつたものではありません」

杉浦健次は殺されていたのだ。女は、自分が河野径子であることを名乗って、柳田桐子

に無実であることの証人になってくれと頼んだ。とっさのことである。桐子は承諾する。だが桐子はひとりだけ大胆にも現場に引き返す。彼女は種々の事情から、河野徑子と大塚欽三との仲をさとったのだ。桐子は心に青い炎を燃やしていた。徑子が無実であるとの証人になるどころか、逆の工作をする。すなわち、現場に引き返して、犯人が落としていったものと思われるライターを隠して、徑子が落としていった女物の手袋を、杉浦の死体のそばに置いた。恐るべき偽装である。

河野徑子は当然重要参考人として喚問され逮捕された。

「とにかく柳田桐子さんという人に聞いて下さい。あの人なら必ずわたしの無罪を証明してくれます」

河野徑子は係官に訴えた。それに対して柳田桐子はそれを全面的に否定した。

「わたしは、河野徑子さんなどという人を、聞いたことも見たこともありません。また、その晩、そのような場所に行ったこともありません」

事件は大きく新聞に報道された。何しろ被疑者の河野徑子が銀座で有名なレストランの

女主人というだけでなく、一流の名士大塚弁護士の名がクローズアップされたからだ。

大塚欽三は、思わぬスキャンダルのばくろで、世間から白い目で見られたがひるまなかつた。彼は徑子を深く愛し信じていたし、難事件に立ち向かう時には思わぬ闘志がわき起こるのだ。彼は徑子を救うためには、名声も地位も、経歴にも、何の未練もなかった。

大塚欽三は柳田桐子の供述書を何十回となく読み、そのうそを見抜いた。だがそれは直感だった。それが虚偽だという立証はなかった。

7

大塚は桐子をおぼえていた。九州から依頼に来たとき、心ならずも追い帰した相手の女だった。不思議なめぐりあわせはともかくとして、桐子は自分に復讐をしようとしているのだ、大塚は思った。しかしこんな迷惑な話ではなかった。何も彼が桐子の兄を直接に有罪にしたのではなかった。全く理不尽な女のうらみであった。

大塚は桐子を勤め先に尋ねた。そのころ桐子は「海草」から新宿裏通りの安バー「リヨ

ン」に籍を移していた。桐子は大塚を見ても驚かなかった。「お久し振りです、先生」といつてにこやかに応待した。話があるからと呼び出すと素直についてきた。

「頼むから検事の前で本当のことを言ってくれないか」

大塚は哀願の口調であったが、桐子はカマトト然として空とほけていた。

「真犯人は現場でライターを落としている。徑子はそれを見たという。が後で警官が来た時にはなかった。だれかが持ち去ったのだ。ぼくは君がそれを持っていると思っている」

「ライターなんかわたしが持っているわけがありません。どうぞ、徑子さんをお助けになりたいのなら、先生が勝手に働きになったらいいじゃありませんか」

とりつくしまもない、すげない返事だった。大塚欽三は、何にも仕事の手につかなくなつた。依頼者も減り事務所は荒廃していった。しかし大塚が欲しているものは桐子の正しい証言だった。物的証拠としてのライターを手に入れることであった。これ以外に徑子を救う道は絶対がない。彼が永年の経験と積み重ねた論理を振り回しても、ひとりの少女の証

言と証拠品には到底及ばなかった。

大塚は「リヨン」に通い詰めた。いちづに思い詰めていた。それを知ってか知らずか、桐子は大事な客として大塚を遇し、愛嬌を振りまいた。だれが見ても、熱い仲のおふたりのように思えた。マダムも、他の女給たちもそう思った。マダムは気をきかして、帰りは桐子を大塚といっしょに帰した。大塚は店にとつては大事なお得意様であつた。だが、外に出てふたりだけになると、桐子の態度は一変した。冷やかな冷たい女になった。

「頼む、ライターを出してくれないか」

大塚は繰り返して頼んだ。目や耳から血がふき出るような思いだった。

「知らないわ、そんなこと、みんな検事さんの前で言つたとおりですわ」

暗くて冷たい道だったが、大塚は、そこに土下座してでも桐子にすがりたかつた。

8

大塚欽三は連日連夜「リヨン」に通つた。

それは執念みtainなものであつた。桐子は店で会つとすっかり愛想がよく、アラ、先生、といつてはしなだれかかつたりして甘えた。

だが店を出るとその関係は一変した。

「どうかぼくを助けてくれ。本当のことを検事に言つてくれ。ライターも出してくれ。その代り、君の気持が済むようにどんなことでもする。地面にひざまずいて両手をついてもいい」

それに対して桐子はクスクスと笑つてとりあわなかつた。

「先生、先生がそんなことなさっちゃ、みつともないわ」

「いや、ぼくは、もう弁護士でも何でもなし、一個人として、君に土下座するだけだ」

そのあくる晩は雨が降つていた。リヨンにはいつていつた大塚のオーバーに雨滴が光つていた。桐子は「おかせをひきますわ、先生。さあ、すぐお脱ぎになつて」かいがいしくオーバーを脱がせ、ストープのそばに行つてかわかした。そういう優しさを見せる彼女が、店を一步出ると冷たい女になつた。大塚は傘もささずびしょぬれになつた。突然彼はぬかるみの上にすわつた。両手を前についた。

桐子は足もとにひざまずいている弁護士を上からながめた。

「桐子さん。頼む。この通りだ」

しばらく桐子はそうして立つたまま、大塚

の血の叫びを聞いていた。ついに根負けしたように大塚の手をとり、承諾の意を伝えた。

「検事さんの前で本当のことを言います。ライターもお返しします。先生、お立ちになつて」意外な申し出にあつた大塚は驚喜した。

約束に従つて大塚は翌日の深夜、教えられた彼女のアパートに行った。桐子は打つて変わったように如才なく、いそいそとして大塚を迎えた。ウィスキーを出してきたりした。

「約束通りライターも出します。でもそれを差し上げると、すぐにお帰りになるでしょ。もう少しここに居て」

桐子の大塚を見る目がうるんで見えた。

「先生、ねえ、お酔いになつて。ライターをお返しする前に、わたくしの言うことを聞いて。先生が好きだったの」

桐子はもだえるように言いながら、大塚を後のベッドに押し倒すようにした。

翌日、柳田桐子は検事あてに内容証明の手紙を送つた。それは大塚欽三を、徹底的に、社会から追放する致命傷を与えるものであつた。大塚は愛人を救けるためにしつこく桐子につきまとい、偽証を強要したというもので

あった。毎晩帰りを待ち伏せて、しまいはアパートにまで押し入って、偽証を迫った上、ベッドに押し倒して桐子のからだを暴力でけがした。自分の恥ではあるけれどあえてこのことを訴えるものです。と手紙には書いてあった。

これで大塚欽三は、残っていた社会的立場に完全なトドメを刺された。

『霧の旗』の結びの文章は、次のようにして終わっている。

『大塚欽三は煉獄に身を置いた。河野径子が閉じ込められている牢獄よりも、苛酷であった。東京から桐子の消息が絶えた』

9

松本清張がフェミニストであることは、冒頭の部分でも述べた。北国の海辺に立つて、暮れなずむ荒海のかたに目をやる板根禎子の、あの理智的な影像（ゼロの焦点）に女性像を夢みるフェミニスチックな清張のロマンチズムは、『霧の旗』の柳田桐子を見抜くことにおいて曇りがなかった。桐子の復讐は本来理不尽なものであった。いわれのない復讐であった。それだけに、大塚欽三には、く

やんでも怒ってもわめいても、追いつききれない無残な運命であった。女の計算に計算を重ねた計画的なうそと擬体は、何よりも強かった。五二歳の一流弁護士の運命が一介の小娘のうそと擬態であえなくついえた。

言いただけを言い、しただけをして、するりと身をかわして逃げこむ。そして、あの人があんなことをするんです、と、訴える女のうそに、世間は弱い。しかも、いっさいの因となった桐子のうらみは、女性の本質をえぐるような、一方的な、盲目的なうらみであった。ここではもうどんな理屈も通用はない。あるのは、女性側から見た、自己中心の感情だけである。

こういう女のエゴが、すさまじい残虐を發揮して際限がない。サジズムの極限に女のエゴが転化する微妙な接点がここにある。松本清張は、しかしこの女のエゴをとがめようとはしない。あこがれの念で見つめている。社会の支配層に対しては、あれほどの憎悪と抵抗と批判を示す清張が、女に対してだけは別扱いである。別扱いというより、理想とすらしている。柳田桐子こそ松本清張の描く、その理想の一つの典型なのであった。

■お知らせ

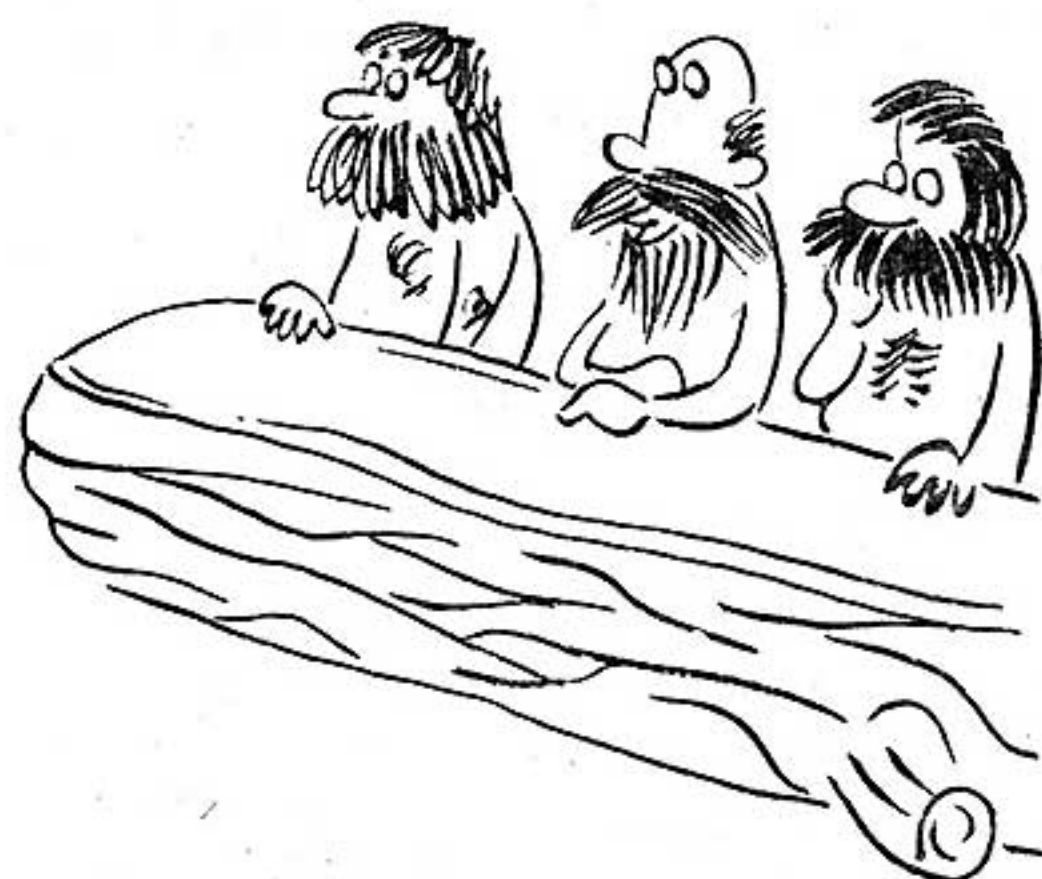
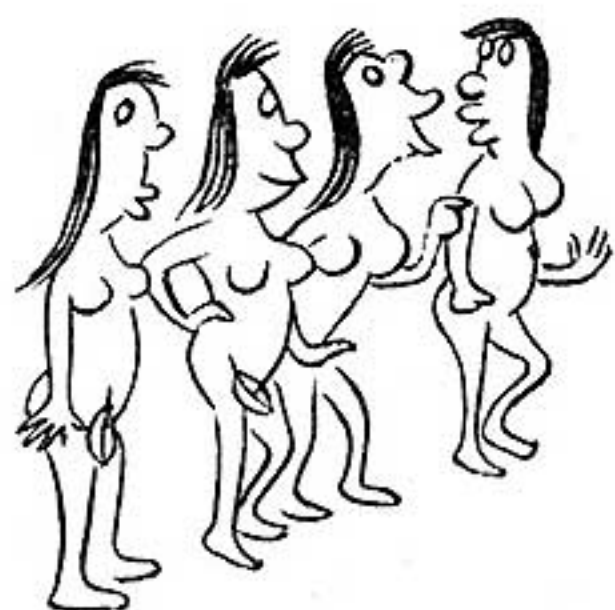


このところ、毎号連載のかたちで読者諸氏の人気者になっている「アラビアの城」の弓子さんは、あまりQ氏の訓練がきびしく、疲労はなほだしいので、この一カ月間、おやすみを頂くことになりました。

一カ月やすめば、きっと疲労も回復するとぞんじます。

十二月号では、また、さっそうと（？）登場し、いじめられることでしよう。いよいよ可憐な美しさをみせる弓子さんに、どうかご期待ください。

オシリコンクール



左次郎

妹オリリは
やさしい女



① 姉のオシシは
がめつい女

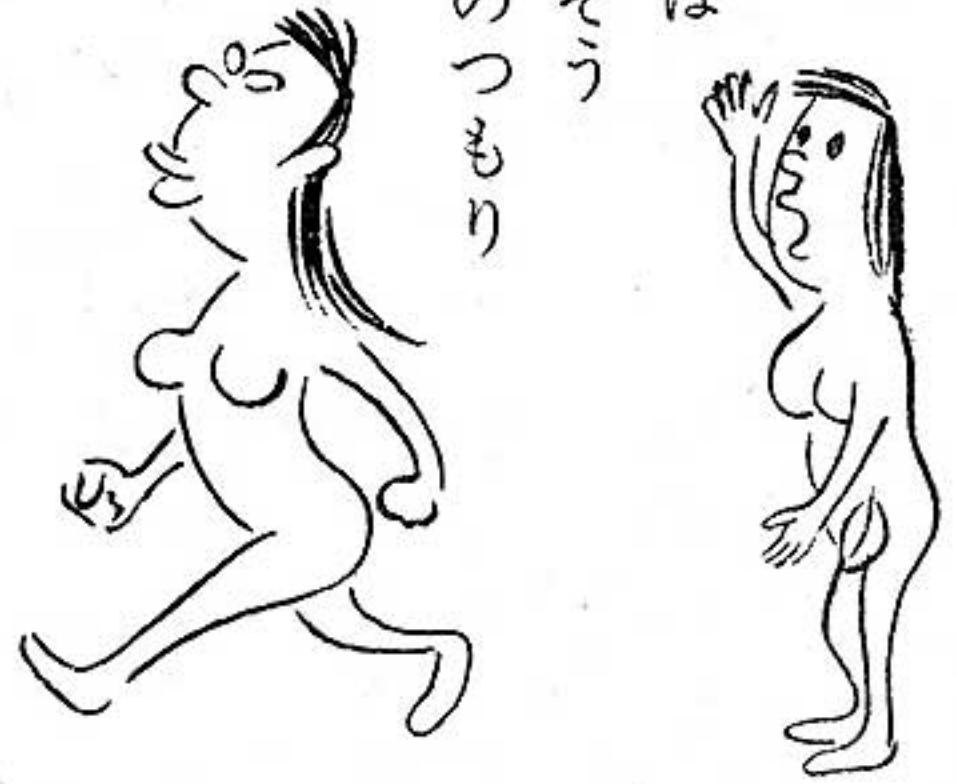
さあしっかり
もんでおくれ
私は一位に
なるんだよ



② 明日はいよいよ
オシリコンクール

③

往きは
さっそう
一位のつもり



④

かえり
がつくり
みごと
落選



⑤

おまえの
もみ方が
悪いからよー



⑥

そのバツに
こうしてくれる



⑦

おもしろそうだね



⑧

これはなかなか
おもしろい





⑨ 何が金もうけに

なることやら

がめつい
オシシは
大よろこび

⑪

ところがある日

なか
なか

みごとにオシリじゃ
コンクールに出なされや



毎日オシリを
たたかれる



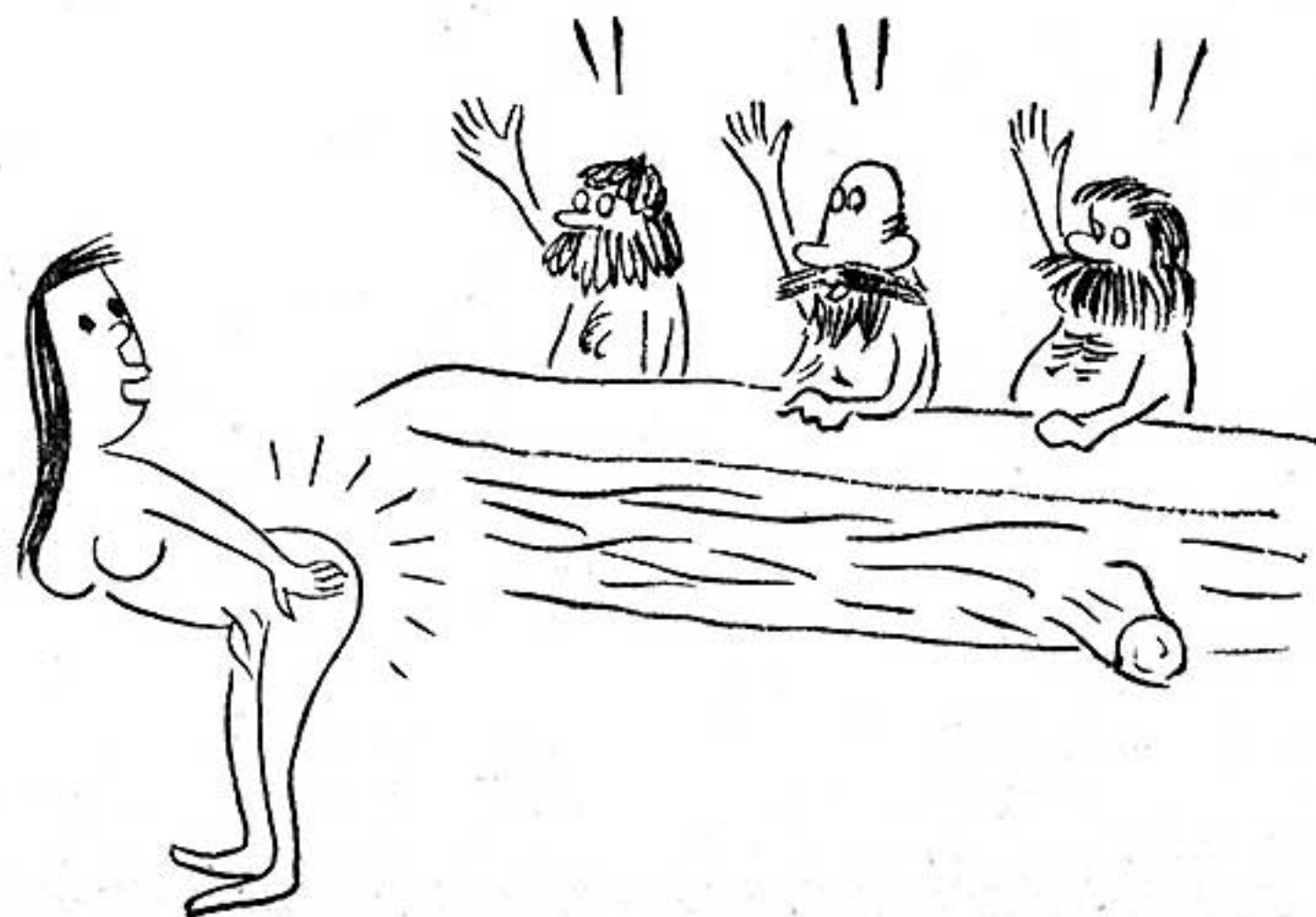
⑩

可哀そうなは
妹オリリ

⑫

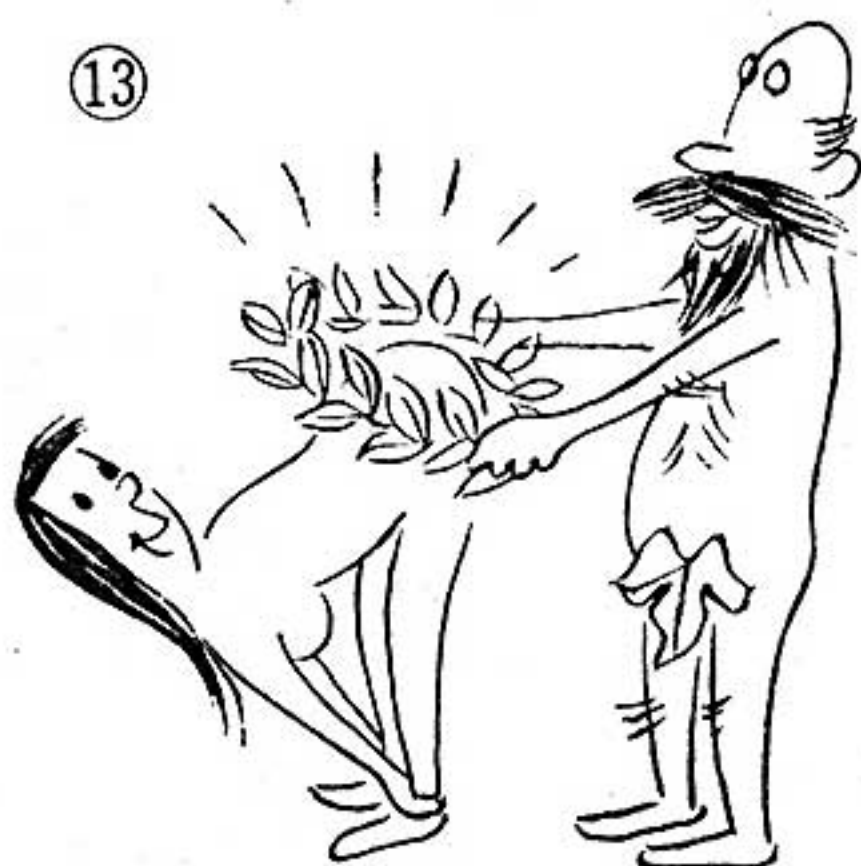
コンクールの長
シリミ氏に
すすめられ

オリリは
オシリコンクールへ



オリリは遂に
第一位まさに
その歴史的
しゅんかん

⑬



女たちの
間に
シリ打ちが
さかんになった



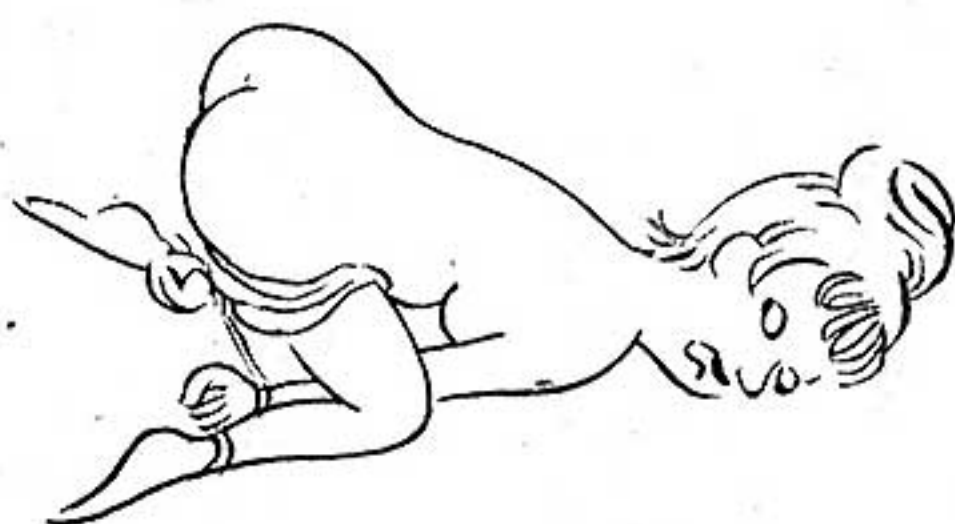
⑭

その評判はたちまちひろがり
コンクールにはもむより打つが勝ちと



⑮

そして現代
ジリを打ったり
打たれて
よろこぶ者の
出現となる





ほも紳士録⑪

ある女装者の夜々

かびや・かずひこ

秋吉 巒・絵

まだ合いのコートを着ていなければうすらさむい、三月のはじめころと憶えている。

ある日の夕刻ころ、私が、その日に原稿を届ける約束であった本郷湯島のSという出版社——「K」というSMの雑誌を出していた——へ行ったところ、その社の若い社長が待ちかまえていたように、私にむかって、

「K誌の読者だというひとが、ぜひあなたに会って話したいことがあるというから、これから会っていただきたい」

といい、事後承諾になって申しわけないが、多分大丈夫だろうと思って、承知してしまったから、とつけくわえた。

私は読者のそうした申しこしには、たいてい応ずる主義だし、つごうもわるくなかったので、即座に快諾した。

ものずきな社長氏も、いっしょに同道したいからというので、約

束の時間だという八時やや前、その読者の待っているという、浅草の「D」という天ぷら屋へ、ふたりででかけていった。

「D」は、むかし私が浅草をだいきで放浪していたころのなじみの家なので、すぐわかった。

その読者は、二階の個室の座敷に待っていた。S・Jと名乗った。五尺一、二寸と思える小づくりな、色白の、三十がらみ、すばらしく上物らしい服を着ていた。

かれは最初から、自分は女装愛好者である、と告白した。女装愛好者というと、知らぬひとは、常時クニャクニャした男を連想するかもしれないが、このS・Jは、じつにキビキビした言語動作である。

女装愛好という奇癖を、内にかくしもっているために、表面ことさらに、そのように「男性的」に、演技しているのかもしれないと、このとき私は思った。

同行してきたS社の社長は、三十分ほどすると、他に用事がある

からといって、中座した。

するとJは、はじめてほっとしたような顔で、

「興味的な傍観者がいては話しにくいので……」

といって、自分が女装すること
を好むようになった動機を、杯を
かたむけながら、つぎのように語
った。

2

Jは大阪に生まれた。

家業は呉服問屋だったので、幼
ないころから、紅っぽいハデな呉
服地などをしじゅうみていたため
か、こどもの時分から女のきもの
をきることは、すきだった。

ひとり子で、女きようだいはな
かったが、親戚のおなじとしごろ
ぐらいの女の児が、Jの家に遊び
にきたときなど、Jはその児にき
ものをぬがさせて、自分がそれを
きてみたりするのだ。

こどものこととて、そのことを
別にはずかしいなどと感じず、ひ
とまえても平気でやった。

そうしたJのようすを、おとな
たちが、

「ぼんぼん、よう似あうぜ。きれ
いや！ ええ女や——」

などとほめそやすと、Jは大得
意だった。いや、得意というより
も、もっと感覚的なところよさが
あった。

よく幼児がはだかになっている
とき、おとなから、「いいぼんぼ
んだこと！」とか「いいおちんち
んだねえ」などといわれたときに
感じるような、自己愛着的な快感
であろう。

が、小学校に行くようになって
からは、さすがにそうしたことに
羞恥を覚えはじめ、つとめて男の
友達と遊び、野球や相撲などをこ
のむようになった。

中学二年の学芸会ときだっ
た。Jらのクラスで、童話劇をや
ることになったが、そのときJは、
お姫さま役をふりあてられた。老
婆心ながら、若い読者のためにつ
けくわえておくが、そのころは、
男女共学ではなかったのである。

出演者の控え室で、Jがそのお
姫さまに扮したとき、周りにいた
友達が、

「えらい美しいぜ」

「おれ一ト目ほれや」
などとはやしたてた。

Jはなんともいえぬころよい
ショックを感じた。それははっき
りと性的な快感であった。

「これが女装に興味を覚えた契機
といえはいえましょう」

とJはいつている。

幼時のそれを、おぼろげな第一
の動機とすれば、このときが、み
ずから自覚した第二の動機ともい
えるだろう。

女装に興味を覚えはじめたとい
っても、それは内部に思っている
だけのことで、実験の機会はなか
ななかった。

ただ二、三度、家の女中が風呂
にはいつているすきに、そつと脱
衣所に忍びこんで、女中のぬいだ
きものを身につけてみたことがあ
った。そのさまを家人にみつから
ぬようにと気をくばる、スリリン

グなきもちも、わるくなかった。
異性にもひとなみの関心はもつ
ていた。どこの女学校の何子がき
れいだとか、何子が性的魅力があ
るとか、男の友達同士でしなさだ
めなどしあっていた。

中学をおわると、東京の大学(商
学部)にはいった。

生まれてはじめて、家人の眼の
ないひとりの生活をするようにな
ったJは、親から送られるポケッ
ト・マネーをさいて、女物の下着、
おしろい、べになどの化粧品類を
買いあつめはじめた。

いまのゲイ・ボーイたちは、デ
パートなどで、そうした女性用品
を買うのに、いささかの羞恥の表
情もない平然たる態度だときいて
いる。また、ふつうの若者でも、
半グレ・半イカレのようなもの
うちには、ちかごろ、ピンクのナ
イロン・パンティなどはいている
のを、銭湯などでみかけるが、か
れらはそのケ——オネエのケ——
がないだけに、おそらく平気で、
そうした女のパンティなど買うの

だろう。

が、女装のケを内にかくしもっているJにとって、女物の下着など買ひもとめることは、多分に勇気のいることだった。

「妹に頼まれたから」「郷里の女きょうだいに送ってやるので……」——そんな口実を店の店員にまえおきしながら、ようやくにしてそれらの品をもとめた。

夜、ドアをロックした自分の部屋にとじこめると、Jは、おおぶりのひげそり、鏡の前に立って、
ハ女装Vを開始するのだ。

いままでつけていた男臭いものは、すっかりぬぎすてて、まず女物のしたばきをはく。乳房パットをいれ、ブラジャーでしめる。

Jはふつうの男のように、ノドボトケの突起がなく、また体つきも、かれのいうところによれば、ウエストが細くしまつて、ヒップが広く、脚のすね毛などもほとんどないから、もうこれだけで、顔から下は女にみえる。

その女のような体つきを、陶然

と背をうつしヒップをうつしなどしながら、シユミーズをきる。

ついで、女のようにひぎをくずして、横っ坐りにすわりながら、顔の化粧である。

頭髮はカツラ下地ならぬ浴用タオルで、ぎゅっと蔽っておいて、おしろいを塗り、くちべにつける、等々……

こうしてハ女装Vをおわった自分の姿を、鏡のなかにうっとりともみいる。

もうこのときには、Jは完璧にエキサイトしている。いや、これだけでエジャクレートしてしまうことも、たびたびだった。

このうえには、艶麗な女のきもの（和服）をきてみたいのだが、それはふところがゆるさなかった。

女装前期ともいうべき時期であった。

ひとりだけで、みずからのハ女装Vを楽しむ——こうしたことが大学在学中、ずっとつづいた。

大学をおわるころ、太平洋戦争

がはじまった。Jは郷里の大阪に帰って、鉄鋼会社に就職した。

戦時中のこととて、かれの会社はいそがしかった。Jはキビキビとよく働いた。男姿のときのかれは、きわめてノーマルなのである。「仕事は仕事、女装の楽しみは楽しみと、はっきり分離できるので。それはいまでもかわりありません」

とJは語っている。

が、その女装の楽しみも、戦況が苛烈になるとともに、全然ご破算となった。

女自身ですら、だいじなよそいきの和服を切りさいて、改良衣と称する、モンペ様のものに仕立てなおしたり、またそうしないまでも、ピラピラと着ていられなかったのだから、男のJが、そうしたものを手にいれるすべはなかったのである。

家業の呉服物卸しも、経営が成りたたず、すでに閉店していた。

終戦後、二年ほどすぎたころ、

Jは両親のすすめで妻を迎えた。しかたなくではない、かれも相手を気にいって、結婚したのである。

Jの言によれば、妻はそのころ売りだしていた映画女優のY・Tに似た女である、ということだ。

かれは妻を愛し、夫婦生活はきわめて常態におこなわれていた。

そのころ、街には、戦前とおなじような、華麗な女の衣裳が、ふたたび、ぼつぼつと現われはじめていた。それらのものをみると、いままで抑え、堪えていた、Jの女装癖が、芽をふくように頭をもたげだしたことは、いうまでもなかった。

戦後まもなく、会社を辞めて、独立で金物の卸しを営んでいたJは、多少の金銭の融通もつくのをさいわい、自宅とは遠くはなれた市内のあるところに、別に室を借りるとともに、女髪のカツラや女のきものを一つ二つと買ひもとめては、その室に運んだ。

そして商売のひまをみては、妻

には所用をかこつけてそこへ行き、室内にとじこもって、カツラをつけ、女のきものをまとうなど、女装欲をみたしていた。

変装症の第一期ともいえる時期にはいったわけだ。

こうした時期が数年ほどもつづいたあるとき、Jは、ふとした機会から、市内の某所に女装愛好者ばかりのグループがあることを知った。

Jはさっそくそこを訪れ、そのグループに加えてもらうことになった。

グループの会員は、十人余の人数で、その半数以上が、女装者であり、他はそうした女装の男性を好愛する男だった。その後者のなかには、二人の中国人と一人の台湾人がまじっていた。

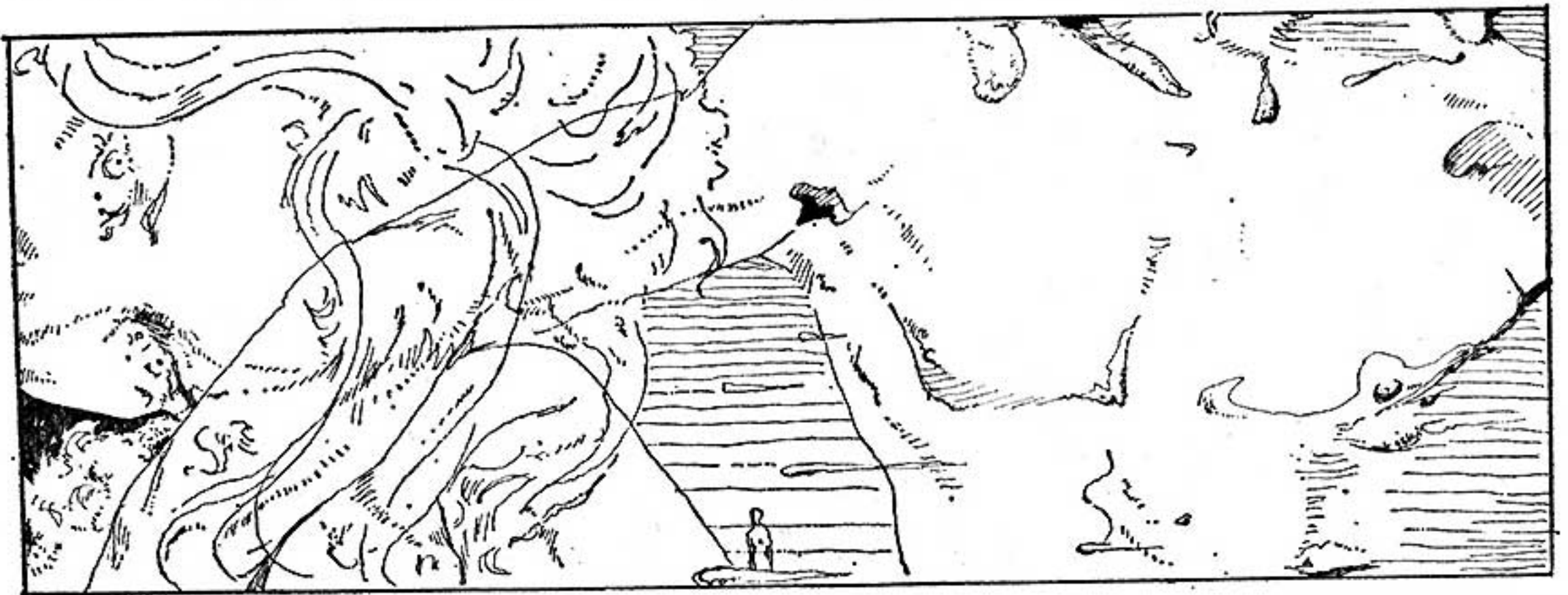
女装の男子を好む者は、もちろん、女性の代償としてかれらを愛するのではない。男であって男でなく、女であって女でない、女装の男の中性的な妖魅にひかれるのだと私は解する。

かつて私は、そうした趣味をもつ者の一人から、かれの蒐めた女装マニアの写真を、かずかず見せてもらったことがあった。その大半は、美々しく着飾った、単なる女装姿のもので、それらのものからは、私はさほど感興を覚えなかったが、そのなかに一枚、ゾロリと着けた女のきものの前をややだけ、怒張したPを覗かせている写真があつて、それをみたとき、私はそれをグロと思うよりも、むしろふしぎな魅縛と興奮を感じたものである。

そのときはじめて、私は、女装の男を好愛する男の心理が、わかったような気がした。

私の知るかぎり、こうした女装男子の愛好者は、自分も女装したいのであるが、容貌が女装にむかぬとか、その他いろいろの事由で、みずからはそれを断念し、女装者を好愛する側になったというのが、多いようである。

さて、Jの加わったグループでは、ときどき会員たちが、一定の



場所に集って、女装者は女装をして、かれらの好愛者側は男姿で、パーティを催したり、いろいろのプレイをおこなった。

パーティは、誰々の帰国送別会とか、誰々の来朝歓迎会だとか、杯をかたむけながら談笑したり、ダンスをしたりする。プレイでは「縛り」などもおこなった。もちろん、女装者が縛られる側となるわけだ。

Jは、その会合のさいに撮ったという写真を、数葉ほど、私にみせてくれた。芸者スタイルのもの、お姫さま姿のもの、カタギの夫人姿の崩れた格好のもの、縛られているもの等々であった。

そのいずれも、着けているものは、高価な衣裳であることが、写真のうえでもよくわかった。

「女装愛好は、ブルジョアでなければなれませんね。こうしたカツラのひとつひとつだって、一万五、六千円はするでしょうし……」

と私はいった。
すると、Jは、自分には中国人

の裕福なパトロンがいて、自分のポケット・マネーでは、高価な衣裳が買えない場合、そのパトロンが援助してくれるのだ、と語った。その中国人は、あるときの会合のさい、Jが町娘の姿になったとき、「とても可愛い！」といっ

て、Jに求愛し、Jもまたそれを受けて、歓を通ずるようになったということだ。

みずからの完全な女装姿を、それを愛好する同性に鑑賞してもらうとともに、相手と交歓する――変装症の第二期から第三期症状へと、きわめてスピーディに突入したといえよう。

Jは自分とおなじ女装者とも、歓をかわさぬわけではない。そしてその場合は、相手の女装者が自分よりも美しいと感じたときは、その愛撫態度はアクチブとなり、その逆のときには、パッシブなきもちになる、ということだ。

つまり、女装マニアのJのなかにも、Mの心理ばかりでなく、S的な心理もいくぶんは共棲してい

る。だから、あいての女装者が、自分よりも綺麗だと感じたとき、Jはあいての美を征服したい、というM的な欲望が起こる。そこで、そのあいてにたいして能動的になる。

また、女装した自分のほうが、あいての女装者よりも美しいと確信したとき、かれは、自分の美をあいてから征服されたい、破壊されたいという、M的な欲求が生じ、受動的なきもちになるのではなからうか。

ここらが、骨の髄まで受身化し、Mになっているエッフエミナチオやアンドロギニーの女装者とは、Jは異っているようだ。

4

「そんなわけで、大阪では女装欲をみたす機会はあるんですが、東京では、そんな場所はまるで知らないのです。ほくは商用で、東京へは月に数回くらい出張してきま

すし、出張期間がわりあい長いので、その間ときどきは、女装して

みたいと思ひまして……」

みずからの女装愛好の経歴を、ひととおり語りおわったあと、テキパキとした口調で、Jはそういつた。

その真剣な表情は、かれの女装欲がいかに熾烈であるかを、雄弁にものがたっていた。

Jはその後、たびたび私の家を訪ねてきた。かれのA商用Vはいかに忙しらしく、いつも車をとばしてやってきては、ものの三十分も話をする、待たしておいた車で帰っていった。

かれが大阪へ戻ったあと、私はかれに頼まれていた用件、(東京での女装の場所)について、問合わしてある先きから返事があったので、そのことを大阪のかれの家へ知らせた。

すると、その手紙は「名宛人、尋ね当たらず」の符箋がついて、返送されてきた。

そこでこんどは、Jの東京出張中の宿とかれから教えられてあるところへ、手紙した。が、その手

紙も、前記とおなじ符箋つきで、戻ってきた。

と、それから一週間ほどすると、Jがあいかわらずいそがしげなようすで、私の家へ訪ねてきた。

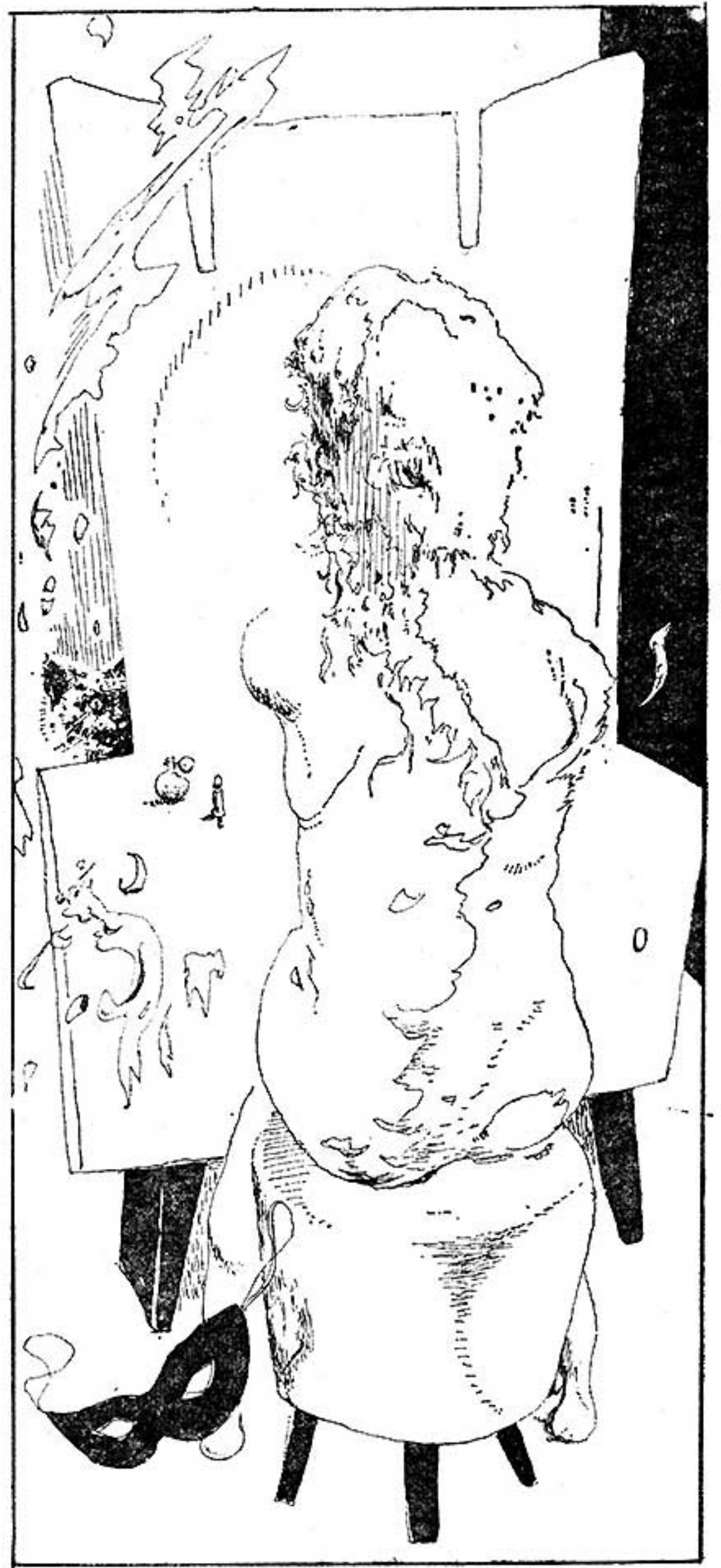
私はかれに手紙したことも、手紙が返送されたことも、わざといわなかった。これと似たようなことは、男色者からときどき経験していて、めずらしいことではないし、あいてに赤面させるのも、おとなげないと思ったからだ。

その夜、私は、銀座でJとおちあつて、本郷湯島の酒場「Y」へ、かれを同道した。

ママさん(?)のKは、私たちの希望で、島田髻の芸者姿――それもKごのみの新派スタイルともいふべき、スッキリした東京芸者の姿で、私たちの前に現われた。「美しいですなあ……。じつに美しい……」

Jは三嘆しながら、貪婪な目差して、しげしげとKの女装姿をみている。

KはKで、いかにもこの道の大



て、Jが——女装のJが、おきもののように、キチンとかしこまっていた。

深いえんじ色の地に乱菊をあしらった柄の、お召しのきものは、白地にすすきを描いた帯を締めていた。

頭には島田髷のカツラ。顔はおしろいを濃い目に刷き、眉毛は塗りつぶして、べつに描いていた。ほほには「含み」をいれてあるらしく、ふだんは削げているほほに、いくぶん丸みがついている。

両手は重ねて、ちょうど股間のうえあたりにおき、眼はじっと伏せたままだった。

私はひょいとかれの手に気がついた。筋ばったその手背は、なんとしても男の手であった。

そしてその手は、おそらく、興奮——おのが女装姿を私たちにみられていることの興奮のために、怒張しているであろう陽根を、おさえつけているように、私には感じられた。

いったん階下におりたKが、茶

先輩らしい、ヴェテランらしい、自信たっぷりのおちつきはあったさまだ。

私もJとは別の意味の職業的などんらんさで、このふたりのようすを観察しながら、またしても、Jの膏盲にはいった女装癖を思わざるを得なかった。

かねて私から照会しておいたごとく、Kは、Jの東京出張中の女装の場所として、自分の店の二階を提供すると快諾した。

あくる日、Jから速達の手紙が

きた。「今夜、＼＼＼の二階で女装するから、ぜひみていただきたい」というのである。

私はそのころ、女装マニアの女装姿を、K以外には目のあたりにみたことがなかった。その夜、私は＼＼＼にでかけた。

＼＼＼の階下には、趣味で女装マニアの研究をしているS氏も来合せていた。

「いまお化粧中ですよ。女装者は、化粧中の格好はだれにもみられないんです。ナルシシスが強い

から、自分ひとりきりで陶醉したいんでしょうね。かれらがひとにみせたいのは、完成した女装姿だけです」

天井を指差しながら、S氏はそういった。

二、三十分も待ったころ、Jの着付けを手伝っていたらしいKが二階からおりてきて、

「どうぞ上ってください」と私たち

私とS氏は二階に上った。つつきの六畳の座敷に、壁を背にし

盆をもって、ふたたび上ってきて、私たちの前に茶をおきながら、

「きれいでしよう」

といった。

「きれいですねえ、じつに……」

S氏はそう合点せずちをうちながら、私をかえりみた。

「ええ……」

と私はうなずいた。ほめてやらなきゃ……とは思いつつも、社交的辞礼のへたな私は、オセジがのどまででかかっている、でなかった。

「くるしいでしょう？」

私はべつのことを、Jにたずねていた。

「いいえ……」

とかれは細いつくり声でいったきり、黙っている。

なにかいえば、のぶとい男の地声がでて、せっかくの気分をこわすであろうとの、かれの心遣いかもしれない、と私は思った。

いつかJが、「女装は自分にとって夢なのです」といったことばを、私はおもいだした。

女装している間は、かれは夢の世界で遊んでいるわけなのだ。

△男Vという現実の世界から逃れて……。

夢はあくまで夢で、現実でなく

てもいいのだ。だから、かれは、女装の場合と、正常な男姿の場合とを、はっきり区別をつけているのかもしれない。

5

Jは、あいかわらず、東京への「出張」のたびに、私を訪ねてきた。あいかわらず、いそがしげにきて、いそがしげに話をして、いそがしげに帰っていった。

そうしたかれのようすに、私はひよいと考えたことがあった。もしや、かれはなにか秘密のしごと

をしているのではないかと。その「秘密のしごと」が、どんな性質のものかは想像がつかぬが、かれのようすからは、なにかそんなにおいが感じられた。

四、五年前の春ころ、と憶えている。「出張してきたが、ぜひこ

相談があるから、お目にかかりたい」という、連絡をうけて、私は、かれの指定してきた東京駅の名店街のなかの喫茶店で、かれと会った。

「Y」ではあまり金がかかりすぎるので、どこかほかに、女装するための家を一軒借りたいが、心当りはあるまいか——Jの用件というのは、そういうことであった。

その喫茶店で、歩きだしたら、Jがここもちビッコをひいているのに、私は気がついた。どうしたのかとたずねたところ、

「二、三日、大阪のグループでのプレイで、男三人から手足を縛られたうえ、三方攻めをやられてから、股のつけねが痛くて……」

とかれは答えた。

その後、私は、Jから頼まれた女装の場所としての家を、二、三さがしてやったが、前に手紙が返送された例もあるので、連絡のしようもなく、かれの訪ねてくるのを待っていた。

が、ひと月経っても、ふた月す

ぎても、かれは現われない。そして、それから一年ちかくも経ったころだろうか、私が外出した不在中の夜、かれがひょっこりと訪ねてきた。

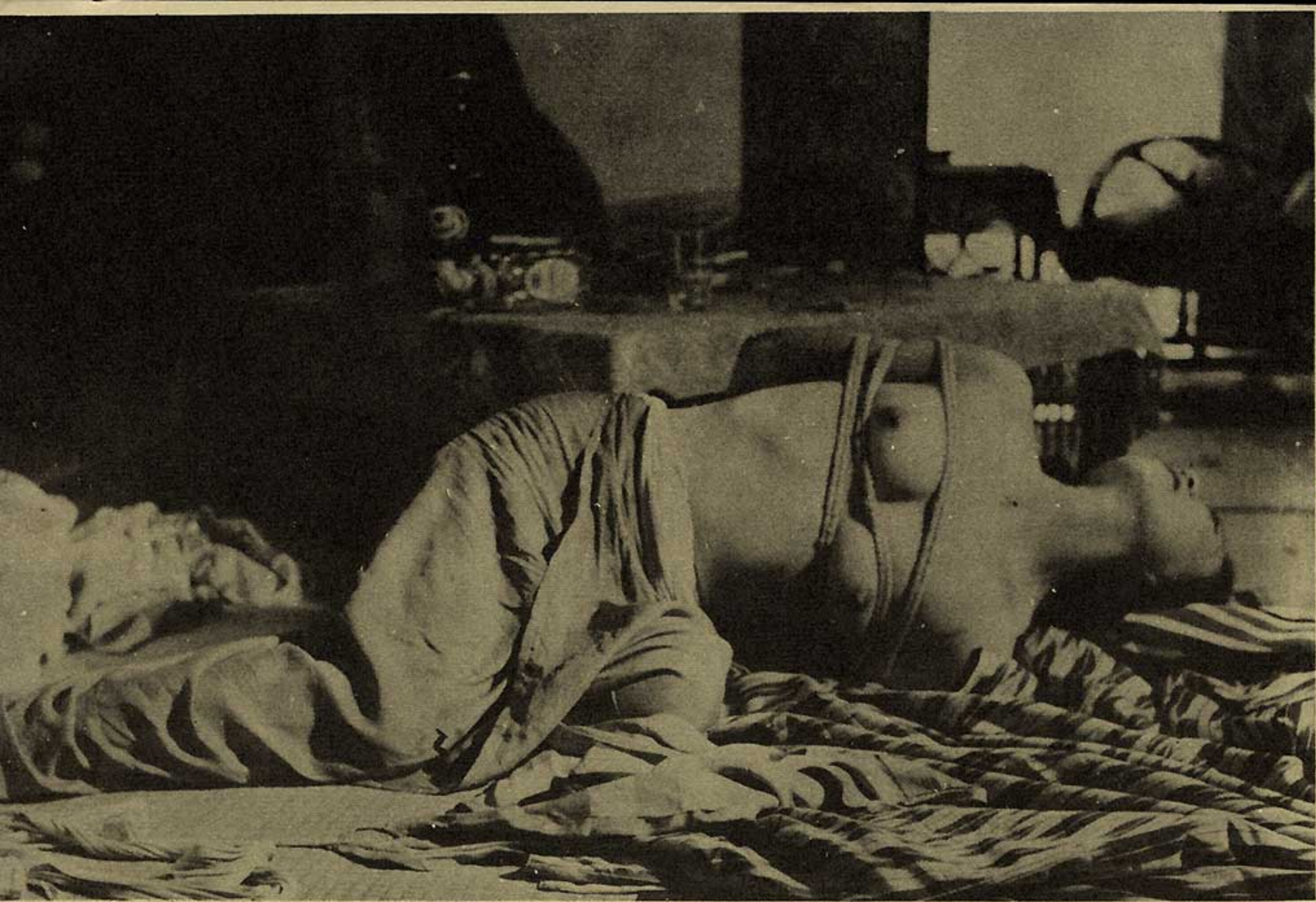
応待にでた妻の話によると、Jはめずらしく女装のまま——それも黒っぽい洋装の姿でやってきてあわただしく車で帰っていったという。別に用件もないふうであった、ということだった。

それを最後として、Jはパッタリと消息を絶ってしまった。もともとひとずての消息——Jと懇意にしていた女装趣味家のS氏の話では、かれはその後、女装のことが妻に知れたため、それから思うように女装もできず、夫婦仲もまづくなり、結局離婚した、ということである。S氏も、Jの「しごと」の正体は、ついにつかめなかったらしい。そしてその「しごと」も、なにかヒビがきたらしいふうであったとのことだ。

金井行雄作品集













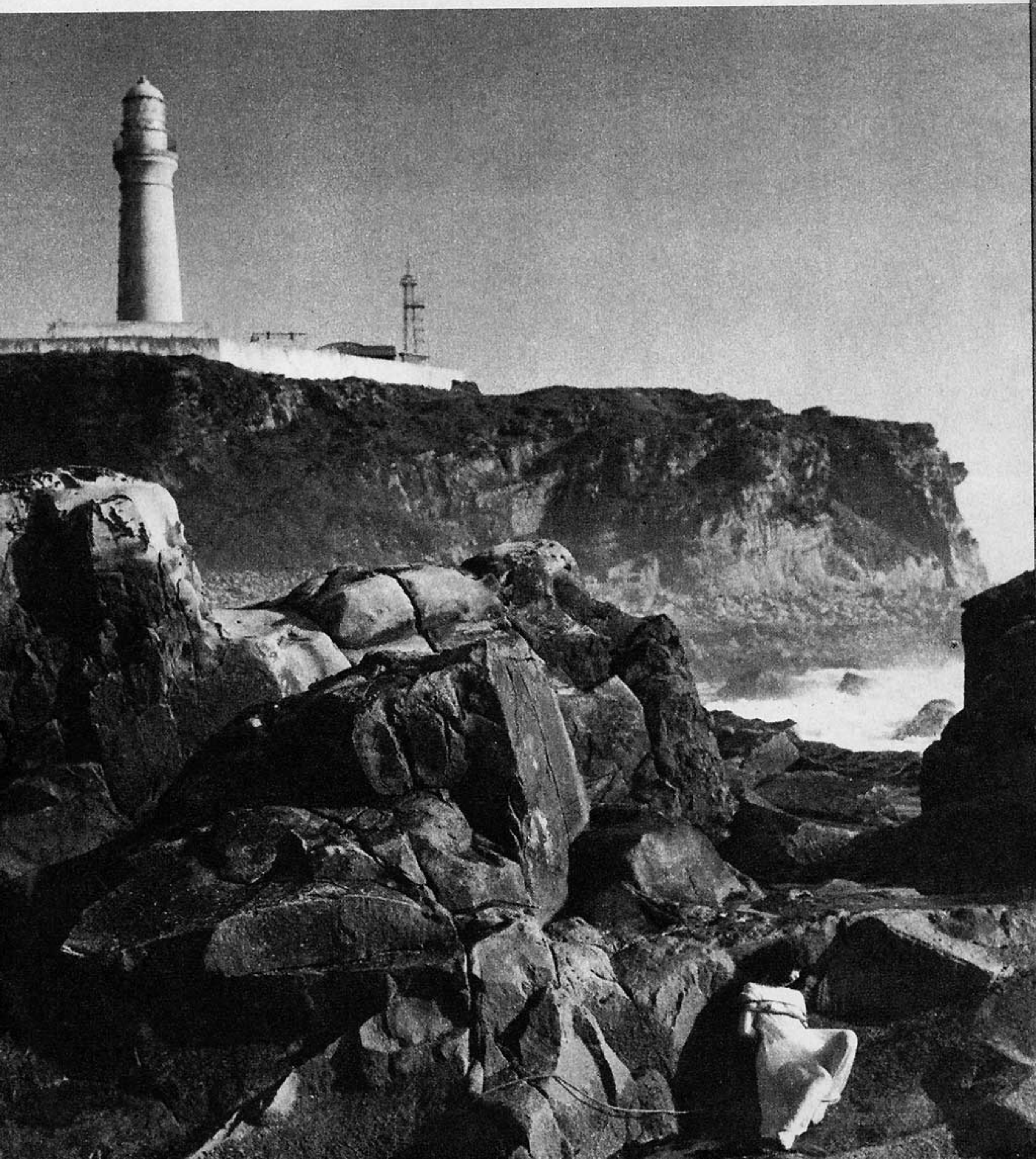


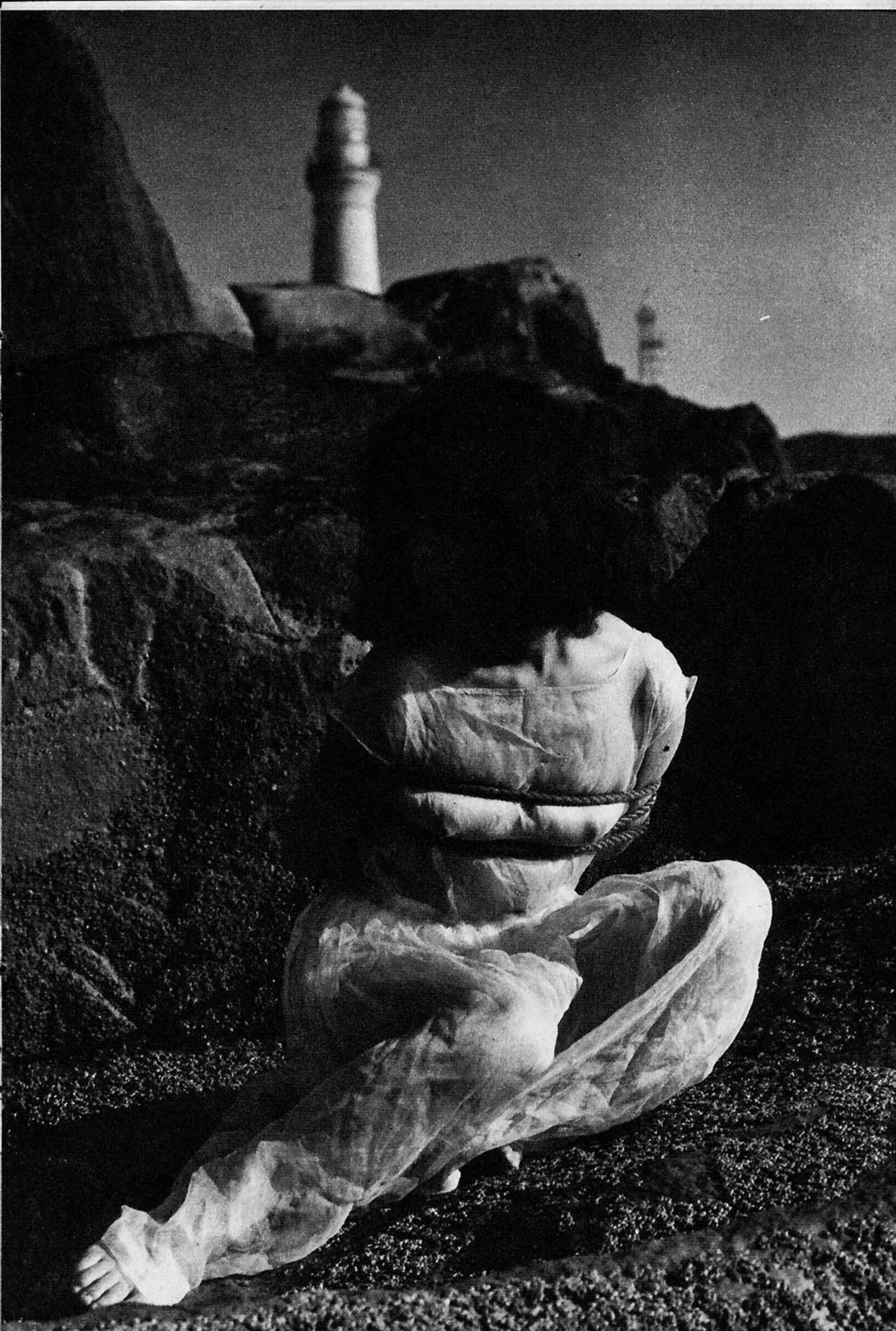


犬吠岬

モデル…エダ・キリコ

カメラ…吉田久

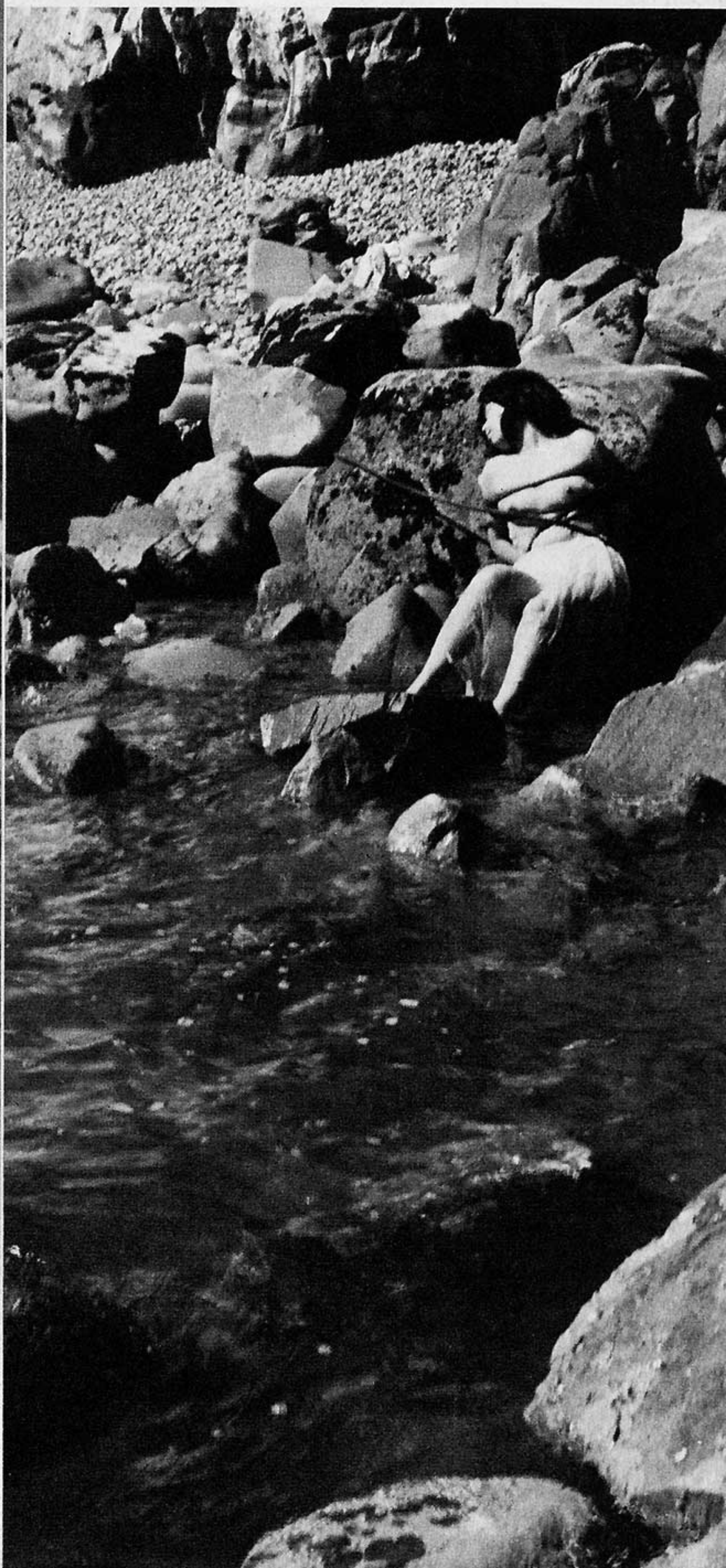


















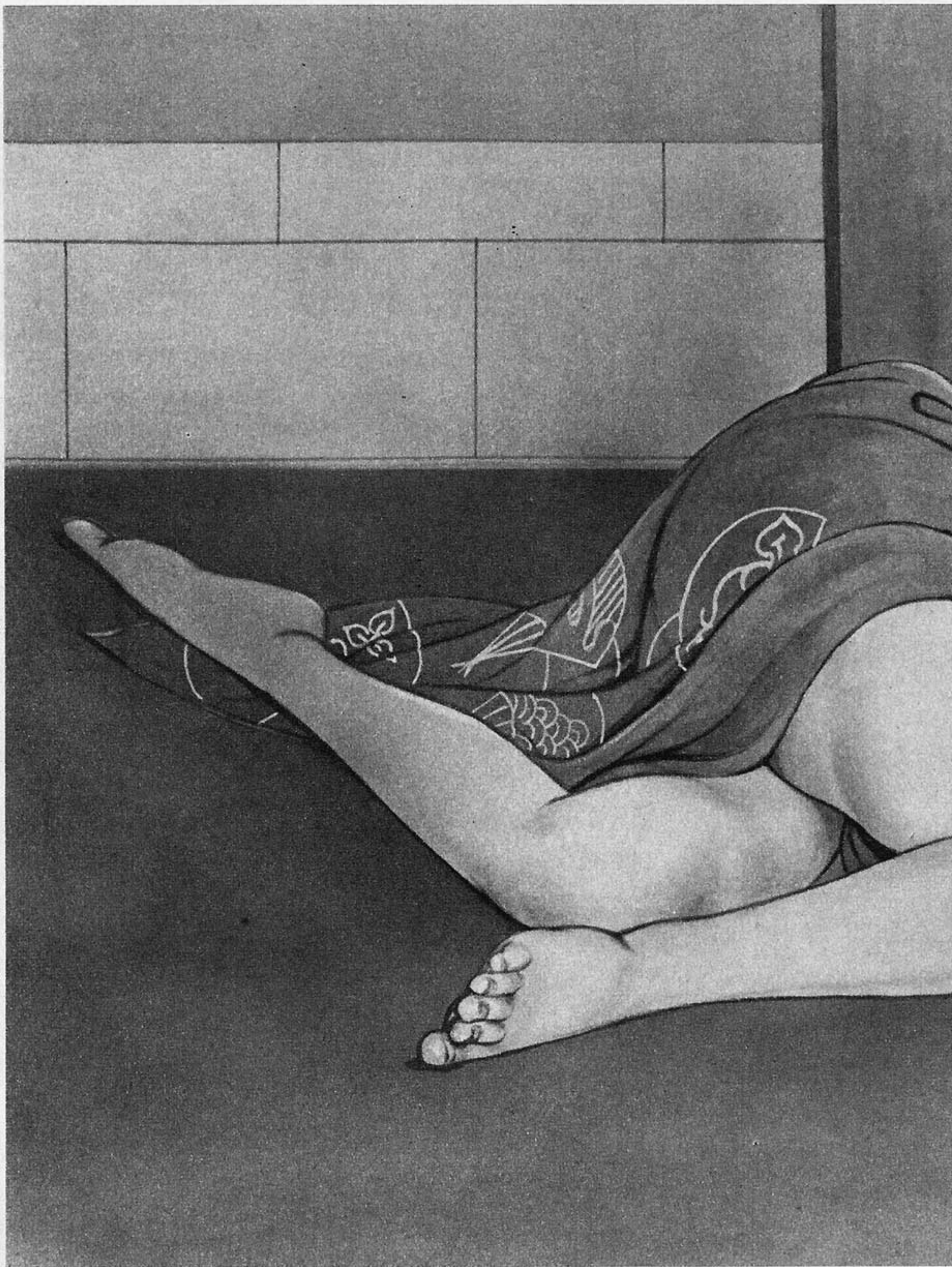


中島喜美時代妖美画集

4



牡丹



女児姓





蔵のなか



青竹



アメリカ S M 絵物語

● ご紹介

海外の
公刊誌
より

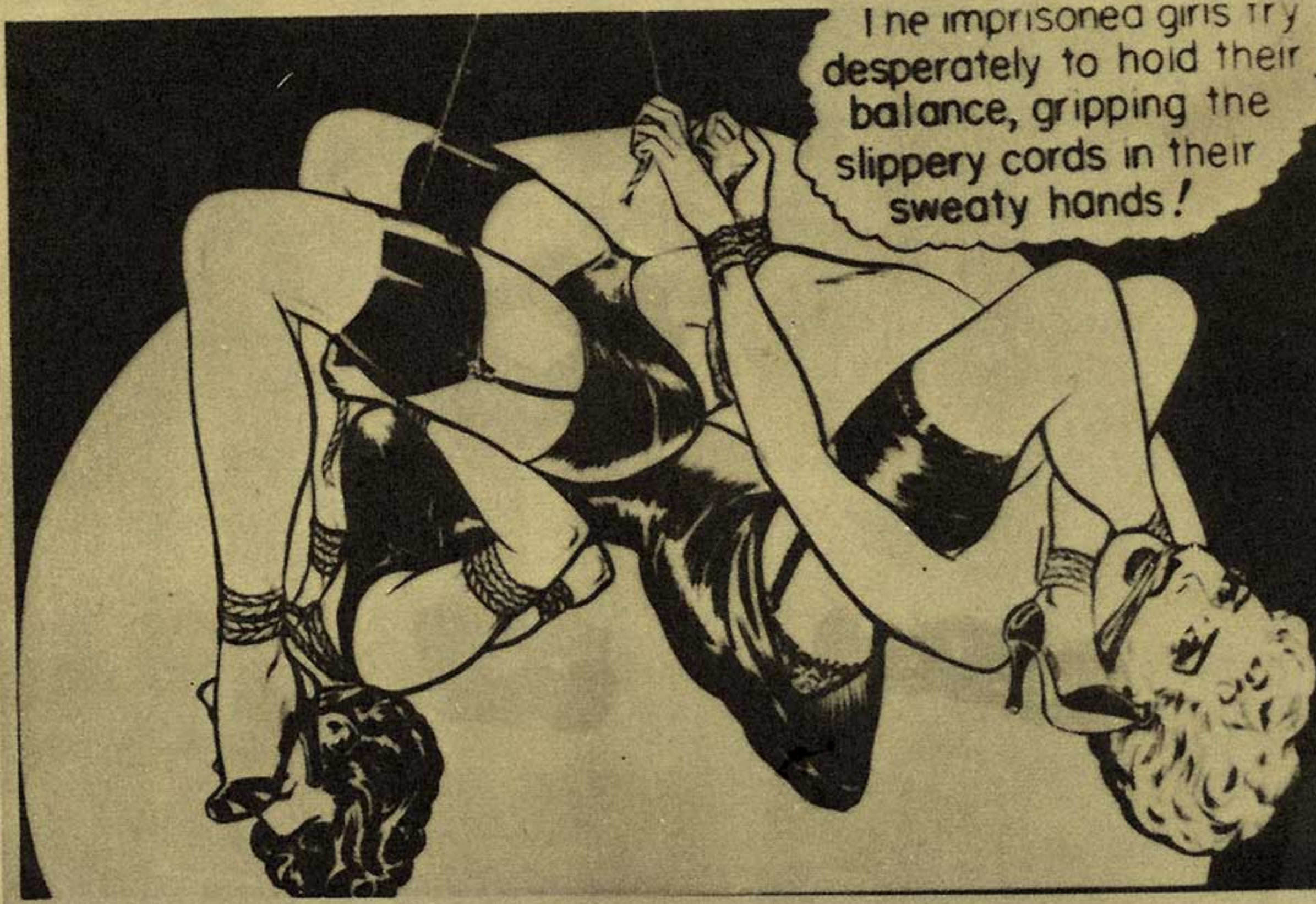


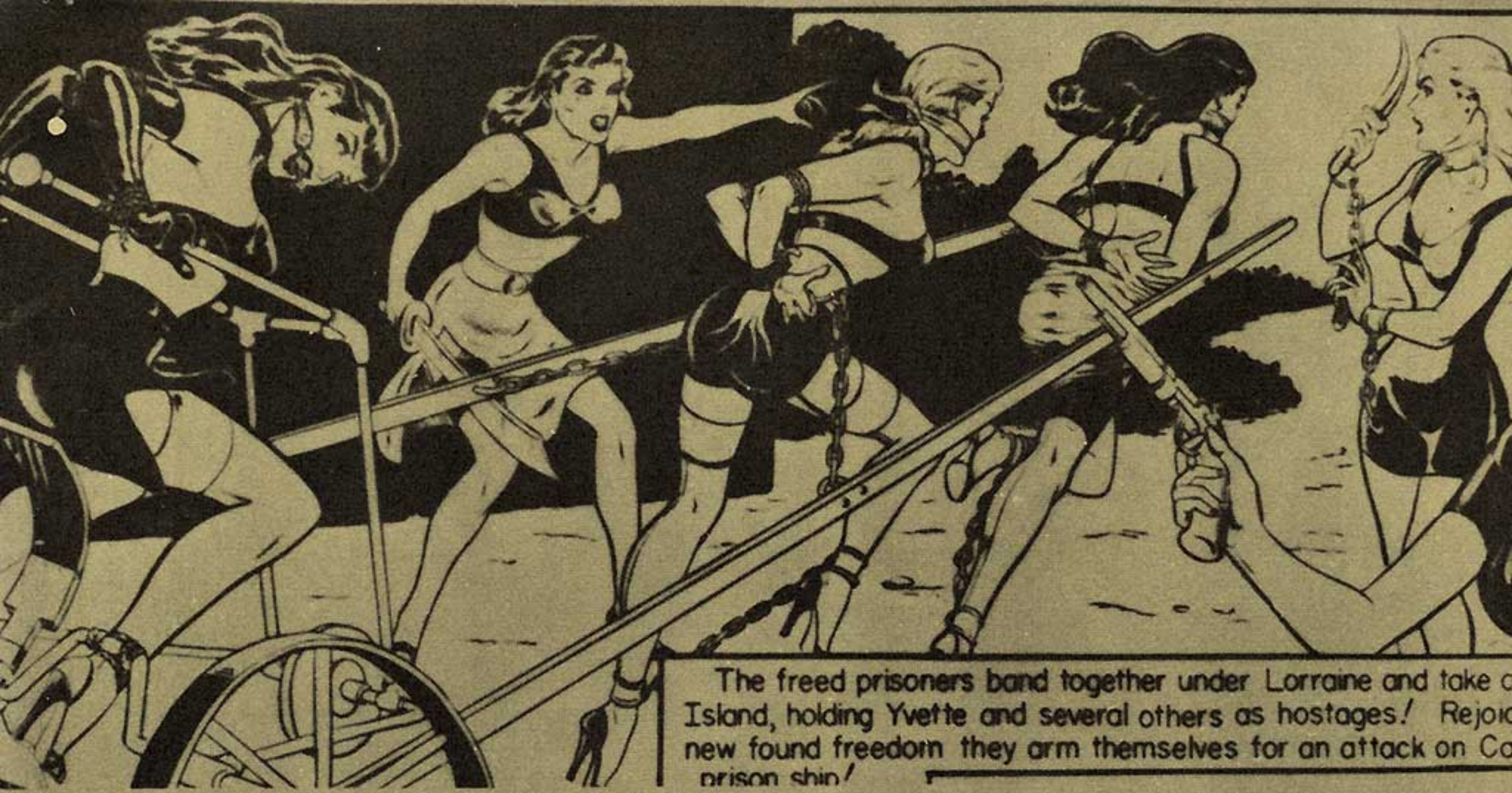


Using a thick wooden pole to eliminate the peril of the traps, Lorraine goes about loosening the bonds that hold the two girls together!



The imprisoned girls try desperately to hold their balance, gripping the slippery cords in their sweaty hands!





The freed prisoners band together under Lorraine and take over the Island, holding Yvette and several others as hostages! Rejoicing in their new found freedom they arm themselves for an attack on the Prison ship!



Leaving the others to free the prisoners from bondage, the Baroness is lowered into a small cell to free two captives who are suspended over a spring-steel trap!



Arriving at the Island of Death, Lorraine and the other prisoners are led shackled down the gangplank!

With
official
breast
girl
penis

3

The prisoners are greeted by the prison pony patrol who tells them to hurry as Yvette, the head wardeness is impatiently awaiting their arrival!



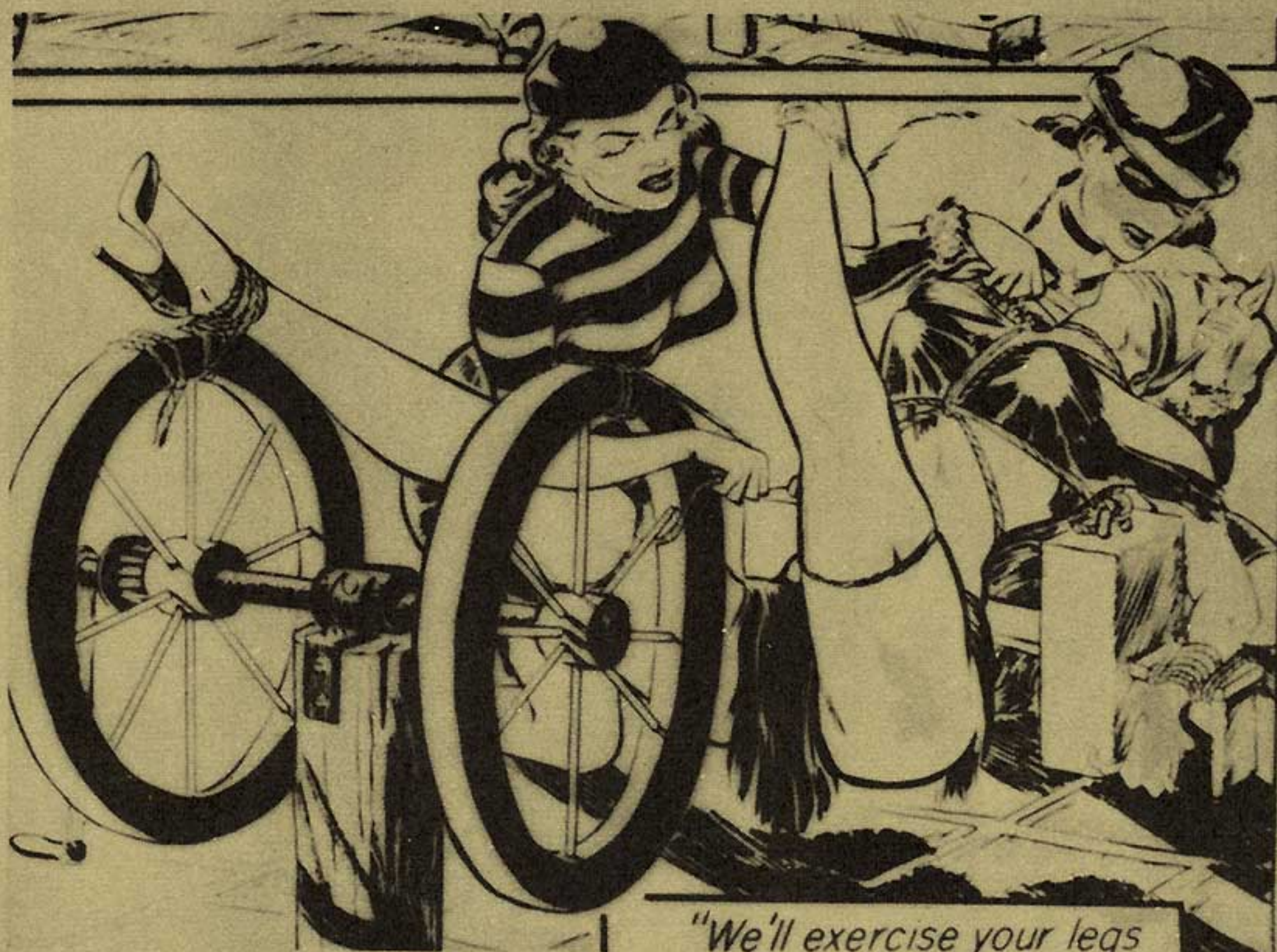


On Mercedes's instructions, her assistant releases the stretched band against the victim's back!



"Nod your head when you've had enough Mercedes snarls!"

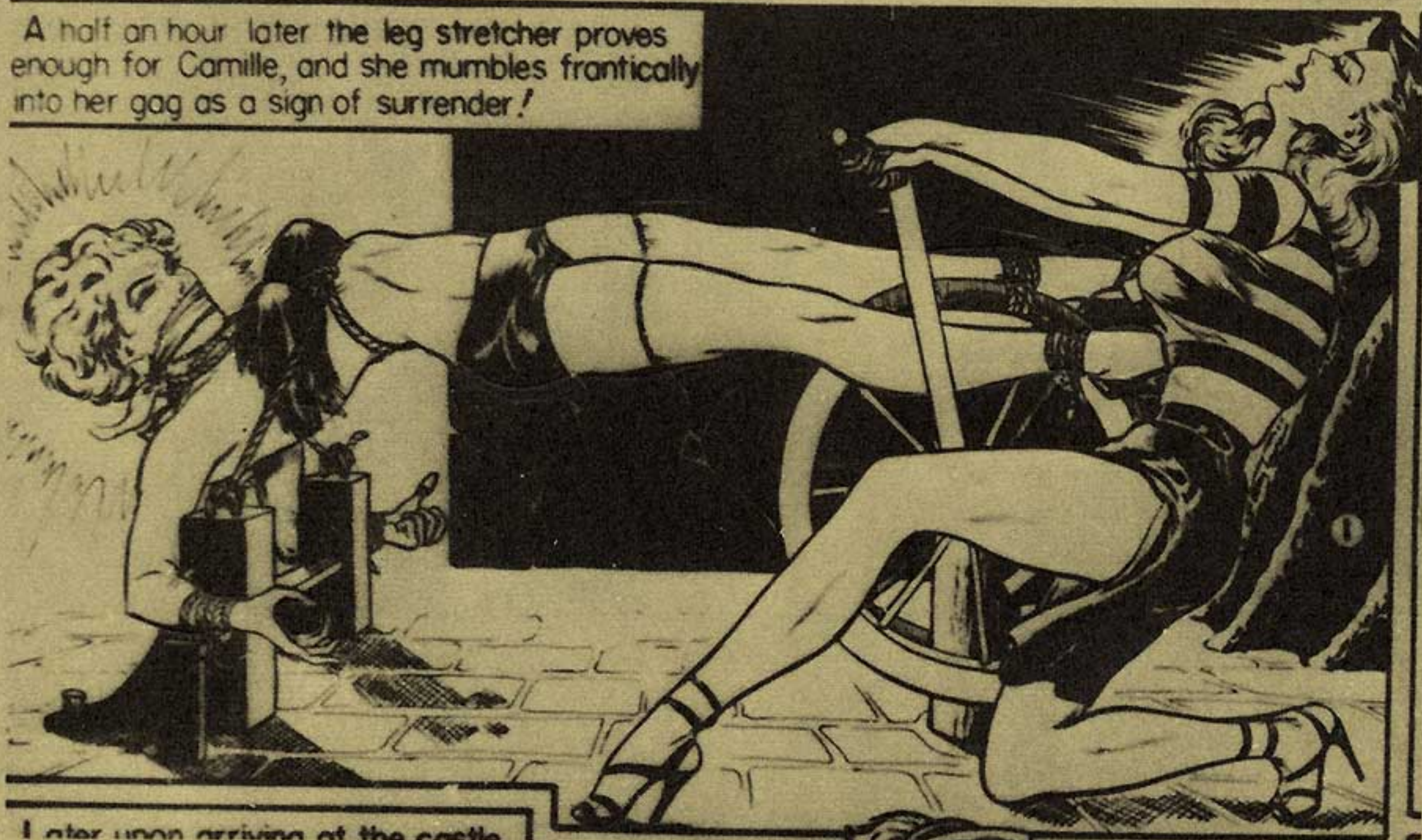




"We'll exercise your legs

"DUCHESS OF THE BASTILLE"

A half an hour later the leg stretcher proves enough for Camille, and she mumbles frantically into her gag as a sign of surrender!



Later upon arriving at the castle

Captain Circe
drags Lorraine down
to the hold of the
ship over a step ladder
of human bodies!



EPISOD

カリフォルニア
フェニクス商会・特約



演舞場の

「青山播磨」

東京・新橋演舞場の八月公演は中村竹弥奮闘公演と銘うち、その夜の部に、ちかごろマスコミをにぎわせた「青山播磨」四幕が登場する。

南条範夫作、武智鉄二演出とあれば、いわずと知れた「残酷」コンビで、まず、一応はみておかねばならぬところ。

青山播磨（中村竹弥）には、たいへんなヤキモチやきの奥方（筑紫あけみ）がいる。

この美しい奥方は、由緒ある大名の家から嫁いできているので、旗本である播磨は、どうも劣等感におちこんでいるらしく、腰元のお菊（長谷川季子）のほうを寵愛している。いや、寵愛というのではなく、奥方の目をかすめながらこそこそ愛している、といった格好である。

そのお菊に好色の目を光らせているのが、旗本神祇組の一員で、

山中源兵衛（金田竜之介）という侍。

この山中さんが、まずメーキャップからして、典型的通俗性サディスト。目の周囲を青くぬり、くちびるを大きく茶色に光らせ、その口はいつもあけっぱなしで、かなりマンガ的。

さて、山中さんはお菊が自分になびかないのを怒って、復讐を計る。

家宝のおサラを運んでくるお菊の前に、わざと足をだしてお菊を転倒させる。おサラは、タタミの上で、なんの音もなく、バラバラにこわれる。

播磨は、お菊をゆるしてやりたいのだが、仲間の旗本たちが、「成敗しろ、手打ちにしろ」と、しきりにさわぐ。

しかたなく播磨は、お菊の処置を奥方にまかせる。

柄はりっぱで、剣術もつよいのに、この播磨はたいへんにいくじがない。

奥方は、待ってましたとばかり

お菊をひきずって去る。

やがて、舞台にはみえない奥庭で、お菊が責められる。

「ヒィーッ！ ゆるして！」

という声がきこえる。

責め手の叱咤の声もきこえる。

この、かげできこえる悲鳴のシーンが、じつは、いちばん迫力があつてすばらしい。

通俗サディストの山中さんは、お菊の悲鳴をきくと、大きな目をぎらぎら光らせ、陰惨に、いいたいところだが、みたところ単純素朴に、

「ウヒヒヒヒ……」

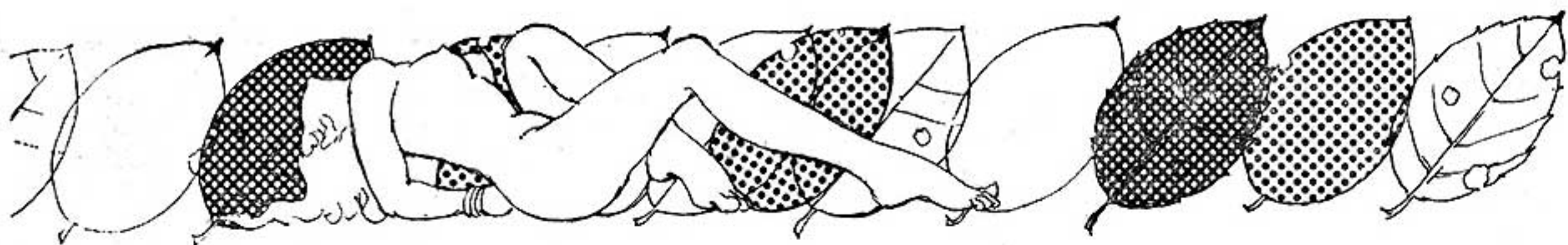
と、声にだして笑う。

それをみて、客席も笑う。

山中源兵衛は、このあと、お菊が殺されたときも、その死体を見て、うれしそうに笑い声をあげ、おのれのサディズムを宣伝するが、いささかオーバーである。

舞台はまわって、いよいよその奥庭の場。

雪の降ったあとらしく、庭には白く雪がつもっている感じ。奥方



とその忠実な部下の腰元が四名ほど、庭におりて、お菊ひとりをはじめている。

帯をとかれ、着物をぬがされ、白い肌着にされたお菊は、左右から両腕をとられて立たされ、身うごきできない。

もう一人の腰元が、カンザシを逆手ににぎってふりあげ、お菊の左手の二の腕あたりに、ぶつりと突き立てる。

白い肌着に、さつと血がとぶ。

この仕掛けは、なかなか巧妙にできていて、赤インクが、ぱっぱっぱといつた感じに、勢いよくとび散る。

「ひいーッ！」

という悲鳴。

つづいてこんどは前の裾をあられもなぐまくりあげ、右足のひざの上あたりにカンザシを、ぶつりと突き刺す。

これも勢いよく、ぱっぱっぱと血がはね白衣にそまる。

カンザシは、ももに突き立ち、腰元が手を放しても、突き刺さったままである。

「ウウーッ！」

と、お菊はのけぞり、抵抗するが、二人の腰元が左右からしっかりおさえているので逃げられない。

つぎは、まっ赤に焼いた火バシを、お菊の頬ッぺたにあてる。

この仕掛けが、じつに巧妙で、

顔に焼け火バシを押しあてると、肉をこがすケムリが、じゅうっと音がきこえるぐらいに迫真性をもつて、たちのぼるのである。

「ぎゃあーッ！」

という、すさまじい悲鳴。

お菊の白い頬ッぺたには、焼け火バシのあとが、赤黒く、むざんな色をみせてのこる。

このあたり客席からも、

「ヒヤーッ！」





「フウーッ！」
「アレエッ！」

の声しきり。婦人客が多いのだが、こわい、などといいながらも目はくいつくように舞台をみつめている。

みわたせるかぎりの周囲には、舞台から目をそむけているような客は、ひとりもいなかった。

しかし、こういうオバサマ方が一步劇場の外へ出ると「青少年を守るために不良出版物を追放しましょう」などと、ヒットラーみたいにさげぶのかもしれない。

青山家のヤキモチやきの奥方より、こっちのオバサマのほうが、よっぽどおそろしい。人間性を破壊する集団的暴力サディズムにながっているからだ。

それはともかく、舞台のお菊さんは、まだまだいじめられる。

お菊の頬を焼いた火バシを、おつぎは髪の毛にぐるぐる巻きつけ二人がかりでひっぱる。

髪の毛をひきぬこうというのである。めりめりッと音がするよう

な感じで、額の上あたりが、ふたつかみほどぬけて、お菊の髪は、哀れ一部分ハゲになってしまふ。

ひきぬいた髪の毛のかたまりをお菊の目の前にみせびらかす。

ここまでやられたら、もうたまらない。絶叫して、お菊はとうとう失神。

奥方は、なおも折檻の手をやすめず、

「うしろ手に縛りあげい」と命ずる。

お菊は気絶していて抵抗できないから、うしろ手に縛りあげるのは容易である。

お菊のからだからひきぬいた白い帯で、三人がかりでうしろ手に縛りあげてしまふ。

左右の腕が背中へねじられ、胸へ帯がまわされるところは、さすがにS的情感がただよう。

「あの井戸へ吊るすのは、いかがでございましょう」

と、腰元の一人がアイデアを提供する。

「よかろう」

と、奥方は青白い顔で笑う。

奥方をはじめとするこの五人の女性たちは、これこそたいへんなサディストで、これらの複雑な重労働を、黙々と、熱心に、なみだぐましいほどの情熱をそそいでおこなうのである。

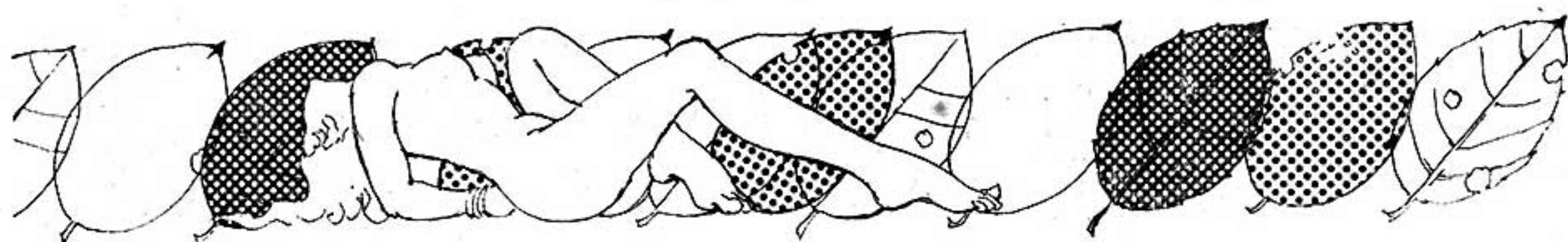
殿さまに愛されるお菊に対してのヤキモチゆえの情熱とは思われず、この加虐行為そのものに没頭しているようにみえる。

したがって、この芝居は、男性S派が観賞するよりも、男性マゾ派がみたほうがおもしろいのではないかと、これは実感であった。

五人のサド女性は、一致団結、力を合わせて、お菊を井戸端へひきずっていき、とうとう車井戸の縄に結びつけてしまふ。

そしてこんどは、竹の棒みたいな長いムチを持ってきて、お菊のからだをひっぱたく。

ムチはお菊の背中からおしりのあたりを、びしびししたたく。これは、気絶状態を回復させるためらしい。



「う、う、う……」

と、お菊は息をふきかえす。縛られた上に井戸に吊るされて、いる自分におどろき、

「も、もう、おゆるしを……」

と、哀願する。

女の細腕を集めて、五人がかりでようやく吊りあげたお菊を、そうかんたんにゆるすはずはない。「井戸の中へ沈め、水責めにしてはいかがでございましょう」と、またさっきの腰元が提案して、さっそく採用される。

二人の腰元が縄をひっぱり、お菊のからだを水の中へ沈めたり、ひっぱりあげたりする。

井戸の底へ沈むときは、ザブーンという音がして、

「アレエーッ、ヒイーッ！」

という、悲鳴がきこえる。

ひっぱりあげられたお菊は、頭上の縄がきりきりと回転するとうる感じで、なんども身を回転させる。

このへんが、武智演出のこまかいところ。

お菊は、沈められたときにカツラを代え（衣裳も代えるのかもしれない）ひきあげられたときは、あたまもからだも、水びたしになって出てくる。

奥方は、ここでまた憎たらしいセリフを吐いて、さんさんお菊をなぶる。

最後の責めは、短刀をお菊の口にくわえさせ、それをくわえさせたまま、力いっぱい引く。

当然、お菊の口は切れ、またまた鮮血がとび、したたり落ちる。

「ヒイーッ！」

と、悲鳴をあげ、身をのけぞらせるお菊。

井戸端には雪がつもっているのだが、その雪までが血だらけになる。

お菊さんは毎晩一回ずつ、確実にこの井戸に縛られ、血だらけにされるので、大道具の井戸ゲタにも血がしみつき、泥絵具のゴフンを、いくら上からぬっても、前日の血がごまかせないほどである。

こうまでめっちゃくちゃに責めら

れては（なんと二十分間の連続）お菊もたまらない。またぐったり気絶してしまふ。

このときになって、ようやく、青山播磨がたすけにくる。

お菊は、きれぎれの声で、

「こんな醜い顔になってしまつてはとても生きてはいられないから殿さまのお手で、どうか殺してください。殿さまに斬られれば私は本望」

などといって、もうあきらめている。

播磨は、わざわざ座敷からロウソクを持ってきてお菊の顔をみるが、ここでびっくり。

お菊の哀願を、なるほど、もつとも、という思い入れで、とうとうお菊を斬ってしまう。

いくじのないくせに、こういうときには、バカに思いきりのいい殿さまである。

お菊はテッテイ的に可哀想な存在で、客席のなかでおばさん同志が、

「さあ、こんどは化けてでるぞ。」



あんなにいいめられて、化けてで

ないはずはない。あの憎らしい奥

方も腰元たちも、こんどはお菊の

幽霊にさんさんなやまされるんだ

よ、みてな」

と、話し合っている。

ところが、南条範夫先生の台本

だから、幽霊なんかでてこない。

この芝居では、幽霊のでない代

わりに、丹前風呂の湯女で、勝山

(阿部洋子) がでてくる。

これは、れいの勝山髷で、歴史

的にも有名な美女。そして、この

芝居では、なんとお菊の実の姉に

なっているのだからオドロキ。

最後の場で、播磨は、お菊の墓

の前で、ななめに切った卒塔婆を

腹に突き立て、凄絶なハラキリを

する。

「お菊、待ってろ。拙者もあとか

らいく」

しかし、そんなもので、たやす

くおなが切れるものではないか

ら、竹弥丈は苦痛に耐えかね、も

のすごい顔で、見得をきる。

血がまた、ぱっぱっぱととび

散る。

最後まで、血の芝居である。

本誌の読者から、

「ぜひ、演舞場の舞台の写真を撮

ってきて、グラビアにのせてくだ

さい」

という、ご要望のお手紙をたく

さん頂いているので、その準備を

したので、写真にはとてもなら

ない。

というのは、お菊を縛った帯が

まったくのかたちだからユル

ユル。

おまけに、うしろへまわした手

が、その帯をつかんでいるのもま

るみえなので、写真にしたら緊張

感なんか、まったくくない。

縛り手が、腰元役の女優さんな

のだから、無理もないと思うが、

それにしても、もうすこし、なん

とか、くふうがありそうなもの。

責め場のセリフのやりとりと、

お菊の悲鳴だけは、たしかにサド

味があったのだけれど。

つまり、この文のはじめに、か

げできこえる悲鳴のシーンに、い

ちばんの迫力がある、と書いたの

は、そういうわけである。

残念ながら、悲鳴はカメラには

うつらない。

余談になるが、今年の一月、東

京歌舞伎座で上演した「明烏夢泡

雪」つまり、浦里時次郎の芝居の

ときも、わざわざ歌舞伎座と菊五

郎劇団に正式の許可をもらって、

撮影に二日間をついやしたのだが

梅幸の浦里では、舞台はよいにし

ても、写真になると、やはりモノ

にならず、七十枚ほどの舞台写真

を、ぜんぶ、ボツにした。

舞台撮影で成功したのは、三十

六年十月号に掲載した、新宿コマ

劇場のトニー谷主演「執念泥沼地

獄」で、このときは、出演者側、

劇場側の積極的な協力もあって、

みごたえのある写真になった。

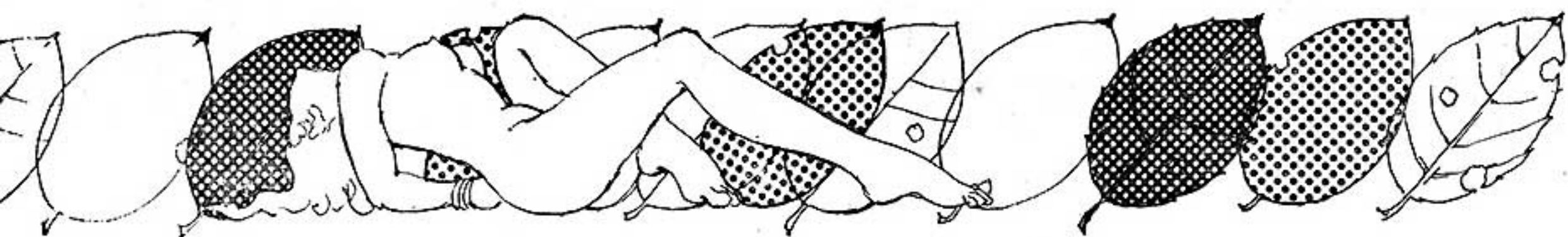
本年三月号四月号に掲載した、

新宿内外ホールの芝居は、はじめ

から本誌で企画・演出したものだ

から、思いどおりの撮影ができた

のは、当然である。



磨」は、日本テレビで録画、十月に放送する予定であるが、かんじんの井戸に吊るして上げたり下げたり場面は、全部カット。

焼け火バシをあてたり、派手に血がとぶところは、ロング・ショットで逃げ、テレビ・モラルを主張するそうである。

そのモラルに対して、

「あそこを除いてしまったら、ぜんぜんつまらない芝居だ」

という意見もあって、いろいろもめたらしいが、結局、カットということになったらしい。

とにかく、都心の大劇場で、まっとうからこういう芝居を上演したことは、ある意味で「壮挙」といえるだろう。

(豊)

テン足について

「週刊大衆」(双葉社発行)の九月十二日号に「足のかたちで占うセックス」という記事が掲載されている。

女性の足とセックスというテーマは、これまで週刊誌で、いやと

いうほどとりあげられてきたが、この記事のなかでは、中国のテン足について、わりあい要領よく紹介されている。

ある種のサディズムを連想させるので、その部分だけを要約してみよう。

——「足をしばることの謎」と題して、R・ステラー博士は、この中国特有の女性のテン足を、セクソロジーでつぎのように述べている。

——現在ではすたれてしまったが、古代中国では、足をしばる伝統があった。足をしばってテン足をつくりあげることによって、女性の外性器に、特有な作用をもたらすものだと考えられていた。

その証拠として、ステラー博士はR・H・バン・グリック博士の

「古代中国における性生活」を引用し「小さな足は女らしさの重要な役割をし、中国の好色文学や春本が、女性のセックス器官の細部にわたって、描いたものがない反面、これほどセックス面に大き

な影響をもつ足についての文学作品や絵画にお目にかかったことはない」といっている。

中国人にとって、女性のからだの部分に関する文献が存在しても、足については、タブーとなっていたことを意味しているのだ。

バン・グリック博士は「芸術家が描く限界は足の周囲まで」と指摘している、このことは足がセックスそのものを裏づけている。

ステラー博士はここで最近香港大学の外科医が調査した中国の老婦人のはいていた靴を紹介している。

現代のハイヒールに似たカカトの高い小さな靴だ。この靴を二歳から六歳ぐらいの幼児期にはかせ、足の発育を束縛する試練にたえぬかねばならない。

すなわち「豊かな家庭では、できるだけ小さなほっそりとした足をつくりあげるために、非常に早くからはじめられ、貧しい少女は彼女らに課せられた仕事のために有益な足をできるだけ残してお



く。その結果成長すると永久的なテン足になり、なかには男の掌以下の長さになる……ことすらあった」とステラー博士は述べている。

医学的には足を束縛する結果血液循環がさまたげられるわけだが、時にはエソに陥入ったりして、足を切断しなければならぬ女性も生まれる。

このほか、足のツメや足指の白癬苔による病気の繁殖、足骨の病気等が生じ、足の裏が短くなるとともに指が長くなってこない。

皮フは光沢はあるが、薄く弱まって傷につきやすい状態になる。

しかも足と脚の筋肉が衰弱してしまうのだ。

だいたい、以上であるが、解放された現在の中国には、もちろんこんなテン足の女性なんて、よほどの年寄りのほかは、いないだろう。

ふとくたくましい足をむきだしで、集団で行進する若い中国女性たちのすがたを映画なんかでみる

と、水尾究氏ではないが、むしろM的感興をそえられるほどの健康美をおぼえる。

(南)

日活映画

「アリバイ」

捜査一課が活躍する、れいの現代捕物帳であるが、この「アリバイ」という映画は、東映の警視庁シリーズに負けない佳作となっている。監督は牛原陽一。

拳銃密売屋、三国人の暗躍、パクリ屋、殺人、などのお膳立てはめずらしくないが、人間描写に光るものがあって、映画そのものがたのしめるのは、ありがたい。

さて、ラスト近く、一人の娘が誘拐される。

その娘の兄が警察にあげられ、きびしい訊問にあっている。そいつが口を割れば、悪党一味の大犯罪が発覚するのである。

背後のボスは、兄の口を封ずるために、妹を人質にさらったわけである。

捕われた妹は、畳敷きの部屋に

うしろ手に縛られ、うなだれて坐っている。

カメラは背後からうつすが、縄は細引きで、手首だけが丹念に固く縛られている。全然芝居気のない、リアルな縛り方である。

口には、タオルらしい布きれのさるぐつわ。クローズアップでうつる。

刑事が踏みこんでいくと、一味は自動小銃で応戦、娘をタテにして威嚇という場面もある。

ようやく縄をとかれた娘が、恐怖をのがれた一瞬の安心に、わつと泣きだすところなど、リアルな情感があった。

(北)

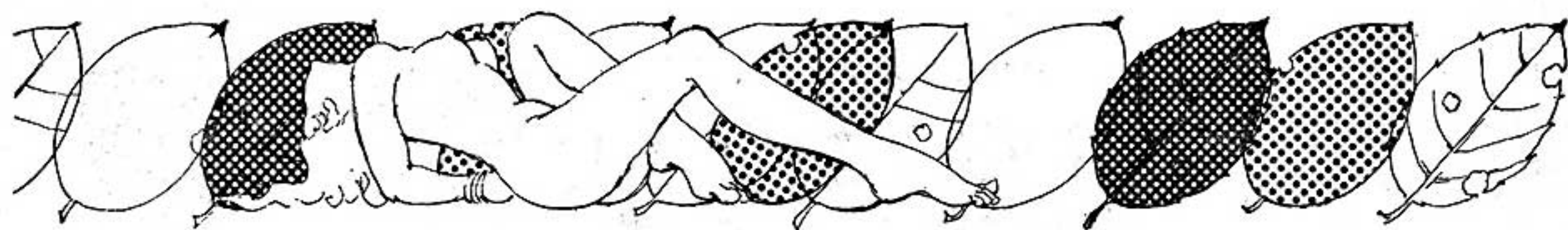
松竹映画

「なんじゃもんじゃ」

現在撮影中の松竹映画「なんじゃもんじゃ」のなかに、おもしろいシーンが登場する。

この映画は、獅子文六原作の喜劇で、津川雅彦ふんする前衛カメラマンなるものが登場する。

そのカメラマンが、スタジオで



モデルを使って「前衛写真」を撮影するのだが、このモデルが、加賀まりこ。

彼女は、新劇女優のタマゴなのだが、津川カメラマンの芸術意欲に同調して、モデルになる。

ところが「前衛的な、異常なムードのセミヌード写真」を撮るために、津川カメラマンは加賀まりこを、ムチでたたきながらポーズをつけるのである。

あきらかに、当今のSMムードを反映した（あるいは便乗した）一場面といえよう。

その女優さんが、サドの大好きな加賀まりこさんときたら、まさしく適役というところであろう。

（東）

ファスナー異変

男のズボンのファスナーは前、女のズボンは左横についているのは、まア常識。

ところが、このあいだ銀座をあるいていたら、ズボンのファスナーを、男と同じく、まん前に堂々

とくっつけている女の子を、数人発見してびっくりした。

腰と足にびっちり密着したズボンをはくと、横のファスナーは、シルエットがくずれるのだそうである。

立っているときや、あるいているときは、まあまあだが、その女が、いすに腰かけているとき、ファスナーが前にくっついていてズボンを正面から見ると、いささか妙なキモチになる。

べつに直接アブと関連があるとは思えないが、なんとなく、ナニカを感じる。

男性にナニカを感じさせるために、そんな発明をしたとしたら、女性とはやっぱり、ナニカ魔性のもののように思える。

話はちよっとちがうが、そんなお嬢さんたちが、首からさげているネックレスの中に、ものすごくふとくて長いクサリがあるけど、あれはどんぴしゃり、ナニカを感じさせます。

なんにも感じない人は……まア

「裏窓」を読む資格のない人でし
ようねえ。
（北）

英陸軍婦人部隊

と同性愛

東京でも近ごろ若い女性たちの間にレスビアンがふえて、男性のゲイ・バーに対抗するかのよう
にレスビアン・バーが方々にできて
毎夜たいへんな賑わいを呈してい
るというが、最近の外電によると、
イギリスでも陸軍婦人部隊で、同
性愛にふける隊員が続出、国防省
は大あわてであるという。

これは、さる八月九日、英紙デ
ーリー・ミラーがすっぱぬいた特
ダネ記事だが、同紙によれば、そ
の一週間前、キングストン・ゲー
ト基地婦人部隊に勤務するウイリ
アムズというお嬢さんが当局へよ
せた「告白」の投書が、そもそも
のきっかけだった。

その投書によると、
「わたしは、以前はボーイフレンド
と散歩したり、絵を鑑賞したり
する、ごく世間にありふれた普通



の娘でした。でも、婦人部隊では右をみても、左をみても同性ばかりでなので、つい同僚の誘惑に負けて、レスピアンとしての訓練を受けてしまいました。いまではもう男性に、まったくなんの関心もありません」

と、同性愛におぼれきっている自分の気持がこまごまと記されていた。これにはさすがに冷静な国防省当局者もすっかりびっくり、大いそぎでウィリアムズ嬢の属する婦人部隊の兵士たちの私生活を調査するとともに、これ以上隊内に同性愛的傾向が拡がるのを防ぐために、多数の婦人隊員を除隊させたという。

それにしても先頃のプロヒューモ前陸相の事件といい、今度の出来事といい、このところ色っぽいスキヤンダルの続出で、陸軍当局もすっかり頭をかかえこんでいるそうだ。

痴漢を縛り

あげた娘さん

(猫)

この夏も夜の街に痴漢の横行がめだった、近頃はなかなか気性の勝った男まさんの娘さんが多いので、あまり相手をなめてかかる、かえって男のほうにひどい目にあうという実例。

八月十二日の午後六時ごろ、愛知県瀬戸市内で、帰宅途中の名鉄バスの車掌高島伸子さん(十九)と石川京子さん(十九)の二人は若い男にしつこくからみつかれた。

二人はさわらぬ神に祟りなしとそしらぬ顔で通りすぎようとしたが、男は酒に酔っていたせいか、いよいよ執拗にからんでくる。そこで、これ以上弱身をみせては相手を増長させるばかりだと思った高島さんと石川さんは、

「やっちゃおうか」
「ええ、やっちゃいましょうよ」

互いにうなづき合うと、左右から同時にとびかかって、抵抗する相手をなんの苦もなく取り押さえたばかりか、あり合せの紐で後手に縛り上げて、駅前派出所に突き

だしてしまった。

男は、もちろん迷惑防止条例で即座に検挙されたが、二十三才になる自動車助手で、酒に酔ってついフラフラとやってしまったと言っている――。

以上が八月十三日付の中部日本新聞に載っていた記事のあらましだが、いかに一対二の劣勢とはいえ、女の子に苦もなく組み敷かれたあげく、縄までかけられるとはなんとも意気地のない男もあったもの。だが、この事件は一面、男のほうも案外満足して交番に連行されたのではないかと想像されるフシがないでもない。というのは若い娘さんに二人がかりで押さえつけられ、そのうえ後手に縛りあげられるなんて、M派の男性にとってはまさに千載一遇のチャンスといつてよいからだ。

だから、当人はブタ箱にぶちこまれてしよげるところか、案外いまごろはその時味わった被虐のスタイルを反芻して、人知れず悦に入っているのかも知れない。(猫)



冷やかな部分

子どもがおとなになるに従って、物事に熱中する度合いが少なくなる。

食事をするにしても、その味覚のうまさには、子どもは我を忘れて熱中するが、おとなになると、うまい物をうまいと思って、それだけのことで、我を忘れるほどの熱中はない。兄弟げんかをしてまで食物やおかしの奪い合いはやらない。

遊ぶこと、本を読むこと、映画を見ること、それぞれ興味のおもむく対象に向かって子どもは我を忘れて熱中する。その熱中のために文字通り寝食をさえ忘れる。マンガ本や冒険小説に読みふけて、思わず夜を明かした記憶がほくには少年時代の思い出として、なつかしく思い返される。

同じ映画を繰り返し繰り返し何度も見ると、なおまた、ほかの映画館にまで出かけて、その労をいとわない。出演者の端役の顔や名前でそらんじて、テーマミュージックはもとより、こういう場面にはこんな音楽だったと口裏でハミングする。

これは旺盛な子どもの記憶力の効果というより、あの無我夢中の熱中の激しさがなせるわざとも言える。

おとなには、このような無我夢中の熱中がない。

どんなに物事に没入しているように見えても、どこかに冷静な熱中しきれない部分が残る。どんなに面白い本を読んでも、やはりどこかにそれを退屈だと感じている部分がある。興味があっても、それが公的な役目か何かでない限り、徹夜してまで本を読み通す気力はない。

映画でもそうだ。よほどのことがない限り、同じ映画を二度見る



■体当たりマゾヒズム論・17

ああ、
ぼくはこの炎のなかに身を投げ
子どもの激しさで燃焼したい

水 尾 究

江 渕 晃 夫・絵



のはおっくうで退屈だ。

友だちとの交渉において、それがささいな遊びであっても、つまらないおしゃべりであっても、子どもはそのことに我を忘れて没入するが、おとなの交友関係は、おもに社会生活上の便宜上の友人関係に限定される上に、また、物事に熱中できなくなったおとなの資質がわざわざいして、どんな熱い友情の間にも、冷静で冷やかな部分が残る。

怒っても笑っても泣いても、おとなはどうしても子どものように、全人的にそのことに熱中できないのだ。

燃焼しきれないおとなのマゾ

おとなは青年ほどに愛に没入できない。燃焼しきることがない。女に血道をあげる中年、老年の恋は、ただにそのことばかりではなく、その時その人が置かれている立場や環境や、その他さまざまな要素がからみあって、その恋そのものは、実は複雑な陰影や、あるいは全く別種のもを内部にはらむものである。恋そのものより、それから派生してくる部分のほうが問題として大きい。それを冷やかな冷静な部分が意地悪く観察している。

サジズムにしても、マゾヒズムにしても、事情はやはり同じだと思ふ。

ぼくの場合からそれを言えば少年時代から青年時代にかけて、ぼくを没我的に熱狂させたマゾヒズムは、夜を徹して読み通すあの冒険小説の面白さ以上にぼくを捕え、引きずり回し、息もつけぬほどの狂熱のトリコにした、あの熱中の記憶が説明しているのである。

谷崎潤一郎の『少年』を読んだとき、全身がしびれ、頭がかすみ、ぼくの全神経は燃えさかった。

あのような熱中は、再びおとなとなった今のほくに、もどってく
ることはないであろう。

▲『瘋癲老人日記』を読む感激がいかに大きく、それがいかにM文
学の傑作であろうと、それにどうしても全人的には同化し得ない、
冷静な部分が残ることを否定できない。

子どもから青年期にかけて、ぼくのMに対する傾倒は、文字通り
無償の行為と燃焼に尽きたものだった。

そのためには、どんなわずらわしいことにでも、メンドくさいと
いった気は毛頭起こらなかった。そのためには、どんな遠くにまで
足を伸ばし、どんな煩雑な手続きも踏み、どんな時間も割き、どん
なからだの酷使にも耐えた。

おとなになると、青年時代ほどの自由が、時間的にも体力的にも
ない、といった言い訳はここでは通らない。足を延ばし、時間を割
き、からだを使うにしても、あの青春期の全人的な燃焼がもうない
のだ。

そのために、メンドくささや、わずらわしいといったきわめて通
俗的な不精さが、最初からツト頭を出す。こういう分別くさい、お
となとしてのシタリ顔が、マゾヒズムであるほくの場合、ほくに
けるマゾヒズムとの関連のあり方において、その意味づけにおいて、
どんな影響をもたらすであろうか。

つまり、それほど燃焼しきれなくなった、いわゆるおとなにおけ
るマゾヒズムは、それだけ不純になり、退歩したことを意味するの
か、そういうことへの設問である。

戦犯ルドウィッヒ

竹山道雄が▲『人間精神の崩壊』という一文の中で、次のようなこ

とを書いている。

『ルドウィッヒ・ラムドールという役人は、残忍な虐待をしたため
に後に絞首刑となったが、その裁判のときに彼の親籍や友人は、あ
の貧しく虐げられた者の友だった親切な男が——とおどろいて嘆願
の手紙を書いた——』

「ルドウィッヒは、田舎の道を歩いているときなどは、足もとの蝸
牛やかげを踏みつぶすまいとして奇妙なステップで歩きました」

思うに、人間のヒューマニスティックな感情は、ある連帯的な関
連の中で初めて保証された姿をあらわすものではないのだろうか。
良心は場所をえらぶのではないだろうか。——安定した関連の中で
は、誰でも他の人間を人間として認めるが、いったんその関連が破
壊されると、そういう認識は、たちまちばらばらに雲散霧消してし
まうものらしい。他人はただの抽象物となってしまう。戦場の敵、
異教徒、民族の敵、階級の敵——』

この文章は、置かれた立場や環境、条件次第で、人はどんなふう
に变身するかわからない、悪魔性を内包した生物であることを認め
訴えている。

そのことをここで今さらつけ足して、さらにこの上に強調する必
要はともかくとして、実は竹山道雄のこの一文の中から、マゾヒス
ト、なにかんずくおとなにおけるマゾヒズムの性格やあり方が抽出さ
れて考えられるのである。そのことを考えたいのである。

先にも幾度か強調したように、子どもの熱中に比べておとなには
燃焼がない、その燃焼の中に燃え残る冷やかな部分、というものが、
マゾヒズムを追求するおとなにあっては、どんな作用をその効果の
中で果たすか、という重要な問題にぶつかる。

青年期の、あの没我的な激しい燃焼が去ってしまったほど、分別

くさを増したほくにおけるマゾヒズムは、それだけ情熱が鈍磨し、退化し、衰えてしまったのか、ということへの設問と、カタツムリを踏みつぶすことを恐れて道を避けて通ったという、戦犯ルドウィッヒに関する竹山道雄の一文とが、一見別のことのように思えて、実はその全く別のこのような二つの事が、重要な一線においてつながってくるように思える。

倦怠の精神

ルドウィッヒは、捕虜に対しての絶大な権限を付与され、それがナチズムの先達としての彼の使命観と結びつき、想像に絶する残酷さを彼に働かせた。

この正当づけられた行為の過程に産まれた副産物がサジズムであった。

当初、ナチの使命という、主目的からそれたところで派生したはずのサジズムが、経過をたどるうち、かえってそのほうが主目的であるかのように、ありとあらゆる修羅場が現出した。ルドウィッヒは、その場ではもうまさしく鬼そのものであった。残虐行為に酔いしれるサジストであった。カタツムリをよけて通り、草花を愛した優しいルドウィッヒは、いったいその時にはどこに行ってしまったのだろうか。

優しかったルドウィッヒ、子どもにも親切であったルドウィッヒ、彼の行き場所は、やはりルドウィッヒ自身の内部のほかにはなかった。鬼のような戦犯者ルドウィッヒの中以外にはなかった。

カタツムリをいたわる優しさは、一面自己をカタツムリ自身に擬する心でもある。卑俗な言い方で、いわゆる相手の立場、カタツムリ自身になって感じるデリカシーな気持ちである。カタツムリの恐

れやまどいや苦しみを身につまされて感じることである。このデリカシーが、実は目をおおわしめるルドウィッヒの残虐行為の中に、どこに逃げるでもなく、どこに姿を隠すでもなく、彼の中に同時にあって、かえってその残酷さを助長した、ということが言えそうである。

子どもは残酷である。蝶の羽をむしり、トンボのからだをひきちぎり、カエルやヘビをなぶり殺しにすることに熱中する。残酷さそのものに燃焼し、我を忘れる。

おとなには、それが最後の最後まで、ふっ切れない部分が残るのだ。サジストが、サジスチックな行為を働く中にも、或る種の倦怠があるのだ。燃え切れない、傍観者的な冷やかな部分が残るのだ。暖流の中の寒流のようなこの冷たい倦怠の中で、おとなは子どものように熱中しきれない冷静さを内部に宿す。それは自己嫌悪とでもいった感情の媒体でもある。

ルドウィッヒの燃えない部分がサジスト、ルドウィッヒを疲れさせた。同時にそこにはカタツムリの心がしのびこむ予地さえあった。あわれであった、みじめであった。相手が生物であるという、実感が、ピクピクと脈打つように彼の心臓に伝わってきた。だからこそ彼は残酷であった。痛さを知らない、苦しむことのない対象物を相手の残酷は到底考えられないのだ。

と同様に、マゾヒストにおいても、こちらの生命を生命として掌中ににぎりしめる実感のあるところから生まれる相手方女性の、残酷な仕打ちを、そして残酷さに酔っているであろうその女性の心理を、その女性になりかわって自分でサジストの快感に酔う、そういう推量を働かせ冷静に観察する、この三者の傍観者が自己のうちにないとマゾヒズムの美酒のうまみが味わえない。



この傍観者の冷静な第三者の役割を担うもの、それをおとなに
ける、あの熱中できない、ふっきれない、冷やかな倦怠の精神が果
たすのである。

サジスチン代替者

マゾヒストにとって大事なのは、この倦怠の精神である。
ふっきれない、熱中できない冷やかな部分を持つことである。

これはマゾヒストとしておとなになるために必要な一種の手續きである。マゾヒストにとって最も関心のあるところは、相手方女性のサジスチックな心理状態のあり方にある。冷やかな倦怠の精神が、一部熱中して燃焼する自己をその場に残して、相手方女性の心理の奥にしのびこむのである。暗部に照明を当て、照明の届かぬところは空想で補い、その女性サジズム探検の経過や詳細をば、逐一本部である自己の意識に報告する。

この報告による加熱作動のピストン運動がマゾヒストという機関車を押し進めてゆくのである。

マゾヒストにあつては、だから子どもからおとなになるに従つて、熱中度合いが少なくなるということは、同時に観察者になるということである。

自己をその場に放てきして、女性側にその部分だけしのびこむことである。ちょうどサジストが、恐れおののく被害者の恐怖や苦痛を、さながら手のうちににぎつて、そのものとなって実感すること、サジズムをいっそうかきたてるように、マゾヒストは逆に、残酷心理に次第に酔いしれてゆく女性の心を実感することで、マゾヒズムはいっそう高進する。

その証拠に、子どもの熱中は直線的、肉体的、燃焼的であるに反し、おとなは曲線回避的、心理的、倦怠的、懐疑的となる。

これは別言すれば、マゾヒストはマゾヒズムの追求者、体现者というより、むしろ女性のサジズムそのものを具現させる、サジスチン自体の完全な味到者、つまりサジスチンその人の代替者ということになる。

ナイター

その日ほくは疲れていた。

初めは妻とふたりで行くはずの、ナイターを、何かのつごうで妻は行けなくなった。ネット裏の招待券が二枚あった。久し振りの野球である。西鉄―東映、西鉄ファンであるほくにとっては、楽しみなカードであった。

当日、だが、ひどく疲れて頭が重かった。妻が突然行けなくなったことで、なお気が重くなった。ひとりで行くのも、おっくうな気がした。

あれほど楽しみにしていたその日が、つい当日になってみると気が進まなかった。それでも気を取り直してほくは出かけた。それにほくは、ほくには一つのもくろみがある。一枚余分に余った招待券で、女の子を釣ってみようというたくらみであった。

このたくらみが頭に浮かんだとき、幾らかからだの疲れがとれたようであった。

券の指定席番号は隣合わせである。いやでも女の子は、野球の間中、ほくと隣合わせにすわっていねばならない。その間、券をくれた人にソッポを向き通しているわけにはいかない。何かそれ相応のあいさつはしなければなるまい。

そのあいさつがどんなものか、ほくはマゾヒストとして考えた。水は方円の器に従うように、女もまた方円の器に従う。相手次第でおとなしくもなり、ごう慢にもなる。

もちろん、真先にほくは彼女の荷物を持ち、妃殿下を案内するよう丁重な物腰で彼女を先導し、椅子のホコリをはたいてほくの最上等のハンケチを敷き、彼女にすわっていただく。クツ先のゴミなど、別に用意したハンケチでふく位のサービスも忘れてはならない。物売りのところに走って行ってガム、あるいはアイスクリーム、

彼女のためにまた走ってもどる。

見ず知らずの男から招待券をタダでもらい、その上お礼を言うどころか先方が過剰にすぎるサービスでまるで付人のようにペコペコすると、女性にとってはさぞや気味の悪いこととなろう。だがそこは女性である。相手次第で不自然なサービスもサービスと思わなくなるのだ。ほくは多少おっちょこちょいで、大分おめでたい男として振舞う。女性は相手が御しやすいと見れば、サービスをそれほど負担には感じないものだ。

受けた親切も、普通以上、あるいは尊敬できるような男性からの親切には、それだけ感謝の度合いも大きい。軽べつする相手、見くびるしかないような男の親切には、感謝どころかかえってそのためにいっそう相手をなめてしまふ、そういうものだ。

まして、ほくは中でも、特に美人でうぬぼれの強そうな女を選んで、いかがですか、と窓口の近くで招待券を差し出す。手放して相手の美しさに見とれ、手放して礼賛する態度をとる。女は自分の美しさにかねてから自信を持っている。そこへこういうおっちょこちょいが現われて、招待券をもらっていただけですか、ととび出してくる。うぬぼれと打算とで、女はたいい券を受け取るにきまっているのだ。受けとればしめたもの、あとは自然と女王と従僕の関係が成立する。

そのテスト時間が、少なくとも試合時間の二時間はある。——こう考えてくると、妻といっしょにこれなかった野球見物が、それはそれで結構楽しいものになりそうであった。

八千円を持って新宿へ

だが期待はむざんにはずれた。

試合開始前の一時間、ほくは何か所かある入場券売物の間を、もどかしげに歩き回った。

お隣りのアイスパレスや遊園地のほうでのにぎやかな人々のさざめきを横目で見ながら、ほくの女王は、ほくの女王はと捜して歩いた。

だが女同士のはなやかな一団は、たいい初めから招待券を自分らで持っていて、そのままススツと券も買わずにゲートのほうに歩いていった。

ひとりで来る女はほとんどいなかった。もし居たとしても、それらはみんな彼氏と打合せて、その夕の楽しいランデヴーを過ごすためにやってきたのであった。そういう、待ち人を待つ女の数は多かった。

そのひとりに目をつけて、相手が現われぬことを願ってほくも人待ち顔に待っていても、必ずきつと男は現われた。

やあ、すまん、と言いたげに、女の肩をいさくようにしてゲートのほうに急いでいった。

七時も過ぎた。

巨大な球場のスタンドの壁が、外側に背を向けるようにして円い放物線を描いて連なっていた。

その壁の内側に照明が映えて、あの試合開始の銘酊状態にも似た群衆の軽い昂奮が潮騒のように響いていた。

ついにほくはあきらめた。

そこで折から駆けこんできた中年のおやじに、黙って券を差し出した。彼は背が低い、コウカツそうな目でほくを見た。ダフ屋と間違えているらしい。それでもその券を、まるきりタダでもらえるとわかった時、おやじの目が急に細く笑った。



一回表、西鉄の攻撃が始まっていた。

ネット裏の二階、最前列、照明に外野の芝生の緑が、美しく光っていた。ぼくと隣合ってそのおやじは、その席がタダだということに気がひけるらしかった。ちようどやってきた物売りをつかまえコーヒーを二つ、その熱いコーヒーのカップを一つ、ぼくのほうに差し出し、どうですか、と奨めた。

彼はいろいろとおべんちやらまがいに話しかけてくる。大きく笑う彼の口からヤニくさい口臭が漂った。何ともしんだ女王さまだと、苦笑する思いだった。席の周囲には、それでもはなやいだ若い女の姿が多かった。たいてい同伴であった。にがい思いが胸の中に広がってゆく。

スターティングメンバーに久方振りに名を連ねた中西がバッター

ボックス。

だがむなしく三振でスリーアウト。この時、不意は二滴、三滴と雨のシズクがほおに冷たく当たった。見上げると空の色が黒い。いつのまにかすっかり星影が隠れてしまっていた。

大したこともなからう、と思っっているうち本式の雨足になった。

ゲームは中断され、観客はスタンドの屋根の下に避難した。ただ、外野席に、雨に濡れながら、修学旅行の地方の中学生らしき一団が、それでもその場から動きもせず、何やら黄色い喚声をあげていた。

三十分以上経過した。

グラウンドの大きなベースカバーのゴム布が、雨にすっかり濡れて、その凹み凹みに小さな水たまりを作るほどになった。

主審が出てきてノーゲームを宣した。まだ帰りもせずに待ちかねていた観客が、たむろしていた屋根の下からぞろぞろ出てきて、口口に好き勝手なヤジを飛ばした。

人波が雨の中を、くずれるように流れ始めた。

水道橋の中央線の駅へ行く途中、雨の中でほくは立ち止まった。背広のカタからズボンのひざにかけ、かなり濡れてしまっていた。このまままっすぐ帰る気にはなれなかった。頭のシンが痛かった。疲労感が思い出したように両腕の付根のあたりにわだかまって、そのまま前のめりに都電通りの水たまりの中にのめりこんでしまいたい誘惑をさそった。

その水たまりを、勢よく、泥水をはね上げながら、はなやかな女性性のグループが駆け抜けていった。

ほくは省線には乗らず、折よく来かかった都電に飛びのった。何となく都電で新宿に出たかったのだ。時間はまだやっと八時を回ったところであった。

吊皮につかまりながらポケットをまさぐると、八千円ばかりはいっていた。この八千円で、女の残虐な心を買ってみたかった。どうにでもなれ、という気持ちだった。自分をせいっぱいいじめつけてみたい、自虐の心にも駆られた。

打率三割、トルコぶろ

松竹演芸場あたりの都電通りを、東へ抜ける幾通りかの小路には、飲み屋やバーが何軒も軒を連ねている。

雨さえ降っていなければこのあたりには客の袖を引く暴力バーの女たちが、カモをねらって立っている所である。

手っとりばやくマゾヒストの渴をいやしてくれるところ、それはバーであり、ヌード写真のスタジオであり、トルコぶろであった。だが、八千円ばかりの金が資本でほつき歩いていれば、何のこともなく金はすくなくなり、ただ満たされない重い気持ちだけをかかえて、帰りの車賃は、と、ガマ口の中の幾枚かの銅貨や銀貨の枚数を数える、いっそうのやりきれなさのまま、街頭にはっぱり出されるのが関の山であろう。

八千円が一万円でも一万円が二万円でも、それは同じであろう。夜の盛り場にまぎれこむと、金は金でなくなる、もうアブクのように飛び散っていくばかりである。

それをほくは、痛いほどに知っていた。マゾヒストはせっかちである。美しい女性と対座すると、もう彼女からムチ打たれ、激しい侮蔑のことばを浴び、その足裏をなめなくなる。

バーの女の子に、いきなりそのことを要求してもムダなのだ。第一、ほかのお客さんの手前がある。だから、他に客のいない、店の間をその時間だけ独占できるような、ガランとすいた店を選ぶとす

れば、そこはたいい暴力バーまがいの素姓の怪しいバーなのである。

平手打ちも、足なめも、ましてネクタール一杯あずからぬうちに、アレツという間もなく八千円位は消しとんでしまうのである。

ヌードスタジオで三十分五百円、というのも味気ないものである。

この女の子で、およそ普通並みにもましな子はひとりも居ない。キリギリスのようにやせた女、ヘドの出そうなふくれ上がった女、部屋に行くといきなりパツとぬいで、そのきたないバンソコウだらけの内股を広げ、それでもバタフライだけ当てがった珍妙なスタイルで、さあ、早く写すか写生するかそれとものぞき専門か、とにかく早くしないと時間だよ、という、味もソツケもない性急さ。

こんなところで、こんな女に、こんなにせきたてられて、今さらマゾといったって始まりはしない。とすれば、安直に行つて効果的なのは、せめて打率三割の僥倖でもあてにして、トルコぶろに駆けこむこと以外にはない。

ダブルパンチ、四千元

ぼくはすっかり濡れていた。背広を通してワイシャツの肩まで雨がしみていた。トルコぶろの明るい店頭の照明に照らし出されてたずむと、客引きのおやじが出てきて声をかけた。

五百円をおやじの手ににぎらせながら、きれいで高い一級の女はだれだ、だれを指名にしたらよいか、と相談をもちかけた。

この場合、だれでもよいの本番では、七、八割はロクな女には行き当たらない。その腹いせにあとひとり、あとひとりと、トルコのはしごが始まってとんでもない散財になってしまう。だから、その店のおやじか、受付のボーイにチップを出して指名してもらうのが

よい。こうすれば、まずそれほどの当たりつぱずれはないものだ。部屋に通るとふろにも入らずマッサージも受けず、最初から切り出したほうが時間のムダがなくてよいのだ。

マゾの話を床にすわってひざまずくようにして訴えかける。

エリ子というトルコ娘は、よくしまった太股の皮膚をはずませるようにして、ベッドに腰をおろしてぼくのほうを見おろしている。

眼じりにアクセントがあつて、ハナの線がすっきりと通り、才氣ばしった自信をその表情にみなぎらしていた。

どだいマゾの話は、相手の女を不愉快がらせることは決してない。ただ唐突だと、ネクタールまではさすがにはばかれるのだが、そういう侮辱の仕方があつたのかと、商売気を抜きにした電流のような表情が、瞬間にその面をよぎる、あの相手の女性の反応の中に、かえって自己をその場に疎外した彼女自身の目となって、その前に打ち伏す奇妙なマゾ男の姿態をながめ返せるのである。

スポーツ愛好者だというトルコ娘と、腕ずもうをやつてぼくは負けた。けんめいに力闘したあげくに、負けてしまったという形をとった。女の子は得意気なふうに高い声で笑った。

ぼくもその声の中に溶けいって、その声の得意さを、女自身の意識で味わって、ぼく自身を笑った。

ぼくはぼくの行為に熱中できずぼんやりしていた。何かメンドくさい気もしていた。その無関心なぼくの中の一部分が、シロシロとぼくを観察していた。一なぐり千円。往復ビンタで二千元、ダブルパンチにおまけがついて四千元、そのあたりで時間が来た。ぼくの両ほおは、みっともないほどに赤い女の手形で充血していた。

予定通り西鉄―東映戦を見ていれば――かすかな悔いがあった。外に出ると、あの激しい雨足はぬぐったようにあがっていた。

■同人誌に発表された同性愛小説



小説『陳述書』（森志斐子）が描く

レスボスの愛の葛藤

嶺 野 間

①

レスボス愛を主題とした小説、あるいは、主題とはしなくも、作中にレスボス愛の情景などを点綴した小説は、男の作家のものにもすくなくない。

谷崎潤一郎の「世」、ゴーチエの「モーパン嬢」、またこれは多少ポルノグラフィに属するのかもしれないが、ミュッセの作と称せられている「ガミアニ」、そのほか、あまり知られてないものでは、枚挙にいとまがない。がそれら男の作家の、レスボス愛をかった小説は、レスビアン（女性）の女性だけのものつ、レスボス愛における深層心理にふれていず、浅層をなでているか、あるいは的はずれているか、ボヤケているか等と、その点ではほとんどが

いただけないのである。

そこへいくと、女の作家、それもレスボス傾向のあると思われる、すくなくともレスボスにつき多少の調べをしているらしい女の作家の、レスボス愛をあつかった小説は、いずれも、さすがに前記したような、レスビアン（女性）の深部心理のツボをつかんでいるように、私には思われる。

その意味で、女性の無名作家だけの同人雑誌「炎」の最近号に掲載されている、森志斐子氏の小説「陳述書」を、私は期待をもって読んでみた。

作中の主人公は、ある女子大学の国文科を五年前に卒業し、母校の講師をしている浜子という女で、この浜子と、やはりおなじ大学を三年前におわって、雑誌社に勤

めている尋子という女との、レスボス愛の関係や、その人間的な葛藤が、一五〇枚ほどと思われる作品の前半ほとんどに描かれている。

浜子は尋子との前にも、同性愛の経験をもっている。そのことを、尋子との情事のさいに、尋子に述懐しているのである。

それは彼女が大学に在学中、寮生だったところで、あいての愛人——はつきりと明示はしていないが、寮監の一人のように推測される——は、多分にS(サド)の傾向をもった女のようなのだ。

その愛人は、毎夜のように、浜子の室に通ってきて、毎夜のように、浜子を打擲する。平手打ちするのだ。

「あなたはここに愛がない」といっては打ち、「忍従は愛ではない」といっては打つ。

打たれたあとは、すぐアザになった。ときには、あいての爪が浜子の膚に、深くささって、血がふきあげたこともあった。浜子があいての打擲にたいして、すこしも抗わず、じっと服従していることが、あいてのこのころをいらだたせ、いっそう強く打ったからだ。

浜子には、その愛人の打擲の心理が、まだ理解できなかった。痛さをこらえて、服従するよりほか、愛の証しをたてるすべを知らなかったのである。

そのうちに、浜子は、みずからの膚ににじみでたアザ

や、ふきあげる血に、みとれるようになった。

アザは日がたつと、だんだんに色変わりしていった。ドスグロい青に、むらさき色に……。それをひとりで見ているのは、もったいないと浜子は思った。

あいての愛人は、浜子との夜々のために、日に日に生命の核をすりへらしていくようにみえた。それほど彼女は、そのことに精魂を注ぎこみ、生命を燃焼させていたのであろうか。

「それ以外にこの女子大学の学生生活になんの愉しみもないことがわかったのよ」

と浜子は自分の場合をそういつている。そう、
「愉しみ」といつているのだ。

目にみえて、あいての女は脆弱になった。ある日、彼女は体育の時間に、あつというまにアキレス腱を折ってしまった。半年ちかくも足が不自由だった。が、そんなときでも、彼女は、階下の自分の室から、二階の浜子の室に通ってきた。両の手にスリッパをはいて、長い廊下や階段をいざって歩いてくるのである。

それほどまでして、みずからの欲望を果たしたあと、その愛人は、まるで雌に食べられてしまう雄のかまきりみたいだ。死んでしまった。

作者のこのくだりで、述懐風の会話のなかで、ひとりの女の、愛におけるすさまじい妄執をえがいている。





「愛というのは、快楽を包む柔軟性、潔癖性に違いない」と作者は浜子にいわしている。だから、その言葉を借りれば、その愛人の場合、「潔癖な妄執」というべきであろうか。

「わたしは、わたし以外の他人の欲望だと思ってつい甘えたのだけれど、わたしが一晚中眠らなかったり、裸になったりしたことは、結局は一人の人間を死へ誘うことだったのね。だから、もう雌のかまきりには二度となくなりたくない」

とも浜子はいっている。

浜子はいいてをオス・カマキリになぞらえ、みずからはメス・カマキリと思っているのだ。あいての愛人の打撃の下にあつて、浜子は、そうした奢りのところをもった女なのである。

②

尋子は、前記のSの女とは、対蹠的ともいうべきタイプの女である。

浜子が人淫乱Vともみているほど、きわめて肉体的な、性的人間である。尻腰はフラフラとしていて、時と場合では、異性にでも——何人の異性にでも、とんでいく女だ。

どんよくな、不逞さももっている。そのことを浜子は、

カエルにたとえている。

「蛙はね、なんでもかでも食べてしまうわ。そして、それから、口を大きく開いて胃袋を掴み出して毒のあるものをとり除く作業にかかるの。河原のせせらぎでさらさらと胃袋を洗うとゆっくり肝臓のなかにおさめるの、また胃袋がからっぽになるでしょう。するとまたなんでもかでも食べはじめの。尋子も蛙に似てる」

それにたいして、尋子が応酬する。

「では先生は、蛙みたいな尋子をどうして追い廻すのです。入寮式の夜の一回ぼっきりにしておけばよかったのに」

「あら、わたしの方が蛙に見込まれたのよ。今に尋子にのまれて、それから捨てられる」

このふたりの会話にもあるように、浜子が尋子に最初の手をあたえたのは、尋子たち新入生の入寮式の晩であった。

そのころ、浜子は寮監だった。卒業と同時に、それを命じられたのだ。

広間の電灯はことごとく消され、かすすくない燭台が、ごくせまい範囲にだけ、うすぐらいひかりを投げいていた。

いうところのキャンドル・サービスである。

「あれは学生の感傷を充すだけではないようね。寮監た

ちを欲望の抑圧から救い出すためにもなるのよ」と浜子がいつているそれ。

その暗がりのなかで、新入生の名がよみあげられる。歌がうたわれる。しくしくとすすり泣く少女もいた。

が、この夜のために、爪を磨いでいる魔女もいた。浜子もそのひとりだった。浜子は機会をみて、しずかにたちあがると、ひとりの少女の前にすすみよった。しずかに、少女のくちびるをくちびるで蔽った。

かつて自分が、ひとりの女からされたことを、浜子はその少女にしたのだ。

少女はなぜか、すこしもうろたえなかった。そうされるのを予期でもしていたかのように、おちついていて、その大胆さに、浜子のほうが、むしろ気負されるおもいだった。

その少女——尋子は、女は女らしくという、この大学の感覚に抵抗をしているのか、いつもズボンをはき、スポーツシャツをつけていた。

ひとりで男装がっているようすが、浜子は、尋子のそうした男がった装いからはみだしている、女のおいばかりを嗅ぎとった。たとえば、「襟もとや頸筋から果実のような女のアウトラインが匂う」うんぬん……と作者はしるしている。

このあたり、はつきりとレスボス愛をみつめる、女の

作家の眼であろう。

たとえば浜子が「メス・カマキリ」であるとはいっても、尋子のなかの「男V」にひかれたのではない、尋子のなかの「女V」に魅せられたのだ。

尋子の逞しさに誘いこまれたといっても、それは、女であることの逞しさに誘われたのだ、と作者はかげの言葉でいつているようである。

尋子はこのころすでに、タバコを喫っていた。せんたく場の裏の空き地などに隠れて、こっそり……と。

そんな尋子を、浜子はややはなれた場所から、射るような眼でみはっていた。そんな尋子のからだつきに、ぽおーとなにか妖しさがともるのを、浜子は感じる。と、浜子はいきぐるしくなり、めまいにすら襲われた。

③

浜子と尋子との交情のさまをしるしたくだりを、原文によって、二、三みてみよう。

「尋子のかなり重い両足が浜子の脛をすぐ横転させてしまふ。繰り返し経験したにしては少しもよい格好ではない。むしろのろまな足に絡まれ汗にまみれてまで連れ合うことに対しては浜子是否定的だ。浜子はもっと激しい痛みがほしい。だが大抵の場合、尋子は尋子の手順を裏切ったことがない。どこで拾ってきたのか密事に汚れた





言葉がぼんぼんと尋子の口をついて飛び出す。ついには「先生、許して」と云う。そのときから、軟体動物そのものになっただらしない尋子の臍を、浜子は一時預からなければならぬ。そんな尋子をだきしめながらこれでもしやんとした臍に立ち直るのだろうかと思ふ。その見込みのつかない尋子の臍のなかで一際火のかたまりのように息づく乳房を、浜子は板のように扁平になるまで押し潰す。それは半ば意地と云ってもよい。その間中なぜかゆとりは失わなかった」

ここに現われるいくつかの「浜子」という文字を、すべて男の名におきかえれば、そのまま男女の情事の場面になることに、気がつかれる読者もあるにちがいない。が、だからといって、この場面がニセの描写だと私はいうのではない。りっぱにホンモノであると思う。

どんなことでもあけぱなしに話してくれる、あるレスピアン（呼吸器）の女性からきくところによっても、交歓のさい、一方（多くの場合、女性型の方）が先きに溺れてしまえば、他の一方がその体を預かって、適当にみちびいていこうとするとは、ふつうのことだという。

この場合にしても、尋子は徹頭徹尾、女の生理である。女の生理がさせる溺れ方である。しかも彼女は、すこぶる肉体的な女ということになっている。

そのグニャグニャに溺れきった尋子の体をもちあつか

いながら、浜子は意地のようになって、あいての乳房をいじめつける。女にたいする男の立場とかわりはないのだ。

浜子はじつは、切って血のでるような、もっと痛烈なものにかがほしいのだが……それは尋子には望むべくもないのである。

ついで、こんな文章がつづく。――

「尋子のような女を淫乱というのだろうか。浜子はときどき尋子が怖ろしくなる。しかしそれによって、時には浜子の臍から水のようにほとぼしる何かがあった。倒錯には違いないが、尋子の陥没の状態に平行してふと呼び醒まされる浜子の恍惚には、世間一般の人間たちがむさぼる官能にはほど遠い危い喜びがあった。二人の臍は二人合せてはじめて、鮮烈な大輪を開花させると、いうこと」（傍点筆者）

おわりの傍点した章句については、男女の情事の場合にもあてはまるように思うがレスピアン（呼吸器）の愛撫には、それとはまた別のなにかがあるのであろうか。局外の男性である私には、窺い知るところではない。

「尋子は急に鼻を天井に向けて深呼吸した。あれの前ぶれに違いなかった。するとまさしくそうであった。いきなり浜子のショウトカットを両手で洗髪するときのようにほさほさと揉んだ。一寸見には、尋子の狂暴なふ

るまいは魅力的だが、これもみな、肉体が迅速に疾くことを希む尋子自身のプロログだと見破ると、浜子は軀が冷え冷えとした。揉み崩された髪毛だけが熱い糸になって粘り合い、尋子の誘う快樂の方へひっぱられていった。

へわたしも暴れてみようかV

浜子はそう思ったができなかった。それでも、尋子の魂胆に封じこめられてしまうだけのことはしたいし、またしなければならぬ

ここでは、浜子のほうがリードされているかたちだ。ただ、尋子のそれと異なるところは、浜子は「……したい、しなければならぬ」という計算をしながら、つまりそれだけのこころの余裕をもちながら、リードされているのである。

「いつもの手順の繰り返しだが尋子の背後に廻って立つ。尋子のシャツブラウスの上から浜子は顔をかぶせ唇を当てがう。平たく土人の唇のように潰して力いっぱいきつく尋子の背なかを吸う。体裁やリズムなどは捨ててしまっている。だしぬかれたわけでもないのに尋子は肩をそらしてうつうつとうめき声を洩らす。(中略) 尋子の軀は浜子の「時」になくてならない完全無欠の受動体という他はないのだ」

「けれど間もなく尋子がどんな無駄口も叩けなくなり、

軀の部分々々を交互にけいれんさせると、浜子は將軍のように晴れがましさに溢れ、充分余裕をもってひとり心地に酔うことができた。(中略) 浜子は調子づく。足を折り曲げ背なかを丸め、両手で被った手布の内側を握りしめ、鼻腔をびくびくさせてみる。するとたしかに、けものの臭いが皮膚の上にうす皮のような膜をつくってくれている。皮肉にも人間らしい気持が一番溢れるのはこのときだった。息の詰まるほどひとりで笑いがこみ上げて止まらない」

ここにいたると、完全に浜子のリードだ。

心奪れる浜子は、あいてを愛しながらもあいてをみくだし、みくだしながらもみずからのからだのよろこびを伴いながら、あいての尋子の体を思うままにしていくなのである。

前の愛人との場合、浜子はあいての打擲の下にあって、うわべはあいてのなすままになっていたが、じつはだんだんと浜子があいてを操っていたのであった。

外見、控え目で、脆弱で、多分に人女Vなのであるが、浜子は所詮、アクチブ・レスピアンなのであろうか。



うるわしき夜のみ眺めて語りたまふ
な。傷しくも悩める君をのみわれは求
むる。狂ひて叫ばん唇に、消えも失せ
なん心して、わが愛する人よ。泣きた
まへ。唯、泣きたまへ。

★真昼の眼

オフィス街の退け時。

石の巣箱が蓋を押し開けられて、色とりど
りの羽を拡げた昆虫が一斉に飛び立ってゆ
く。赤、黄、緑に紫。解放されたよろこびを
石畳の上に刻んで。

カツ、カツ、カツ、カツ

石を刻むたがねのように、規則正しく。や
がて、幾万もの足音が入り乱れ、咲き乱れ、
大都会の香に魅かれて、思い思いに散ってゆ
く。

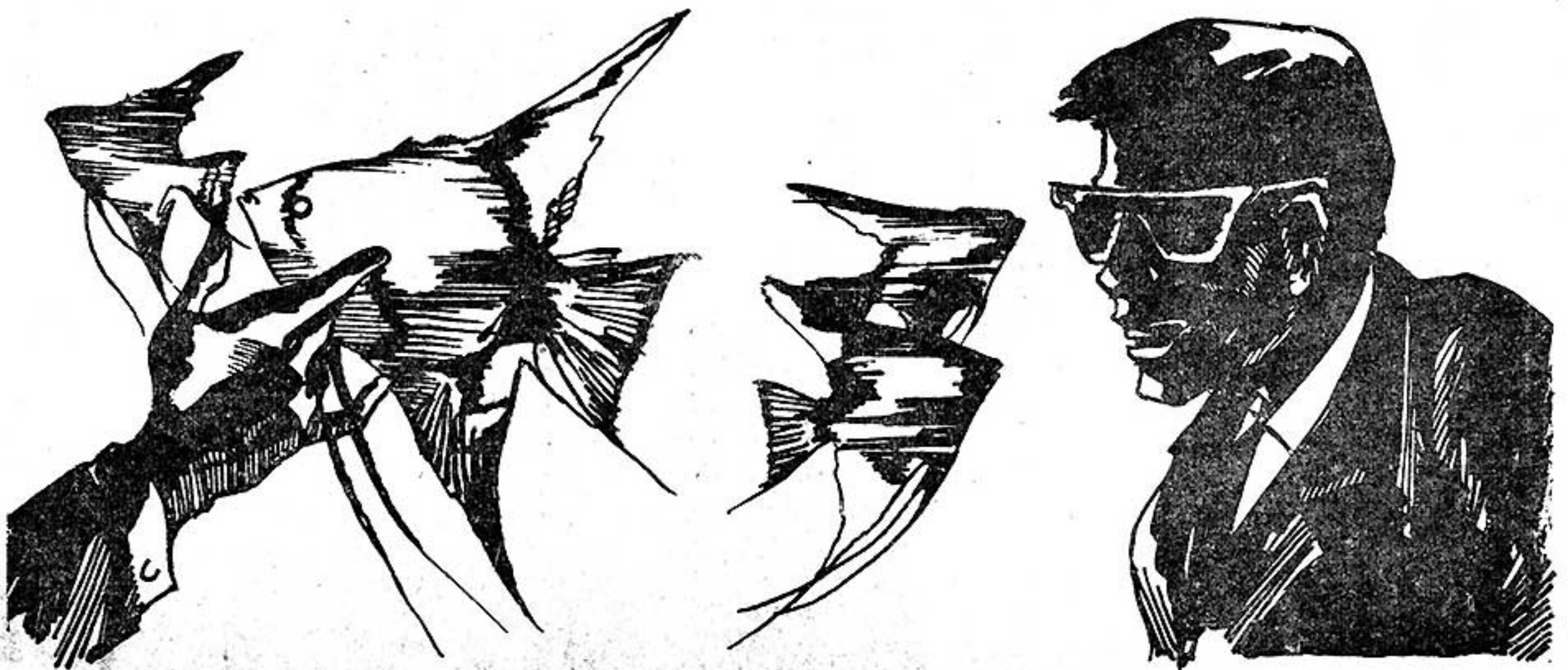
大都会は欲望の街。ほったの赤い女の子
の、可愛らしいアンミツへの食欲から、腹の
せり出した重役様の、青畳の香のする四畳半
への欲望まで。皆思い思いの欲望に鼻うごめ
かせ、心ときめかせ、腕時計を何となく気に
しながら、ひとときの心の休らぎを求めて散
ってゆく。我を忘れ、人の眼を忘れ、ただ自
分の眼にうつるものに貪婪な瞳を向けなが
ら、散ってゆく。

■エンゼル・フィッシュはいかが

大都会の夜の底で

九十 九十 郎

江 渕 晃 夫・絵



他人の眼なんか気にしてたんじゃ、楽しいことも十分楽しめやしない。

その通り、その通り。だけど、美しいお嬢さん。タイトスカートの陰に見えかくれする可愛い膝小僧に気をつけて。

ほらほら、ブラウスの深い切れ込みの奥から、お乳のふくらみが……。

いいのよ、いいのよ、これくらい。淋しい男たちにサービスしてやらなくちゃ……。

男たちは、おそろいの白いユニホーム。ネクタイに首を絞めあげられ、長いズボンに汗をにじませて、おそろいの紙袋を小脇にかかえ。

カツ、カツ、カツ。

白のユニホームはその下の黒ずんだ欲望を隠すため。長いズボンはその陰の毛の生えたおそろしげな足を隠すため。そして、自分の首を絞めあげているネクタイは、ほどけばただのヒモですよ。

ヒモ、紐。美しいお嬢さん。ヒモで何ができると思います？ あなたの晴れやかにひろがっているその羽を、縛ることができるんですよ。

いいのよ。あたし縛られたいの。いとしい人に縛られて、息もつまる程愛されたいの。美しい女を見る眼は誰しも持てる楽しみ。



ネクタイはすべての男の持っている特権。気をつけなさい、美しいお嬢さん。本当に。

散ってゆく。散ってゆく。赤、白、黄の可愛い鳥たち。虹のように歩道をいろどり散ってゆく。

「あの女だ。薄黄のブラウスに茶色のスカートをはいた。ほら、隣の女と顔を見合せて笑ったろう。小鳥のように無邪気に笑ったろう。あ、ハンドバッグを持ちかえた。あの綺麗な女だ。くるぶしがキュッと引きしまってハイヒールがよく似合う」

「わかりましたよ」

「間違えるなよ。小鳥のように明るくて、小鹿のように無邪気なんだ。そら小切手」

「連絡は『鹿も四つ足 馬』。広告欄を見落としなく」

「したら例の場所に、例の時間に飛んでゆく。何をおいても」

「お年寄りに興奮は禁物。長生きして下さいよ」

禿頭は欲望の輝き。小切手は欲望への入場券。クロームの車体をひからせた高級車は優越感のガスを吐き出してすべってゆく。

大都会は死の谷間、取引きを終えた男は、黒い手帳をパタリと閉じる。

ああ、お嬢さん。そこにゆく美しいお嬢さ

ん。あなたの体は、あの黒い手帳の中に、押し花のようにはさみ込まれてしまった。

★恋人たち

恋人たちの夜は暗く、そして明るい。遠景の失われた風景の中に、いとさといらだたしさがさざ波のようにゆらめいて、夜光虫が欲情の波紋をほのかに照らし出す。

「小百合さん」

「誠さん」

あとは言葉にならず、ただひと手を取りあい、肩を寄せあい、夜光虫の燃やす燐光が暈のように二人を取り巻く。

君がほしい。ほしい。ほしい。

男は白いユニホームの中でもだえる。

どうしてそんなに臆病なの。ああ、抱いて抱いて。しっかり抱いて。

女の、ふっくらした乳房が静かに盛りあがる。そして二人はささやき交わす。心の底の満たされぬ欲情を、みやびな言葉にすりかえて。

「好きなんだ」

「愛しているわ」

ほしい、ほしい、ほしい。

抱いて、抱いて、抱きしめて。

★夜の誘惑

大都会は誘惑の巷。欲望を引きつける磁石の陰極。あるいは毒々しい原色のよそおいをこらしてまたたき、あるいは青白い蛍光灯の下にひそやかに吐息をつく。悩める男には色赤い魔法の美酒を。心貧しき女には黄金の輝きとダイヤモンドの魅惑を。そして、淋しい男には美しい恋人を。

「旦那、いい娘がいますぜ。どうです」

「あら、これルビーじゃないの。あたしにくださるって、ほんと？」

ほの暗い酒場の片隅にうずくまる欲望の蛇は舌なめずりをして、かま首をもたげる。

「ママ、あの娘を世話してくれよ、な」

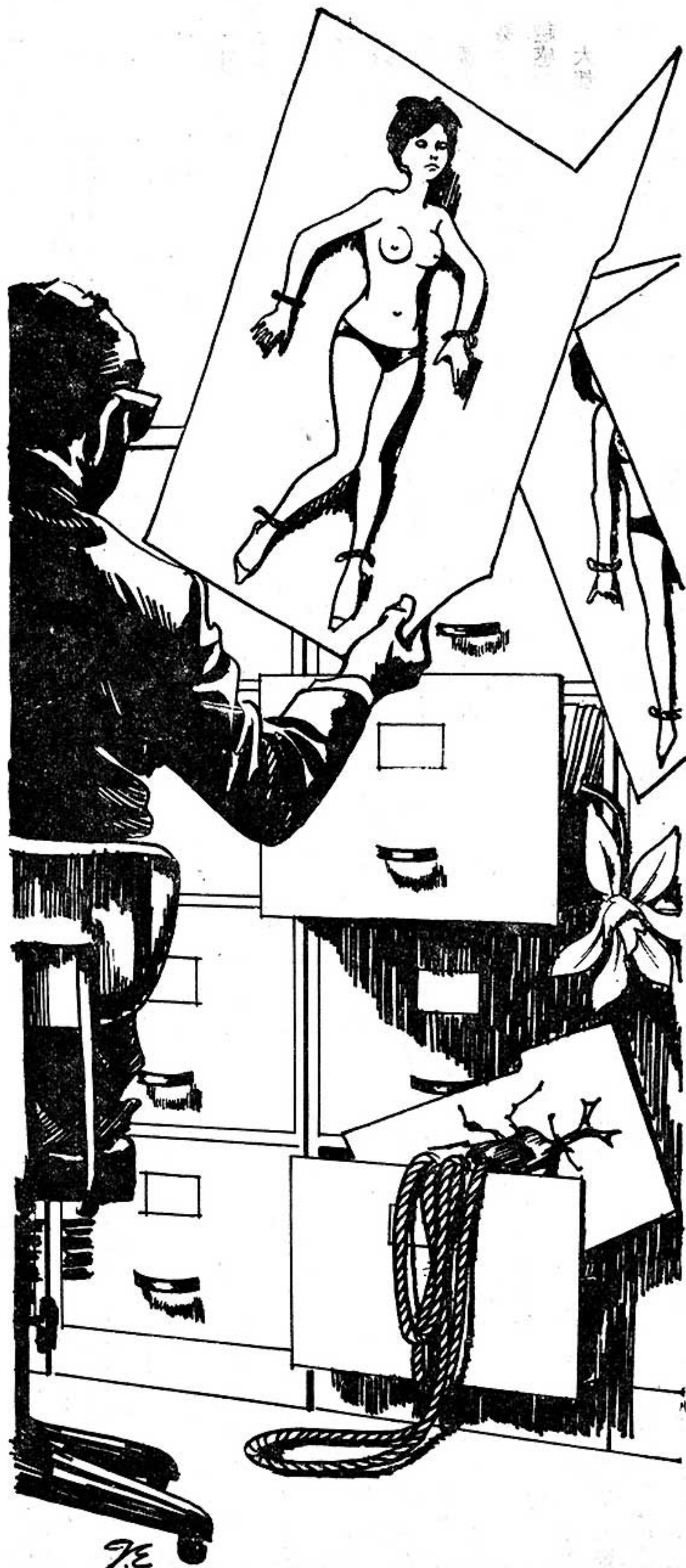
「いいか、ぬかるんじゃねえぞ。奴がひるむ所を、四方から寄っていつて……」

「ハジキ？ いくらだ」

厚化粧の街は聞いている。ネオンはウインクを交わしあい、電柱は高い所から見降ろしている。

「いくら言っても無駄だよ。よしてくれ」

「じゃ、これ以上おすすめしません、もし気が変わったら、一週間後、この時間にこの場所に来て下さい。その時いらっしゃらなかったら、それでこの話はなかったことにしてく



ださい」

「待つ事はないよ。さあ、もう僕にかまわな
いでくれ」

中には誘惑に強い男もいる。しかしそれは
時間の問題。

誘惑は心のすきを待っている。まともに歯
の立たない相手には時間をかす。ただ待つて
いる。相手に欲望があるかぎり、誘惑はいつ

までも待っている。たばこをふかして待つて
いる。

★屈 服

「相手のお名前は」と商人が聞く。

「日野小百合」

恋人の名を口にする男の唇はかすかに痙攣
する。

「住所は、勤め先は、趣味は、友達……」

全部教えて下されば、彼女のすべてをあな
たにさしあげましょう。気の弱い殿方には勇
気の身代りを。もてない男には、美貌の代用
を。ただしお金の代用だけは平にご容赦。男
には女が必要。女には男が必要。私どもは、
ただ仲を取り持つだけなのです。一夜明けれ
ばそれでおしまい。すっぱりすべてをお忘れ

下さい。お忘れにならない方には、当方で忘れさせてさしあげましょう。サービス業は信用が第一。

「連絡は、『恋人よ帰れ とく』。毎日の広告欄をお見落としなく。では」

恋人を売った男は酒を飲む。後悔にさいなまれ、苦い思いをアルコールに燃やしつくそうと酒を飲む。悪魔のささやきの甘さはサッカリンの味。アルコールにも中和されないサッカリンの味。

★張られる網

現代はファイリング・キャビネットの黄金時代。現代人はピンで板にとめられた、死んだカブト虫。

「組織」のキャビネットの中で、あなたは原紙のフォルダーの中に並べられ、ファイリングされたコレクション。あなたの温かくふくよかな肉体は、分厚いクリーム上質紙の上をのたくる青と赤のインクに分解され、ナフタリンの匂いのする商品に仕上げられる。

いから始まってスに終るあらゆる注文本の名前が「契約中」の棚に幾十冊のファイルと成って四角な顔を並べている。本人も知らぬ間に彼女のすべては裸にされ、剥き出しにされ、切りきざまれ、調理され、客の前に出さ

れるのを待っている。そして、一夜明ければファイルの上に、大きく赤く(済)とハンコを押されて、地下の倉庫に放り込まれる運命を待っている。

ああお嬢さん、気をつけて。人の眼に気をつけて。ふとした街の出会いにも、銭湯の湯気の陰にもあなたをねらう眼が光っている。おしゃべりの気のいいお友だちにも気をつけて。ほら例えば……、

「あら、小百合さんのこと？ そうね、親友といっけいいくらいよ」

「じゃ教えて下さいよ」

「でも、あなた何なの。興信所のかた？」
(恋人にしちや、ちょっと眼つきが悪いわねえ)

「これ秘密なんで、ご本人には黙っていて下さいよ。実は……」

「あら、ご縁談？ そうね、何かからお話したらいいのかしら……」

秘密に弱いのは女の常。自分だけに打ち明けられた秘密には世界の重みがある。

××大学仏文科三年生。きれいで、頭が良くて、おしとやかで、本当の箱入り娘なのねあの人。仏文の若い助教授が夢中になって……。

でも、どうしてそんな事まで必要なの。た

った一人の女をつかまえるのに。

ああそれは、たった一夜の外泊を何でもないうように見せかけるため。箱入り娘のお嬢さまに、嫁入り前のキズがつかないようにするための、涙ぐましい当社のサービス。サービス業は信用第一。

集まって来る、集まって来る。彼女の肉が血が、可愛い吐息の一つまでが、集まって来る。伸びやかに胸を張り、青春の息吹きに満ちた乙女の周囲に網がめぐらされ、次第にすぼめられ、せぼめられ。時来れば……。

「どうやら、ここらへんがいいところらしいな。毎週二回フランス語会話を勉強しに出かける。これだ。午後四時から六時まで。時間も丁度いい。誰か居ないか、フランス語にたんのうな女は。彼女が心を許すような女は」
「マキはいかが。貴婦人然と取りすまし、フランス語を知っているのも好都合。有閑マダムのみまつぶしに、フランス語にみがきかけると見せかければ」
「箱入り娘はほれ込んで、自分で罠に入ってくるか。マキを呼べ」

★月の渚で

夜の海に月が昇り、赤い月がアドバルーンのように空に浮かび、寝もやらずささめいて

いる浜辺を、高く高く見降ろす。

渚に波が銀に砕け、輝き、背もあらわな女の背を抱く男の黒い腕のこわい毛をやさしく照らし出す。

お嬢さんは恋人の抱擁をふりもぎり、ほてった体に月の青白い光を浴び、ものうげな海の愛撫に身をまかす。

ああ、あたし、しあわせ……。

月影は千々に砕け、幾重にも幾重にも重なりあい、もつれあい、彼女の体を押し上げ押し下げ、ころよいリズムにのせて、沖へ沖へと運んでゆく。

ふと、だしぬけに、音もなし、ボートが一隻、黒い影をひいてお嬢さんの傍に寄って来る。中にはたくましい男が二人。一人はオールをあやつり、今一人は舵を取り、月の光に濃いサングラスをうつろに光らせて。

「何するのよ」

叫びもあえず、お嬢さんの細腰は男の腕につかまれ、引きあげられ、大きな手のひらが口をおおう。あらがう腕は背中にねじり上げられ、氷よりも冷たい手錠をはめられ。上体がボートに仰向けにされ、水を蹴る雌鹿の脚は折りまげられ、そろえられ、枷がキラリと輝き、カチリと音がして、それでおしまい。オールを取る男の膝に仰向けにねかされて

お嬢さんは、取りたての生きのいい魚のようにうごめき、はねる。

ああ、助けて、助けて、

お嬢さんは猿轡の奥で声にならない悲鳴をあげて恋人の名を呼ぶ。きつとあの方は助けに来てくれる。たくましく陽焼けしたあの腕で、この男たちをやっつけて、あたしを救い出してくれる。きつと、きつと。

だが、月の形を小さくうつした黒いサングラスの四つの眼は、無表情に女の願いを見降ろしている。唇だけが笑っている。

呼ぶがいい、お前の恋人の名を、呼ぶがいい。おれたちは、そいつの合図でお前さんをお願いに参上しただけよ。お前は餌にかかった魚。さあ思い切りはねまわって美しい白魚のおどりをを見せてくれ。

男の手が伸びて、海水着の肩をはずす。ういういしいお乳のふくらみが二つ、月さえはじらうまるやかさを見せて、輝き出る。

だが、お嬢さん。こんな事くらいで泣いてはいけない。これは男たちの退屈しのぎ。いわば役得。あなたは運ばれてゆく、連れられてゆく。トランクにつめられ、車に積み込まれ、あなたを注文した、あの禿頭の男のもとへ。

あなたは注文主以外の者にはただの商品。

あたたかくにおやかな、こわれやすい商品。この男たちは、商品をただ検査するだけ。

さあ、泣かないで、落ち着いて検査を受けましょう。大事な商品に傷をつける商人は居ませんよ。泣けば、ほら、お月さまがお空で笑っている。

★期待

汚れちつまた悲しみに
いたいたしくも怖気づき
汚れちつまた悲しみに
なすところもなく日は暮れる……

男は待っている。期待と不安と後悔に、貝がらのように小心な心を切り刻まれ、さいなまれながら、それでも胸おどらせて待っている。

「誠さん、近頃はどうしました。顔色もすぐれず、食欲も進まないような……」

母一人子一人のつましい夕餉の卓に、母親は息子が子供の頃好きだった食べ物の幾品かをそろえて、食卓にさそう。

母親は知らない、息子が飢えているのを。乳の香するゼリーではなく、舌にとろける水蜜桃の甘い口づけに飢えているのを。

「ああ、うるさいなお母さん。なんでもないんです。ちょっと勤め先でむずかしいことを



やってるんです」

母親は不安である。この自分よりも大きく成長した息子の男くさい体の中に、どのような欲望が渦巻いているのか。

「まさか、お前。誰か好きな人でもできたんじゃないや……」

「そんな、お母さん。本当に何でもないのですよ。もうすぐ良くなります」

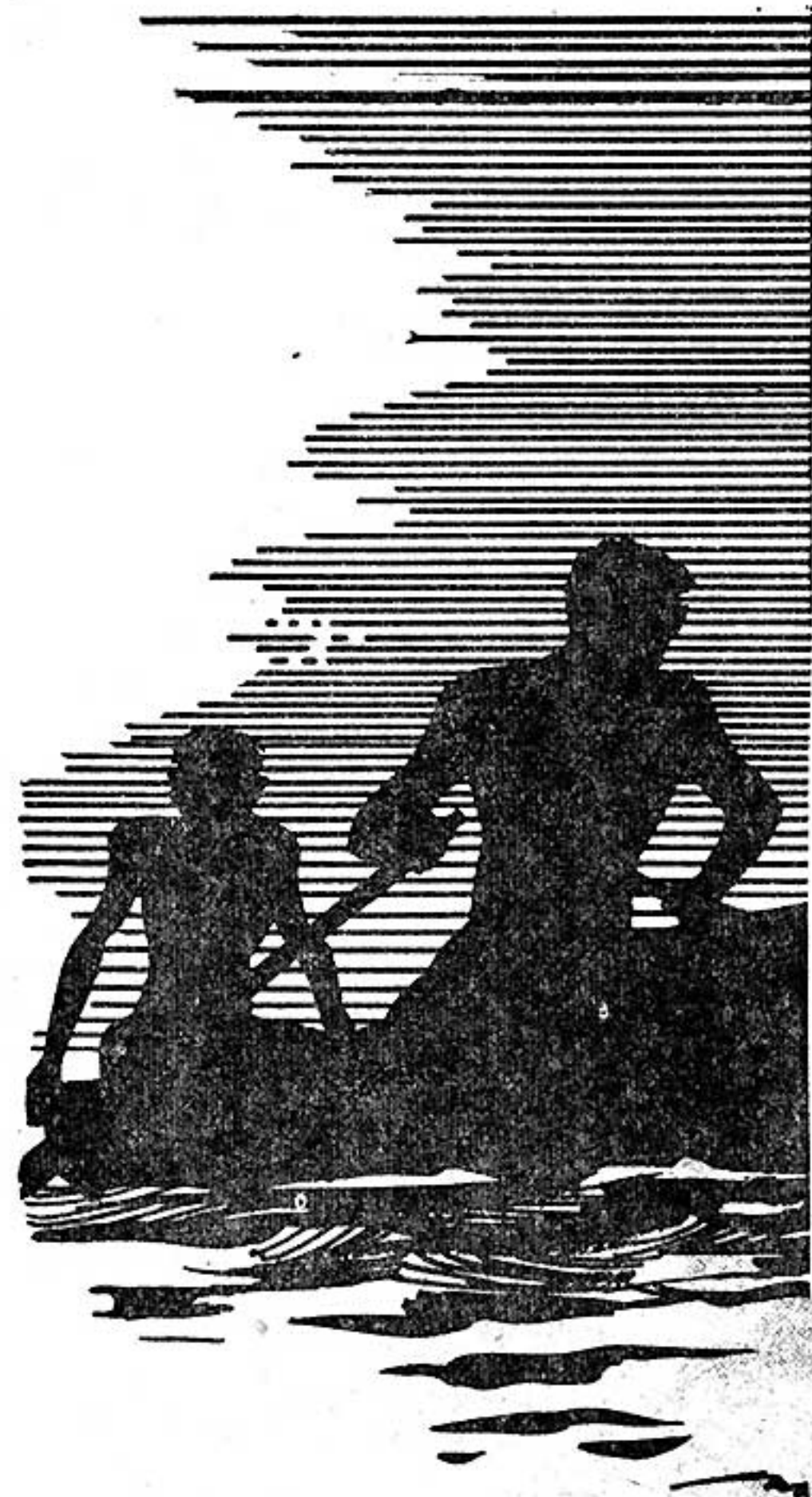
そうだ、もうすぐよくなる。毎朝の新聞の広告欄、世の中のありとある欲望を秘めて無表情な字句を連ねている広告欄。その中にただひとこと交わる詩的な文句「恋人よ帰れとく」

それさえ見れば、すぐによくなる。

昨日の事だった。「鹿も四つ足馬」という文句をその欄で見つけたのは。それは何の暗号だったのだろう。どのようなしめしあわせがそこに隠されていたのだろう「恋人よ帰れとく」と同じ何かであろうか。しかしこの男には何の関心もない。それはただゆきずりの人の顔、頬を吹き過ぎる風。幼児誘拐の身代金請求の符牒であろうと麻薬取引の暗号であろうと、今の彼には何のかかわりもない。そして、ただ「恋人よ帰れ とく」

そして、遂にその朝が来る。

それは詩的な文句とはうらはらに、平べっ



たく縮かんだ活字に組まれて、周囲の角張った、すき間のない文字の羅列に押しつぶされそうになって、おずおずと男の胸に語りかけてくる。

「恋人よ帰れ とく」

★甘 い 罌

「あら、わたくしの方からお引き止めしたのですもの、お送りしますわ」

そう言われると小百合は断わり切れない。それに、この「お姉さま」の態度には、どこかことわり切れない威厳がある。同性を酔わせる美しさがある。生まれて始めてクラブなにかに誘われて、行く気になったのもそのため。

お母さま、こんなにおそくなっちゃって、心配していらっしやらないかしら。

だが、表には自家用車の扉を開けて運転手が待っている。

「小百合さん、さっきのショウ、どうお思いになって」

言葉がグサリと、まだほてりのおさまっていない胸に突き刺さってくる。

あのショウ。裸の男と裸の女のバレ―。金の鎖が女の体に巻きつき、長い鞭がうなり、

からまり、もつれあい。白と黒とが入り乱れライトのピンクが血の赤に躍り、狂い、女の唇がひらかれ、ぬめやかにひらかれ、男の黒タイツが、それにからまり、それを抱きしめ……。

「どうって、あたし……」

「ホホホ、小百合さんって、まだほんとにねえねなのね。そんなに顔を赤くして」

お姉さまは、そっと小百合の手を自分の両

手の間にはさむ。暖かく柔かく、心のたかぶりに震えている手。

「いとしい方に、あんなにして縛られ、いじめられて固い腕の中に抱きすくめられて、死ぬ程愛されたいとお思いにならない？」

その言葉のひとつひとつが、初心な乙女の胸のかたいふくらみを羞恥にまみれさせるのを知りながら、お姉さまは語りかける。

たとえ望まなくとも、お前はもうあたしのもの。見知らぬ男に捧げられるいけにえ。男の好き心をそその可憐な玩具。

「きらい。そんなことおっしやるお姉さま、きらい……」

ふと、優しい恋人の面影が浮かんでは消える。そっと抱いて、キスしただけの、あの誠さん。

お姉さまは、小百合のふっくらとした掌を、やさしくもみほぐす。時々手を引こうとして、ビクツと指に力がこもるが、またすぐとろけるようにお姉さまの掌の愛撫にまかせきりになってしまふ。

この可愛い小雀を自由にしたいと言いだしたのは、どんな男だろう。今、例の家で、あたしたちの到着を待ち構えているのは、どんな男だろう。出来ることなら自分が代りたいとさえ思うこの初心な小雀に眼をつけたのは

何という幸福な男だろう。

ああ、この綿菓子のようにもろく、おいしい
そんな娘。興奮してしつとりと肌をぬらして
いる、この小雀の羽根を思い切り引きむしっ
てやりたい。

魔女はいけにえを地獄に突き落とす楽しみ
を増すために、悪の快楽に薬味を加えるため
に、いけにえを、更に更に甘い恍惚の高みへ
と引きあげてゆく。

眠らせてから連れ込もうか、連れ込んでか
らそれとせよとせようか。あたしがベールを
ぬいだときの娘の驚きを早く見たい。あたし
を呪い、哀願し、おどし、果てはただ涙にな
きくれる、そのいじらしい姿を見たい。とめ
どもなくあふれ出る涙は真珠の首飾。戦き訴
える唇は珊瑚のブローチ。何より好きな贈り
物。

ああ、それから、家に電話をかけさせるの
だ。今夜は「お姉さま」の家に泊るので帰れ
ないという事を。馬鹿な母親は電話口であた
しにペコペコ頭を下げて、娘が世話になるお
礼をくどくどのべたてるだろう。「お姉さま」
の家なら安心。ふつつかな娘をどうかよろし
く頼みます。ええ、ようございます、どうい
たしまして、一夜で立派な女にしてあげます
とも。死ぬほど楽しませてあげましょう。あ

あ、ほんとに全く、サービス業は信用が大
切。

いけにえの乙女は知らない。恍惚と伏せた
まつげを細かくふるわせ、乗った車が見も知
らぬ暗い街へと入ってゆくのを知らない。

★かごの鳥

「どれどこに居る。わしの可愛い小鳩はどこ
に居る。早く出せ」

「そうせかれずに、落ち着きなすって。かご
にかって逃げないようにしてあります」



「ああ、わしば待ったぞ。毎日、毎日の新聞か、一日千秋の思いで待ちこがれたぞ。会社の帰りにあの娘と顔を合わせるのがつらかった。あのほっそりした首すじの後に鼻を押して、どこまでもついてゆきたかった。くびれた腰がわしの抱きしめるのを待っているように見えた。歩きたびにヒクヒクおどる尻を見ると……」

「年甲斐もなく頭に血が昇り」

「我を忘れてむしゃぶにつき、ブラウスを引き裂き……」

「スカートを剥ぎ……」

ああ、本当に道の真中にでも素裸にしてしまいたかった。いずれ手に入ると思えばなおさら心はつとり、今眼の前に陽気にはしゃいでいるのが気をそそのるのだ。

「それも、もうおしまい。欲しいものは手に入れぬ中が花。年寄のひや水。さあ、あなたの可愛い小鳩さんはかごの中。あなたのおいでを待ちしております。ただし、あんまりはやって、お命を縮めませぬよう御用心」

「わかっておるわ。いのちあつてのものだねじゃ」

檻の戸が開き、あかりがともる。

ああ、お嬢さん。あのきらびやかな羽根はどこ。かほそい首は金の鎖にとめられて。よ

くしなう両手はうしろに縛られて。

ほら、お嬢さん。淋しい男がやって来る。もどかしくネクタイを解きながらはいつて来る。ピンクの絹のクッションの柔かみの中に身を縮めずに、さあ、そのサービス満点の姿をお見せ。

★小百合

ここはどこ、とこやみの国。これはただ一夜の悪夢。食べ過ぎた夜のまがましい夢。

「さあ、小百合さん。お母さまも御安心なされたし、後はただ、殿方を待つばかり。あなたに愛される幸福な殿方は、いったいどんな方でしょう」

魔女はささやく。手の中の小鳥の身悶えを、楽しみながら、赤い唇の女はささやく。

お注射が痛いのは、針が肌につきささるまでのこと。ささってしまえば、たとえちよっぴり血が出て、毒を含んだ液体が注ぎ込まれても、痛くないものよ。

可愛いいけにえの小雀はふるえている。もだえている。椅子の上に縛られて、どうしようもなく、掴みかかる男の手を待っている。

ああ、お母さま。誠さん。

★誠

隠しことは恋につきもの。男はマスクの奥に燃え上る瞳を隠し、髪を逆立ててふるえている。ふるえている。いとしい恋人を我がものにできる興奮のためか、我が犯した罪の行ないをおそれてか。

「ああ、僕の姿を彼女に見せる前に、のぞき窓から彼女の様子を見せてくれないか。どんなにおびえ、どんなにおののいていることか。こわいのだ。こわいのだ、この僕も。出来ることなら、他人とこの役を代りたいくらいなのだ」

「そして？ そしてあなたは、それをのぞき見するだけ？」

「そうなのだ。あのけがれない恋人に、僕の手を触れたくない。内に欲望がたぎっている、この手だけは触れたくない。この燃え上がる肉体を、彼女の前から消してしまいたいのだ。だからこそ……」

「だからこそ？」

「だからこそ、こんな事までしてしまっただ」

「わかります、わかります。がしかし、恋とはもともと罪なもの。禁断の木の実の実は五体をしびれさす。よししびれても、食べねば癒えぬがこの病。自分の手を汚さずに、恋しい人の身を汚そうとは、いささか虫が良すぎると

いうもの。では、お話通りにいたしましたしょう。

現代人は何事にもアリバイをほしがらる。のぞき窓は現代の隠れみの。見られないで見られてゐるのを知らない人を見られる。何という優越感、何という安心感、そして興奮。

部屋の中には女が一人、泣いている。ほっそりした体を二つに折り、手折られた花のようになつてベッドの上に棄てられて、泣いている。裾がったスカートは花びら。すんなりと伸びた足は雌しべ。

「縛ってないのか。女の自由を奪ってないのか。これからこの僕が、彼女と争って、反抗する手を振りもぎり、蹴りあげてくる両足を押しひろげ、さまざまなホックの知恵の輪に生爪をはがし、彼女の肌のぬくもりにじかに触れ、彼女の悶えにおののかなくてはならんのか。ああ、それでは、お前たちの手を貸するまでもなかったのに」

「お望みとあらば、可愛い小雀の羽を縛りもいたしましょう。羽根をむしりもいたしましょう。それはただボタンを押すだけの手間。そうすれば——」

そうすれば、黒いタイツに身を固めた大男が現われて、それ、あのように、気弱な恋人の代役をつとめます。

両手は伸ばしてベッドの柱にくくりつけら

れ、両足は花の形に拡げられ、同じベッドの脚に結ばれる。スカートの花びらがさわやかに拡がり、雪より白い下着のレースが花粉となつてベッドに散る。

ああ、恥ずかしさにのけぞつた、のどの白さに黒い手袋が伸び、なでまわし、ひねりあげ、悲鳴をあげさせ。きちんと固いブラウスの胸もとをひろげ、まるっこい肩を剥き出し、ずりさげ、引きさげ。スリッパが、ブラジャーが……

「それ、ごらんなさい。可愛いおっぱいが飛び出しましたよ。まだ人の手を知らない、初らしい木の実が」

「ああ、やめろ。そこまでは頼まない。後は僕が……」

男は燃え、たぎり、ふるえ、火の玉となつて我を忘れる。

「さあさあ、どうぞ。たっぷりとお楽しみ」

ああ、何てまだるっこしい燃え方だ。原子の火が燃え、機械のうなるこの現代に、人間の肉体を焼きつくす火は、こうでもしなきゃ燃え上がらないのか。

★万華鏡

恋する男に時計はいらない。金がわ時計の針は飛び散り、時間はとまる。

二人だけの空間は、何かえたいの知れないねばねばしたもので満たされる。大気は透明さを失ない、空気分子のひとつひとつが、ねばっこい汗を吹き出して、二人の周辺に渦を巻く。

男は、すでに獣の肉体の中におのれを破り棄てた。そして、眼の前の女を憎む。そんな自分にした女を憎む。

そうだ、女を裸にするのだ。素裸に剥くのだ。自分をこのようにあらわにした女を、あらわにしてやるのだ。肉体だけの獣に変えてやるのだ。

黒くつややかな髪の毛が乱れ、もつれ、涙の玉がまつ毛をぬらし、まつ毛の奥に瞳がぬれ、空中に虹をかき、虹は破れ、星がきらめき、火が燃え……

ブラウスは、むしり取られた花びら。スカートは咲き誇るダリヤ。スリッパの白百合。

ブラジャーの花模様が空に散り、パンティのピンクの縫い取りは、可憐な桜草。花開き、咲き乱れ、まどわしの香を放ち、やがてはしほみ、しおたれ、ちちこまり、床に落ち。そのあとは、けがれない乙女のはじらいに満ちた真白の大輪の菊の花が、まだ固い蕾をむりやり縄と鎖におしひろげられ、ねじふせられ、たおやかにくねり、息づき、盛りあがり。



ああ、小百合、小百合。これがお前の肉休
なのか。これが、この暖かくはずむ、すべす
べした、ふっくらした、これがお前か、鎖の
下に虫のようにもがき、くねり、よじれ。こ
れがお前なのか。涙にぬれ、汗にぬれ、うめ
き、泣き叫び、あらわなこの肉が、お前なの

か。

男は泣き出したい。羞恥と侮辱に泣きだし
たい。

男は傷つく。この耐えがたい侮辱。このあ
からさまな肉体が自分に対する侮辱でなくて
何であろう。

鞭が、黒革の長い長い鞭が、男の怒りを、
女に何の責任もないこの怒りを宙に描いて空
を切る。空を切る。悲鳴をあげ、泣き叫ぶよ
うな音をたてて。

盛り上る乳房の先の乳首が固くなり、腹の
柔らかな脂肪がしこり、腰が、猥褻にひねら

れ、苦痛をたえる呻きがもれ。これこそ、恋の痛みを鎮める妙薬。怨恨を激する興奮剤。心の旅路にさまよう巡礼者の泊り宿。

なぜなぜなぜ。

女は問う。無明の闇に向かって、ひたすら問う。

ああ、女は知らない。これが愛だということ。これが男の望む愛のかたちだということ。

鞭は飛び、女の眼に火花が飛ぶ。暗黒の中に、かたちのないかたち、めくるめく色彩を織りまぜた火花が散る。赤熱の鉄片が肌に愛のしるしを、ひとすじ、またひとすじ。赤い縞がお前の体を縛ってゆく。しびれるような感覚で、お前の体を鞭の下に縛りあげてゆく。

「ああ、やめて」

「やめてなるか、この売女。この猥褻な肉を持つお前を憎むぞ。おれは憎むぞ」

「ああ、ゆるして、もうよして」

悲鳴は快感の交響曲。哀願は快楽の薬味。

悶える姿態は、ただ燃え上がる男の視線の餌食。もやとなって立ち昇る悩ましい乙女の体臭は、高価な娯楽。

「ああ、やめて。なんでも——おっしゃることを——聞きます。やめて、やめてッ」

おお、言うことを聞くというのか。おとなしく、男のいいなりになるというのか。

聞きます、聞きます。わたくしはあなたの奴隷。心いやすい肉の奴隷。

男は激しい怒りにふるえる。いわれのないいらだちに歯をかみ鳴らす。

お前はとらえ得たか、いとしい人の心を、否。

お前はその手に握んだか、真実の愛のかたちを。否。

ああ、小百合——

白い腹を仰向けさまにのけぞらせ、うごめきあえぐ、死んだ肉体。

小百合——

これはあのいとしい乙女ではない。おれの愛した乙女は、清楚な姿態を衣服に包み、理智の瞳を輝かす天使にまごう少女。愛を語り、文学を論じ、音楽にするどい耳をかたむける理想の女。このような肉の塊ではなかった。

突然、男は眼の前の猥褻な肉体のうごめきに握まえられる。黒い欲望の罠にひっつかまえらる。

燃え上がる。燃え上がる。溶岩を、真赤に焼けただれた粘液のように噴出させ、低い所を求めて、どろどろとはいずり落ちる。落ちる。落ちる。森を焦がし、畑を沈め、あてど

もなく燃えさがり、むなしく焰をあげてもえさかり、燃えあがり。

「誠さん。助けて……」

燃えさかる炎に包まれ、焼かれ、悶え、女は叫ぶ。

ああ、お前の誠さんは眼の前にいる。黒マスクの奥に、獣のようにあえぎ、よだれをたらして、お前の眼の前にいる。お前を救おうとして、身をこがしている。

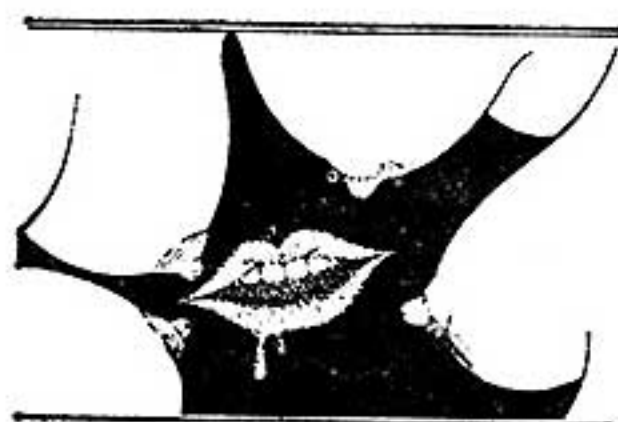
★墜落

「誠さん、私はもう資格のなくなった女。何も聞かずに一人で行かせて下さいませ。そして、お願いできることなら、かつて、いやしい女が誠さんを愛していたということを、時には思い出して……」

男は女が身を投げた断崖の端に立つて、その遺書を切れ切れに引き裂く。白い雪片となつて、その遺書は長い長い海面までの距離を舞い落ちて行く。

小百合も墜落するのに、こんなに時間がかったのだろうか。くるくる回転する視野に幻惑されながら、小百合は何を考えたろう。おれの名を呼び続けていたろうか。それともあの夜、体にせまって来た、あの黒マスクの悪魔を思い浮かべたろうか。

■裏窓ちゃんねる



そして、このおれは落ちて行く時、いったい何を考えるだろう。何を叫ぶだろう。叫ばずには居られまい。小百合の名を呼ぶだろうか。おれを迷いの道に引きずり込んだ、あの不思議な男をまぶたに描いて、呪いの言葉を吐き出すだろうか。

ああ、手足が風車のように、まわる、まわる――。

海面にたたきつけられたとき、痛みを感じるだろうか。

新聞は何と書くだろう。恋人の自殺を悲観して、とでも書くだろうか。

ああ、まわる、まわる。世界がまわる。

死体はぶさまだろうか。ぶくぶくふくれあ

がり、鼻のあたまで指先を魚にかじられ……鯛がおいしいのは、人間の肉を好んで食べるからだと聞いたことが……。

不意に、誠は背中をドン、と突きとばされる。重心を失った誠の体は断崖の端を踏みはずして、空中に浮かぶ。そのまま一直線に落ちて行く。手足をせい一ぱいに拡げ、ゆっくり回転しながら。

誠の眼は、断崖の上にさかさまになって、自分をのぞきこんでいる男の姿をとらえる。

その男の顔を見た瞬間、はじめて夢からさめたように、のどもさけるばかりに絶叫。

★大都会の夜の底で

今日もまた、大都会の夜の底、むらさきの

酒場の海底、ジャズ喫茶の興奮の中で、あなたは見つめられている。物欲しげな眼は光っている。それは地に落ちた天の星くず。幾千萬もの墮天使の天国を望む羨望の瞳。

そして、あなたは、ガラスの水槽のエンゼル・フィッシュ。胸びれを張り、背びれを長くひらめかせ、黒の縞目もあざやかに、小魚の群を従えたエンゼル・フィッシュ。

さあ、どれにいたしましょう。

ここは熱帯魚の店。可愛い愛玩用の小魚の店。よりどり見どり、お好きなやつをすくって下さい。

▼本誌に毎号麗筆をふるわれておられるQ画伯（ご本人の名誉のために本名は発表せず）には、妙なオクセがある。

▼Q先生には、若くてピチピチした愛人がおられるのだが、その愛人とナニするとき、あるひとつの準備をしないと、ナニできない。

▼その行為とは、Q先生の両乳房を、糸で縛ってもらうこと。（Q先生はもちろん男である、念のた

め）いくら男性の小さな乳首でもしげきをあたえれば、小さいなりに、ボッキをしめす。そのとき、すばやく糸で縛ってもらうのだそうである。

▼縛るほうの彼女も、さいきんでは熟練して、すばやく巧みに糸で輪をつくり、ひょいと結ぶそうである。縛ってから、そうとう乱暴

にひっぱっても取れないというから、ずいぶん固く結んであるにち

がいない。▼「へエエ、そんなことして、痛くないのですか？」と、おききすると、

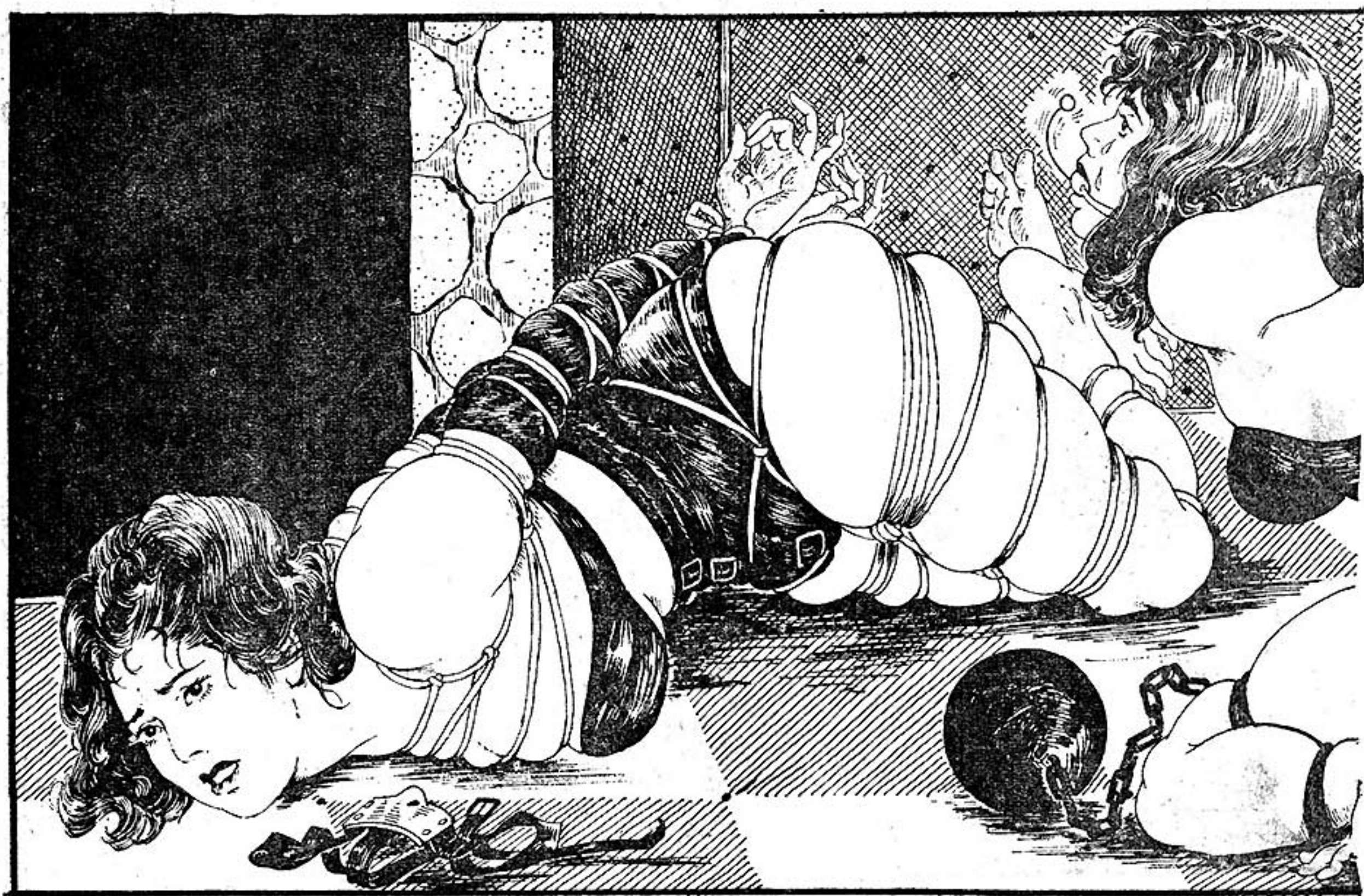
「その痛いところが、なんともいえぬくらい、いい」と、おっしゃられる。

▼どう考えても、M派にぞくするのだが、このQ先生のおかきになられる絵は、圧倒的にSものが多いのだから、ヒトはわからない。

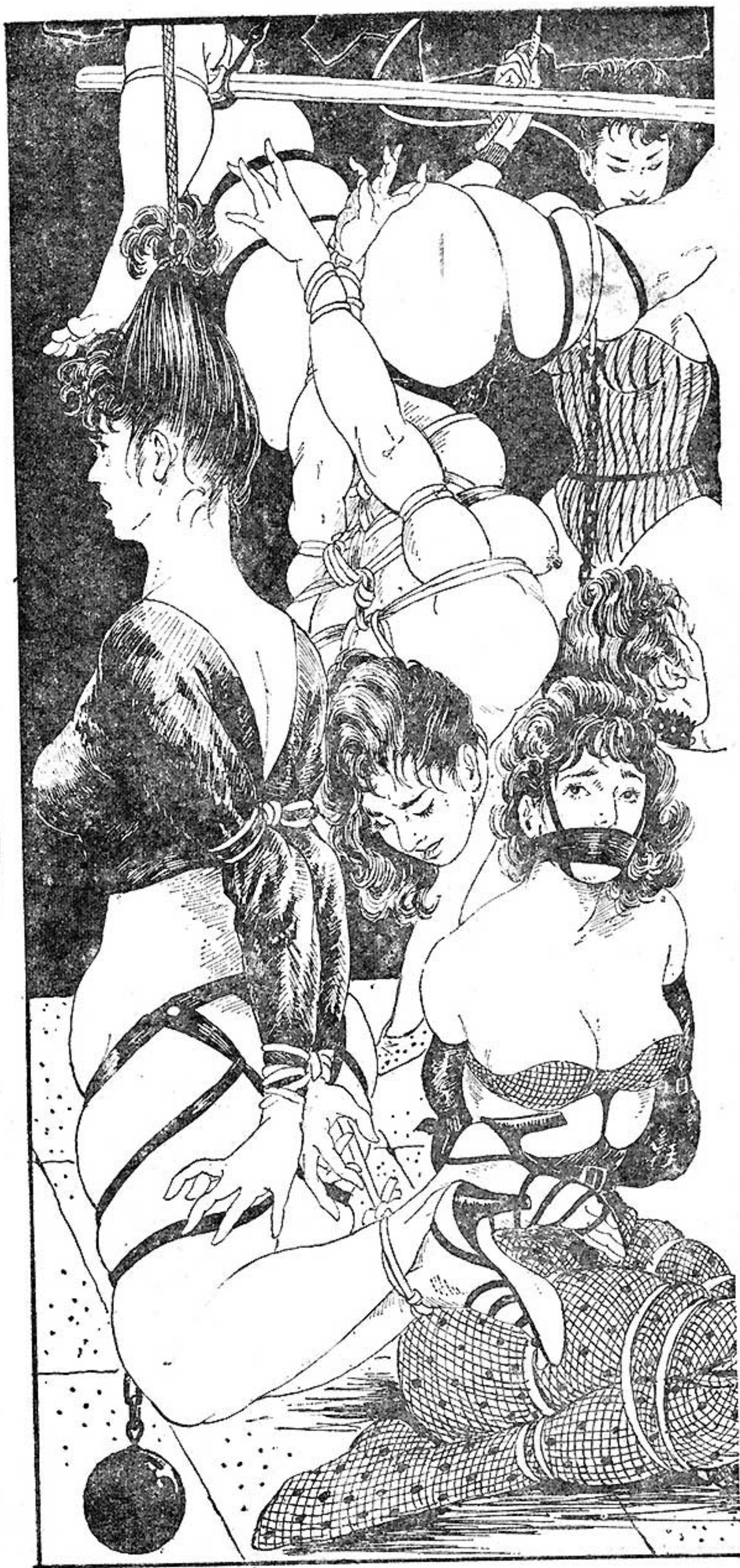
●鬼頭暁画集

黒い皮の饗宴









ビルマの首枷族

春川光彦



太平洋戦争がはじまってまだもない頃のことだから、たしか昭和十七年の春である。ビルマ戦線の日本軍の快進撃を報ずる新聞が、一枚の奇妙な写真をけいさいした。

見出しには「山からおりてきて皇軍を歓迎するビルマの首輪美人」と書かれている。

盛装した、若い女性が宣伝班員と並らんで写真におさまっている。日本人によく似た顔だちの、なかなかの美人である。しかし、その首——その細く長い首を見て私はハッと息をのんだ。女は肩からあごまで金属の輪をらせん状に首に巻きつけている。きっちりとはめられた輪のちからで、あごが下から突きあげられ、首が次第に長くのびていったことは、一見してあきらかだ。

首輪はどんなにか固く、重いことだろう。その生活はどんなに不自由で、首がのばされるのは苦しいことだろう。当時、小学校四年生だった私にとって、この一枚の写真は大きなショックだった。

さっそく、図書室で、このビルマの首輪族について調べはじめた。ある程度までのことはひかく的容易にわかった。

ビルマの中部、シャン高原に住むパダウン族は、女性の首にしんちゅうの輪をはめる。子供の頃からはじめて次第に輪の数をふやし

そのため、娘の頃になると首は長くのびる。この一族では、長い首は美人の条件として欠くことのできないものになっている。世界風俗辞典にはそんな風に書かれて、しんちゅうの首輪を巻いた娘のカラー写真がそえてあった。

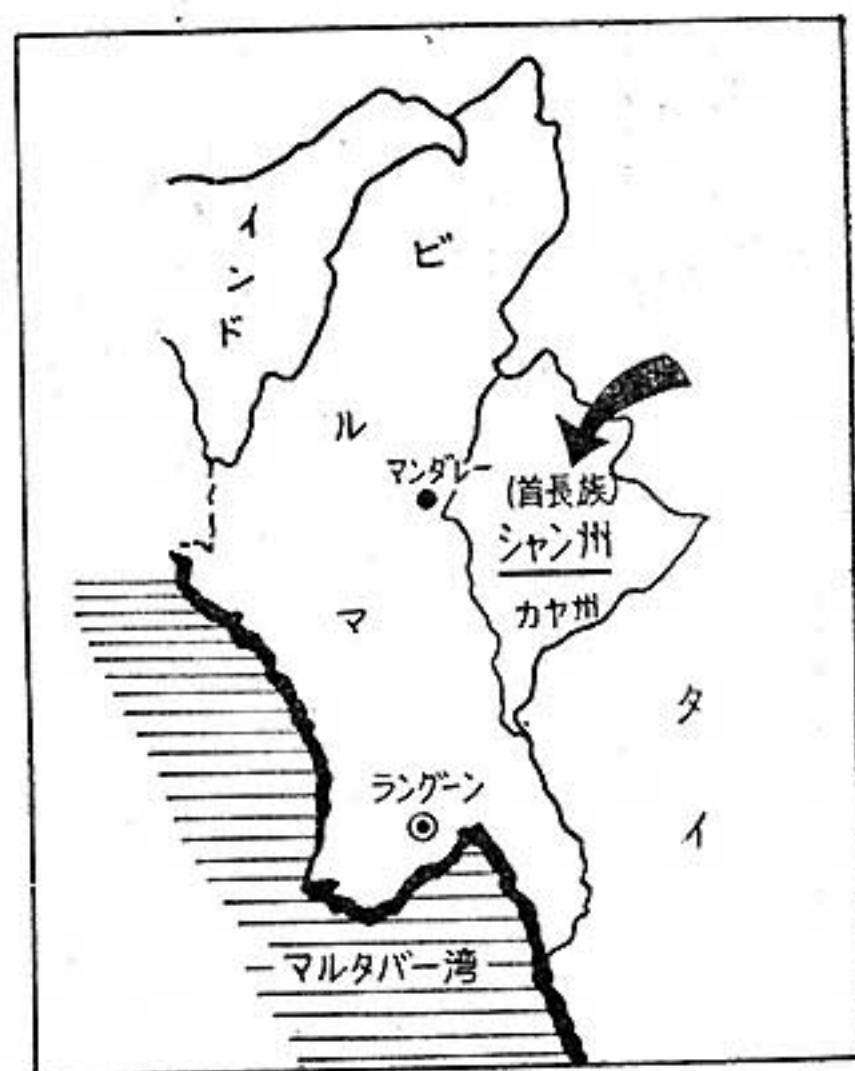
首輪は金色に光りがやいて美しい。そして、娘の首は細く長く、哀れにものびきっていた。おそらく、左右を見ることも、下をむくこともできないだろう。首輪にあごを押しあげられていて、口も充分に開くことができないのではないだろうか。

幼い私の心には、一族の風習を甘んじて受けいれている、パダウン族のかわいそうな娘たちに対する同情の気持ち、とめどもなくわきおこってきた。

装身具というより、あれはむしろ首枷にちかいものではないか。パダウンの女たちは死ぬまで、一生のあいだ首枷をはめて、不自由な生活をしいられているのだ。

パダウン族については、その後しばらくの間、調べようにも方法がなかった。

そして、一昨年の秋、NHKが編成した東南アジア取材班の一行が、このパダウン族の生態をフィルムにおさめてきた。私は「東



南アジアの自然をたずねて」というテレビ番組で、このパダウン族の女達の生活を見ることができた。

中部ビルマの都会マンダレーから、東へおよそ二四〇キロ行ったところ、東部ビルマのシャン高原の山のなかに、このパダウン族の部落がある。

シャン高原にはいろいろな種族が住んでいるが、このパダウン族の持っている習慣、女の首を長くのばすという習慣は、世界中さがしてもこの種族だけというきわめて珍らしいものである。

パダウン族がいつ頃からこの土地に住みついたかはわからない。また、いつの頃から女の首を長くのばすようになったかもわからない

いがとにかく、この現代においてもなお女の首にしんちゅうの輪を巻き重ねて、十数年の苦痛をへてこれを長くのばしてしまおう、という伝統をしっかりと守りつづけているのだ。パダウン族は女の児が五、六歳になると、その首にしんちゅうの輪をはめてやる。そして、それから二年ごとにその輪をふやしていくのだ。

金属の輪はあごを突きあげて、彼女たちは下をむくこともできなくなる。少女期にはあごに当る金属の痛みをやわらげるために、あごと輪のあいだにやわらかい布をはさんで、苦しみにたえていかなければならない。

同時に、両足のひざ関節の上と下、両手首に鉄の輪がきっちりとはめられる。このために日常の動きも不自由になり、目の前に落ちてくるものもかがんで拾うことができなくなる。

娘が十七、八歳になると、長い首は完全にできあがる。最近得た資料では、その時の娘の首の長さは十二インチないし十八インチ、しんちゅうの首輪の重さは、二十二ポンドにたつするということだ。一インチは二、五四センチ、十二インチといえば約三十センチ、十八インチは実に約四十五センチになる。重さの二十二ポンドとは約十キロ、およそ二貫七

百匁にそうとうする。実際に四十五センチな
どという長さの首が存在するものかどうか、
とても信じられない気持ちだが、それに近い
長さにたつするまで、十キロに近い首輪を強
制される娘たちの苦痛はかなりのものだろ
う。

そして、この首輪は一生のあいだはずす
ということがない。死ぬまで細い首に固く巻き
ついているのだ。

パダウン族がなぜこのようなことを考えつ
いたか。これには以前からいろいろの説があ
るらしい。

一つは、かなり前のこと、パダウン族の男
性が、長い首の女に奇妙な魅力を感じて、こ
れを女に強制したというもの。

もう一つは、昔、この部落の近くに虎が出
没して、畑に出てはたらく女たちが、自分の
身をまもるために金属をはめたのがはじまり
だ、というのである。

おそらく、さいしょは虎よけのおまもりだ
ったのだろう。ところが、ある時、いじわる
な男性がその首輪をつみかさねてみようと思
いついた。彼はそうして首を長くのばすよう
に命じ、この道具を女性を支配し、服従させ
る機械として利用することにしたのではない
だろうか。女は愛を得るために、甘んじてそ



の苦痛を受け入れることにしたのである。

洋の東西をとわず、このようなことは昔は
さかんにおこなわれた。

日本では女性を精神的な面で支配すること

に、より関心がむけられたようだ。女性の衣
服がこの場合、たくみに利用された。

中国では肉体の改造が積局的に考えられて
「てんそく」が発明され、つい最近まで、非
常に長いあいだ、むしろ美風として実行され

てきた。生まれてまもない女児の足の親指だけ
けをのこして、あとの四本を足の裏へ折りま
げ、かかとまでを布につつんできびしく縛り
つけておくのだ。足の甲はそのまま成長がと
められてしまう。成長期には娘は夜も寝られ
ないほど足が痛む。どんなに足がはれ、痛さ
に泣きわめいても、娘はこの苦しみにあたえな
ければならないのだ。男のてのひらに乗るよ
うな小さな足は、美人としての、いやむしろ

女性であるための、絶対の必要条件であるか
らだ。

成長して一人前の娘になった時、てんそく
の小さな足では、娘はよちよち歩きしかでき
ない。

男性はひげをはやしてあくまでもたくまし
く、娘は歩行も不自由で、そそとした、男性
に反抗するなどということは夢にも考えるこ
とのない、やさしい愛玩物に育てあげられて

いるのだ。

西洋のコルセットと、その結果である「蜂
の腰」もこれと全く同じことだ。

十代のはじめに開始されるコルセットによ
る肉体の改造訓練は、それから十数年にわた
ってしつようにくりかえされる。それは、女
性の身にとっては、甘美な苦痛をとまなう訓
練であり、その苦しきのなかに、異性との生
活を想いおこさせる一種独特な魅力を感じる
ようになっていくようだ。

うすい鉄板、もしくは鯨のひげをしんにし
た固いコルセットでキツチリと締めあげられ
た時、一本の棒のようにかためられてしまっ
た女のからだは、もはや軽快に飛びまわるこ
とはできず、ひっそりと椅子に坐ってナイト
のような男性の差し出してくる手を、ただ
待つという風になるのだ。

そして、女性は今も男性の要求にこたえ
るために、みずからの手でコルセットを細く
締めあげていく。時には気を失うほどに激し
く締めていくのだ。周囲の女性がみなそうで
あれば、女性は自分の行為に対して、少しも
疑いを持つとはしない。

パダウン族の女性も、全くつゆほどの疑い
も持たずに、苦痛にたえて自分の首をたえず



のぼしていく。

ところでここにもう一つおもしろいことがある。

パダウン族の男たちは、ただ単に長い首の女を求めたにすぎないのだろうか？

首をのぼすだけなら他にももっと効果的な方法がありそうである。あごと後頭部に金属の輪、もしくは皮製の輪を首枷のように当てて宙にぶらさがる。自分の体重を利用して首を上下にひきのぼすわけだ。これは中世の貴婦人が美容法として、やはり首をのぼすために使った方法だが、この方が一日に数十分、または数時間の訓練ですむし、その他の時間は肉体は完全に自由なのだ。

何故に、パダウンの男性は、重く固いしんちゅうの首輪を採用したのだろうか？

私は彼等がそこにすばらしい美を発見したからだと思う。

本来、女性の肉体はやわらかく、かぐわしいものだ。そのやさしい女性のからだに、無慈悲にはめこまれた固い金属の輪、やわらかい女の肌と、それに喰い込む、固く冷たい金属の感触、このきびしい対比にパダウン族の男たちは、限らない美しくしさを発見したのだろう。

日本人にいた顔だちの小麦色の肌をした娘

たち、その首に輝く、金色の重い首枷、冷い、固い、そのきびしい曲線と、娘たちのからだの丸い曲線の見事な対立に、パダウン族の男たちは酔いしれたのであろう。

あごを突きあげるようにして首輪をはめられるというのは、なれるまではかなり苦しいことなのだ。

試みに、あごを前へ突き出すようにして、首を思いきりのぼし、その状態で飲物や食物をのみ込もうとしても、まず普通ではなかなか自由にのみ込めるものではない。

また、あごの骨が絶えず下から押されてい

をために、長期間に顔のかたちがすこしずつ変ってしまう。上下にみじかく、押しつぶされたような表情の顔。これがパダウン族の女性に共通した顔かたちである。

現代の文明社会でも、背骨の病気の治療法として、数年間にわたり、あごと腰に皮帯をはめて、背骨を上下に引きのぼそうと強い力を加えた結果、顔のかたちが次第に変って、あごのちいさい、上下に短い顔になってしまった気の毒な患者がたくさんいる。医者はこの特異な顔を「鳥顔」と呼んでいるが、パダウン族の女たちの顔はみなこの「鳥顔」なのだ。



顔のかたちが変わってくるだけでなしに声まで次第に変化してくる。声帯のかたちが変わってしまった「鳥顔」の人たちは、一種特別のかん高いキイキイ声で話すようになるのだ。

私たちの周囲にいる、気の毒な痲痺病の人たちと同じである。病気で背骨がまがり、うしろに突き出してセムシになると、必然的に胸の骨が前の方に突き出てくる。胸が前後に厚くなり、首が肩に落ちこんであごを前へ突き出すようになり、キイキイ声しか出なくなってしまうのだ。

ところで二年に一度、このしんちゅうの輪をはめる時は、どんな風にするのだろうか。たぶん娘を台の上に寝かせ、数人の男が頭と腰、足を押さえてちからいっぱい上下にひきのばし、首をできるかぎり長くのばしておいて、強引に太いしんちゅうの針金を巻きつけていくのだろう。たとえ娘が苦しみに泣きさけんでも、幾巻きかは無理にでも余分に巻きこんでおかないと首はのびない。あたらしい首枷をはめてしばらくは、娘は首とあごの痛さに泣くだろう。首が枷のとおりに長くのびてきて苦痛を感じなくなると、再び次の巻きなおしの時期がやってくるのだ。

こうして、三十センチも四十五センチもある長い首が生まれる。そして十キロに近い重

い首枷をはめて、不自由なからだで一生を終るのだ。

もし、首がのびたあとでしんちゅうの首枷をはずしてみたらどうなるだろう。

最近、台湾で出版された本には、パダウン族の娘の首はたぶん、蛇の胴のようにぐにぐにやになってしまっていて、首輪がはずされたら倒れてしまうだろう、と書かれている。しかし、私はそうは思わない。首の筋肉は全く使用しないため、長い年月にすっかりマヒしてしまつて、頭をささえるからには無くなっているだろうが、長くのびた七個の頸椎は固定されているあいだに完全にかたまってしまつて、おそらく一本の棒のような骨になっているだろう。

パダウン族は野生の竹をきつて家をつくり綿をさいばいして、木綿の衣服をつくる。娘たちは不自由なからだで木を切り、うすをついてひえのような植物から酒をつくつて生活している。

現在、シャン州とその南のカヤ州に、合計二千人程が住んでいるらしい。ビルマ政府とカトリック教会がはいりこんで、盛んに首をのばす習慣の廃止をよびかけているようだが、ほとんどききめがないようだ。今もなお、

五、六歳の幼児が、首にちいさいしんちゅうの輪をはめて遊びたわむれている。

NHKテレビの「東南アジアの自然をたずねて」は好評で、その後も二、三回再放送された。そして、問題のパダウン族の部分を八ミリフィルムにプリントして、「NHK八ミリ映画——ビルマの首長族」が昨年の春、NHKサービスセンターから、一般に発売された。

五分ていどの無声フィルムであるが、画面はいたつて鮮明、テレビで見るよりもはるかに迫力がある。

パダウン族の娘たちの生態が、今度は自宅の茶の間で見られるようになったのだ。

千八百円のこのフィルムはかなり売れたらしい。遠く海を渡つてアメリカへも送られた。

二十世紀のこの奇妙な風習が、アメリカでも興味深く見守られているのだ。

NHKサービス・センターの職員は理解に苦しんでいるという。たくさんある「NHK八ミリフィルム」のなかから、何故にこの「ビルマの首長族」が良く売れるのかわからないのだそうだ。



現代マゾヒズム文化時評 ②

森 下 高 茂

SFマガジン誌から

臨時増刊八月号（一九六三年）に、『裸女が戦う』（リチャード・レン、矢野徹訳）というのがある。この小説の物語りのなかで、ジム・ハイスマンは恋人のキャロル・ティガードが二カ月も姿を見せないの探索する。彼女の伯母からの情報で、闘技場へやってきた。ここにキャロルがいるはずだった。

「さがしていた黄色いドアの前に立ちどまつたジム・ハイスマンは、廊下の壁にかかっているいやにけげばしいポスターを、むっつりとながめた。

▲キラール・ケイト対タイガー・ガール▼
ポスターは絶叫していた。

▲五ラウンド。二人の処女、血にそまって倒れるまでの激闘▼

「全裸といってもいいような女が二人、リングの上で、すぎましいまでに性的魅力にあふれた肉体のほうほうから、血を流しながら闘っている画」が、そこに描かれている。

キャロルは貧乏なジムのために一挙に大金を得る手段として、かくれて女ボクサーを志したのだった。ボクシングと言っても、この未来に設定されている時代では、医学が進歩していて、破片となって飛び散った肉片を拾

いあつめてから、ふたたび復元することも容易にできる。だから思いきった残酷なショウが実行可能になっている。

まず志願した女は、特效薬を注射される。そして毒々しいまでにセックス・アッピールのある肉体美に整形される。胸は、はちきれんばかりに盛り上がり、胴は蜂のようにくびれ、腰の肉もまるく盛り上がっている。

また目もとはアイシャドウをつける。そして彼女たちは▲世紀の決戦▼で流血のショウを見せなければならない。というのは彼女たちが使うグローブには、するどい十本の針がつけてある。これで相手の顔面をひっかきめ

ちやくちやにつぶしてしまふのだ。その上、女ボクサーたちは試合直前に刺激剤を注射される。その作用で彼女たちは相手への憎悪と殺意を感じるようになっている。

キャロルが、このショウに出ることを知ったジムは、なんとかしてこのショウへ出るのを取りやめさせようとするのだが、それを聞いてマネージャーのラーズはせせら笑う。

「ジムはキャロルの前を横ぎって、はりきった尻の横におかれているファイティング・グローブを取り上げた。強化レザーで作られたグローブから小さな針が十本突き出ている。『こんなことまで、なぜしなくちやいけないんだ?』」

ラーズは肩をすくめて見せた。

「客は血を求め、おれたちは入場料だけの値うちのはあたえるってわけさ。気に入らないなら、出て行け!」

この合法的なショウのじっさいは、さらに凄惨である。ラーズはつづける。

「——生まれて初めての試合に、そう大したことは起らないよ。キャンパスにいっぱい血が流れて、顔が、めちやくちやになるだけなんだ。初めての試合で、どうすれば相手を切りぎめるかを知っているような女の子はいないよ。ヘビィウエイトのプロなら話はちが

ってくるぜ。医者も、元どおりに肉をくつつけるのに大騒ぎだからな。去年の暮れにフリスコでやったときは、チャンピオンがサウザン・ベルをこま切れにしちやったもんだ。」

ジムはキャロルに言う。

「『キャロル、こんな試合は「変態連中」のためだけにあるんだよ。これはいけないことなんだよ!』」

だが、キャロルは出場を止めようとはしなかった。

「黒い髪の娘は、リングを突進して行き、相手に拳をふりおろし、まっ白な肩にまっ赤な筋をなん本も作った。その娘はうしろによるめき、自分を守りながら左手を突きだした。その残忍なグローブは相手の顔のまん中に命中した。群衆が叫び、けしかける中を二人は戦った。背の低いほうの女は右手をふるって相手の胸に、ひどいカウンターパンチをあたえた。」

その女はよろめき、カメラは(テレビカメラ)、胸にほそい布をぶらさげた、大きく露出した乳房を観衆の前に写しだした。血がみどりのキャンパスの上にしたたりおちていた。

——ついにそのラウンドは終り、かれはぼんやりとスクリーンをながめた。一人の男がかがみこんで、すこし前までは、きつと顔であ

ったにちがいない血まみれのものをしらべていた。」

ジムは、なんとかしてキャロルを取りもどそうとした。彼は、試合中に太っちょの男から、この試合に出る女ボクサーたちは、そのための整形やなにやらで前借りが多く、試合で大金をかせいだつもりでも、じっさいは差引かれてしまうので、ついにはマネージャーの言いなりに、コールガールのようなことをしなければならぬ——と聞かされたからだ。

ところがキャロルは、注射による薬がききはじめ、ジムに向かって、針のついたグローブでおそいかかってくる。止むおえずジムはキャロルをなぐり倒し、かつぎ上げて闘技場から出ていってしまう。

以上が『裸女が戦う』の概略の一部であるが、ここに見られる一部から、相反する二つのものを見いだすことができる。

一つは、SF小説という自由な舞台で、偶然にもSM的な心理傾向をもったシチュエーションを、この作品が作り上げていることである。これは主として、金銭のために薬を注射され、整形され、針のついたグローブで相手と裸同然の姿で、満場の注視の中で戦わねばならないという、キャロルが置かれている

立場、その心理に被虐的なものを感じることができるといふことにしほられる。

第二点は、作者も訳者も、たぶんSMがなんでいるかを深く知らないまま、軽卒に変態性欲という言葉を使っていることである。なぜなら、S的な描写と思われる前掲のボクシングの描写などは、サジズムとは関係なく、吸血鬼か殺人鬼好みである。そして、これらが「客の好み」であるといふことは、言わず語らずに無責任な「健全な群衆」が、いかに犯罪や惨虐性——残虐と惨虐はまったく異質である——親しいかといふことを証明しているにとどまる。

リチャード・レンによれば、腰の大きい胸がキュッとした、豊かな乳房をしたスタイルは「変態性欲連中の好み」だと言わんとするのだから、また訳者もその点に顧慮することなく訳述しているとすれば、この原作者と訳者は、いったい何をもって変態性欲と考えているのだろうか。こうしたギモンはこの小説のいたるところに見いだせるのだ。

そこで私は、この小説『裸女が戦う』の一面について考えながら、戦時中(第二次大戦)に起こったある哀れな警官の話を思いだした。

彼は「主義者」という言葉は、「犯罪者」

と同義語であると思いこみ、自分の受持ち区域の古書店から、主義という題字のついた書物を全部没収して歩いた。その没収した本の中には、皇学館出の神道学者の『皇国主義研究』というのもあった。この話は、ある古典的左翼の斗士であった古書店主が、笑いながら話してくれたものである。

これに類した無知のわざによる悪は、現代でも往々に見うけられるのではないか。だから私は、リチャード・レンや同様の考え方をもってSMを見ようとする人たちは、うたがいもなく肉体的にポリウムのある、形のよい豊かな乳房や細くくびれたウエストやすばらしい腰をもつ、変態的な女性を愛することせず、おそらくは針金虫を擬人化したような女か、ミス一五〇キロに優勝しそうな女性たちを愛人にえらぶのだらうと思う。だれもそれをうらやましがりはしないだらう。

コメディ・フランキーズ(第一回)

朝丘雪路のジョルジュ・サンド

これはテレビにコメディ・ミュージカルを持ちこもうと、フランキー・堺が自信をもつてはじめたという新番組の第一回である。この中で純日本の女性である朝丘雪路が、女丈夫というか男性的ジョルジュ・サンドを演じ

ていた。

扮装は写真(A)の通り、ジョルジュ・サンド自身が、ショパンやミュッセと同棲したり関係をもったところの、きわめて世紀末的な匂いのする、倒錯的な雰囲気と考え合わせると大へんおもしろい。

女性としてバカにされたくないからという理由で、男装を通し、名まえもジョルジュ(英語読みではジョージ)とあらためたサンドは、その性生活では、サンドからNを取ったサドと共通するものを持っていたらしい。そう考えながら見ていると、かなり楽しめる番組であった。

『ジャミラよ朝は近い』

この本は、しばらく前に発行されている。「裏窓タウン」でも紹介(三八年四月号)されたのだが、それを読んで、私は『ジャミラよ朝は近い』のなかには、人間の無恥、弱さ、そして空虚のはげしさのために、すぐには本欄で紹介する気持にはなれなかった。

この内容は、アルジェリア独立直前の在アルジェリア仏軍およびコロンの組織であるOASが、独立運動の弾圧のために、どんなにヒステリックな狂気を、全北アフリカにまきちらしたかを、その体験者の手記によって

活写したものである。

無知で権力にゆだねる警察、下級兵士、お先走りの民間人、いわゆる急進的現状維持派のコロンたち、こういう無価値にもひとしい数ばかり多い人間たちが、何をしたかという事実の記録は、素材としてあまりにも生々し

すぎる。

じっさいOAS側のみならず、独立派側でもひどい拷問や復讐的な処刑がおこなわれたことは想像にかたくない。そして双方の普通人、忠実な軍人、道徳的な市井人、熱心な商人、そして学生、主婦などによって血でえが



写真 A

かれたこれらの暴虐の記録は、単に人間の歴史に泥をねったというような単発的な事実ではなく、一般人がいかに無恥な動物であるかを、また権力の保護の前に、どのように反道徳的で反人間的であるかということ、さながら古代戦争における奴隷の酷使時代としか考えられない。

サジスチックな——という形容がいたるところで、文中くり返えされている。しかし、その本質も、また記録に見られる残酷な行爲も、サジズムとは無関係である。

ジャミラは、縛り革のついたソファに丸はだかにされてしばらくつけられる。検事や刑事はタバコを吸いながら、この若い娘への拷問を楽しんでいる。ジャミラのむきだしにされた乳房は電線がまきつけられ、それに電流が通されるたびに彼女はころげまわらねばならない。かれらの好色な能力は、電極を陰唇の中にさし込むことを思いつかせる。また肛門にさえも突っ込まれる。

悲鳴と叫喚の中で、かれらはタバコをジャミラの肩でもみ消し、ビールビンまで持ち出してくる。まっ赤に流れる血が、このおろかな人間たちを楽しませ、うわずらせるばかりである。

これこそ、かれらフランス人たちが、ナチ



スのおこなった非人間的な行為と同一の、残酷な拷問をくり返したのだと言えるではないか。そして美辞麗句に明け暮れ、おこがましくも文明の代弁者といつわるほどに、思い上がった各国の司法関係者どもからの鋭い追究は、一つはナチスへの羨望からでもあるかのうにさえ見えてくる。

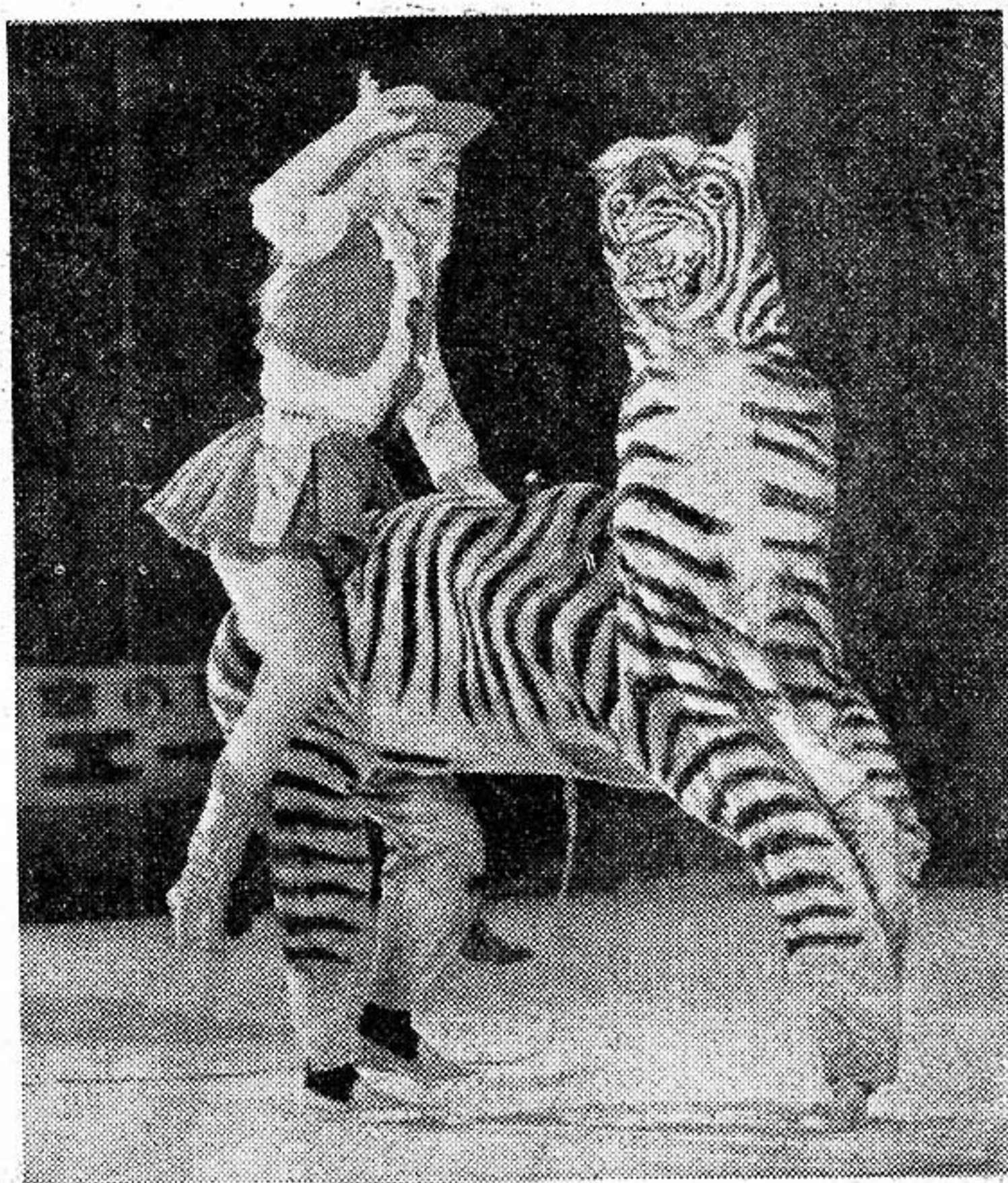
サジスチックな——と形容される、こうした処女の娘に対する拷問——は、サジストやマゾヒストにとっては、ただ夢として物語りとしてであるところだけにかぎり、興味をひく。そしてこれらを実行する役目はつねに正常人に属するのである。

▲死を職業とする▽のは、つねに健全で常識的で小心な下級官公吏であり、権力欲におごりたかぶって、小学校教育の倫理さえ忘れはてるのも、つねに高級官公吏であり権力の座に、はい上がった為政者である。

S M派にとっての真のよろこびの素材は、かれらがおこなった行為の▲ごく一部分の物語り▽であろう。

実践は決して倒錯者の領域ではない——実践以上に、もっと刺激的で、もっと充実した▲空想▽こそ、自分の武器としているのである。

だからその意味で、人間の嘔吐にもひとし



写真B ↑

写真C →

いこの一冊の本『ジャミラよ朝は近い』は、さまざまな題材を私たちに送る。

ドイツ・ナショナル・サーカス

まず断っておきたいのは、ポスターにある▲ハーゲンベック・サーカスの云々……▼というのは、あまりにも根拠のないところである。ハーゲンベックというと、すぐ私たちが思い出すことは、故小野田勇がほれこんで、岐阜までついて行ったが、

「私のライオンのように慣らされてしまうよ

うな男ではダメよ」

と追いかえた女調教師の話などがある。

昭和九年ごろ、大へんな編成で日本をさわがせたハーゲンベック、猛獣曲馬団を思いだすのだが、本国ドイツはもちろん、全ヨーロッパやまたアメリカでも、ハーゲンベックは動物園と動物供給業で有名なので、どここのサーカスにもハーゲンベックからきた出演者や動物がいるものである。

だからドイツ・ナショナル・サーカスが、ハーゲンベックと特に関係があるとしても、

それはただドイツからやってきたということだけであると考えてよからう。

そして演目もヨーロッパ風というか、常識的なもので、同時に東京で上演している第三回ポリシヨイサーカス（これも本国編成のごく一部、ジキトなどは真打ちではないということ、ソ連のサーカス記録映画をみればすぐわかることである）が、お国ぶりを十分に見せているのに反し、ドイツ・ナショナル・サーカスは、まったく新味がない。

ただ、直接サーカスとは関係のないも同然の道化と暮間のバレエのなかに、おもしろい演目が見られる。

写真（B）は道化番組『女調教師と人間縞馬』。写真（C）はバレエ『ミリタリィ・パレード』いずれも解説は不要であろう。M派の人には、そこはかとなく空想をたのしませるよき素材であると思う。

小説『エデンの東』（スタインベック） ク）と

『タルノフスカ』（ハンスハーベ）

あまりにも有名なこの『エデンの東』のなかに、よもや倒錯的な部分があるうとは、私自身も夢にも思わなかったものです。

ところが、この小説の前半に▲倒錯者のた

めの娼婦▽ケイトが登場するということ、はるばる西ドイツのハンブルグに住むヨアヒム・パウリー博士に教えられたのです。

さっそく『エデンの東』をひっくり返してみると、たしかにありました。

邦訳版六五ページ上段に、ケイトのせりふとして、つぎのような意味のことを言っています。

「ここには妙な連中がやってくるのさ。これここに撮っている男は、鞭で打ってもらうためにやってくるのさ。こいつは国会議員をやっているのよ。それに汚れた化粧着をなめまわすことだけを楽しみにやってくる男だっているのだよ。」

こういうケイトは、ごく下等な賤業婦で、その上すでに中年になっているのです。そしてM派の客をとることで商売をつづけています。また、そんな行為の古い写真を持ちだしては、ときどき眺めたりするのです。そう言ったときも、彼女は、そんな写真を眺めているときでした。

スタインベックはドイツ系のアメリカの作家です。だからかれは、ドイツにおけるこういう娼家の存在を基にして、このくだりを書いたのかも知れません——ちょうどレマルクが『黒いオベリスク』のなかで、長くつをは



写真 D

き、鞭を持った娼婦△鉄の馬▽を、ドイツでの知識にもとずいて書いたのと同じことが言えます。

しかしアメリカという特に、最近ヒステリックにピューリタニズムを強調している国の出版物に、こうした描写が見られることは興

味ある事実です。

パウリー博士は、同時に別の最近のドイツ歴史小説『タルノフスカ』（ハンス・ハーベ著）のなかにも△シュティーフエルディネ▽すなわち△長くつをはいた職業的女主人▽が登場すると教えてくれました。

さつそく、その小説『タルノフスカ』をさがしてみました。が、原文(ドイツ語版)、英訳本とともに、日本では手にはいらず残念に思っていたのです。

ところが偶然、ドイツの旬刊誌『シュテルン』(一九六三年二月二四日号)に『タルノフスカ』の抄訳というか、梗概が出ているのを発見しました。

ざっと目を通したところでは、この『シュテルン』による紹介に見るところでは、《シュティーフェルデイルネ》についての部分は見あたらないようです。

なお物語りは、帝政時代のロシアに素材をとった恋愛中心の歴史小説のようです。

西ドイツのテレビ誌から

ここにかかげる写真(D)は、友人が西ドイツから送ってくれたものです。したがって掲載誌名はわかりません。

かれの書き送ってきた説明には《最近のテレビ娯楽番組からの一画面です》とあるだけでした。

図がらから言っても容易に想像はつかないのですが、おそらくはミュージカル・ショウの一つではないかと思われます。

紳士の首をつけた木馬に横乗りになった若

い女性、そして、まったく暗さのない場面の空気、それらが、たとえひそかに倒錯的な嗜好に投ずることを意識しての演出であるとしても、すべてを救っているようです。

つまり、正常な嗜好の持ち主に対しても明るいほえみを、またマゾヒストに対しても明朗な印象と鋭い暗示を、この一枚の写真が提供していることは注目にあたいます。

以前、やはりドイツの旬刊誌が、木馬にまたがった女性を広告欄にのせていたのを見たのですが、そのときも同じような印象を受けたのを覚えています。

熊使いの女性と山岳馬術

—ポリショイ・サーカス—

来日三度目で、いま東京都体育館で(七月三日~八月中旬)公演中です。

こんどは、山岳馬術を主としたものですが、前回の《キオ》よりもおもしろいと思います。

去る六月三十日午後七時からの『私はナンバー・ワン』(NHKテレビ)に、このサーカスの熊使いの女性が出演しました。彼女はロシア風のおとなしい女性ですが、民族衣裳をつけ大へん美しく見えました。

さて、熊は立ち上がると彼女よりずっと大

きいのです。しかし彼女の鞭さばきにつれて大きな図体を、ドタドタと不器用に動かして芸を見せるのです。

彼女が白い、すばらしく上等のハイヒールの長ぐつで、コツコツと舞台を歩きまわるのを見てみると、思わず——自分が首輪をつけられた熊で、この美しい小柄な女調教師が言うままに動かねばならない——という状況設定を思いうかべさえるのです。

その光景を見ている自分は、すでにテレビの画面に登場している熊に結びついているのです。

こうした《意識の対象への転位》と、《その反映を受けとめる主体となった自分自身》という二重構造の心理が、《フェチシスチックな心理》と呼ばれるものです。

この歓喜への通行証《空想的フェチシズム》を資格として見ている人にとっては、この番組などは、途方もなくすばらしいものであります。



あ く と う は ん く ん う
 玉 虎 半 九 郎



潮 一 樹 . 小 日 向 一 夢 絵

雨

梅雨、細い雨が小やみなく降っていた。

人通りの絶えている街道を、びっしり濡らした旅姿の遊び人がひとり、すたすたと宿場に入ってくる。

体を包んだ廻し合羽の裾から、輪金をはめた長脇差の鍔が覗いている。三度笠の下顔に凄味のある眼が光っていた。

宿場は奇妙にひっそりとしている。

男はがらんとした静かな宿場を、立ち止って眺めていたが、冷たく眼を輝やかせてぼそりと低く呟いた。

「血の臭いがしやがる。一稼ぎできそうな宿場だぜ」

男がにやりと笑って、歩き出そうとした時に、頭上から女のあまい声が降ってきた。

「ちよいと、お前さん。話があるんだけど、来ておくれでないかえ」

見ると小料理屋と旅籠を兼ねた家らしい。

二階の障子をあけて、女がひとりで見下ろしている。女盛りの熟れ切った美しい女だ。幾らか酔っているのか眼もとが紅い。

「よかろう。承知した」

男は答えて、縄暖簾を濡れた三度笠でかき分けた。

小女に導かれて、二階の座敷に案内されると、先刻の女がぼんやりと雨の降る街道に視線を投じている。男は持っていた長脇差を手から離すと、畳にゆっくりと腰を下ろした。

「用ってのはなんだね。姐さん」

笠を取った男の顔は苦味走って、旅慣れた遊び人の貫録を漂わせている。

「わざわざ呼びしてすみませんね」

と、女は前に置いた膳から、杯を男に差し、銚子を取りあげながら微笑した。

「私はおえん。お前さんのお名は？」

「俺は御家人崩れの半九郎。親分なしの旅烏でね。江戸を喰い詰めた男だよ」

「お前さん、この宿場を目当てにおいでになったのかえ」

「ただ通り掛っただけのものさ。それがどうかしたのか」

「この土地じゃ、いま博突打ちの縄張り争いが起っているのさ。昨日もこの辻で斬り合いがあったんだよ。狭い宿場町だもの。ふたつも一家が成り立っていかないのが道理だよ。

赤猿の吉兵衛と矢車の猪八ってふたりの親分がいる。私は吉兵衛の女房同様の者だけどね。見たところ、お前さんはかなり腕がお立ちのようだし、どうだろう。吉兵衛一家にわらし

を脱いで下さいな。それ相当の手当も出すからさ」

にやにやと半九郎は笑った。

助っ人集めに急いでいるのだろう。田舎やくさの争いに体を張るのは馬鹿なことだ。わらし錢でごまかすに決まっている。

「折角だがね」

と、半九郎は盃を返した。

「俺も御家人とはいえ直参だった男よ。ケチな仕事はやらねえ。助っ人なんてのは真平だね。どうだい、姐さん。もっと荒く稼げる仕事の話はねえかね」

半九郎は吐き捨てるように言った。

ふいにおえんの眼が妖しく光った。そして体を半九郎にすり寄せて、声を低めて耳もとにささやいた。

「お前さんがその気なら、一肌脱いでもらいたい稼ぎがあるのさ。片棒かついでおくれだね。分け前は半々だよ」

むせ返るような女の匂いが半九郎の鼻腔にまつわりつく。半九郎の唇がいかにも悪党らしく歪んだ。

おえんの顔をじっと見詰めて、ゆっくりとうなずいた。

誘拐

翌日の昼さがり。

半九郎の姿は宿場を出はずれた藪陰にある地蔵堂の前に立っていた。

相変らず三度笠を目深にかぶり、腕を組んだまま街道を眺めている。

おえんの企みは吉兵衛のひとり娘であるお絹を誘拐して身代金を強請することだった。

女房を失ってから、吉兵衛はお絹を掌で囲うよう可愛がって育てた。十九になるお絹の美貌に眼をつけた猪八の横恋慕が縄張り争いに

からんでいるという。

垂れ下った雲が、いまにも泣き出しそうである。梅雨の陰気な空だ。

半九郎が地蔵堂から、ゆっくりと街道に足を踏み出した。四つの人影が近づいてくるのが見えたのである。言葉巧みにお絹を誘い出したのだ。おえんを先にしてお絹らしい若い娘と、吉兵衛一家の者がふたり。これは用心深くついてきたのだろう。

おえん達の方に半九郎は無雑作に歩み寄っ

てゆく。ふたりの若い者が前へ出て立ちふさがろうとした。

半九郎は足を止めて笠の下からお絹を眺めた。ふくよかな頬をもった美しい娘である。おえんがまず口を切った。

「お前さん、誰れなんだえ」

「赤猿の吉兵衛の娘を預るぜ」

「なんだと」

若い者が長脇差の柄に手を掛けた。

「てめえ、矢車の猪八の廻し者だな」

「違うね。ただの悪党さ」

言い終るなり、半九郎の腰から白光が左右に噴いた。鮮やかな居合である。声もなく、長脇差を抜きかけたまま、ふたりは朽木のように路傍の叢に転がった。

「峰打ちだ。安心しな」

誰れにともなく半九郎が呟いた。

お絹が悲鳴をあげながらおえんにすがりつく。おえんが冷たく唇を引き吊らせた。手でお絹の唇をふさぐ。お絹の顎をふさぐ。お絹は事態の異常な変化に体を震わせた。

半九郎が長脇差を鞘に納めると、お絹の体を横抱きにすると、おえんにかわって掌をびたりと唇に当てて駆けだした。

地蔵堂の崩れかけた扉を押す。湿ったほこりっぽい臭いがむっと鼻を突いた。





「猿轡だ。早くしろい」

半九郎がたもとの手拭をおえんに投げた。
おえんも用意してきたのだろう。布片れをま
るめると、お絹の花びらを思わす唇を割って
詰めこもうとするのだ。

「あ、あうっ」

布切れがお絹の声を押しつぶした。その上
から半九郎の手拭が頬をくびれさせて締めあ
げる。恐しさに半ば意識を失いかけているお
絹である。後手に縛りあげるのは雑作ない。

「地藏堂の裏の藪を抜けて天明寺に運んじま
おうよ。あそこは安心だからね」

猿轡の上でお絹の睫毛がおののいていた。

黒い縄目

竹藪に囲まれた天明寺には、年老いた盲目
の住職がひとり住んでいるだけであった。

掃除も行き届かぬ本堂にお絹をかつぎこん
でも怪しむ者はいない、半ば気を失っている
お絹を、転がすと半九郎はおえんに顔を向け

た。

「汚ねえ場所だが、日が暮れるまで俺はひと
眠りするぜ」

笠を脱ぎ合羽を床に敷くと、半九郎はごろ
りと体を横たえた。片腕を突いておえんとお
絹を眺めている。

何を考えているのか、おえんは黙ってひと
りで動いている。本堂の柱にお絹を引きずっ
てゆき縄尻を巻きつける。お絹の上半体が縄に
引かれて起きあがった。襦子の黒襟に顎をう
ずめて、黄八丈に縄の喰いこんだ姿は半九郎
の眼に眩しいほどに見えた。

「おい、お前はそその娘をどうする心算だ」

と、半九郎はおえんに訊いた。

「ちよいと苛めてやるのさ。私はこの娘に恨
みがあるのでね」

おえんは昂奮した楽しげな口調で答える。

客齋で好色な吉兵衛から、金を捲きあげて
江戸へ逃げたいと言ったおえん。そのために
お絹を誘拐して餌にするだけだと言っていた
が、どうやら別な狙いも潜んでいるようだ。

半九郎も妙に胸の中がぞくぞくしてくるのを
押えきれなかった。

おえんはお絹の顔を仰向かせた。濡れたよ
うな黒い眼が恐しさに慄えている。

「本当に鳶が鷹を生んだんだね。あの吉兵衛

にどうしてお前みたいな娘が出来たか不思議でならないよ」

おえんが手をのぼして、お絹の黒襟をぐいと押し上げた。お絹が体をくねらせる。縛られた体は、いたずらに揺れて、裾をみだすだけであった。

破れ寺の黒ずんだ床に、華麗な色彩が鮮やかに浮んだ。おえんの指は隙なく動いて、長襦袢の襟もはだけて腕の付根まで剥ぎ落す。むっちりとした生娘の凝脂をのせた肌があらわになる。

「う、う——」

やめてくれとお絹は叫んだのだろうが、猿轡に塞がれた口からは呻き声が洩れるばかりである。

「お前は私が吉兵衛の女房になることにさからったんだねえ。猫可愛がりの吉兵衛だものお前の言う通りになっちゃった。小娘のお前にあやつられたんじゃ私は気がすまないよ」おえんは憎々しげに言った。指をのぼしてお絹のまるい肩の肉をつまみあげた。ひねりあげる痛さに、お絹は体をよじった。猿轡の下から苦鳴が流れ出る。

「う、う、うっ」

おえんの指は意地悪く動く。襟を引きはだけて、白いぬめ肌を思うさま剥き出すのだ。

誰にも見せたことのない無垢の肌を、さらけ出されるお絹の羞恥は耐えられないほどであった。黄八丈と長襦袢は胸を締めつけている縄によじれている。

ふくよかな乳房が、縄に責められて、ぶつくりと覗いている。匂い立つような肌であった。

半九郎は息を吞んで見詰めている。

「お前の泣き叫ぶ声が聞きたいねえ」

おえんが猿轡の結び目に手をかけた。

「おい、そんなことをして大丈夫なのか」

と、さすがの半九郎もおどろいて声をあげた。女の方が大胆なのである。

「心配おしでないよ。この寺の坊主は盲で耳が遠いのさ」

おえんが答えた。頬をくびれさせていた手

拭が落ちると、おえんが半ば開いたお絹の唇から、布片をつまみ出した。お絹は喘ぎながら哀願の声をあげた。

「助けて、助けて下さいまし」

「ふん、お前はね。大事な金づるなんだよ」いきなり、おえんが乳房の肉を揉みねじった。

「あ、あれっ」

非情なおえんの指が動き続ける。

「ひ、ひい——」

悲鳴をきしませてお絹がのけぞった。裾が割れて、白いすべやかな膝頭が出る。おえんの眼がそれを見ると、きらりと嗜虐的な光を放った。



「ほら、膝が見えるよ。どうだい。いっそ裸になってみないかえ」

「かんにん、かんにんして」

お絹はぎよつとして叫んだ。だが、おえんの表情はそんな哀願にゆるむような生やさしいものではないらしい。

半九郎は咽喉をごくりと鳴らした。

羞恥の底

「ちよいと半さん。手伝っておくれよ」

おえんが振り返った。お絹の衣類を剥ぎ取るのはひとりでは無理なのだろう。半九郎は面白半分に腰をあげた。

「お前はこの娘をどうしようってんだい」

「私はね。こんな若いきれいな娘を見ると、無性に苛めたくなるのさ。お前さんは押えつけといておくれよ。縄は解かなくちや駄目だからね」

おえんが柱に結んでいた縄尻をほどいた。押し倒したお絹の背を半九郎が膝頭で押えつける。その間に素早くおえんが、帯を解くと手をふところに突っこんで扱帯をはずしてしまふ。

「お、お願い。やめて、かんにんして」

お絹が心死に叫ぶ。両手を縛っていた縄をいったんゆるめる。すかさず、半九郎は後襟



を掴んでぐいと引く。しみひとつない白磁の背がむき出る。お絹の手が懸命に襟もとを合そうと動いた。

「く、く、くう」

お絹の咽喉から嗚咽が洩れた。

半九郎は柱に寄りかかって視線を注いでいた。

お絹はくの字を描いて横たわっていた。帯と黄八丈と燃えるような長襦袢が本堂の床一杯に散らばり、その中にお絹の裸身がある。

改めておえんが縛り直した。縄目は柔肌の中に喰いこんでいる。背に組み重ねた両手の指が、しっかりと拳をつくっているのが哀れであった。

赤い湯文字に包まれた腰のまるみが、異様な鮮やかさで半九郎の眼に浸みる。両脚をしつかりと閉じ合わせているが、ふくらはぎの白さも息を呑むほどに美しい。

「かんにん。お願い——」

と、お絹は眼を閉じて呟き続けている。

おえんが立ちあがると、埃だらけの木魚の傍から、撞木を持ってきた、いったいどうするのだろう。半九郎はおえんの動作を凝視する。女が女を責めさいなむのは、陰惨さよりも妖しい美しさが先に立つ。そのかわり惨酷な方法を考えたすのは女なのだ。

「ふふ、この姿を吉兵衛が見たらどうだろうね」

と、おえんはおもしろそうに笑った。

「おえんさん、許して。許して下さい。お願いですっ」

お絹が泣き声を振り絞った。突っ伏して、出来得る限り、肌を隠そうとするお絹であった。

女という奴はひでえものだ。と半九郎は口の中で言った。

「許すかどうか私は知らないよ。お前の親父次第さ」

おえんはにたりと笑って、

「鉦代りに女の悲鳴を仏さまにお供えするのさ。柔かい鉦だから音は悪いからね。精一杯いい声で泣くんだよ」

いきなり撞木でお絹の臀を叩きはじめた。

湯文字があるとは言っても、薄い布地一枚である。しかも、おえんは力をこめて叩いているのだ。

「ひ、ひいっ」

お絹が悲鳴をあげて両脚を縮めた。

「い、いたい、やめて」

泣き声が鈍い音に交錯する。

「おい、よしな。それほどいたぶることはねえだろう」

半九郎が苦笑を浮べて口をはさんだ。夢中になっているおえんが聞く筈はない。

「放つといとくれ。私は好きでやってるんだよ」

おえんは高い声を返して、今度は撞木を縄目の間にくぐらせて、力まかせにこじあげた。

「く、くうっ」

お絹がのけぞって呻き声を噴いた。縄は乳房の両側から喰いこみ、息の詰まるほどに胸を締めつける。おえんはゆるめては力を入れてじわじわと責めていく。お絹の髪が、がっくりと崩れる。

赤い裾を踏みしだいて、ぬめぬめとした太腿が宙に躍った。

濡れ笠

降り出した雨に、濡れた三度笠が、吉兵衛一家の土間にぬうっと立った。半九郎であった。

峰打ちで倒した三下奴は息を吹き返して告げたのだろう。吉兵衛一家の騒いでいるところへ、半九郎が現われたのだ。

「おい、吉兵衛に会わせろ。娘のことで話がある」と伝える

笠の下からどすの利いた半九郎の声が流れ



出る。

「この野郎だな。お絹さんをかどわかしただ奴は」

居合せた五、六人の若い者が長脇差を引っ握んで立ちあがった。

「静かにしろい。お絹の命が欲しかったら黙って吉兵衛を呼んでこい」

半九郎の叱咤は家中に響きわたる。奥から飛び出た五十ちかい男が吉兵衛だろう。この男の娘とは考えられないお絹だと半九郎は苦く笑った。

「俺が吉兵衛だが、お前がお絹をかどわしたのだな」

吉兵衛が唇を慄わせた。

「てめえは矢車の猪八の子分じゃねえようだが、誰に頼まれた」

「余計な詮索は抜きにしろ。手っとり早く決めてもらおう。二百両の金を出せばお絹はてめえのところに戻してやる」

と、半九郎はじろりと殺気立っている一家を見廻した。

「お絹の傍には妙な男がついている。こいつは女を殺すのが大好きだという奴だ。俺の帰りが半刻ほど遅れたらお絹の命はなくなる。二百両出さねえなら、俺は矢車猪八にお絹を売りつける」

この威嚇には吉兵衛も顔色を変えた。矢車の猪八の横恋慕が争いの一因でもあり、お絹を敵側に渡されては縄張り争いの敗北は決定的となる。

「待て、本当にてめえがかどわしたか決まっちゃいねえ。お絹が無事かどうか確めなきや金は出せねえ」

半九郎はにやりと笑った。吉兵衛が金を出すことは決定したも同然である。

「成程、そりゃ、お前さんの言う通りだ。よからう。今夜六つ半、お前さんひとりで宿場はずれの地藏堂に来るんだ。いいな、たったひとりだぜ。そこで俺がお前さんをお絹のいる場所に案内して引き換えに金をもらおう。これで承知だな」

言い置いて、半九郎は子分達の方に向き直った。

「俺は矢車の猪八とは何の関係のない男だ。万一、猪八の子分どもが襲いかかってきた時には俺が必ず守ってやる。安心しろ」

半九郎はすたすたと背を向けて油障子をあけた。吉兵衛一家は声もない。半九郎は笠を傾けて空を仰いだ。雲が切れたのか、梅雨の夜空は意外にも明かるい。雨はいつの間にかやんでいた。半九郎は街道を歩きながら、お絹の肢体を思い浮かべていた。

天明寺の本堂に帰りついた半九郎は、脱いだ三度笠を濡れ縁にほうり、中を覗きこんで眉を歪めた。百匁蠟燭が二本、赤味のある光を拡げていた。

お絹の裸身が本堂の床に光を浴びていた。絶えず唇から呻き声が流れている。両脚をあぐらのように組み合わされて、足首を括った縄がお絹の首にまわっている。お絹の背はまがり、後手の指が宙を掴んでいた。

半九郎が消えていた間に、おえんはずいぶんお絹を責めたのだろう。お絹の白い肌は噴き出た脂汁でぬらぬらと光っていた。

「おい、いい加減にしねえか」

半九郎がいらいらした声で言った。

おえんが振り返った。上気した顔は凄艶な美しさを漲らせていた。おえんはお絹を責めさいなむ悦びに酔っているのだろう。半九郎は話の成立を告げた。

悪女の報い

六つ半、地藏堂の傍に、吉兵衛が立っていた。ふところに二百両の金包みが重い。娘可愛さに都合した二百両だ。それにしても、おえんはどこにいったのだろう。吉兵衛は落ちつかぬ眼を闇に光らせた。約束通りひとりはきたが心細い。

と、黒い旅装が闇の中から現われた。

「待たせたようだな」

三度笠に廻し合羽の半九郎である。

「尾いてくるがいい」

半九郎は吉兵衛に言つて先に立った。蛙の
声が喧しく響いている。

天明寺の崩れ落ちた山門の傍までくると、
半九郎は足を止めた。吉兵衛がぎよつとした
ように立ちすくむ。

半九郎はおえんに分け前をやる気をなくし
ている。おえんはお絹を責めて充分に満足し
ただろう。今度は俺が満足する番だと半九郎
は決めた。

「金を出してもらおう。娘はこの寺の本堂に
いる」

吉兵衛は両手でふところを押えた。

「話が違ふぞ。娘と引き換えに渡す筈だ」

「判つてゐるよ。だが、金を受け取ったら俺は
すぐ消える。娘は本堂で素っ裸にされてな。

海老責めに縛りあげられてるぜ。娘の傍にい
るのは男じゃねえ。おえんだよ。お前さんの
妾のおえんが書いた筋書きだが」

半九郎は吉兵衛の襟を素早く掴んだ。片手
を吉兵衛のふところにすべりこませる。

「な、なにをしやがる」

吉兵衛がわめく間に、半九郎は金包みを抜

き取つて、吉兵衛をどんと突き放した。

「ゆきな。いって金の恨みをおえんに晴らす
んだな」

押された勢いで、吉兵衛は本堂めがけて駆
けだした。

半九郎は掌にのせた金の重みを、しみな
がら、にやにやと突っ立っていた。

本堂から女の叫び声と男の怒号が聞こえて
くる。

おえんと吉兵衛が争っているのだろう。や
がて、その騒ぎは静かになった。

半九郎は二百両の金包みをふところに押し
こむと、天明寺の草がおい茂った境内に入っ
てゆく。

音を殺して濡れ縁にあがり、破れ障子の間
から本堂を眺める。

事態はまったく逆になっていた。

裸に剥がれて、水色縮緬の湯文字だけで転
っているのはおえんである。

女盛りの豊満な裸身は素晴らしい量感に満ち
ている。縄は吉兵衛の噴怒をこめて喰いこん
でいた。

お絹は責め苦から解き放たれて、気を失っ
たように横たわっていたが、さすがにやくざ
の娘だ。よろよと起きあがった。

「この阿魔、俺を裏切りやがって、畜生」

吉兵衛がわめき立てて、おえんを蹴りつけ
ている。

後手に縛られたおえんは、ごろごろ転がり
ながら泣き声をあげている。

「親分、私じゃないんだよ。許しとくれよ」

お絹が吉兵衛に凄いのを言った。

「おとつあ。海老責めに縛るのよ。そし
て体中にお灸を据えてやるの。その性悪女を
こらしめてやつて」

「許して、許しておくれよ」

おえんの悲鳴を聞きながら、半九郎は濡れ
縁から草の中に降りた。

今度はおえんが責められる番だ。女って生
きものは恐ろしい性質を持っていやがる。と半
九郎は肩をすくめた。

ふところの金を掌で暖めながら、半九郎は
笠を傾けて歩きだした。



ゴルドンの記憶

⑧

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

エテルナへの疑惑

流しのギター弾きから、まるきり連絡がなく二週間が過ぎた。わたしはようやく不安の念にかられ始めた。なるだけ目立たないにこしたことはないと思って、エテルナにも足向けなかった。それが結果としてまずいことになった。なんらかの變事があつたに違いな

かった。あの一見、ニヒルな感じの青白い顔のギター弾きは、結構信頼のおける男だと、ぼくは見えていた。

最初、相馬博士とおぼしきこじきについて情報を聞き出そうと、わたしは応分のチップをはずんで彼に頼んだのだが、彼は知らぬことは知らない、とばかり、もらった金をわたしに突き返した。あの一徹な彼の冷たい表

情には、十分に信頼するに足るだけの気概じみたものがこもっていた。それだけに、いったん引き受けた事がらについては、必ずそれだけの責任を持つ男、そうわたしは見えていた。だが、二週間もの間、彼からの連絡はなかった。となってみると、じっとしているわけにはゆかない。意を決する思いで様子を探りに出た。夏の宵である。日が落ちると、街角



に涼しげな宵風が立った。その付近は飲み屋やバーが軒を連ねている一画であった。エテルナという、小さなかわいらしいスタイルの門燈にも灯がいて、ふとそれを見た瞬間、あのたくましい上島氏の横顔を、それと重ね合わせるくあいに思い浮かべた。エテルナは上島氏のなじみのバーであった。

最初、新宿の街頭で、サレアと連れ立って歩いていた上島氏を見かけた日、初めて彼に案内してもらった。和服が似合の三十前後の

■前号まで

わたしは大阪商船の上島氏と、彼の知合いであるふしぎな女予言者サレアとの妖しい運命のもつれに巻きこまれてゆく。そしてふしぎな世界を暗示する『ゴルドンの伝説』に関する古文書を、上島氏はわたしにいわくありげにあずけ出航する。美しい上島夫人、美美子とその出航を見送った時の思い出が印象的だ。わたしの心は美美子に傾いていた。

『ゴルドンの伝説』の古記録の、本当の持主、人文学者の相馬博士に会う機会をうる前に、留守中、正体不明の女に記録を持ち去られ博士も行方不明となる。東亜日報の小林春吾などは、博士の行方不明についてさほど関心を持たなかったが、これは想像

マダムは、如才なくふるまった。上島氏の好みをよく心得ていて、キュラサオ島産の本物のキュラソーをかねて用意していたりした。

コマ劇場でサレアの不思議な予言の舞台を見、彼女の楽屋でゴリラ男を近々と見、そこで上島氏とふたり、ゴリラ男はもしや有尾人では、という猟奇的な話題を闘わしたのもエテルナにおいてであった。

上島氏が航海に出た後、その後を受け継いだ形で、わたしはエテルナに通った。小林春

以上の事件となる。博士の行方を追求するため盛場の流しの男などに協力を求める。焦点はバー・エテルナ。その間に航海勤務中の上島氏がキューバ近海の洋上で、突如消えてなくなった事件の知せを受ける。この一連の裏側に、ナゾの女、サレアの影がたえずつきまとう。

そして相馬博士が惨殺死体となって発見されて事態は急転回し始めた。場所は奥多摩秋川河谷、死因は餓死。だが、異様なのは全身の傷だ。集団リンチが行なわれたこと歴然としていた。わたしはギター弾きの流しの男にバー・エテルナの様子を探るよう依頼する。しかし彼はホステスのひとり、キクに近づき、逆に彼女らのとりことなる。

吾とも何度か行った。マダムは前よりいっそう如才がなかった。エテルナにはマダムのほかにナオミとキクがいた。ほかにも何人か女の子がいたが、いずれもピチピチした若い子たちばかりであった。ルミはふつくらした、肉づきのよい面立ちをしていた。キクはやせぎすで、クリクリしたかわいい目をしていた。

そのキクに、わたしは好意を感じていた。何の変哲もない、なじみの気やすいバーが、エテルナであった。

だが、そのエテルナに、ぼくはいつしか秘密のにおいを感じていた。こじきの件にしても、今度の流しの男の件にしても、いや、流しの男といえ、まだ、何がどうなったというわけではないが——とにかくぼくは真正面から当たるつもりで、エテルナのドアを押し

妖しい雰囲気

「あら、阿麻さん、どうしてらしたんです」
「いちはやくわたしの顔を認めて、女の子のひとりが声をあげた。二人連れの客が、一組、カウンターでグラスを傾けていたが、時間が早いせいか、女の子たちは、いずれも手持ぶさたのようであった。」

チラリと一瞥をくれるまでもなく、キク

とルミのふたりが、出迎えのかたちで立ってきた。カウンスターの客が、いずれも振り返るようなかたちでこちらに流し目をくれたが、その中を、わたしは奥のほうのボックスのほうに歩いていった。

「マダムは？」

「もうそろそろ来るころだわ」

ルミが目もとに笑いをためて言った。ふくよかなかわいい感じに、女の挑発的なコケトリがこめられていた。大抵の男は、こういう女のコケトリには弱い。しかるべきナイトクラブに出ても、おそらくナンバーワン、ツウ、スリーあたりにははい入るであろう。

ところで、もうひとりキクがいた。彼女はルミに比べるとやせていた。いったいに小造りであった。身軽な身のこなのが少年じみた印象を与えた。いたずらっぽい大きな目をしていて、そこには何か、妖しい雰囲気を感じられた。わたしはふしぎに、ルミよりこのキクのほうによけい引かれるものを感じていた。

赤いサクラランボの実が涼しさを呼ぶ甘口のシンフィズ。キクがすり寄ってきた。エリ元が湾曲して、深くくくれているところから、彼女の乳部の、隆起しかける肉の盛り上がりが見すかされた。やせてはいるが肉はしまつて

はだが抜けるように白かった。

キクもルミも、全く前と変わりがなかった。何のわだかまりも、含みもなく、如才がなかった。これもマダムのおしこみの効果であるうか。

だが、このあまりの変化のなさに、かえって、わたしは何かしらハダに迫る恐れを感じた。そんなことはないのだ。確かに何かがあったのだ。そうでなければならぬのだ。

いなくなつた兄貴

時計を見ると九時になっていた。まだマダムはこなかった。

「どうしたんでしよう。ママさん遅いわね」
わたしの気を察してキクとルミは、口裏を合わせるようにそう言った。とその時、三人連れの流したちが、

「どうですか旦那、一曲」

口々に言いながら、奥のほうまで割りこむようにはいつてきた。そのころはあらかた店は客で満員になっていた。だが、だれも曲を所望する者がいない。一番奥まできて、帰りにシロッとわたしと視線を合わせた男に見おぼえがあった。連絡を絶ったまま、もう二週間以上にもなる、あの流しの男といっしよの組で歩いていた男に違いなかった。

「ちょっと」

呼び止めると男はかかえていたギターを持ち直すように、小腰をかがめた。

「旦那、一曲景気のいいところでもやってもらえますか」

帰りかけたふたりの連れも、引き返してきてボックスの回りに立った。

「景気のよいところ、そうだね。じゃ、ひとつ『出世街道』でもやってもらうか」

「はい、待ってました。旦那は好みがいい」
「畠山みどりとはいかしますな。じゃ、いちようやりまっさ」

せまい店の間に不似合いなほどの熱演で、
「……どおうせ、この世は、いーっぱんどっこ」拍手がパチパチとあつて、わたしはそこでさえぎって言った。

「前いっしょにいた、あの青白い顔したお兄さんは、きょうは見えないようだね」

「あ、兄貴ですね。兄貴ならここんところどつかへ雲隠れ、行方不明になっちゃったんですよ」

と、いつものんきな答え方だった。わたしには彼のその答えより、実は間接的に、ルミやキクの反応をそれで確かめることにねらいがあった。視界の端で、彼女らの表情や動作に、どんな動きがあるかと、注意をこらして



いたが、何の反応も変化もなかった。それどころか、

「そういうば、あの人、ここんところ顔見せないわね」

などと、人ごとのように言っていた。

奇蹟と科学

新聞の文化欄に、霊媒に関する記事が特集されていた。そこに掲載されている顔写真は現代の奇蹟、サレアの美しい横顔であった。説明文を読まなくても、それがサレアである

ことがわたしにはすぐわかった。

東大教授と編集局長との対談で、霊魂は不滅か、という論題で語られていた。わたしは霊魂の存在などは頭から信じない不信心者であったので、大抵は見過ごしてしまう記事であった。だが、サレアの顔写真がわたしの関

心を引きつけた。

最初新宿の街頭で、彼女の後姿を真近に見かけた。長くふさふさとして長い真赤な鳥の羽を頭飾りに、地に届くように豊かな髪を背に垂らしながら、一枚皮のトカゲの被布をまとった異様な彼女の風態を、今でもまさまざと思い返せるのであった。彼女は事もあるうに、上島氏と連れ立って歩いていった。聞けば、サモア島で知り合った、と、上島氏は言っていた。

奇蹟の女、サレア。その実演をコマ劇場の舞台で見た。ゴリラ男を責め殺す女性出演者は、と、飛入りの娘たちが募られたが、いずれもゴリラ男の不死身には勝てなかった。ともかくショッキングな思いきったショーであった。いよいよサレアの出番という時に、司会者がこんな説明をした。

「奇蹟の女、サレア。彼女は自分の前世をありありと目のあたりに見ることができます。前世のまた前世をも見るができます。科学では解くことのできぬこのナゾ！人は前の世には何であったか、そして来世は何に生まれ変わるのか。この大問題に解決を与えるのがサレアの奇蹟であります」

その口上の通り、サレアは、まるで千里眼のような透視術の偉力を、いかななく発揮し



た。

新聞の対談記事は、世界の学界でも話題になっている、このサレアの奇蹟を科学の目でどう解き明かすか、そうして霊魂は果たして存在するのかどうか、というふうに話題が及んでいた。わたしはその一字一句、目をすえて、むさぼるように読んだ。

サレアの記憶

記事には、サレア自身に関する、かなり詳細な記録が付記されていた。サレアは、自身自身に関して、自己の霊魂と語り合うことによつて、次ぎのような記憶をヒレキしている。『わたしはこの世に三度の生を受けた。一度目は今もって記憶がおぼろげで、ここにすべてを語ることができないのが残念だが、二度目は今をさか上る五百余年前、アラビヤの酋長の娘で、名をシマンディーニとして産まれた。長じて、インドの王子シヴルカにとついだ。シヴルカはカナラ王国を治め、紀元一四〇一年にチンドラギーリの要塞を建設した』ここで実は、当時の状況の微細な説明がサレアの記憶で語られるのだが、紙面のつごうでその部分は割合してあった。だが、驚くべきことは、世界の奇書とされるインド史の原典、S・チャールリットの著書には、確かにサ



レアの語る場所や人物が、その通りに矛盾なく存在していたのである。そしてこのチャールリットの書は、これを読める学者は、世界でもわずかな数名にしか過ぎないという難書で、サレアが、これを読むはずは決してなかった。

そればかりではない。この印度の王子シヴルカは、時折自動的に襲ってくる催眠状態の間に、インドの古語ととりまぜて、アラビヤの時代語を書いたり話したりしたというのであった。この時、彼が書いたり話したりした、最も難解なことばを、サレアは実になつかしように目を細めながら、自在に書き、しゃべるということであつた。

『第三番目のわたしの生がいは』

と、サレアは語る。

『フランス革命のさい、断頭台の露と消えた

マリリー・アントアネット、彼女こそわたしです』

こうせんとくそぶくサレアは、ここでも事細かに、日常の宮廷生活の詳細を、逐一語つてよどむところがなかった。

このほかにサレアは、自己の霊魂をからだから自由に解き放すことによつて、珍しい火星旅行の話をしたりした。火星での奇異な風俗のほかに、もっと奇抜なのは、サレアの語る火星語であつた。この不思議なことばの前に、世界の言語学者はいずれもカプトを脱いだ、火星語は決して出たら目なものではなかった。一定の韻律と秩序があり、整然としていた。

新聞の特集記事の対談では、結論からいって霊魂の存在は否定されていた。だが、生き



ている奇蹟、サレアに関しての意見はいまいであった。それは夢と同じく、一種の迷妄の所産であろう、ということであったが、それでは批判の根拠は薄弱である、と、ぼくは思った。

ところでわたしには一つの疑問が起こった。それは、サレアの最初の生がいは、いったい何であったか、ということであった。記憶がおぼろげであるから、ということは、言い訳にはならない気がした。あれほど詳細に、第二、第三の生がいついて記憶をよみがえらせる能力を持つ彼女が、第一の生がいついての記憶がなぜおぼろげか、そんなはずはないという気がするのであった。

失われたその第一の記憶、それこそゴルドンの記憶と呼ばれる恐るべき秘密ではないだろうか。そして、その秘密の一端を、相馬博士が広範な南方未開発地域の実地調査によって、探り出してきたのではなかったのか。何者とも知れぬ女に持ち去られたあの『古文書』が、それを解く手がかりであった。カギであった。

わたしは新聞の特集記事を読むことで、そんなトテツもない連想と推理を働かせたのであった。

甘いかおりの女

第二次アフリカ類人猿学術調査隊長、西司郎教授が香港経由のエルフランス機で羽田をたったのは、結局夜の八時七分過ぎであった。黒くのしかかるように空が重く感じられた。一点の星影もなかった。風さえなかった。昼の暑さがそのまま夜に持ち越されたようにむしむしした。

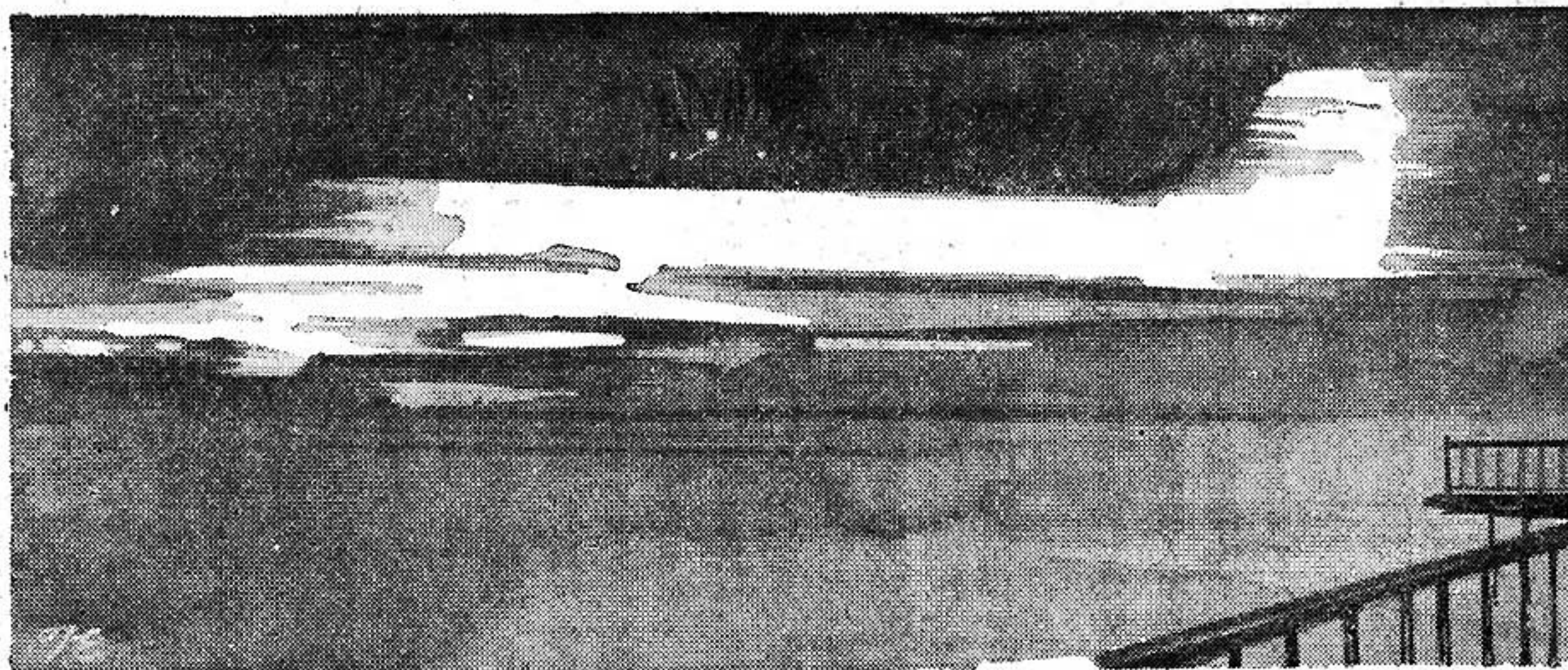
いったん動き出した飛行機が夜の滑走路に方角を向けかえ、テールライトのあでやかな光彩をきらめかせて、一陣の風をまき起こし、前方の闇に挑戦するように立ち向かった後、エプロンステージの見送人たちの間に一種の虚脱感がわいた。小林春吾もそのうちのひとりであった。同僚とふたりで新聞のタネ取りに来ていたのであった。

「おい、ほつぽつ引き揚げようや」

同僚のカメラマン、会田琴三はそういって小林春吾をうながした。

「よっしゃ、帰ろう」

ざわざわとざわめきが起こり、見送人の人波がくずれ、あかあかとともる空港メインピルの照明の中に、動いていった。小林春吾は押されるようにして表に出たが、その時前を歩いていた若い女に、鼻先を押しつけられる



ように、いやでも近々と寄らされた。いいにおいがした。何のにおいかはわからないが、独特の甘いかおりであった。その女の後エリが深くくけていた。背中のハダの白さが夜光虫の輝きのように、小林春吾のハナ先でまぶしく浮き立った。

「どうしたんだ。ほんやりして」

表で社の自動車に乗る時、会田琴三が小林の背中をどやしつけた。

「いや、実に美人だね、あの女」

いずこともなく人波の中に消えていった若い女の後姿を、小林春吾は残り惜しそうに見送っていた。

それからその後も、その女のことを、小林春吾にとっては忘れられない強い印象として残った。だれを見送りに来たのかは知らないが、ともかくちよつとした因縁めいたものであった。これが後に、小林春吾にとって、大変な出来事の端緒になろうとは、その時までには思っても見なかった。

殺人

熊本県阿蘇郡小国町杖立温泉から西の方、のしかかるようにせばまってそびえる湯見岳の山林に、男の惨殺死体があった。発見者は炭焼業の河津倉蔵である。

ちょうど八月十八日の午前六時ごろ、河津倉蔵は一の番小舎の炭焼場へ、当分の食糧を背負籠にせおいこんで、細々とした木立の下籾の中のソバ道を登っていた。背後は急な傾斜でその落ちたところが県道になっていた。大分県日田市から熊本県阿蘇郡坊中を経て、熊本市にまで通じるいわゆる九州縦断道路である。道路は深い杖立川の峡谷に添って、うねうねと蛇行している。

河津倉蔵は一息入れるかたちでコシをおろそうとした。傍にワキ水があった。下草を濡らし小さな滝となって、急斜面の山肌を流れおちていた。山の朝の空気は澄んでさわやかだった。ところが、倉蔵はそのワキ水のすぐそばに、思いもかけぬ見知らぬ男が打ち伏している姿を見た。両手を伸ばし、足を乱してくの字に曲げ、顔はそのまま流れ落ちる水のしぶきに濡らしていた。

河津倉蔵は仰天し、背負籠はそこに置いたまま、走るように今来た急なソバ道を駆けおりていった。事件は早速杖立駐在所から熊本県警に報告された。

ホシは女か？

男はアロハシャツまがいの開襟シャツに、黒いズボンをはいていた。そしてはだしであ

った。付近一帯、くまなく搜索されたが、男のはき物は見つからなかった。その他手がかりになるものは何一つ見つからなかった。

第一、どこからどう運ばれたのか、死体をつぐか、引きずるかしてのそのあたりの下草の乱れもなかった。不思議な事件だった。

検死をしたとき驚いたことに、全身無数の傷が、殺し方のいかに残虐であるかを証明していたが、打傷、切傷、刺傷ありで、中にも左目ふちからハナ、耳にかけて、無数の小さな針の刺痕があった。下腹部から男根にかけてもそれがあつた。集団リンチのあと歴然であつたが、誠に異様な殺しではあつた。

死体は熊本医大で解剖に付されたが、その結果さらに意外な真相が明るみに出た。男の死因は餓死だったのである。胃の中には何ともおぞましいことに、回虫の幼虫が何匹もとぐろを巻くように、生きて動いていた。そしてその中に、緑の染色体を持つクロレラが検出された。

県警の古谷捜査一課主任は、そこで東京、警視庁から照会のあつた奥多摩殺人事件の事例を思い出した。相馬博士の事件であつた。ナゾと猟奇に満ちたセンサーショナルな事件は二か月ほど前の六月二十日から二十一日未明にかけて行なわれた。その後、捜査は一向

に進展の跡を見せなかった。

「これは相馬篤太郎殺しといっしょですな」

古谷主任の発言をまつまでもなく、そのことはもう自明の理であつた。

しかし考えても不思議な事件である。奥多摩秋川溪谷の人里部落と、阿蘇杖立溪谷の山林と、地理的にいいたいどんなつながりがあるというのだろうか。被害者の男はこの付近の者ではなかった。都会くずれしたニヒルな感じがあつた。現場の状況と、なお男の死因が餓死だということから、殺人の現場は明らかにほかにあつた。どこかに監禁され、大勢のなぶりものにされ、そして飢え死にに追いこまれた。その場所はどこなのか。その場所からいつ、どんな方法で死体は運ばれたのか。それらしき者を見かけた者はないかと、土地の住民の協力を訴えかけたが、だれも届け出る者はなかった。大分県日田市、熊本県坊中、宮地のタクシー業者にも、心当たりの客を運んだ者はいなかった。

警視庁捜査一課坂崎警部は、熊本県警古谷主任からの連絡で、早速山浦、岸本両刑事を現場に急行させた。両刑事は両三日の出張からあたふたと戻ると、湯見岳山林殺人事件の詳細を報告した。

「そりやまるっきりおんなじ手口だ」

坂崎警部は腕組みして考えこんだ。頭に浮

かんだのは相馬博士の死体の模様であつた。

左目ふちからハナ、耳にかけて無数の針の刺痕があつた。さらに下腹部から男根にかけてやはり針穴の跡があつた。

「とっぴなようだがね。ホシは女かもしれんぞ」

不意に警部は、半分は自分に言いきかせるような、そんなつぶやき方をした。

西司郎と芙美子

校了日の翌朝、わたしは朝寝の床の中で、たばこをふかしながら、何気なく手を伸ばし、机の上にほうり出してあつたままの写真帖を取り寄せ、パラパラとページを繰った。その中に上島氏夫人芙美子のポートレートがあつた。わたしが写してやったものだった。西荻窪の大阪商船社宅の近くでだった。小さな子どもの遊園地、彼女は片手にブランコの綱をにぎり、ニコリとこちらにはおえみかけていた。切れ長の目じりに強い線があつた。

「阿麻さん、お客さんですよ」

下宿のおばさんの声で、わたしはどきりとした。遇然の符合というもので、それが芙美子ではないかと、とっさに思ったのだった。いささかあわて気味に床の中から起き上が

り、急いで服に着替えようとするところへ、上がりこんできたのは小林春吾だった。

「なんだ。君か」

わたしは、また半分がっかりしたかたちで床の上に身を投げた。

「あれ、君か、とはひどいね。おれで悪かったのかい」

いささか不満気味の小林は、それでも勝手した気やすさから、挨拶も抜きにわたしの枕元のあたりにコシをおろした。

「おっ、この人、君知ってるのか」

小林は写真アルバムの、芙美子の写真にほんきような声をあげた。

「どうしてだい」

小林の言い方に、ちょっとただならぬ気配を感じてわたしは、床の上に顔を上げた。

「いや、なにね。この人なら、ついこの間羽田で見かけたもんだから」

小林はゴクリとつばを飲んだ。目を輝かせている。

「羽田っていえば、君そうだ。あの日だよ。」

西司郎教授を見送りに行った日だよ」

「彼女にまちがいなかったか」

「そりゃ、もう——」

まちがうはずはないと、小林春吾はハナをうごめかした。あの独特の甘いかがりが、今

でも漂っているようであった。

「本当にまちがいはないか」

ほくが念を押すと、小林はいやに念を押すじゃないか、といった顔で、

「まちがうどころか、一目ぼれしちゃったんでね」

「だったら、彼女はいったい何で羽田に行ったんだ」

「そんなこと知るかい。だれか見送りに行ったんだらう」

小林春吾はあくまでのんきに構えている。「だけど、いったいだれを見送りに行ったのか」

「さあね。そこまではね」

「君が見送ったのは、確か西司郎とかいったね」

「そうだよ。えらくくどいじゃないか。——どうかしたのかい。それより、その美人はだれなんだい」

「うん。なんでもないけどね。この人は、君も知ってる上島さんの奥さん、芙美子さんだよ」

わたしは気のない返事をした。何だか変な疑念に捕われて頭が困乱した。

「主任、ホシは女じゃないかって、それはまだどういう意味ですか」

坂崎警部のひとりごちるようなことを、みんなは聞きとがめた。

「いや、何となくそんな気がしたまでだ。集団リンチといったって、この特徴のある針の刺し傷なんか、男より女のやりそうなことだよ」

「だってまさか」

刑事連は不服げな面持ちであった。「女が、そんな大それたことをするかって言いたいんだらう。おまけに集団でな」

警部は机にほおづえをついた。「いや、ほくもまさか、とは思うんだ。ただ、何となくそんな気がしたもんだから。しかしいよいよとなるとね。本当に残酷になるのは男より女だよ。まとにかく、今度の事件は何といったらよいか、とにかく普通の殺しじゃないね。常識っぱずれなところがある。それだけに、捜査も並大抵の苦労じゃないと思うが、何分とも最後までがんばってくれたまえ」

その時ドアをあけて、刑事のひとりがいって来た。

坂崎警部は、いかつい視線をその刑事のほうに向けた。

(未完)

面会人

読

者

コ

ー

ナ

ー



★他にも多くのご投稿がありました
たが、スペースの都合で掲載でき
なかったことをおわびします。こ
のらんの投稿はハガキでも結構で
すからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌
次号をお送りします。誌上匿名は
自由ですが、住所、氏名はお書き
ください。（読者コーナー係）

て掲載されていますが少し多
ぎたのではありませんか？海
外ものという興味はありますが
絵が漫画的などころもあり、実
感がわきません。やはり日本の
画家の筆による絵の方が親しみ
があります。貴重なグラフィアペ
ーシですからもう少し有効に：
：と思うのは小生のわがままで
しょうか。「寄稿作品の短評紹
介」は投稿者に対するサービス
といえますか、今後投稿する際
の貴重な参考ともなりますの
で、よかったと思います。愛読
者あつての出版——そういうサ
ービス精神と、良心的な編集部
の態度が、毎号、誌面のどこか
に見だされます。

（和歌山・YM生）

★「裏窓」のあちらこちらに鏤
められているかわいらしいカッ
ト、だれの筆か知りたく思っ
ていましたが、十月号「龍宮城の
反乱」で落合竜二氏のものとな
り、あらためて鑑賞しなまし
ました。宝石のような氏のカッ
トは、その抒情味と相まって非
常に好ましいものです。特に九
月号「海外SM誌紹介」にある
もの、十月号「ミッドナイト」
のカットなど。外国の写真や絵
は、いかにも現実離れの構図で

★残暑お見舞申し上げます。都
会の雑踏を離れて「静かな京都
を」と思っ出て出かけましたが、
いや、いずこも同じで、かえっ
て疲れにいったようなものでし
た。ところで、今日、九月号拝
見しましたが内容的には充実し
てきていると思います。この春
からの作品では「アラビアの城
シリーズ」が文章、挿絵ともよ
く、僕のもっとも気に入ったも
のです。特に五月、九月号のが
よかったと思います。これから
も、このような作品を是非続け
て欲しいものです。編集者諸氏
のご健康、ご健闘を祈ります。

（東京・一愛読者）

★バックナンバーで購入しまし
た旧号と、最近の九月号を拝見

して感じたことは、旧号に良い
記事、良いグラフィア等が載っ
ていました。まず三十六年八月号
にある「レジャーの利用法」と
題し、縛られた女のグラフィアに
映画スターの顔をくっつけて楽
しむという記事は、なかなかお
もしろいものでした。小生も以
前はそうして楽しんだ経験があ
り、やはりいろいろな面で小生
と同好の方がいるものだなあ、
と感じたものです。こういう実
用？的な記事も今後いろいろな
面でご掲載下さい。そして「挿
絵の名作展」を載せている旧号
でしたが、今後も続けてよいと
思います。新しく読者になった
者のためにも、旧号を買いもら
した者のためにも、この「名作

展」はよい方法で、その中に気
に入った絵のあるのを見て、そ
の絵の載っているバックナンバ
ーを買ってみよう、という気
にもなります。また、同じ八月号
の「夜の舞台は濡れている」と
いう記事もよかったし、挿入写
真がいい。縛られた女が三人、
本当に楽しくなります。さて、
本年九月号ですが、八月号と何
ら変わった点もなく、ややマンネ
リ化というところでしょうか。
都築先生の絵も精彩がないよう
です。先生の絵はペン画よりも
写真版の方が好感が持てるので
すが、しかし山田、春日両先生
の絵は、本当に申し分ありません
でした。「海外SM絵物語」
はグラフィア十六ページにわたっ



あり、図式的であり、ただだけ
ません。むしろ、氏や、鬼頭曉
氏の絵筆で充たしていただける
ならうれいのに、と思ってい
るのです。その方がたとえ雑誌
が薄くなっても、充実感をあた
えられるのではないだろうか。
その意味で「龍宮城の反乱」は
貴重でした。ストーリーにもシ
ョート・ショートの味が効い
ていて魅きこまれました。

(東京・大森鷹雄)

★拝啓、九月号拝見しました。
そこから「読者コーナー」の諸
氏に対する、私の意見を述べて
みたいと思います。まず、東京
・Kさん、あなたはSMとは何
か、もつと真剣に考えてほしい
と思います。SMとはねじまげ
られた文学では決してなく、真
に意義をもった芸術であるので
す。しかし、これは明きらかに
従来の純文学、大衆文学とは質
的に異なった一つのミュータン
トであり、そして、永遠の疎外
者であります。あなたの考えの
根底には、文学とおもしろけ
ればそれでよいのだ、という一
種の官僚主義に迎合してしま
うとする、大衆排除の原理が底
流しているように思われます。
最後のY・Gさん、あなたの「女

・女・女物語」に対する感想を
読みましたが、これではまるで
子どもの作文（失礼）ではない
ですか、なぜ、もう少しつつこ
んで真のマゾヒズムとは、真の
美、女の美しさというものにつ
いて考究されなかったかと残念
に思います。最後のほうは腰く
だけの感がするように思われま
す。あなたは最後の二節で最初
の論をひっくりかえし、結局な
にも書かないようなことになっ
てしまったのではないでしょう
か？ では本の内容の方を少
し、まず表紙から、九月号の表
紙は真にSM的な芸術写真と思
う。広い画面に一人の女、これ
は実にすばらしい構図です。難
点もないことはないが、まずま
ずの出来だろう。「海外の公刊
誌から」これを見るとアメリカ
の類縁した思想から生まれた一
つの、高踏的であるが故に、一
つの新しい使命を与えられた芸
術であるということがよくわか
る。「小笹姫受難」これは一言
でいっておもしろくない。全体
の感じが現代的であるにひきか
え、時代を過去に持ってきたの
は失敗であつたと思われる。そ
の現代的主題をつらぬく思想
は、なんといつてもあまりに古

くすぎ、それがこの作品の致
命傷になつていように思われ
ます。まず、場面の設定に無理
があつたことは認めねばならな
いでしよう。まあ、はっきりい
うと、これを現代におきかえて
も、それで通用するという部類
の物語であり、大うそである。
ここには真のSMなんてものは
存在しない。しかも、それが生
はんかなのだ。即ち、あるか、
ないか、わからないのである。
次の「特製マゾキン」これはま
あまあ成功作であろう。しかし
これも現実性にとほしい。SM
が現実のものである以上、SM
も現実の上に立脚し、現実を真
に芸術的に把握しなければなら
ないからである。「魔女アク
リカ」はその残酷性をみせるた
めの、単なる紙芝居にすぎず、
こういう作品は読者の思考力を
減退させ、彼らをよろこばせる
ばかりです。「嫌悪の青春」は
一編の詩だ。「必殺のデリンジ
ヤー」以下の作品は、別に書く
こともないので省く。しかし、
最後にある「ゴルドンの記憶」
について一言。前にも言ったよ
うに、今までにない秀作だ。私
は今までに見た小説の中では最
高といえるのではないであらう

か。しかし、難点をいえばSM
をSMとして認識していないこ
とだろう。SMとは何か、をも
っとしっかりした態度で受け入
れた時、はじめて真のSMが書
けるのだ。これはSFについて
も言われることだが、SMなり
SFの真の目的は何か、という
ことをつかんだ人こそが真のS
Mを書ける人であると思う。即
ち、SMという現実をしっかりと
把握して、その上に、その築か
れた巨大な機械文明の一構造物
である現実を、SMという現実
を完全に否定する事である。こ
のことはいかにむづかしいこと
であつても、SMをこころざす
以上、どうしても通らねばなら
ない門である。これを忘れた人
間は、SMを語る資格がないの
である。それから、その前の
「アラビアの城」は明きらかに
駄作だ、つまらない。最後にエ
ダ・キリコならびに安東泉の文
芸評論を読み、これについて批
判を加えたいと思います。まず
エダ・キリコさんの方から、あ
なたはどうしてそんなに感傷的
になるのでしょうか？ ここに
書かれたことは評論なんかでは
ありません。これはただの告白
にしかすぎない。なぜなら、あま



りにも感傷的になりすぎ、それによってその主体性が失われ、サドを絶体的に賛美し、その自分の賛美に自分がおぼれてしまっているように思われます。つまり、このようなセクト主義的感傷主義からは、なにも生まれないということですね。そのようなセンチメンタリズムを捨てない限り、SMを語る資格はないのです。あなたの文はサドへの賛美でみちみちています。しかし、それがまた欠点となっていて、サドに対していらっしゃるようですが、女性であるまえに人間である我々は、まず人間としてサドに対さねばならないでしょう。でもあなたは女性であることを一つの特権のように誤解なさって、それをふりまわし、そして、困るとすぐに「女性だから……」というように、妙なものを持ち出そうとする。あなたにはそういうところがあるように思いますが、いかがでしょう？ それにくらべると次の安東泉の評論は、いかにも評論家のものである。彼の論旨には、何か一てつな文学者、哲学者の眼というものが感じられる。しかし、彼もエダ・キリコ同様に

時代を無視したところに難点がある、こういった十九世紀という過去の作品を論ずる時、それを十九世紀の視点でとらえないで（もちろんそれも必要だが）それ（サド）を二十世紀の、現実的視点でとらえているのはあやまりであるといえるだろう。サドの場合（過去の作品をとり扱う時はいつもそうだが）特に過去の視点ということが必要なのだ。その時代的背景を無視してサドを語る、これこそ現実に対する激しい闘争を忘れるようにする大衆の無知の現われだ。大衆無知なるものは、大衆の政治的無関心から生まれるものである。このアパシーこそ、もっともおそろしい我々の敵である。その無関心性なるものが、サドを簡単に容認したり、否定したりする原因となるのである。それから「現代マゾヒズム時評」の、映画「悪徳の栄え」に対する森下高茂氏の批判、これは真にSM的な批判であり、このような文章こそ私のいう現実否定に近いものであります。しかしここにも感情のおもむくまま、自己批判を加えず書き流している箇所があり、これが難点となっていてます。（山口・藤本絃一郎）

●編集後記●



ほとんど理解しているということですが。

▼本誌おなじみのモデル嬢、柚木あぐり、エダ・キリコさんのおふたりを中心に「モデル嬢をかこむ愛読者の集い」という催しを、いま、ふっと思いつきました。

▼どこか気軽な会場をさがして、会費はおひとり千円でいど。あまり人数が多いと、会そのものが散漫になりますから、読者側からの参加人員は十名内外にしましょう。

▼すでに愛読者のみなさま方ごそんじのように、このおふたりのモデル嬢は、たいへん本誌に協力的で、なによりも心強いのは、本誌の性格を、

ほとんど理解しているということですが。

▼気軽な座談会形式で、その記録を速記にとって本誌に掲載すれば、またほかの読者にとっても一興だと思われ、私も編集者にしても、かならず、プラスになる会になると予想します。

▼もんだいは、おふたりのモデルさんが、その風貌どおり、あまりにも可愛らしいお嬢さんタイプで、たくさんのお参加者の質問に、十分なおこたえを発言できるか、どうかということですが。

▼それと（まことに失礼ではありますが）席者の人選を、厳重にしなければならぬでしょう。おもしろ半分、いたずら半分に出席されては、ほかのみなさんの迷惑になりますから。

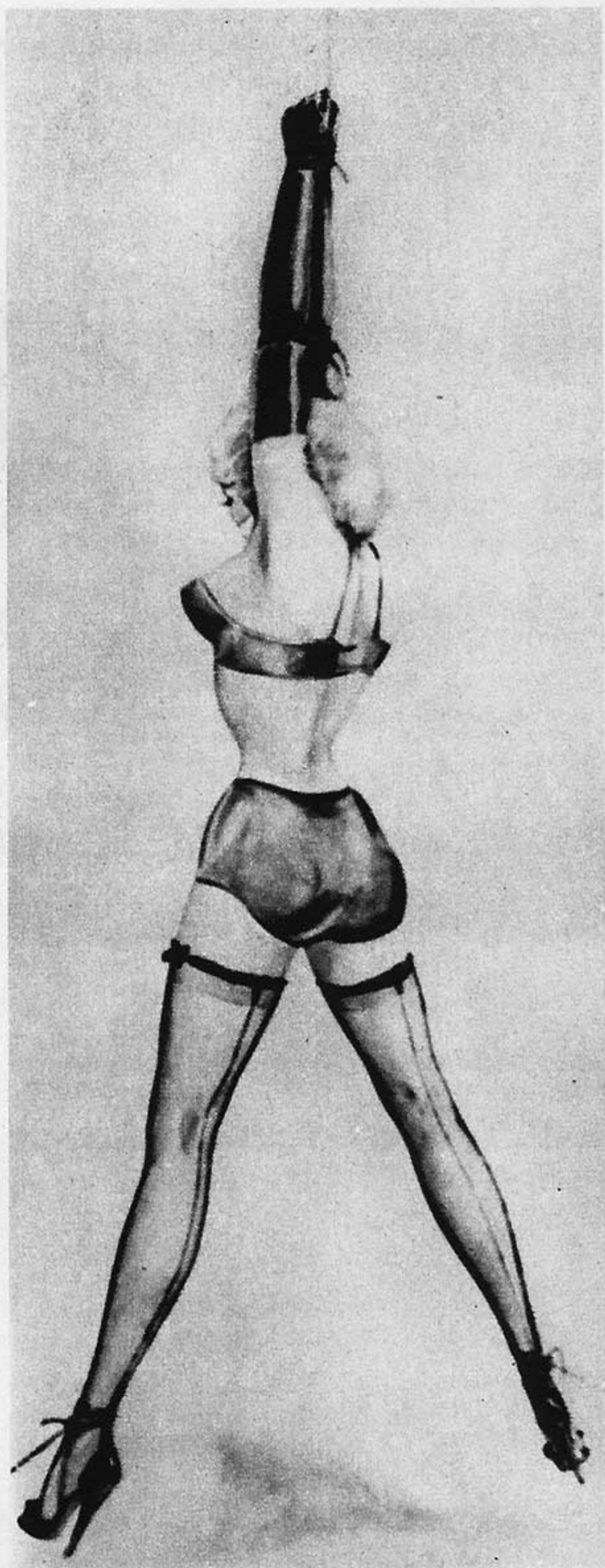
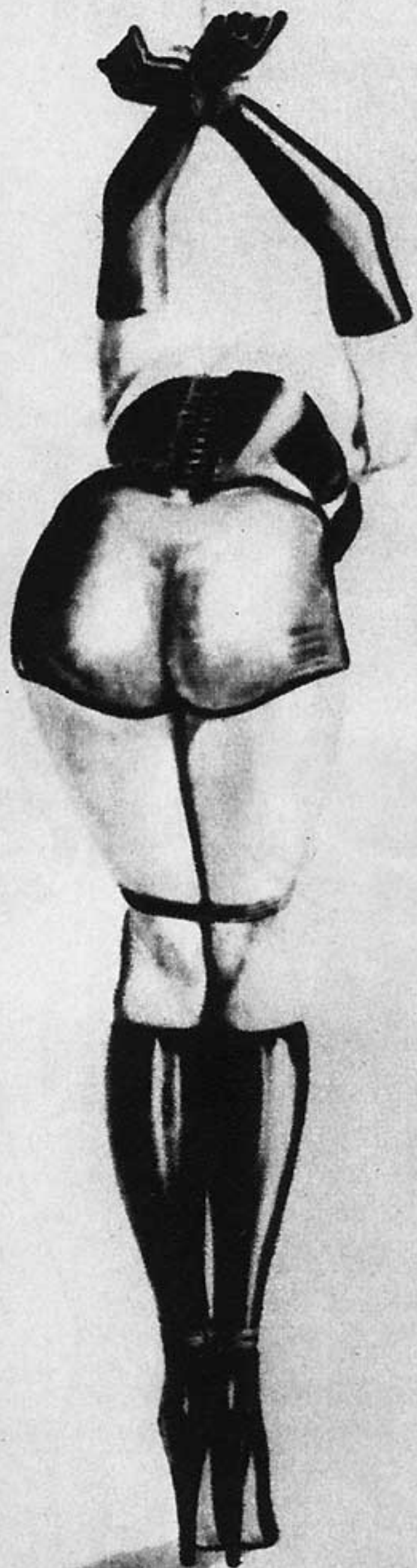
（飯田）

海外の公刊誌より

特約・カルフォルニア・フェニクス商会

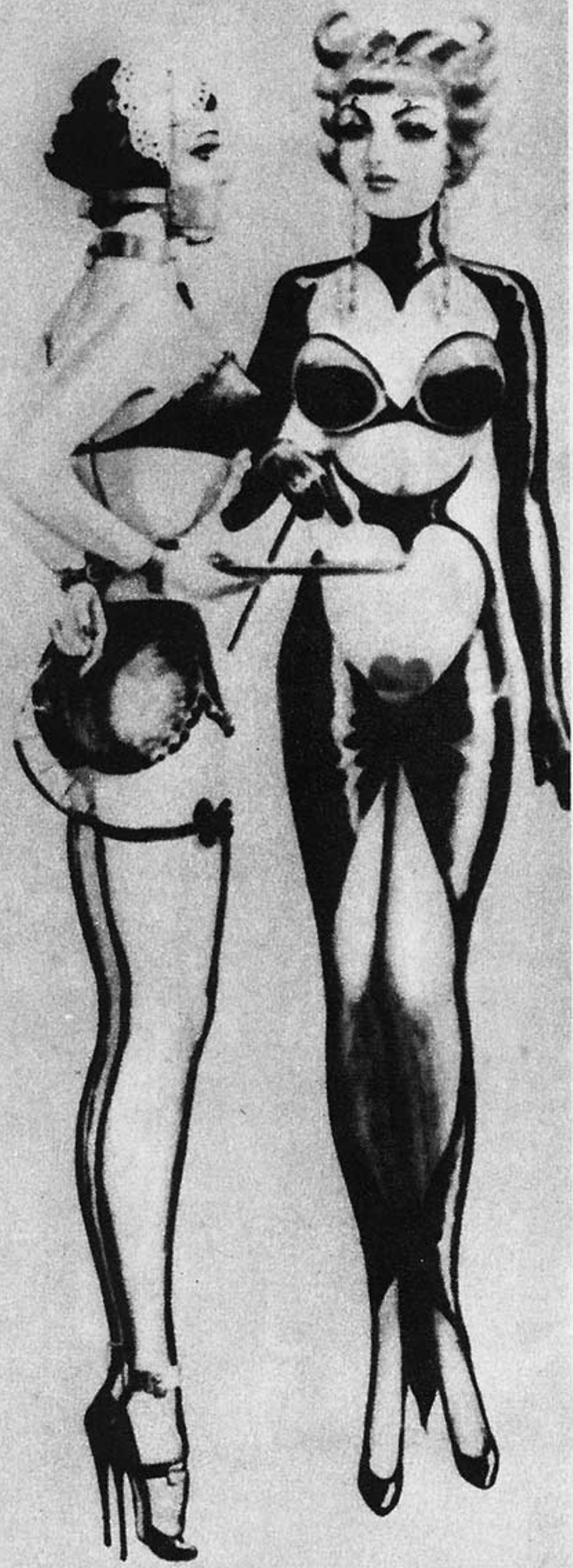


- so our little Princess is obstinate !
well- we'll see !

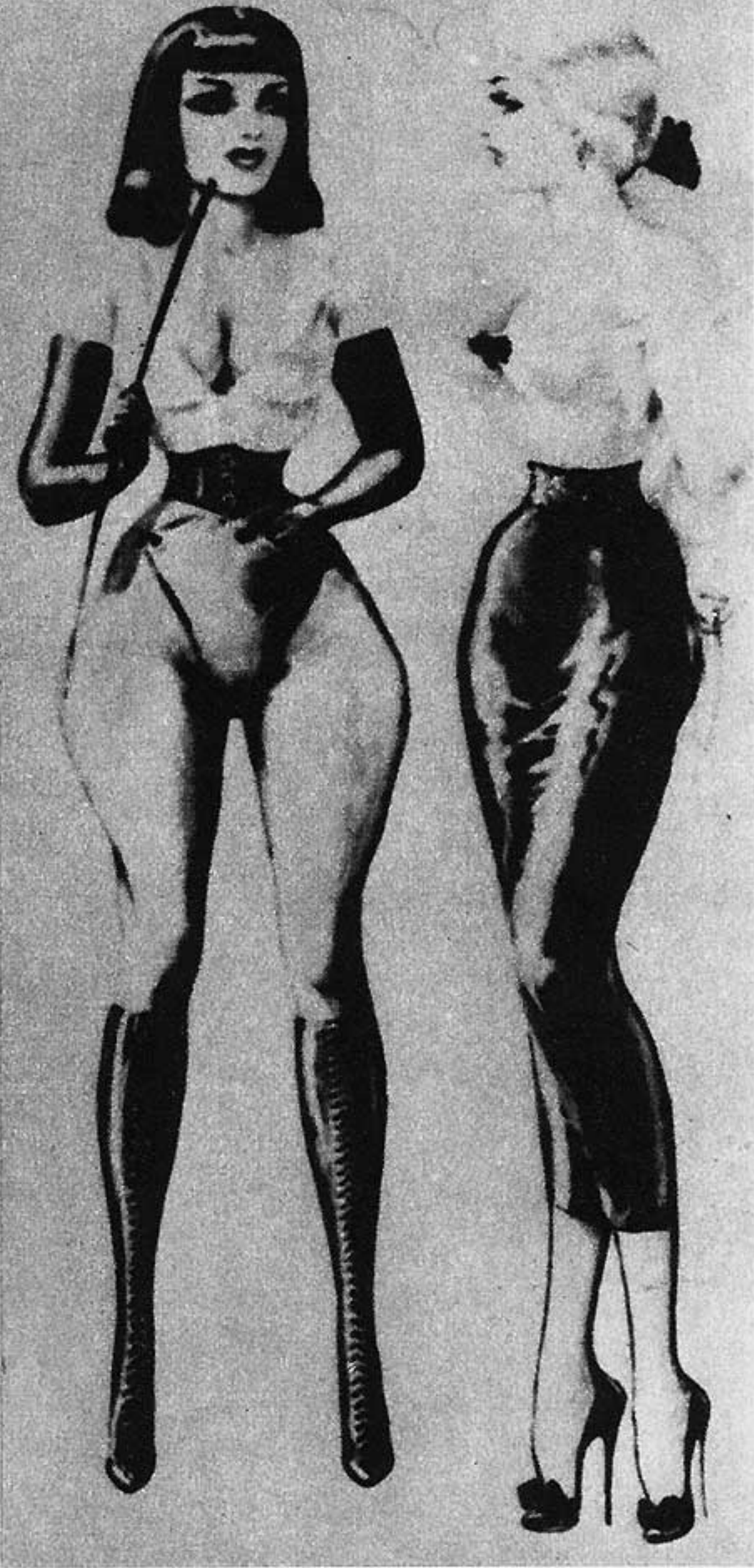




IT IS UNWISE TO BE OBSTINATE IN THIS CASTLE
 Take this note to your Royal Mistress. It is to tell her
 to prepare herself for a visitor who is now dressing
 for the audience



AT LAST GWEN GETS DRESSED
 I forgot to tell you- Aunty's very Victorian -
 corsets and all that
 Oh phooey to corsets! how
 d'you like my shirt? - I can hardly
 walk in it- Don't you think my hands
 should be tied to complete the
 picture?

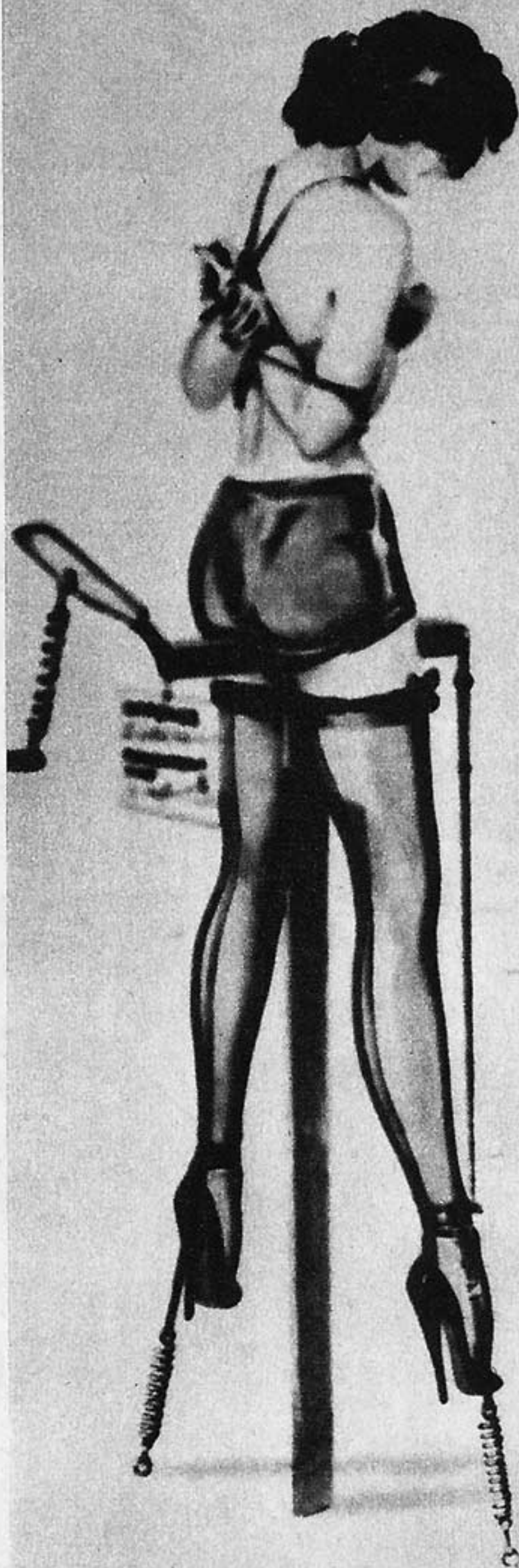


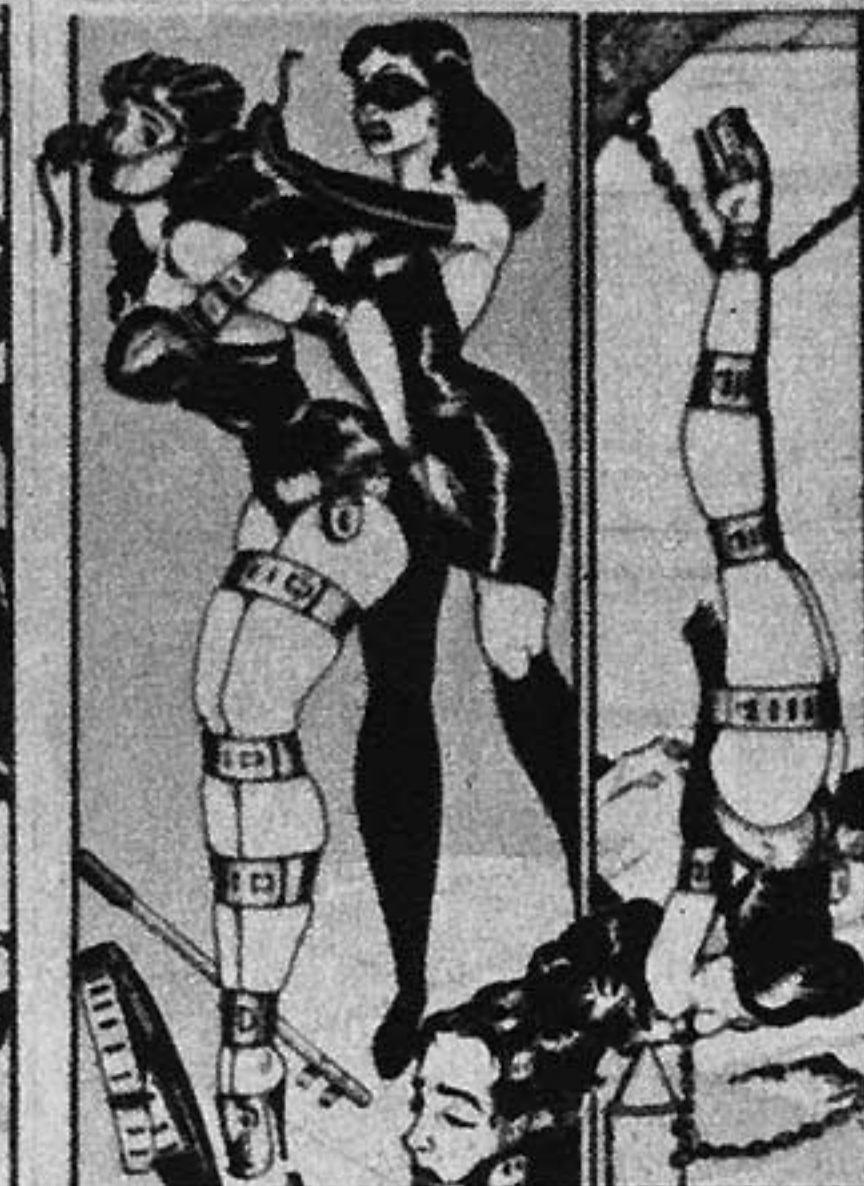
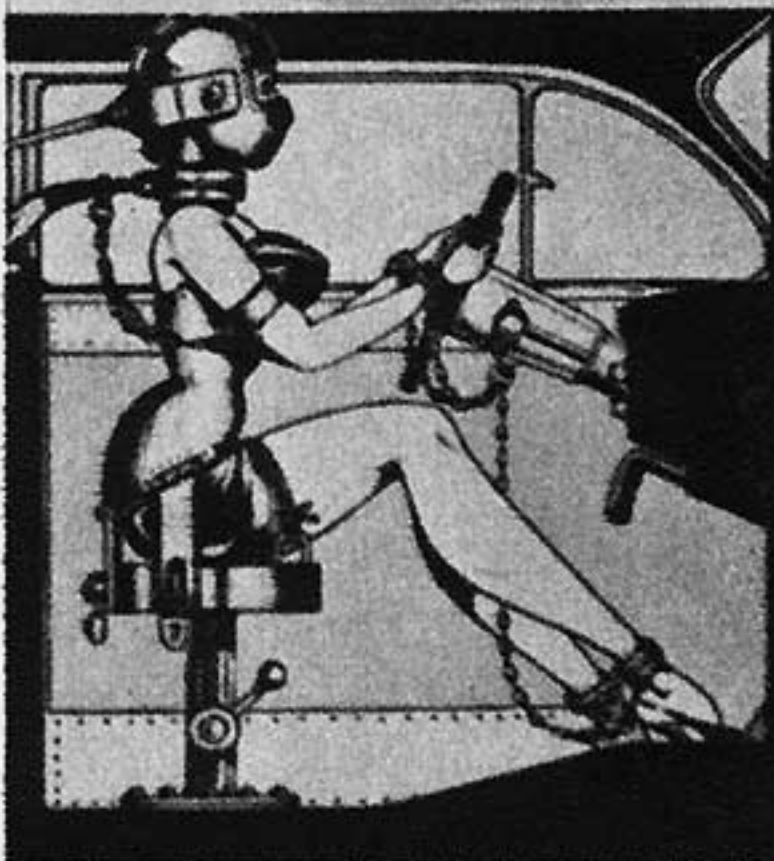
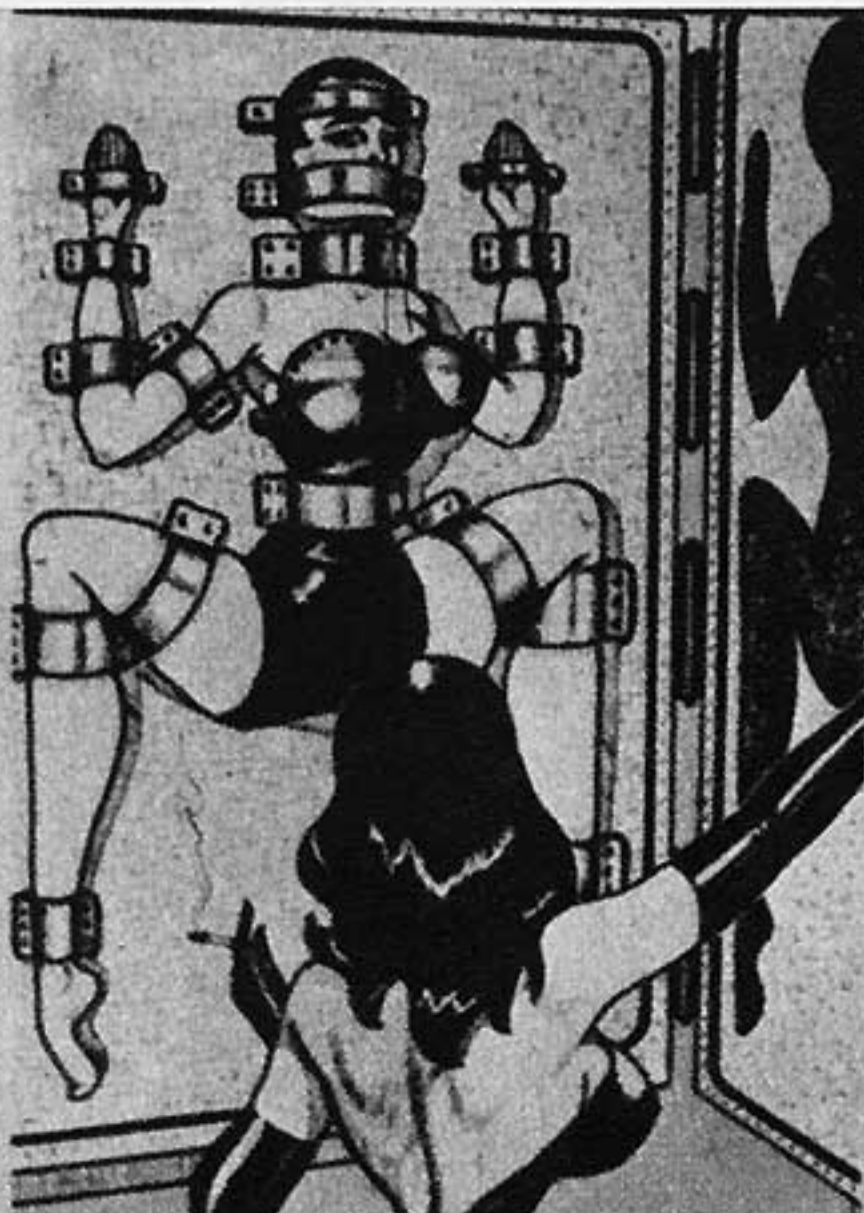
so Gwen is prepared for the experiment

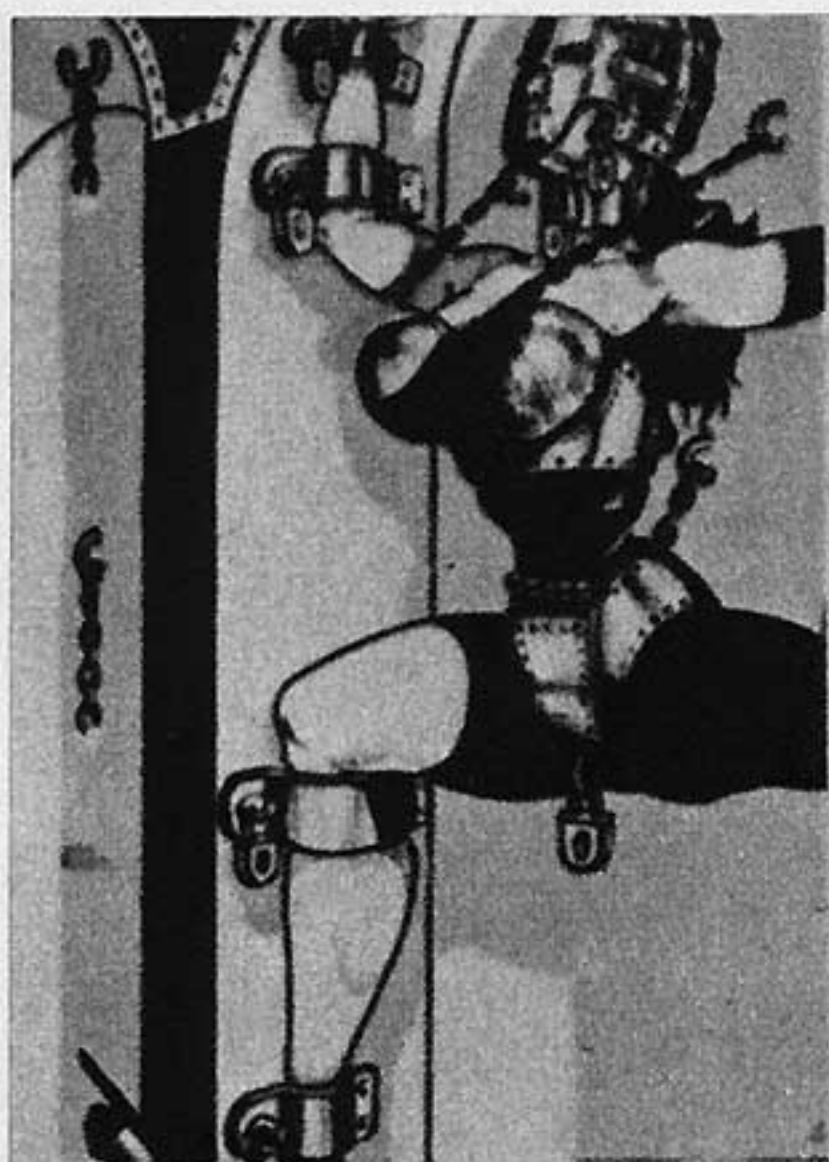
Now aren't I kind to
take you out of this
very tight corset -
hold still!



This one however is rather uncomfortable all the
time - in fact extremely so - and as you can see
she receives plenty of attention.

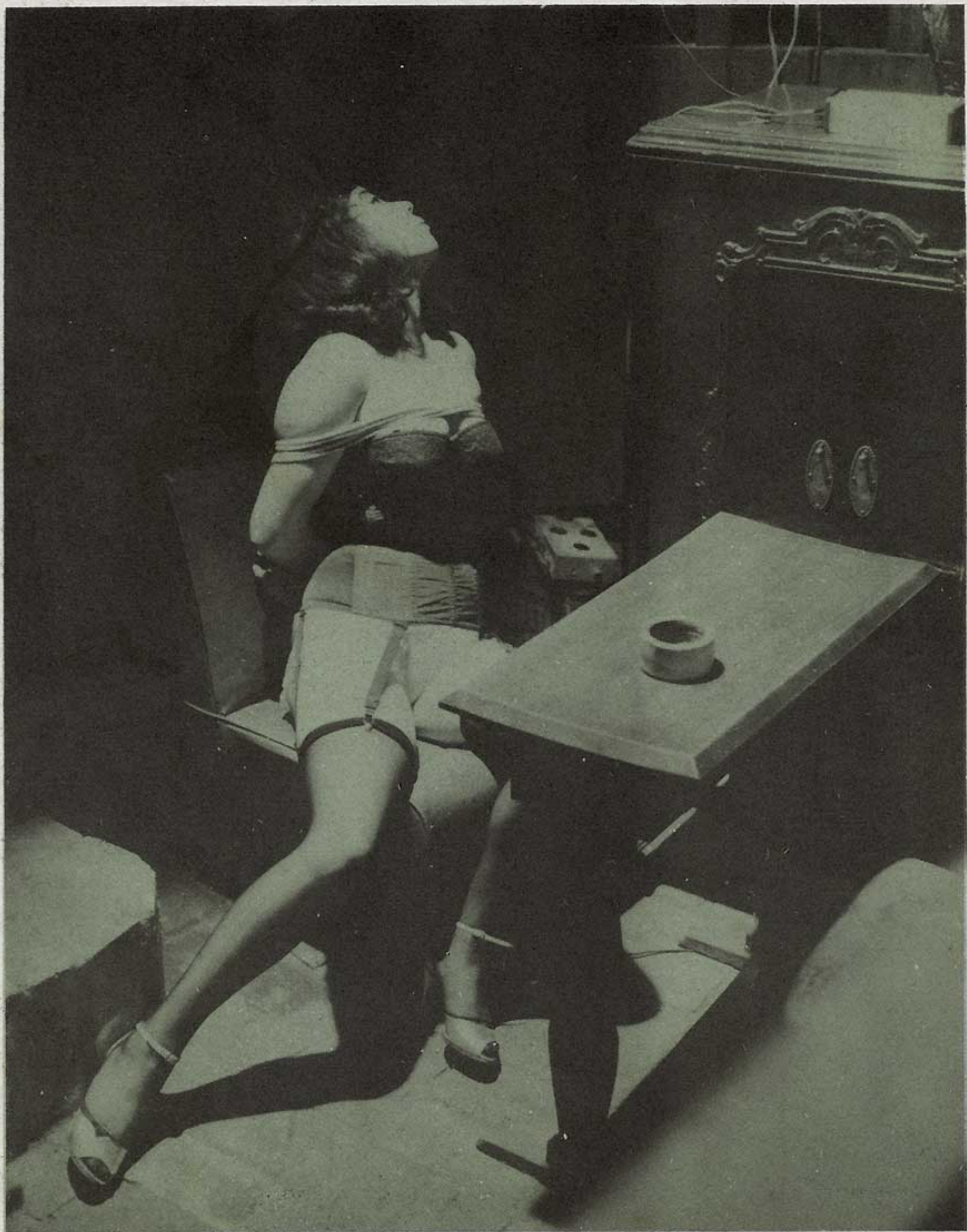








暗い画廊









38年(六月号) 1100F

●鬼頭晩時代妖美画集	鬼頭 晩
●中島喜美時代妖美画集	中島 喜美
グラビア・幽囚の部屋	吉田 久
●絵画集	落合竜二
・続・美しき海賊船 フェニクス商会	
・西部の女	芦田 奈貴
七つの大罪(中川彩子・絵)	九十九十郎
続・異端の終末	左 次郎
おどろ記珍化論	
「ロリータ」における	
ニンフェッティズム	安東 泉
「夜と霧」	黒田 史朗
放浪と自己恋着の画家	かびや・かずひこ
月光の道で	河村 童八
鬼婦長	丸亀 恵子
夜の妖蝶	立原 道夫
ボスには乳房がある	五所 章
体当たりマゾヒズム論(11)	水尾 究
さんざね不動(小日向一夢・絵)	庄内 裕治
復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)	黒部 恭治
忍法「乳影」(鬼頭晩・絵)	島本 春雄
妄執侍(古正英生・絵)	潮 一樹
霧姫変化(鬼頭晩・絵)	佐藤 達四郎
ゴルドンの記憶③(江淵晃夫・絵)	阿麻 哲郎

38年(五月号) 1100E

絵物語・白蠟闇若衆	文・島本 春雄
・流刑星の美女たち	文・豊田 一狼
江淵晃夫妖美画集	江淵 晃夫
グラビア・夢幻のへや	藤沢 修
・美しき海賊船	フェニクス
・くさりと美少女	商会・提供
海外SM画傑作選	井村 錠
茅女物語	潮 一樹
会津の女兵	飯田 豊吉
その夜	阿麻 哲郎
ゴルドンの記憶(2)	村山 省
椎名夫人の足	かびや・かずひこ
ほも紳士録	森下 高茂
現代マゾヒズム文化時評(14)	水尾 究
体当たりM論(10)	北野 竜一
私の愛した女優	北園 透一郎
アラビアの城	祖父江 新
孤島の復讐鬼	草田 奈貴
異端の終末	豊中 夢夫
背後の脅迫者	郷 保夫
ばんざいッお転婆学園	

38年(四月号) 1100D

絵物語・冥府海賊伝奇	文・島本 春雄
・マドリーナと黄金の靴	文・松平 莊司
・白狐のお新いさん	絵・中川 彩子
小日向一夢妖美画個展	絵・東 桂史
グラビア・黒猫といふ	毛 卓三
・黒いタイツ	猪島 昌也
・鏡と女	藤沢 修
・パウリーネ夫人のピクニック	フェニクス
海外SM画傑作選	商会・提供
ゴルドンの記憶①	阿麻 哲郎
処刑の囚	三鬼 俊
無分別な夜	海老沢 七郎
大阪非情地帯	豊中 夢夫
内外ミュージックホール・スナップ集	藤沢 修
「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話	北野 竜一
文芸評論「醜いコメディ」について	安東 泉
ほも紳士録④	かびや・かずひこ
A子の話	南 ゆり
体当たりマゾヒズム論⑨	水尾 究
舞踏会の贅	春川 光彦
のぞきの大スケ捕物帖	飯田 豊吉

38年(三月号) 1100C

絵物語・スリーベット号	文・豊田 一狼
不時着す	絵・鬼頭 晩
・銭姫党伝奇	文・島本 春雄
・白蜂の女忍者	文・矢桐 重八
グラビア・けんらんたる商品	絵・小日向 一夢
・黒猫を捕えろ①②	毛 卓三
海外SMフォト・画傑作選	泰西出版資料
醜いコメディ	淡路 周五
大根根無頼	祖父江 新
和装恋慕	宮古 志満夫
ほも紳士録(3)	かびや・かずひこ
体当たりマゾヒズム論(8)	水尾 究
猫	村山 省
犬とギブスと搾衣	春川 光彦
不死身の女	海老沢 七郎
「蠍たち」にみる	安東 泉
あるサディスチンのタイプ	鬼頭 晩
鬼頭晩時代妖美画展	左 次郎
うら八捕物帳	飯田 豊吉
虹川画伯のアトリエ	
「裏窓」湯河原へ行く	編集部

38年(二月号) 1100B

絵物語・姫法師呪文	文・島本 春雄
・変化黒髪小僧	文・京 剣児
秋吉樹妖美画個展	絵・古正 英生
グラビア・黒い皮のスタジオ	泰西出版
・美の凝結	金井 行雄
・美の模像	金井 行雄
海外SM画傑作展	泰西出版
島原の子守唄	春川 光彦
金色の胸毛	立原 道夫
郡氏の応接室	豊中 夢夫
代用品じゃつまらない	九十九十郎
フォルリ城の花嫁	三鬼 俊
おれの名はクニエル	祖父江 新
愛の戦慄と充実	白木 ゆりこ
体当たりマゾヒズム論(7)	水尾 究
ほも紳士録(2)	かびや・かずひこ
新・森栄利論	間野 嶺
新・安岡章太郎論	安東 泉
女因お蓮の死	小田 桐 爽
浪人夢想日記	市原 砂夫
カブー家の第三夫人	加木 れい子

38年(一月号) 1100F

絵物語・ハレウィンの歌う首
文・松平莊司
絵・中川彩子

・赤鯨奇伝
絵・小日向一夢
文・島本 春雄

・隠密香猫
中島 喜美

山田彬弘妖美画個展
山田 彬弘

グラビア・美の回帰・ほか
毛 卓三

・美の彷徨
北 好夫

・美の孤立・ほか
金井 行雄

クリスマススイヴに悪魔がくる
九十九 九郎

赤い血のうずまき
関町 妙男

飯面のたわむれ
溝口 雄太

黒い幻想
白木 ゆりこ

小さな赤い腰巻の記憶
外村 良

体当たりマゾヒズム論(6)
水尾 究

夜の感傷
万里小路 崑

忍者遁走記
祖父江 新

決闘立花屋
花巻京太郎

女性的情念の三十年
かびや・かずひこ

「叩き声」を解剖する
安東 泉

小説「連」のレスピアニズム
間野 嶺

婦人機密将校ボーリン
泰西出版資料

売られていく玩具たち
北園透一郎

37年(十二月号) 1100F

絵物語・洞穴の姫と
文・松平 莊司
絵・中川 彩子

・耳の戦慄
絵・曾我部 泰

・妖説黒縄盗賊
絵・小日向一夢

グラビア・犬と女
毛 卓三

・美の発端
北 好夫

・美の展開
毛 卓三

・美の落差・ほか
金井 行雄

かわいい調教師
北園透一郎

殉国
中康 弘通

投げ節お駒
花巻京太郎

締めつける愛情
春川 光彦

東京午前零時
豊中 夢夫

日本刑罰史(終回)
名和 弓雄

はも・とその周辺(終回)
かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論(5)
水尾 究

新・三島由紀夫論
安東 泉

お春さらわれ草紙
小田桐 爽

千代の青春
浦戸 宏

赤い城
三津井弓雄

ある身の上相談から
神原 栄知

イラ ラする夜に
羽鳥なつ子

風雲地獄街道(終回)
鈴宮 英樹

37年(十一月号) 1100F

絵物語・かわいいアンヌの
文・松平 莊司
絵・中川 彩子

・異聞・牛裂きの刑
絵・東 桂史

・宝石の血
絵・秋吉 樹

グラビア・美の鋭角
毛 卓三

・美の冗舌
金井 行雄

・美の傾斜
金井 行雄

・美の断面・ほか
金井 行雄

海外SMフォト特選集
泰西出版資料

あわれ雪路
丸亀 恵史

おかつばとおさげの間
間野 嶺

霧笛の町
五所 章

妖美画傑作選
沖沙二 都築峰子

火刑幻想
多賀 満

夜の画帳
鳴滝 三郎

足
村山 省

体当たりマゾヒズム論(4)
水尾 究

さまアみろ
春川 光彦

ある恋の物語
山木 節夫

不安と絶望から幸福への道へ
桜井 和子

畜獣デリムソン(終回)
阿麻 哲郎

はも・とその周辺(9)
かびや・かずひこ

風雲地獄街道(6)
鈴宮 英樹

37年(十月号) 1100F

絵物語・ひざまずいて
絵・秋吉 樹

・柔肌切支丹
絵・曾我部 泰

江洲晃夫妖美画個展
江洲 晃夫

グラビア・舞台名場面集
金井 行雄

・たわむれのふたり
藤沢 修

・美と醜のあいだ
金井 行雄

ある青年の休暇
ゴードン社・提供

紅の私刑
五所 章

女奴隷の浴室
東島かおる

妖しい体臭の夜
市川 菊夫

畜獣デリムソン(11)
阿麻 哲郎

鬼洞又四郎の煩惱
小田桐 爽

ギラルド王の金色奴隷
松平 莊司

現代女牢記
多賀 満

江戸の怪談
河西 恒一

はも・とその周辺(8)
かびや・かずひこ

海外SM映画ご紹介
美濃村 晃

体当たりM論(3)
水尾 究

盗む
村山 省

おろかな馬のものがたり
馬場 弘二

風雲地獄街道(5)
鈴宮 英樹

37年(九月号) 1100F

絵物語・凄絶めくら忍法
絵・東 桂史

・密林の女王ムムタル
絵・中川彩子

・蛇と鞭
絵・山田彬弘

北原環妖美画個展
北原 環

グラビア・SM式美容鍛練法
毛 卓三

・屈曲
毛 卓三

・悪夢
毛 卓三

・女ひとりのへや
猪島 昌也

・かわいいくちびる
毛 卓三

お浜の受難
花巻京太郎

山小屋の暴風雨
駒井たまき

戦慄の女体爆弾
綾川 妖司

鈴の泣き声
浦戸 宏

白痴美の女
青柳貫次郎

日本型罰史(3)
名和 弓雄

はも・とその周辺(7)
かびや・かずひこ

「癡癡老人日記」を解剖する
安東 泉

タロの恋
八巻 令

体当たりM論(2)
水尾 究

女賊と姫君
霧山 志郎

畜獣デリムソン(10)
阿麻 哲郎

鬼婆のすむ家
三枝喜久治

風雲地獄街道(2)
鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号) 1100円

絵物語・最初の火星人………絵・山田 彬弘

〃 鞭に生きる女(5)………ウアン・ロッド

〇海外SMフォト特選集

〇中川彩子妖美画個展………中川 彩子

★グラビア・時代劇のムード………猪島 昌也

〃 石伐り場の女………毛 卓三

〃 沼のほとり………毛 卓三

フォト時代劇・島抜け伝八………海老沢七郎

旗本被虐年譜………島本 春雄

鼻には鼻を………九十九 九郎

脱走兵とその妻………竹谷 十三

姫に捧げられた人獣の話………白畑 高之

はも・とその周辺(5)………かびや・かずひこ

地獄で泣け………万里小路 崑

武后秘話………綾川 妖司

奇縁縁切り檀………小田桐 爽

絵本かぞえうた………喜多 玲子

畜獣デリムソン(8)………阿麻 哲郎

忘念油屋火事………竜崎 聖吾

現代マゾヒズム文化時評………森下 高茂

裁塚温泉のおもいで………影 なぎさ

裏窓タウン………編集部・編

風雲地獄街道(2)………鈴宮 英樹

37年(六月号) 1100円

絵物語無残女忍者記………文・矢桐 重八

〃 時間旅行機第一号………文・豊田 一狼

〃 鞭に生きる女④ 文・画・ウアン・ロッド

〃 フン族の暴雄アッチラ画・中川 彩子

碧眼蜜女伝………小田桐 爽

肉の濁流………城堂 純

畜獣デリムソンⅧ………阿麻 哲郎

グラビア追いつめられていく演技・毛 卓三

〃 和室のひとり………猪島 昌也

〃 女体倉庫………毛 卓三

〃 ふとんの上で………猪島 昌也

色餓鬼島田………竜崎 聖吾

桜とサムワイとサディズム………浜野 真砂

哀艶十六夜街道………文・円城寺 達

A心酔のタイプ………かびや・かずひこ

日本刑罰史(1)………名和 弓雄

稲妻さんげ………万里小路 崑

現代マゾヒズム文化時評………森下 高茂

黒髪幻想曲………重 文彦

地獄船青竜号………永井卓二郎

縄を待つ女………堀越 早苗

風雲地獄街道(1)………鈴宮 英樹

37年5月号ぜんぶ

売り切れました

37年4月号ぜんぶ

売り切れました